博士学位申請論文

研究題目

古代寺院伽藍配置の意義

―観世音寺式・法起寺式伽藍配置をとる寺院とその展開―

指導教員　邊土名 朝邦 教授
国際文化研究科研究生　貞清 世里
学籍番号　20RD001（12DK004）

目　次

序論……1
本論の構成……1

第１部　寺院造営の背景と伽藍配置……2
　第１章　わが国への仏教伝来と寺院……2
　第２章　中国、朝鮮半島への仏教伝来と寺院……3
　第３章　先行研究と問題の所在……4
　　(1) 伽藍配置の先行研究……4
　　(2) 法起寺式伽藍配置と法隆寺式伽藍配置……5
　　(3) 川原寺式伽藍配置と観世音寺式伽藍配置……7

第２部　古代国家の地方支配……9
　第１章　西のまもり大宰府……9
　第２章　東のまもり多賀城……12
　第３章　地方官衙と寺院……15

第３部　伽藍配置の分布と展開……16
　第１章　観世音寺式伽藍配置……16
　　(1) 観世音寺式伽藍配置をとる寺院……16
　　(2) 観世音寺式伽藍配置をとる寺院の創建瓦……29
　　(3) 分布からみた観世音寺式伽藍配置の特徴……30
　　(4) 四天王地名との関連性……31
　第２章　川原寺式伽藍配置……34
　　(1) 川原寺（弘福寺）……34
　　(2) 南滋賀町廃寺……34
　　(3) 川原寺式、観世音寺式伽藍配置をとる寺院……36
　　(4) 川原寺式の特徴と南滋賀町廃寺……40
　第３章　法起寺式伽藍配置……41
　　(1) 畿内の法起寺式をとる寺院……41
　　(2) 東海道の法起寺式をとる寺院……46
　　(3) 東山道の法起寺式をとる寺院……50
　　(4) 北陸道の法起寺式をとる寺院……55
　　(5) 山陰道の法起寺式をとる寺院……58
　　(6) 山陽道の法起寺式をとる寺院……62
　　(7) 南海道の法起寺式をとる寺院……65

(8) 西海道の法起寺式をとる寺院……70
(9) 法起寺式をとる寺院の様相……73
(10) 法起寺式をとる寺院の金堂基壇規模 ……81
(11) 法起寺式伽藍配置と尼寺 ……83

第 4 部　国土防衛と寺院　……87
第 1 章　肥後の寺院と古代山城……87
(1) 鞠智城……86
(2) 肥後の古代寺院……88
(3) 百済の古代山城……92
(4) 扶余の古代寺院……93
(5) 扶余の寺院と西海道、肥後の寺院……95
第 2 章　南海道の法起寺式をとる寺院と官道……98
(1) 南海道の古代山城と寺院……98

第 5 部　国家仏教と伽藍配置……101
第 1 章　観世音寺式伽藍配置と大寺……101
第 2 章　国分寺　……105
第 3 章　観世音寺と下野薬師寺……107

第 6 部　伽藍配置の意義 ……110
第 1 章　観世音寺式と法起寺式をとる寺院の性格 ……110
第 2 章　伽藍配置の意義 ……112

おわりに　……114

引用・参考文献 ……115
挿図出典 ……128

序　論

古代寺院の伽藍配置には様々なパターンがあるがそれぞれの伽藍配置のもつ意味や思想についてはあまりよく知られていない。寺院は、寺の本尊を祀る金堂、釈迦の骨である舎利を安置する塔、経を講じる堂である講堂を中心として、僧侶の居住する僧房、鐘を釣る鐘楼、経典を収める経楼などの建物によって構成される。わが国では7世紀代において多くの古代寺院は、飛鳥寺式伽藍配置、四天王寺式伽藍配置、薬師寺式伽藍配置、川原寺式伽藍配置、法隆寺式伽藍配置、法起寺式伽藍配置など、代表的な寺院の名前を標識名とする伽藍形態をとっている。いずれの配置も､南に門（中門）を配し、両妻からのびる回廊内に金堂、塔、講堂などの主要な建物をおき、それらの建物の並び方や数によって伽藍配置として、区別されている。

本論では、主としてわが国の古代寺院において金堂のとる方位の異なる伽藍配置の選択がどのように行われ、展開していったかを明らかにするため、観世音寺式伽藍配置と法起寺式伽藍配置を中心に検討する。観世音寺式と法起寺式は一塔一金堂式で、回廊内の東に塔、西に金堂を配置するが、金堂のとる方位が観世音寺式は金堂が東面、法起寺式は金堂が南面する点で区別される。両伽藍配置をとる寺院について、まず全国的に集成を行い、それらの寺院の分布の特徴や出土遺物について比較検討し、両伽藍配置をとる寺院からみえる特色・性格を抽出する。主としておおむね天平13（741）年の詔にはじまる国分寺・国分尼寺建立による国家仏教政策がとられるにいたるまでの寺院を対象とし、伽藍配置の採用にあたり古代寺院の伽藍配置における金堂のとる方位がどのような意味、役割をもつのかを考察する。それらを踏まえ、伽藍配置の変遷を再考し、古代寺院の伽藍配置の意義を探る。これにより、同じく一塔一金堂式で、回廊内の西に塔、東に金堂を配置する野中寺式伽藍配置、全国的に多く分布する法隆寺式伽藍配置のもつ性格、意義についての検討の足掛かりになると考える。

本論の構成

本論は6部構成とした。第1部「寺院造営の背景と伽藍配置」では、わが国への仏教伝来から寺院造営、国分寺建立にいたる流れ、中国、朝鮮半島の寺院とわが国の古代寺院の伽藍配置について先行研究を整理し、問題の所在を明らかにする。第2部「古代国家の地方支配」では、古代国家による地方支配と寺院の関係について、大宰府や多賀城にみられる官衙・城柵と寺院のセット関係を例に、古代寺院のもっていた役割について述べる。第3部「伽藍配置の分布と展開」では、観世音寺式、川原寺式、南滋賀町廃寺式、法起寺式伽藍配置をとる寺院についてそれぞれ日本全国の寺院を集成する。各伽藍配置をとる寺院の分布や基壇規模の特徴などから、その性格について分析する。第4部「国土防衛と寺院」では、第3部を踏まえ、国家政策と寺院の関わりについて、肥後地域における古代山城・百済扶余の羅城構造と寺院分布、南海道における官道と法起寺式をとる寺院の分布を例に検討する。第5部「国家仏教と伽藍配置」では「大寺」制と、寺院で行われる法会と経典、国分寺建立とその展開について考察する。また観世音寺と下野薬師寺を比較し、両寺の伽藍配置の採用の違いについて検討する。第6部「伽藍配置の意義」では、第1～5部で検討した、同じ一塔一金堂式をとり回廊内の西に金堂をおく観世音寺式、法起寺式の採用・分布の違い、その他の特徴から、両伽藍配置型式の性格を抽出し、古代寺院における伽藍配置型式の展開および伽藍配置の意義について論じる。

第１部　寺院造営の背景と伽藍配置

第１章　わが国への仏教伝来と寺院

仏教のわが国への公伝は『上宮聖徳法王帝説』[1]や『元興寺伽藍縁起并流記資財帳』[2]の記録から、戊午の年の伝来が共通見解になっており、538 年のことである。『日本書紀』欽明天皇 13（552）年 10 月条に、百済の聖明王は使者を遣わし、釈迦仏像、経論などに仏法の功徳を讃える上表文をそえて献じたとあり、これを公伝とする解釈もなされてきた。また、『隋書倭国伝』600（開皇 20）年条に「仏法を敬す。百済において仏経を求めた」とあることから、6 世紀には仏教が伝来していたことが想定されている。後述する発掘調査による研究成果・考古学による先行研究からも、6 世紀の東アジア世界において仏教は、単なる宗教ではなく国際的な文化・思想であったことが想定され、わが国の仏教の受容は、東アジア世界の流れとして必然的なものであったと考えられる。『日本書紀』によれば、わが国には古来「百八十神」を祭る信仰があり、それを理由に物部尾輿、中臣鎌子は仏教受容に反対したが、蘇我氏によって受容がすすめられていった[3]。その後、蘇我馬子によって飛鳥寺、厩戸皇子によって法隆寺、四天王寺が建立された。『日本書紀』によって、飛鳥寺建立においては金堂の造営が先行していたことがわかり（森 1998）、この時期の仏教においては金堂が重視されたと考えられている。624（推古天皇 32）年には僧正・僧都・法頭とよばれる僧尼を検校する職がおかれる。7 世紀前半の寺院は蘇我氏や蘇我氏と関わりの深い氏族や渡来系氏族により建立され、その分布は大和、摂津、河内、山城などの一帯に限られていた。645 年の乙巳の変（大化の改新）により蘇我氏による政治が終わり、孝徳天皇によって難波宮遷都が行われた。同年 8 月の仏教興隆の詔、649 年の評制移行による地方支配の再編により地方での寺院造営が本格化した。新しい地方支配体制への流れの中に仏教が置かれ、在地の支配者層は地方寺院の造営者となり、それまでの支配構造が確保されていった。

663 年の白村江の戦いから 672 年の壬申の乱の動乱の時期には、天智天皇によって斉明天皇の菩提を弔うために川原寺が創建された。大官大寺、飛鳥寺、薬師寺と並んで四大寺に数えられ国家仏教を支える寺院であった。天武朝においては、仏教の興隆をめざして国家寺院として大官大寺（もと高市大寺、のちの大安寺）が造営され、皇后（のちの持統天皇）の病気平癒を願い、薬師寺の造営が始められた。685（天武天皇 14）年には「諸国に、家毎に、仏舎を作りて、乃ち仏像及び経を置きて、礼拝供養せよ」という詔[4]が出された。この詔を契機に地方寺院の造営が活発化していき、持統朝では『扶桑略記』[5]692（持統天皇 6）年に 541 か寺が数えられる。また、694 年には護国経典である『金光明経』を諸国に送り読経させて[6]おり、仏教を鎮護国家を目的とした国家仏教として意味づけた。また、律令国家が僧や尼を統制のもとにおくため、僧尼令[7]が制定され、僧尼が律令体制のもとに秩序づけら

1　聖徳太子の伝記で編著者未詳。

2　746（天平 18）年 10 月、元興寺が僧綱所の牒を受け、翌年 2 月に勘録牒上した伽藍縁起と寺財目録

3　『日本書紀』欽明天皇 13 年 10 月条

4　『日本書紀』天武天皇 14 年壬申条

5　神武天皇より堀河天皇の寛治 8 年 3 月 2 日までの我が国の歴史を、仏教に力点をおきながら略述した私撰の編年体の歴史書

6　『日本書紀』持統天皇 8 年 5 月「癸巳に、金光明経一百部を以ちて、諸国に送置かむ。必ず毎年の正月の上玄に取て読め。」とある。

7　養老令の第 7 編で 27 条から構成。僧尼の統制などの仏教統制の規定。

れた。律令国家は本格的律令制の導入、地方支配体制の構築のもとで豪族に寺の建立を勧め、支配体制に組み込んだ。

727（天平 9）年 3 月、聖武天皇は丈六の釈迦三尊像の造立と『大般若経』600 巻の書写を諸国に命じ[8]、741（天平 13）年 2 月に国分寺・国分尼寺建立の詔を発した。国分寺はその名を「金光明四天王護国之寺」、国分尼寺は「法華滅罪之寺」といい、四天王をはじめとする諸天善神による護国を祈る寺院である。詔が出されてからすぐに諸国で国分寺、国分尼寺が建立されたわけではなく、それぞれの国の事情により建立が遅れるものもあった。また、第 3 部で詳述するが、諸国の国分寺の伽藍配置は一様ではないことがすでに知られている。

第 2 章　中国、朝鮮半島への仏教伝来と寺院

中国においては、後漢末期の紀元前 2 年に景蘆が大月氏王の使者から浮図経を口授されたとされる（松浦 2017）。後漢代には訳経が進められ、初期のものは西域から伝えられたとされる。三国時代をへて、晋代には寺院数が 900 ほどあったといわれている。4 世紀後半には阿弥陀・弥勒・観音信仰が始まる。4 世紀～ 5 世紀に初頭にかけては中国僧がインドへ求法していく。5 世紀半ばの北魏太武帝の廃仏後、文成帝の代から再び仏教は復興し、隆盛をむかえる。中国の寺院伽藍については発掘調査事例が少なくあまり明らかになっていないが、おおむね北魏の洛陽永寧寺にみられるような一塔一金堂式である。北魏代、東魏北斎代の石窟には木塔を模刻した方柱がみられることから、南北朝時代の伽藍は木塔を中心とする一塔一金堂式であったことが示される。

唐代初期 7 世紀前半において、本尊を安置する金堂中心の形式に変化し双塔伽藍も登場する（佐川 2010）。東晋代（317 ～ 420 年）には文献史料において、武昌（湖北省武漢）の昌楽寺に双塔伽藍がみられ、その後 5 世紀になると北魏で孝文帝と文明太后の「二聖」のために双塔伽藍が発願される。率先して仏教を崇拝した皇帝・皇后が「二聖」と並び称され、国教に関与し権力をもっていたためであり、新羅・わが国が受容した仏教においても双塔伽藍の受容の背景にはこのような君主と仏教界の関係性があったことが指摘されている（向井 2019）。

朝鮮半島においては、まず高句麗において、372 年に前秦王苻堅により高句麗に僧順道が遣わされ、仏像と経論がもたらされた。百済には 384 年に東晋から胡僧摩羅難陀が来朝、新羅には 528 年に高句麗から仏教が伝えられる（中島志 2017）。高句麗の寺院の伽藍配置は、清岩里廃寺などに代表される一塔三金堂式が目立ち、飛鳥寺式のモデルになったと考えられている。近年の扶余における発掘調査数の増加によって、百済の泗沘期の寺院は一塔一金堂式であることが分かってきている。統一新羅の寺院は、皇龍寺跡（553 年創建、645 年に九重木塔および寺院伽藍再建）、芬皇寺跡（634 年創建）が調査されている。いずれも、一塔三金堂式であるが、皇龍寺が塔の北側の正金堂の東西に東・西金堂を横に配置するのに対し、芬皇寺跡は塔の北側に正金堂を配置し、「品」字になる。一塔三金堂式は統一新羅段階以降のもので、6 世紀後半段階では一塔一金堂式であった（佐川 2010）。また、百済王興寺にみられる伽藍両脇の付属建物をトレースしたものが東西の金堂となり、飛鳥寺式伽藍配置のモデルとなったとする説（佐川 2010）もあり、近年百済とわが国の初期寺院とのつながりが改めて検証されている。

8 『続日本紀』巻第十二　天平九年三月条

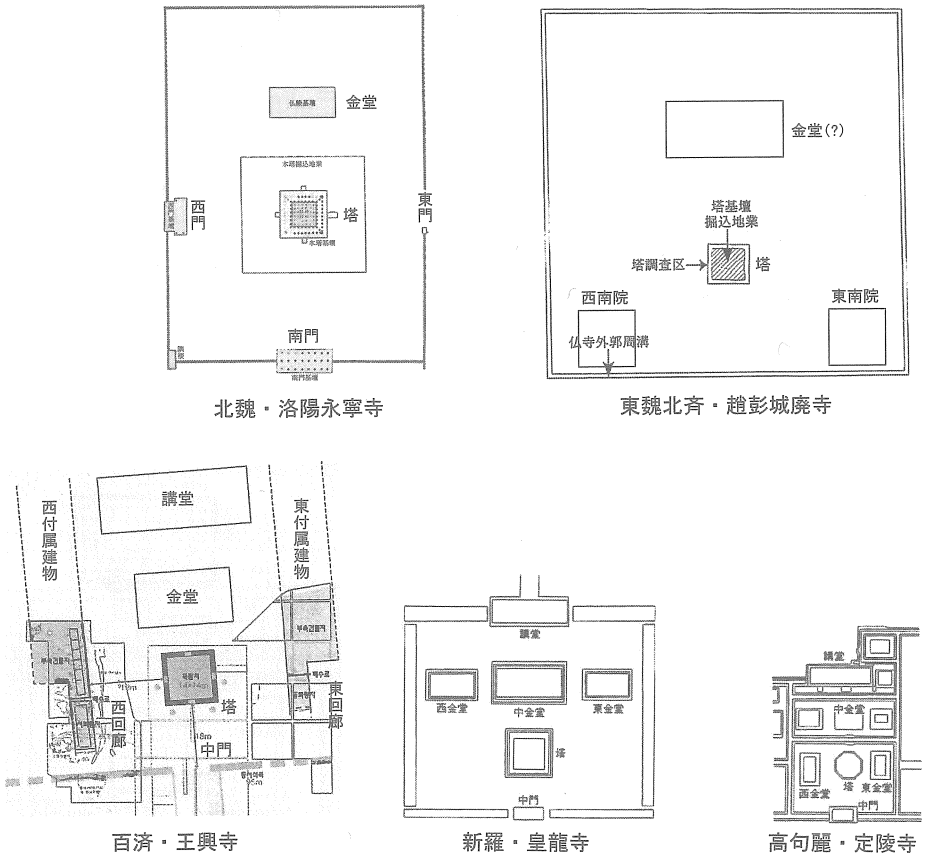


図１　中国・朝鮮半島の古代寺院伽藍配置（佐川 2010 より作成）

第３章　先行研究と問題の所在

（１）伽藍配置の先行研究

石田茂作は、塔・金堂の配置に注目し四天王寺式、法隆寺式、法起寺式、薬師寺式、東大寺式の５型式に分類し（石田 1956）、飛鳥寺、川原寺の発掘調査後には、塔を中心に三金堂を配した飛鳥寺式伽藍配置、塔と金堂を縦に配す四天王寺式、回廊内に二塔を配した薬師寺式、回廊外に二塔を配した東大寺式へと変化したと考え、飛鳥寺、川原寺はそれぞれ飛鳥寺式伽藍配置、川原寺式伽藍配置として型式化した（石田 1978）。

鈴木嘉吉は、伽藍配置を大きく、１前期対称型（一塔対称型）、２非対称型、３後期対称型（二塔対称型）、４金堂中心型の４型式にわけた。１の前期対称型は、飛鳥寺式と四天王寺式である。飛鳥寺は塔、金堂、講堂を中軸線上に並べており、東西金堂を付加物とすると四天王寺式に含むこともでき、飛鳥寺式の発展したものとして四天王寺式を捉えている。２の非対称型は一塔二金堂の川原寺式と一塔一金堂の法隆寺式、および観世音寺式にわかれ、塔と金堂の左右並立、塔と二金堂による視覚的バランスを重視したものと考え、白村江の戦いの頃から一斉に現れるとしている。３の後期対称型は薬師寺などの二塔式のもの、４の金堂中心型は、塔が伽藍中枢部から離れて独立し、回廊内部が全体の金堂の儀式用前庭となり、塔の位置や数が重要ではなくなったものとしている（鈴木 1974）。

岡田英男は建築学的考察を行っている。地割に大尺（高麗尺[9]）を用いる手法は奈良時代まで用いられており、飛鳥寺では一町大尺300尺を造営計画の基本としている。川原寺においても大尺300尺が基本の長さになっており、300尺の四分の一である75尺を地割の基準単位としていることに飛鳥寺との強い関連が認められる。川原寺は、飛鳥寺以来の手法を用いながら、中金堂・塔・門などの個々の建物の造営には小尺を用いているなど新しい手法も採用しているとしている（岡田1989）。

森郁夫は、時代の政治情勢の変動による朝廷の仏教観の変化が川原寺式以降の伽藍配置への変化の要因であるとし、塔・金堂を縦に配する四天王寺から回廊内に金堂・塔を横に配する川原寺式、法隆寺式が現れ、回廊内に双塔をおく薬師寺式、回廊外に双塔をおく大安寺式が現れるようになったと考えた。また、川原寺などの金堂と塔を横に並べる伽藍配置の成立は650年前後であるとし、川原寺の中金堂には釈迦像が安置され、塔の東に位置する形で西金堂には阿弥陀像が安置されたと考えている。『日本書紀』によると、640（舒明12）年に無量寿経が朝廷で説かれており[10]、このころすでに阿弥陀信仰が存在し、朝廷が尊重したことを述べている（森1998）。

菱田哲郎は金堂を仏のいれものとして捉え、特定の仏像に対する信仰との関係から伽藍配置が仏教教義を示し、伽藍配置採用の一要因とした。釈迦如来（南面）、薬師如来（西面）、阿弥陀如来（東面）という仏の方位性と金堂がとる方位に主眼をおいた。伽藍配置を大きく、0：一堂あるいは一塔のみのもの、Ⅰ：塔の北に主たる金堂があるもの、Ⅱ：金堂が塔の西に並ぶもの、Ⅲ：金堂が塔の東に並ぶもの、Ⅳ：塔の北西・北東に金堂があるもの、Ⅴ：金堂の東西に金堂があるもの、Ⅵ：その他、の六つを基準として分類し、観世音寺式伽藍配置はⅡA類として、ⅡB類の法起寺式と区別している。（菱田2005）。

三舟隆之は朝鮮半島の寺院はわが国の四天王寺式に分類される型式をとり、規格性を持つのに対し、わが国の古代寺院のなかでも特に地方寺院において、伽藍配置は規格性に欠けており、画一性や仏教教義を見出すのが難しいため、為政者などによって規制されることなく自由なプランで造営されていたものと結論付けている（三舟2017）。

7世紀後半以降においては、一塔一金堂式の法起寺式、法隆寺式伽藍配置をとる寺院が全国的な展開の中で多く分布し、法隆寺式に比べて法起寺式は地方に多く分布する傾向にあることが知られる（菱田2005、石松2007）。

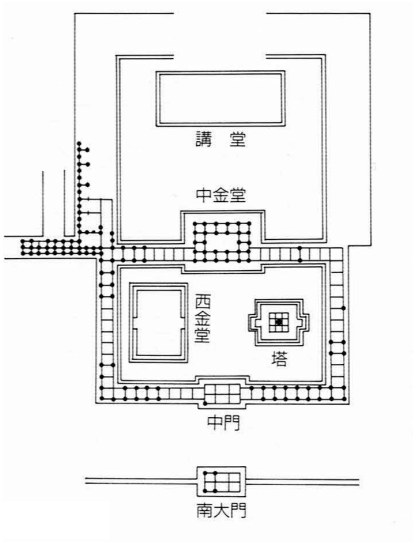
（２）法起寺式伽藍配置と法隆寺式伽藍配置

法起寺式伽藍配置は一般的に、一塔一金堂式で回廊内の東に塔、西に南面する金堂を配するものと定義される。法起寺式をとる寺院の初出は奈良県の法起寺であると考えられている（菱田2005、石松2007、森2008など）。法隆寺式伽藍配置は、一塔一金堂式で回廊内の東に南面する金堂、西に塔を配するものと定義される。

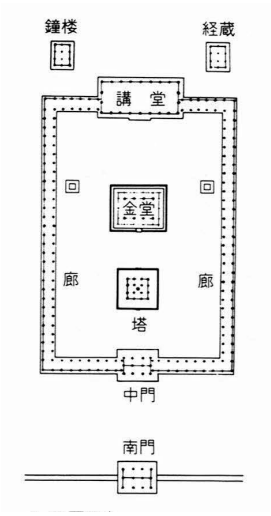
法隆寺式伽藍配置の成立については、塔と金堂を同時に礼拝供養する思想の現れであり、百済大寺建立以前に官が管理した寺は存在しないことから、舒明朝に従来とは異なる仏教観をもつにいたり、新たな仏教観により百済大寺建立に際して採用されたと考えられている（森2009）。近年の調査成果

9　高麗尺（飛鳥尺）一尺約35.5cm

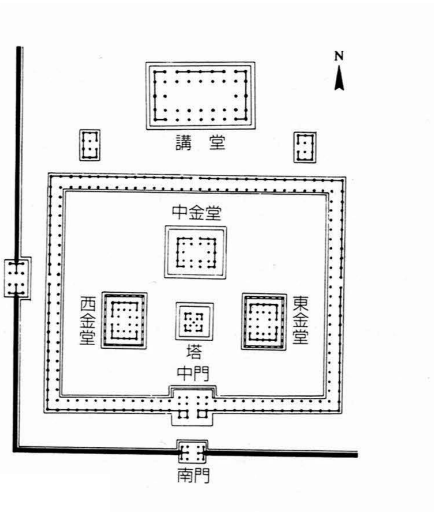
10　舒明天皇12年5月条に「五月の丁酉の朔辛丑に、大きに設齋す。因りて恵隠僧を請せて無量寿経を説かしむ。」とある。



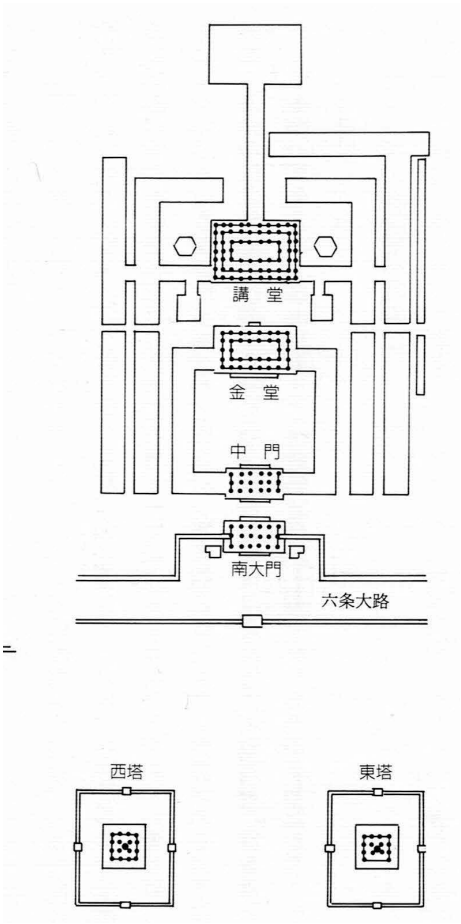
川原寺



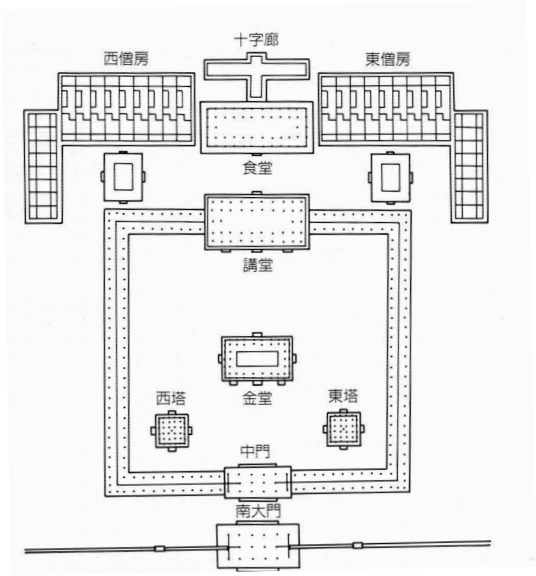
四天王寺



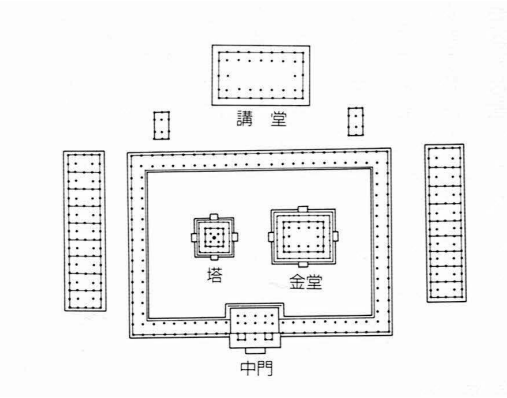
飛鳥寺



大安寺



薬師寺



法隆寺

図 2　わが国の古代寺院伽藍配置（森 1998 より作成）

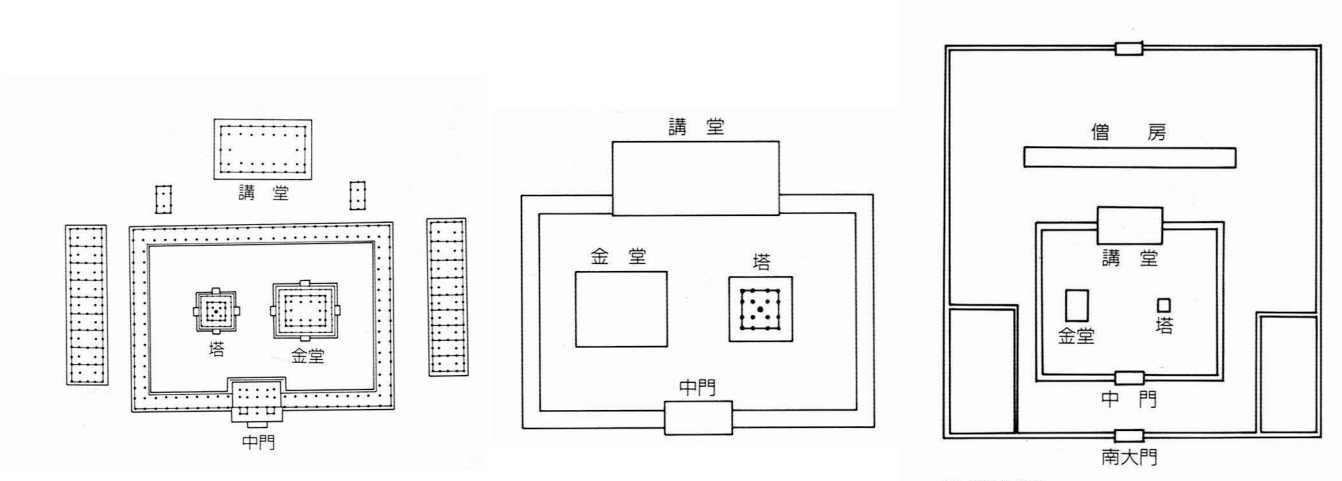


図 3　法隆寺式（左）、法起寺式（中）観世音寺式（右）の伽藍配置（森 1998 より作成）

で、吉備池廃寺は百済大寺であると考えられ、法隆寺式をとる最古の例となった。630 ～ 640 年代初頭に創建されすぐに別の場所へ移転したが、出土遺構や『大安寺資財帳』から塔は九重塔に推定され、新羅皇龍寺木塔と同規模である（小澤編 2003）。これらのことから近年では法隆寺式は、百済大寺（吉備池廃寺）が初現の王権の伽藍配置として、畿内に多く分布し、官に採用されたものとして理解されている。一方、法起寺式伽藍配置は先述の菱田説をとると、南面する金堂をもつことから、釈迦如来の方位性を重視して仏殿の配置を計画していると考えられるものの、法起寺の金堂本尊が弥勒仏であるため方位性との関係が想定できず、法起寺式をとる寺院の本尊がわかる例もごく少数であるため、信仰との対応関係を見出すのは難しいとしている。

（３）川原寺式伽藍配置と観世音寺式伽藍配置

法隆寺式の初現である百済大寺に次いで官による建立が行われたのが川原寺である。川原寺式伽藍配置は、一塔二金堂型式で、回廊内の東に塔を、西に南北棟の金堂を置き、両者の間の北に東西棟の金堂を置くものと定義される（森 1998）。一般的に川原寺式を簡略化したと考えられている観世音寺式は、一塔一金堂型式で、回廊内の東に塔を、西に東面する金堂を配し、その二つが向き合う形で、回廊がない場合は回廊に準ずる寺域を区画する施設をもつものと定義される。川原寺式は中金堂を講堂に変え、西金堂を金堂として簡略化すると観世音寺式となり、法隆寺式、法起寺式と同様の回廊内の東西に金堂・塔をおく、一塔一金堂式となる。

観世音寺式伽藍配置は福岡県太宰府市の観世音寺を標式として、宮城県多賀城市の多賀城廃寺、郡山廃寺などが例としてあげられる。都を境に日本列島両端の官衙に付属する寺院が同じ伽藍配置であることの理由として、多賀城廃寺が観世音寺をモデルにしたという共通見解がある。

このように、これまでの古代寺院研究において、観世音寺式伽藍配置は川原寺式のグループの中に位置づけられ理解されていたが、近年、観世音寺式の最大の特徴である東面する金堂に重きをおいた研究として、金堂のとる方位が仏教教義を示すとし、東面する金堂をもつ観世音寺式を一つの型式とした研究（菱田 2005）や、金堂が東面することをその特徴として一つの伽藍配置型式であるとした研究（髙倉 1996、石松 2007）などがある。これらにより観世音寺式は川原寺に系統をたどることのできる一つの独立した伽藍配置の型式であると考えられるようになってきている（森 1998）。

このように、法起寺式と観世音寺はいずれも同じ一塔一金堂式の回廊内の西に金堂を配する形であ

りながら、金堂のとる方位が異なり、その分布傾向も異なっていることがすでに知られているが、両伽藍配置の性格の違いについては十分に検討されているとはいえない。伽藍配置の意義を明らかにするためには、先行研究においても重要視されている塔・金堂を並置するタイプの極めて似た形である観世音寺式伽藍配置と法起寺式伽藍配置を比較し、金堂のとる方位による性格の違いを検討することが必要と考える。よって本論では、観世音寺式ならびに法起寺式伽藍配置をとる寺院と観世音寺式の祖型である川原寺式をとる寺院を改めて全国的に集成し、その分布の特徴や出土遺構・遺物などを比較検討することで、それぞれの伽藍配置をとる寺院からみえる特色・性格を抽出する。主としておおむね天平 13（741）年の詔にはじまる国分寺・国分尼寺建立による国家仏教政策がとられるにいたるまでの寺院を対象とし、伽藍配置の採用にあたり古代寺院の伽藍配置における金堂のとる方位がどのような意義をもつのかを考えたい。

第 2 部　古代国家の地方支配

地方寺院が増加する 7 世紀中頃からの律令体制の導入・成立期における古代国家の地方支配と寺院の関係や役割を、日本の東西端に置かれた官衙である大宰府と多賀城を通して考えるものである。

第 1 章　西のまもり大宰府

大宰府と西海道の古代山城　古代国家は白村江の戦い（663〈天智 2〉年）に敗れたことを契機として、唐、新羅からの攻撃に備え、西海道から畿内に至るルート沿いに山城を築き防衛設備を整えた。7 世紀後半を中心として 6 世紀末から 8 世紀はじめごろ、対外防衛のため古代律令国家がその主体となって建てられたと考えられている（亀田 2008）。

日本全国で約 30 城が確認されており、『日本書紀』などの記録に記されたものが 14 城、記録に残っていないものが 16 城である（亀田 2008）。西海道においては、大宰府がその中枢である。大宰府は東西を山に囲まれた自然の要塞に位置し、その防衛については、百済の王都扶余の山城配置と酷似する三重の羅城構成が指摘されている（阿部 1991、成 1993、髙倉 1996、小田 2000 など）。

大宰府羅城の第一列目は水城、大野城、基肄城によって構成される。白村江の戦いの翌年 664 年に三郡山地と脊振山系の切れ目に水城を築いた[11]。水城は全長 1.2 ㎞の大土塁で高さは 13m である。前面に幅 60m ×深さ 4m の幅の広い濠、後面にも濠をもつ。土塁の両端付近には門が設けられており、通行が可能な構造であった。この水城によって博多湾方面からの大宰府への侵入を防いでいる。665 年には、百済亡命官人により、大野城、基肄城が築かれた[12]。大野城は標高 410m の四王寺山の頂に築かれており、南北 2 ㎞×東西約 1.5 ㎞で南北に歪んだひし形になっている。周囲を幅 11m ×高さ 6m の土塁で区画し、谷の部分には石垣が築かれている。桁行 5 間×梁行 3 間の総柱建物跡が多数発見されており、有事を想定した倉庫群と考えられている。基肄城は大宰府の南方 8 ㎞に位置し、標高 414m の四王寺山山頂に一周 4 ㎞にわたって尾根線上に土塁が築かれ、谷には石垣が築かれている。城内から倉庫と考えられる桁行 5 間×梁行 3 間の建物跡が確認されている。山頂から筑紫平野を一望で

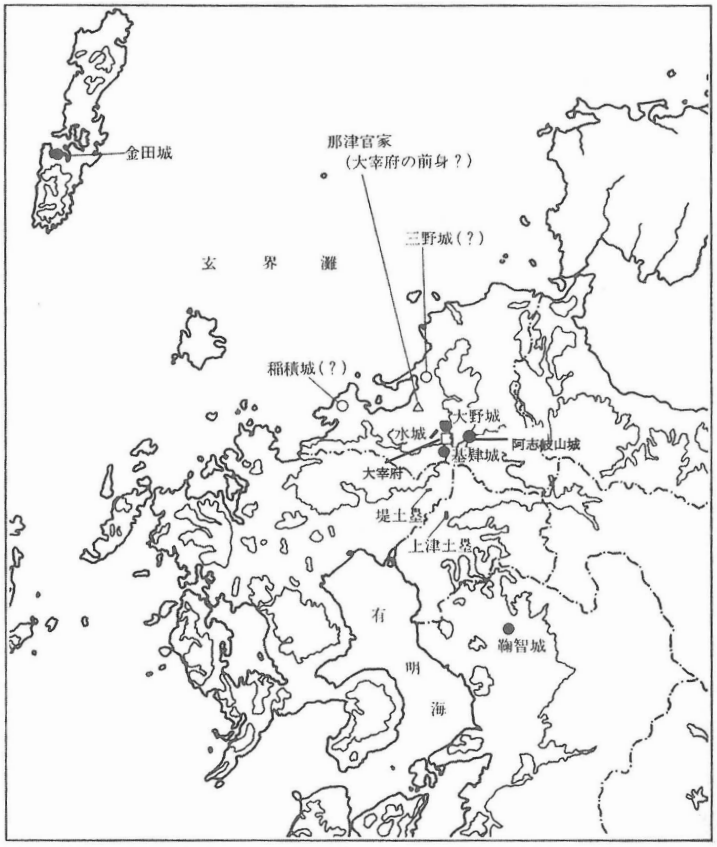


図 4　西海道の古代山城（髙倉 1996 を一部改変）

11 『日本書紀』天智天皇三年条に「筑紫に、大堤を築き水を貯へ、名けて水城と日ふ。」とある。

12 『日本書紀』天智天皇 4 年 8 月条に「達率憶礼福留・達率四比福夫を筑紫国に遣して、大野と椽、二城を築かしむ。」とある。

きることから有明海方面からの敵の侵入を防ぐ目的があったと考えられている。

第2列目として金田城、鞠智城がある。667（天智6）年に対馬の金田城が築城された。金田城は現在の対馬市美津島町黒瀬の城山に所在し、土塁石垣、城門の遺構が残っている。664（天智3）年に筑紫国、壱岐島とともに烽がおかれており[13]、朝鮮半島と地理的に近い対馬は九州本土より先に攻撃の対象となることが想定されている。さらに、熊本平野の奥まった熊本県菊池市・山鹿市の標高160～200mの米原台地の一帯には鞠智城が築かれており、土塁や門跡、倉庫と思われる礎石建物跡が発見されている（西住ほか編2012）。

対馬の金田城、水城・大野城の間に位置する第3の防衛ラインとして、福岡県久留米市高良山西麓の丘陵間の平地に位置する上津土塁がある。長さ約500mの土塁で南側に濠をともなう。版築土の状態から水城とほぼ同時期に築かれたと考えられている。これに類似するものとして佐賀県三養基郡上峰町の堤土塁がある。長さ約110mが残っており、版築土の状態から水城と同時期に築かれたと考えられているが、濠は確認されていない（髙倉1996）。これらに加え、筑紫野市宮地岳の阿志岐古代山城は羅城の東南を固める山城として注目されている。

大宰府から瀬戸内海を経て都へと至る交通路には、山口県下関市付近に長門城、広島県東部に茨城・常城、香川県高松市には屋島城位置しており、瀬戸内海への敵の侵入を防ぐ目的があったと考えられている。さらに、大阪府八尾市に高安城があり、都への侵入を間際で止めるための位置にあったと考えられている（町田編1989）。また、九州北半の山城には隼人への対策施設としての意味もあり、対外的な軍事施設であったと同時に、隼人対策としての機能も有していたと考えられるのである。

大宰府の成立については、『日本書紀』の536（宣化元）年に現在の博多湾沿岸、那津のほとりに官家がおかれたという記事[14]があり、これを那津官家とよび大宰府の前身と捉え、白村江の戦いの後に現在の太宰府市への大宰府の設置につながるというのが一般的な見解である。文献史料に「大宰」の文字がみえるのは『日本書紀』の609（推古天皇17）年4月条年の「筑紫大宰」が初見[15]で、筑紫以外では天武天皇8（679）年3月条 の「吉備大宰石川王[16]」が最古である。

この後『続日本紀』700（文武天皇4）年10月条に筑紫に総領がおかれたという記事[17]がみえる。総領とは、7世紀から8世紀はじめにかけておかれた地方官で、最初は大宰（おおみことものつかさ）とよばれた。律令制の数か国を管する国司（国宰）の上級官司であった。筑紫・吉備・周防・伊予・播磨・常陸（坂東）におかれたとあり、この筑紫大宰は百済救援にともなう臨時の軍政府的機能をもつ官職であったと考えられている。

大宰府　大宰府の政庁跡は現在の福岡県太宰府市のほぼ中心部、東の四王寺山と西の脊振山系からのびる丘陵の間の平坦地に位置している[18]。大宰府政庁は東西122m×南北211mの築地・回廊に囲まれた建物で、遺構は第Ⅰ～Ⅲ期の3時期にわかれ、2時期にわたる礎石建物（Ⅱ・Ⅲ期）とその下層には掘立柱建物跡（Ⅰ期）が発見された（図4・5）。最も古い第Ⅰ期の遺構は中門・回廊東北隅部・北

13 『日本書紀』天智天皇3年条に「対馬島・壱岐・筑紫国等に、防と烽とを置く。」とある。

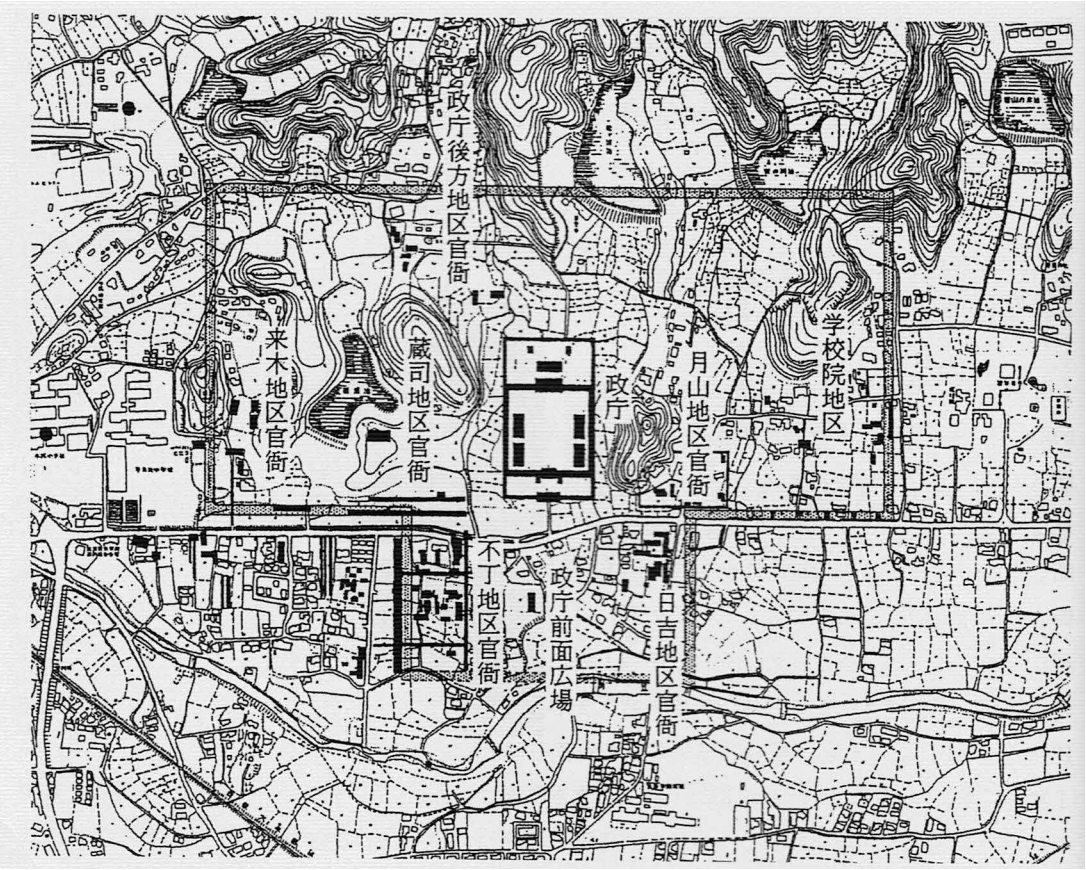
14 『日本書紀』宣化天皇元年5月条に「…（中略）…官家を那津の口に修造てよ。」とある。

15 『日本書紀』推古天皇17年4月条に「…（中略）…筑紫大宰、奏上して言さく…」とある。

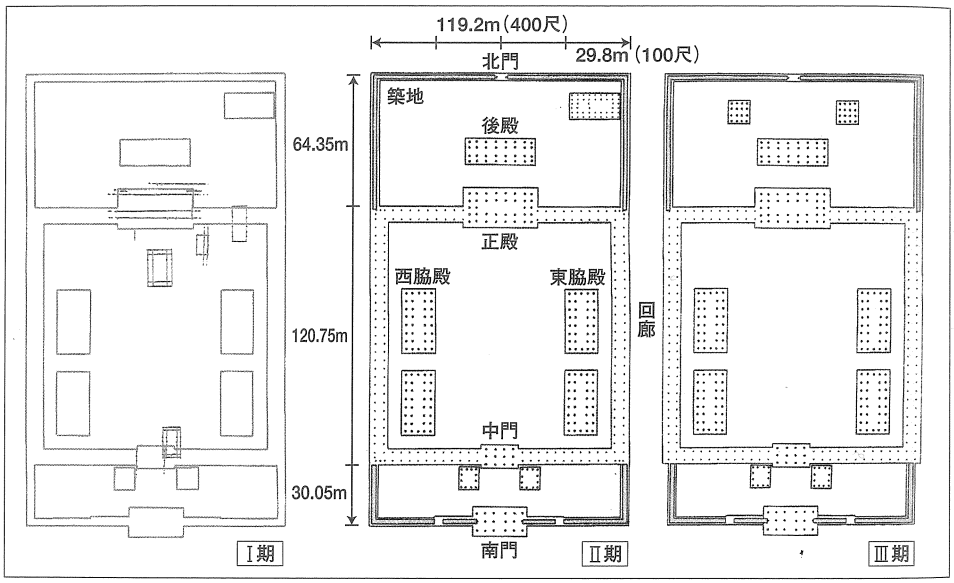
16 『日本書紀』天武天皇8年3月条に「己丑に、吉備大宰石川王、病して吉備に薨りぬ。」とある。

17 『続日本紀』文武天皇4年10月条に「…直大壱石上朝臣麻呂を筑紫総領とす」とある。

18 以下、九州歴史資料館2002にしたがって述べる。



大宰府政庁と周辺の官衙



政庁の3時期の変遷

図5　大宰府政庁と周辺の官衙および政庁の時期変遷（上：小田 2013、下：杉原 2011）

門跡から検出され、中門跡からは建物 4 棟と柵 4 条が、回廊の東北隅部では建物 2 棟が検出された。北門では柵 2 条と建物の一部が見つかっている。これらの掘立柱建物の年代は、整地層のなかに含まれた土器から 7 世紀後半とされており、中門跡と回廊跡で検出された建物はⅡ・Ⅲ期の遺構と同じ方位をとっているため、Ⅱ・Ⅲ期遺構との連続性が考えられている。8 世紀の初頭には掘立柱建物から礎石建物へと建て替えられ、都の朝堂院・大極殿形式と似た建物配置をとっている。第Ⅱ期の礎石建物遺構は、南門・中門の基壇に埋められていた須恵器の年代から 8 世紀初頭～ 10 世紀中頃、第Ⅲ期の年代は 10 世紀中頃～ 11 世紀中頃とされている。遺構は南門・中門・正殿・後殿・北門が検出され、これらは南北にならび、回廊と築地によって結ばれる。中門と正殿の間の広い空間には東西に脇殿が 2 棟ずつあり、脇殿付近・正門の南側・中門付近から玉石敷が検出されており、東西脇殿の間の空間地は玉石敷で、外国使節を迎える式典の場所としての広場であったと考えられている。府丁域に関しては条坊復元案と同様に、現在でもなお意見が分かれているが、政庁の前面に張り出しをもつことが近年の発掘調査によってわかっている（杉原 2011）。

政庁跡からは瓦類・土器類・土製品・金属製品・木製品・木簡などが出土した。出土瓦には最も古い鴻臚館系の軒丸瓦、老司Ⅱ式があり、最も出土量が多い鴻臚館式の瓦が第Ⅱ期遺構に葺かれたものだと考えられている。これらは大宰府を代表する瓦である。ほかに 3 種類の鬼瓦・文様塼・文字瓦も出土している。土器・陶磁器類は第Ⅰ・Ⅱ期から須恵器と土師器が出土したが、第Ⅰ期は須恵器のほうが多く、第Ⅱ期は土師器のほうが多く出土した。第Ⅲ期からは須恵器は大型の甕などのみで量も少なく、椀・杯・皿などの土師器の小型品が出土した。また墨書・刻書土器が多くみられ、硯や土製鋳型などのほか金属製品は鉄釘・刀子などが出土した。木簡は計 930 点以上が出土した。饗応のためと思われる須恵器・土師器や、役人が使ったと考えられる硯や木簡、墨書土器などが大量に出土していることからも、大宰府が西海道を統括する大きな役所であったことが実証されている。

686（朱鳥元）年には、政庁の東に斉明天皇の追善のため天智天皇勅願寺院として創建された観世音寺の伽藍が一応の完成を迎える。その後「府（ふ）の大寺」とよばれ西海道を統括する大宰府に付属する寺院として機能した。

第 2 章　東のまもり多賀城

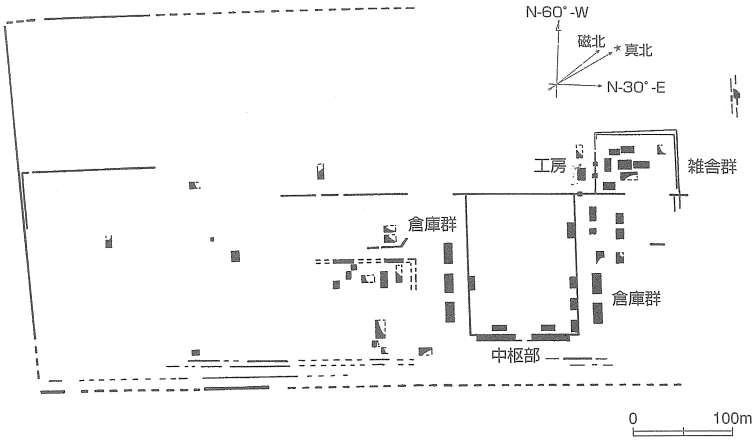
一方、日本の東端では律令政権が蝦夷として異民族化した集団の支配をはじめた。日本海側の越に 647 年に渟足柵[19] が、648 年に磐舟柵[20] が置かれ、太平洋側の陸奥国に 7 世紀半ばに郡山遺跡のⅠ期官衙が設置された（図 6）。

郡山遺跡は宮城県仙台市の広瀬川と名取川の合流点近くの自然堤防上にある。発掘調査によって 2 時期にわかれる官衙遺構が発見された[21]。古い段階のものをⅠ期官衙、新しい段階のものをⅡ期官衙とよんでいる。郡山遺跡のⅠ期官衙は造営基準方位が真北に対して西に 50 ～ 60 度傾いており、全体を材木列塀で囲んだ長方形で、東南から西北 295.4m、東北辺の塀の遺構は未確認であるため西南から東北 604m 以上の規模である。内部は塀によって区画され、中枢部のほかには南北に雑舎区・倉庫区がそれぞれ設けられており、北雑舎区の南には鉄の鍛冶公房区もあった。中枢区は政庁にあたり、

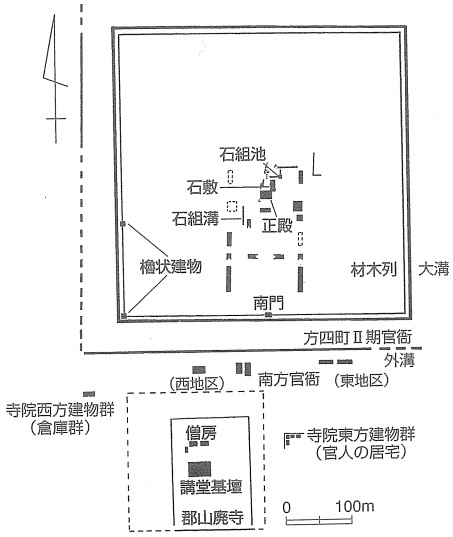
19 『日本書紀』孝徳天皇大化 3 年条に「渟足柵を造り、柵戸をおく。」とある。

20 『日本書紀』孝徳天皇大化 4 年条に「磐舟柵をおさえて蝦夷に備ふ。」とある。

21 以下、長島編 2005 にしたがって述べる。

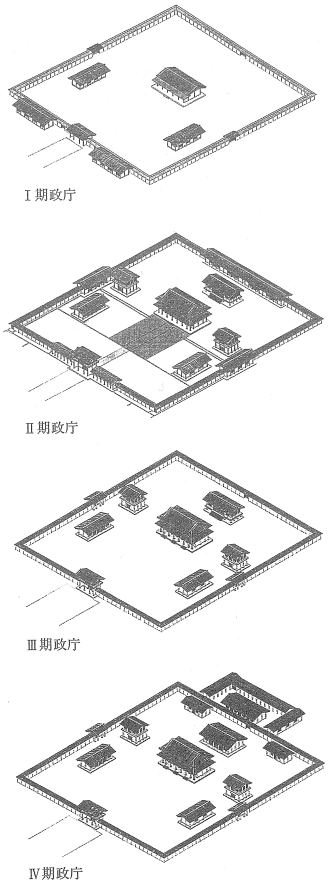


郡山遺跡Ⅰ期官衙（高倉 2008）



郡山遺跡Ⅱ期官衙（高倉 2008）

多賀城全体図（須田 2013）



多賀城政庁の変遷（高倉 2008）

図 6　郡山遺跡と多賀城跡

政務はもちろん儀式や宴会も行われたと考えられている。出土した土器の年代から7世紀中頃～末の年代が与えられており、城として機能した軍事施設として考えられている。

7世紀後半にはⅡ期官衙が藤原宮をモデルにして建造され、城柵の形をとりつつ陸奥国府として機能した。Ⅱ期官衙の遺構はⅠ期官衙と同じく材木列塀で囲まれた東西428.44m×南北422.72mのほぼ正方形である。塀の外側に大溝・外溝とよばれる二重の溝がめぐっており、塀と溝、溝と溝の間は空閑地になっている。正殿の北には石敷、石組池、南北棟掘立柱建物などがある。飛鳥の石神遺跡に同様の池があり、そこでは蝦夷の服属儀礼が行われたことから、構造が同じである石組池をもつ郡山遺跡のⅡ期官衙でも服属儀礼が行われていたこと考えられている。

724年には多賀城が建設され、律令政権の官衙が北上した（図6）。多賀城とは古代律令国家が東の辺要､陸奥国に配置した城柵の一つで陸奥国府の所在地である。奈良時代には鎮守府も置かれていた。多賀城の遺跡は宮城県多賀城市北西部の仙台平野に張り出した低丘陵上から沖積地にかけて存在する。中央部に政庁跡があり、南北約150m×東西約120mである[22]。

遺構には、8世紀前半から10世紀半ば頃にかけての4時期にわたる変遷がみられる。8世紀前半のⅠ期には築地に囲まれた長方形の区画のなかに、中央に正殿・東西に脇殿・南門・前殿の各掘立柱建物遺構が確認されている。8世紀後半のⅡ期からは礎石建物に建て替えられ、玉石を基壇や石敷に用いたことがわかっている。遺構は東西7間×南北4間の正殿、正殿の前面に東西64m×南北30mの広場、東西2間×南北7間の東西脇殿、3間四方の南門が検出された。Ⅱ期の建物群が火災消失した後に建てられたⅢ期の遺構は、年代が8世紀末～9世紀前半で、正殿・東西脇殿・南北棟の東西に配される建物（第二脇殿）・南門が検出され、Ⅱ期の建物群を復興したものと考えられる。9世紀後半～10世紀中頃までの年代が与えられているⅣ期には正殿と築地が改修され、西北隅に多くの建物が配された。

出土遺物には瓦類・土器類・木簡などがある。多賀城の主な瓦は重弁蓮華文軒丸瓦と重弧文軒平瓦である。3種の鬼瓦、塼も出土している。また土器も皿・杯・瓶などの食事用のものや、甕などの貯蔵用、調理用のものが出土し、多賀城の政庁が饗応の場としても機能していたことがわかる。また、南辺中央部には近世に壷碑とよばれ、多賀城跡の存在を世に知らしめた多賀城碑が樹立している。

文献史料では737（天平9）年に「多賀柵[23]」として『続日本紀』に初見する。創建年代は明らかではなく722（養老6）年には鎮所・陸奥鎮所の記載があり、多賀城の創建をそのころであるとする説もある。「多賀城」としての初見は780（宝亀11）年、伊治呰麻呂に攻められ、略奪放火された時のものである。その後、多賀城は蝦夷征討の根拠地となり、802（延暦21）年に築城された胆沢城に鎮守府が移されてからは陸奥国府として機能し、古代中世を通じて東北の政治・軍事の中心であった。

また、郡山遺跡Ⅱ期官衙および多賀城には寺院が付属し、郡山廃寺・多賀城廃寺とよばれている。第3部で詳述するが、両廃寺とも伽藍は観世音寺式をとっている。

以上のように、古代日本の東西のまもりの要として、大宰府が西海道を治めたのに対し、東の多賀城は蝦夷対策と東北全体の支配を意図していた。多賀城は国府を超えた地方官衙である大宰府に近い性格をもっていたと考えられている。

22　以下、高倉2008にしたがって述べる。

23　『続日本紀』聖武天皇天平9年4月条「…（中略）…将軍東人、多賀柵より発つ」とあり、この「多賀柵」は郡山遺跡Ⅱ期官衙を指すのではないかと考えられている。

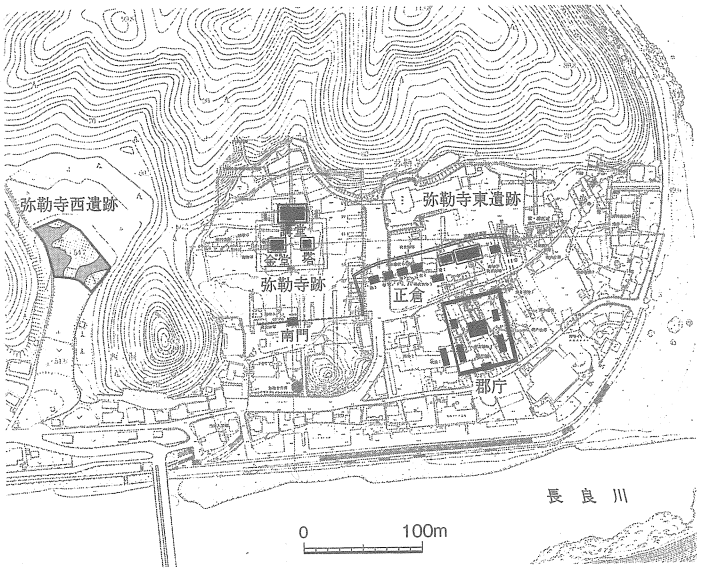


図 7　弥勒寺遺跡群（菱田 2007）

第 3 章　地方官衙と寺院

郡衙と寺院の関係が明確に分かる例として、岐阜県関市の弥勒寺官衙遺跡群がある（図 7)。長良川北岸の平地に寺院と官衙が計画的に配置されている。弥勒寺の西側には祭祀遺跡と考えられている弥勒寺西遺跡があり、郡衙の周辺に仏教施設と神道祭祀施設が並置されている。また弥勒寺からは「大寺」と書かれた 9 世紀後半の墨書土器が見つかっている。限られた空間の中に郡衙、寺院、神道祭祀施設が配置されていることから、高度な計画性をもって建てられ、弥勒寺が単に氏族の氏寺という性格のみではなく、郡衙と一対で機能することを意図したと考えられている（篠原・田中 2001、田中 2005、2010)。つまり、弥勒寺は郡の寺として存在していたのである。

以上のように、古代国家が律令国家へと発展し地方支配を行っていく中で仏教が重要視されていた。天武・持統朝に行われた仏教政策はいわば鎮護国家政策である。658（斉明 3）年に『金光明最勝王経』、『仁王経』、『法華経』の鎮護国家の三経のひとつである『仁王経』が読まれている。676（天武 9）年には官寺の制がしかれ、同年 5 月に『金光明経』、『仁王経』が読まれている。また、天武 14 年には「国々、家ごとに仏舎をつくり、仏像と経をおき礼拝供養せよ」との詔がでている。『日本書紀』685（天武 13）年の天武天皇の「凡そ政の要は軍事」の詔にもあるように、仏教政策は単に宗教的、先進の文化的側面のみならず、軍事的側面をもっていた。持統朝では、694（持統 8）年、696（持統 10）年に『金光明経』が読まれている。天武・持統朝に造営された寺院は護国という目的のなかでそれぞれの寺に与えられた役割を担っていた（甲斐 2010)。

第３部　伽藍配置の分布と展開

第１章　観世音寺式伽藍配置

観世音寺式伽藍配置は、一塔一金堂型式で、回廊内の東に塔を、西に東面する金堂を配し、その二つが向き合う形で、回廊がない場合は回廊に準ずる寺域を区画する施設をもつものと定義される。観世音寺式をとる寺院に注目した近年の研究として、先述の菱田哲郎による研究がある。観世音寺式をとる寺院として、多賀城廃寺、郡山廃寺、夏井廃寺、大御堂廃寺、道成寺、観世音寺を挙げ、東西南北の要衝に布教の拠点として観世音寺式伽藍配置をとる寺院が設けられた可能性を指摘している（菱田 2005）。また観世音寺と多賀城廃寺がともに飛鳥の川原寺を範とする伽藍配置を採用したという見解も示している（菱田 2007）。

また、『シンポジウム報告書　天武・持統朝の寺院造営―東日本―』（帝塚山大学考古学研究所 2008）では、観世音寺式伽藍配置をとる寺院の分布についての議論がされている。そのなかで、森郁夫の「いずれも官に関わるお寺が目立つ」という発言に対し、佐川正敏が「伽藍配置の選定が（中略）国家的な一つの政策に基づいて判断された」と述べており、観世音寺式伽藍配置の採用に国家的な意図があった可能性が指摘されている。また須田勉は、観音信仰には菩提を弔う性格と、国家的な危機に対する救済の両方の性格という二つの面をもっていることから、観世音寺も多賀城廃寺も辺境の防衛というものに性格が変化したのではないかと指摘している（須田 2013b）。

（１）観世音寺式伽藍配置をとる寺院

上記の定義により筆者が確認した限り、観世音寺式伽藍配置をとる寺院は、先学によって挙げられた多賀城廃寺、郡山廃寺、夏井廃寺、道成寺、大御堂廃寺、観世音寺の６寺院に、穴太廃寺、崇福寺、英賀廃寺、伝吉田寺、上坂廃寺、陳内廃寺を加えた 12 か寺である[24]。以下、北から南の順に各報文等に従ってその概要を述べる。番号は図８～10 と対応している。

1. 多賀城廃寺　宮城県多賀城市高崎に所在する。多賀城跡の東南約１㎞の丘陵上に立地している。1969（昭和 44）年からの発掘調査により、塔・金堂・講堂・中門・築地塀・鐘楼・経楼など 15 の遺構が確認されている（伊東編 1970）。

塔は高さ約 3m の土壇上に 17 個のすべての礎石が残っており、建物は３間×３間で、基壇の規模は方 11.43m（37 唐尺）、建物の初層は方 6.23m（21 唐尺）であったと考えられている。金堂は塔の西、心々距離で 40.7m のところにある。発掘調査によって 26 個の礎石が検出され、基壇の規模が東西約 16.3m ×南北約 20m であることがわかった。建物は桁行５間×梁行４間の南北棟で、桁行３間×梁行２間の身舎に四面廂をもつと考えられている。創建時の基壇化粧は凝灰岩切石による檀上積基壇である。基壇の周囲からは多くの瓦が出土しており、創建期の瓦が 96%を占めている。講堂は塔・金堂の中心線の北 33.5m の位置にある。基壇は東西約 31m ×南北約 18.8m の規模であり、桁行８間×梁行４間の東西棟で、桁行６間×梁行２間の身舎に四面廂がつく建物であったことがわかっている。金堂と同様に凝灰岩切石による檀上積基壇である。講堂の北方と西南方一帯から泥塔が多数出土してい

24　時期を違えて秋田城Ⅰ・Ⅱ付属寺院、出羽国分寺（堂の前廃寺）、薩摩国分寺を加えた計 15 寺に数えられる（貞清・髙倉 2010）。第５部で詳述する。

る。また、中門は塔・金堂中心線の南 25.2m に位置し、根石跡と基壇化粧の跡とみられる凝灰岩切石等が発見されている。これにより東西 11.3m、南北 8.9m の基壇で、桁行 3 間×梁行 2 間の礎石建物が復元されている。築地塀跡は中門跡から塔と金堂を取り囲むように講堂に接続している。長さは南辺約 81.7m、西辺約 56.4m である。南北棟で東面する金堂とと塔が向い合うため、観世音寺式である。

9 世紀に鐘楼・経楼などが建設されていることから、多賀城廃寺は国分寺造立後も官立寺院として存続し、多賀城におかれていた陸奥国府が財政負担を行い維持した重要な官立の寺院であったとされる。1983（昭和 58）年に西方約 2 kmの山王遺跡から「観音寺」と墨書された杯形土器が発見された（高倉 1991）。土器の年代は 10 世紀前半とされ、多賀城廃寺が機能していた時期にあたり「観音寺」は多賀城廃寺をさすと考えられている。須田勉は多賀城廃寺が観世音寺式伽藍配置をとることからその字名が観世音寺であり、筑紫観世音寺に対しての陸奥観世音寺であったと論じている（須田 2003）。

創建瓦は多賀城式とよばれる多賀城の創建瓦と同じデザインの瓦で、重弁八弁蓮華文軒丸瓦と重弧文軒平瓦の組み合わせである。重弁八弁蓮華文軒丸瓦の直径は 17.8 ～ 21.5cm で、平均約 20cm である。重弧文軒平瓦は、顎の幅がおおよそ 8cm 前後で、弧線は正面に 2 本で顎に太い鋸歯文が施されている。

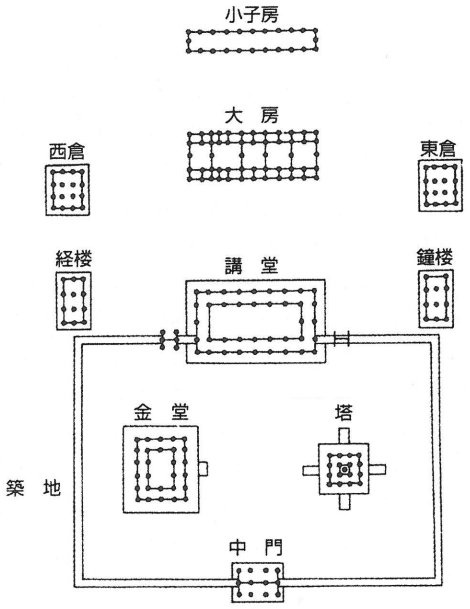
2. 郡山廃寺　宮城県仙台市太白区郡山に所在する。仙台平野の中央部、仙台市南部の名取川とその支流の広瀬川に挟まれた自然堤防上の多賀城から南西へ約 13 kmの地点、郡山遺跡の南部に位置している（長島編 2005）。郡山遺跡のⅡ期官衙に付属していた。Ⅱ期官衙の年代は出土土器から 7 世紀末～ 8 世紀初めと推定されており、その後 724 年の多賀城建造まで存続したと考えられている。『日本書紀』天平 9 年に記録のみえる「多賀柵」は郡山遺跡Ⅱ期官衙をさすと考えられている。

遺構は外側を材木列塀で囲んでおり、伽藍の規模は東西（北辺）120m、南辺 125m、南北 167m である。発掘調査によって、講堂、僧房、金堂などの遺構が検出された。南門の北で検出された東西 32m 以上×南北 12m 以上の規模の版築基壇が講堂に推定されている。その北に桁行 5 間×梁行 3 間（11.8m × 5.8m）の東西棟の建物跡があり、掘立柱建物の僧房と推定されている。講堂の西南には瓦葺きの基壇建物跡が推定されており、金堂に推定されている。また、伝承では塔があったといわれている。以降の遺構が不十分であるが金堂が南北棟と推定されており、観世音寺式伽藍配置と考えられる。

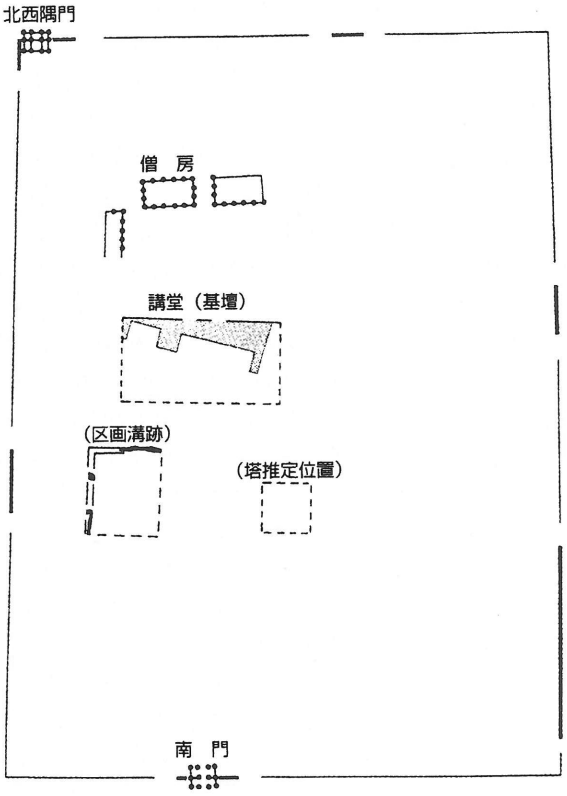
出土遺物として、瓦は単弁蓮華文軒丸瓦、ロクロ挽き重弧文軒平瓦、平瓦などがあり、多賀城・多賀城廃寺の瓦の祖型と考えられるものが出土している。また、木簡、土器類なども出土している。創建瓦は単弁八弁蓮華文軒丸瓦と平瓦の組み合わせである。単弁八弁蓮華文軒丸瓦は A ～ D の 4 種にわかれ、A 種が最も多く出土しており年代も古く、創建瓦とされている。直径は平均約 17cm である。組み合わせる平瓦は軒平瓦の代用として用いられたと考えられている。平瓦は粘土板桶巻作りによるもので、縄叩きされている B 種が出土量も圧倒的に多く、郡山廃寺に葺かれたと考えられている。

3. 夏井廃寺　福島県いわき市平下大越に所在する。夏井川の河口付近にあたり、南に磐城郡衙をのぞむ。南北 500m 以内に郡衙と寺院が立地しているため、郡衙との関連性の強い寺院であると考えられている（廣岡・中山編 2004）。遺構はその変遷時期が明らかになっている。0 期は寺院創建以前、Ⅰ期が 2 時期に分けられ、創建のⅠ A 期が 7 世紀末～ 8 世紀初頭、Ⅰ B 期が 8 世紀前半～中頃で、8 紀後半～ 9 世紀前半のⅡ期には伽藍の完成期を迎え、Ⅲ期は 9 世紀後半～ 10 世紀で、寺院衰退期である。

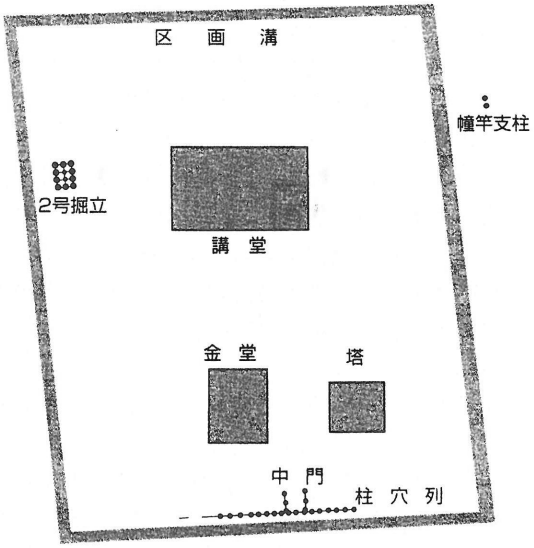
塔は、東西 12.8m ×南北 11.8m の基壇が検出されており、多賀城廃寺と同規模の三重塔が想定されている。金堂跡の基壇は東西 13.1m ×南北 17.2m で、桁行 5 間×梁行 4 間の建物と考えられている。



1　多賀城廃寺



2　郡山廃寺



3　夏井廃寺

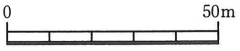


図 8　観世音寺式伽藍配置寺院集成 1（廣岡・中山編 2004）

講堂の基壇は東西 32.1m ×南北 19.5m で桁行 8 間×梁行 4 間の建物と考えられている。いずれも四面廂の建物が想定されている。また、東西 96.3m ×南北 119.5m の区画溝が検出されている。遺構の時期変遷によれば、Ⅰ A 期に金堂、講堂が建てられ、Ⅰ B 期に塔が建立されており、金堂、講堂にやや遅れる形で塔が建てられたと考えられている。伽藍配置については、東面する南北棟の金堂にその特徴があり、先に東面する金堂を建立し、少し遅れて塔が建立され東面する金堂と塔が向かい合う形となるため本論では観世音寺式に分類する。

出土遺物には、複弁六葉蓮華文をはじめとする 17 種類の軒丸瓦、ロクロ挽き重弧文など 3 種類の軒平瓦、文字瓦、平瓦、丸瓦があり、瓦のほかには土師器、赤焼き土器などがある。創建瓦は複弁六弁蓮華文軒丸瓦（a 第一類）、複弁八弁蓮華文軒丸瓦（d 第一類）とロクロ挽き重弧文軒平瓦の組み合わせである。複弁六弁蓮華文軒丸瓦は直径 17cm、複弁八弁蓮華文軒丸瓦は中房径 4.4cm である。梅ノ作瓦窯群跡第 4・5 号窯跡から、A 第一類の複弁六弁蓮華文軒丸瓦とともにロクロ挽き軒平瓦より後出の重弧文軒平瓦が出土しており、その年代が 8 世紀初頭から前半とされていることから、創建瓦である複弁六弁蓮華文軒丸瓦、複弁八弁蓮華文軒丸瓦、ロクロ挽き重弧文軒平瓦には 7 世紀末～ 8 世紀初頭の年代が与えられている。

4. 穴太廃寺（後期穴太廃寺創建寺院）　滋賀県大津市穴太に所在する。金堂・塔などが検出されており、方位は旧北陸道とほぼ合致する（林ほか 2001）。金堂の基壇規模は東西 12.96m ×南北 14.22m で、瓦積み基壇である。建物は桁行を南北方向にとると推定され、塔と対面すると考えられているため、観世音寺式となる。金堂の東から塔と考えられる基壇の西辺版築面が検出され、一辺 10.20m（28 尺四方）の基壇規模が推定されている。心礎石は不明である。基壇の外装は大和産凝灰岩を用いた切石積み基壇と考えられている。ほかに再建寺院の講堂跡の南辺で約 18m、北辺東側で 12.0m の西回廊跡が検出されている。また、西金堂の基壇北辺から約 27m 北方、西金堂跡中心点と塔跡中心点を結ぶ線から北へ約 35m のところに約 5m の北方葛石列が、西回廊跡の北側の礎石から北へ約 10m の地点では階段状施設が検出された。

遺物として、7 型式 10 種の軒丸瓦、全 11 型式の軒平瓦、丸瓦、平瓦、道具瓦、鴟尾、土器類などが出土している。このうち後期穴太廃寺創建寺院（Ⅱ期）のものは瓦と鴟尾のみである。創建瓦は単弁八弁蓮華文軒丸瓦と素文軒平瓦の組み合わせである。軒丸瓦は、出土した単弁八弁蓮華文軒丸瓦の中で最も多い ANM21A 型式で、直径 21 ～ 21.3cm である。組み合わせられる軒平瓦は素文軒平瓦で、横幅 36 ～ 38cm、長さ 40cm である。また、穴太廃寺の前身である前期穴太廃寺の遺構からは高句麗系の軒丸瓦が出土しており、穴太廃寺再建寺院（Ⅲ期）の遺構からは川原寺式の複弁八弁蓮華文軒丸瓦や南滋賀廃寺出土瓦と同笵の軒丸瓦が出土している（仲川 2001）。

5. 崇福寺　滋賀県大津市滋賀里に所在する。通説では天智天皇の勅願で、遅くとも 668（天智天皇 7）年に大津京の西北山中に建てられたとされている。主要伽藍は谷川を隔てた北尾根、中尾根、南尾根の三尾根上に築かれている（柴田 1941、林 1989）。その平坦部の標高はいずれも約 242m であり、これらの高さは揃えられたと考えられている。三尾根のうち、北尾根、中尾根の伽藍を崇福寺とする説が有力である（埋蔵文化財研究会 1997）。

最も北側の尾根は「弥勒堂」という小字名で南北 25m 前後×東西 40m 前後の平坦地があり、そこに花崗岩の地覆石を並べその上に瓦積み基壇がつくられている。基壇は東西 22.7m ×南北 15.8m である。基壇上には花崗岩の礎石があり、東西 5 間×南北 3 間の南面する建物跡が検出された。また、この建

物基壇の東側平坦部には基壇の東南から東北にのびる高さ 1.2m の石垣、その北端から南面して東西にのびる約 3m の瓦積み基壇が発見されている。中尾根は俗称「丸山」とよばれる。東西約 40m ×南北約 18m の平坦部があり、その東寄りに方約 10m の基壇をもつ塔跡がある。3 間× 3 間で、一辺は約 6.55m である。心礎石は東西約 1.82m、南北約 1.52m の自然石で、中央に直径 53cm、深さ 10cm の柱受けの門座を設けてある。塔跡から西に約 12m のところに東西約 11.4m ×南北約 11.6m、高さ 60cm の基壇をもつ小金堂跡があり、建物は 3 間× 2 間の身舎に廂を設けたものであると考えられている。筆者は、天智天皇勅願寺院であることや北尾根の建物を講堂、中尾根の小金堂を金堂とすると、山上寺院という特殊な形態ではあるが、観世音寺式のグループに入ると考えている。

出土遺物には白鳳期のものは少なく、瓦類や土器類も大半は平安期のものである。瓦のほかには舎利容器荘厳具、磚仏、鏡が中尾根から出土している。川原寺と同笵の複弁八葉蓮華文軒丸瓦が中尾根の塔付近から出土している。また、紀寺式軒丸瓦が北尾根弥勒堂付近から出土している。軒平瓦は四重弧文のものが出土している。創建瓦は中枢である中尾根から複弁八弁蓮華文軒丸瓦Ⅰ、Ⅱ型式が出土しており、創建瓦と考えられている。複弁八弁蓮華文軒丸瓦Ⅰ型式は中房に 1 ＋ 5 ＋ 9 の蓮子をもち、外区に面違鋸歯文が施されている。Ⅱ型式は中房に 1 ＋ 4 ＋ 6 の蓮子をもち、弁端と間弁端がすべて連続するつくりになっている。複弁八弁蓮華文軒丸瓦Ⅰ型式は川原寺創建瓦 A 種と同笵のものが中尾根の塔付近から出土しており、同じものが南滋賀廃町寺でも崇福寺のⅡ型式としてわずかに出土しており、Ⅱ型式は南滋賀町廃寺のⅢ型式と同笵である。四重弧文軒平瓦は中尾根から段顎をもつものが出土している（林 1989）。

6. 道成寺　和歌山県日高郡日高川町（旧川辺町）に所在する。日高川左岸の丘陵に立地している。寺伝では 701（大宝元）年に紀大臣道成が勅を奉じ宮子夫人の祈願寺として創建したとされている。1978（昭和 53）年から発掘調査が行われ、創建時の伽藍は門から左右に複廊回廊がのび、金堂、塔と取り囲み、講堂にとりつく配置であることがわかった。金堂は検出された 21m × 24m の地山造出面が金堂基壇を設けるための基盤と考えられている。桁行 5 間×梁行 4 間の南北棟の建物に復元されていることから、観世音寺式をとると考えられる。塔は回廊の位置などから金堂の東側の位置に想定されている。また、測量調査によって、中門は桁行 3 間×梁行 2 間、講堂は桁行 7 間× 4 間の建物が復元されている（水野編 1980）。

遺物は、複合鋸歯文をもつ道成寺軒丸瓦をはじめとする軒丸瓦 10 種、扁行唐草文軒平瓦などの軒平瓦 6 種のほか、瓦釘片が出土している。創建瓦は、複弁八弁蓮華文軒丸瓦、複弁七弁蓮華文軒丸瓦と扁行唐草文軒平瓦（第 1・2 類）の組み合わせである。複弁八弁蓮華文軒丸瓦は直径 15.6cm で、周縁に複合鋸歯文をもつ。複弁七弁蓮華文軒丸瓦は直径 15.8cm で、外区に変形鋸歯文をめぐらせている。この 2 種で道成寺軒丸瓦の第一系譜を形成している。これらと組み合わせられると考えられている扁行唐草文軒平瓦第 1 類は、上外区に珠文、下外区に複合面違鋸歯文をもつ。第 2 類は、内区に細線の扁行唐草文を、上外区に珠文をいれ、下外区は作られない。第 1 類と同笵で、下外区を取り外して成立したものであると考えられている。第一系譜の瓦の年代から、道成寺の創建は 8 世紀はじめと考えられており、寺伝とほぼ一致する。

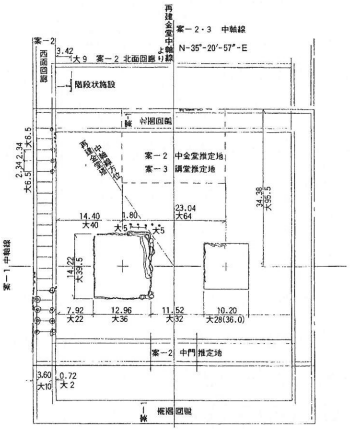
7. 大御堂廃寺　鳥取県倉吉市駄経町に所在する。倉吉平野の東側、天神川の支流竹田川と小鴨川の合流点近くの沖積平野の基部に位置する。西に約 5 kmにある伯耆国庁に続く官道が寺域の南に想定されている。古くからその存在が知られており、1996（平成 8）年から始まった倉吉市教育委員会によ

る発掘調査で、金堂・講堂・僧房・築地塀・導水施設等が発見された（真田 1986、真田ほか 2001、真田・根鈴 2005）。寺域は東西築地間 135m、南北 200 ～ 220m と推定されている。金堂は東西約 12.3m ×南北 18.4m の基壇規模で南北棟建物である。基壇上面は破壊を受けているため、建物の規模は不明である。塔はすでに基壇がほとんど削平されていたが、基壇残部などから基壇規模は 9.6m 四方と推定されている。講堂は基壇が削平されていたが、根石の抜き取り穴などから東西 36.6m ×南北 16.8m の規模に推定されている。伽藍配置について報告書では、金堂と塔との基壇縁間が 7.2m（約 24 尺）と接近していることに言及しつつ東面する金堂という特徴をもつため、観世音寺式をとるとしている（真田・根鈴 2001）。また、「久米寺」銘墨書土器が出土したことから、郡名を冠する寺名をもった公的な性格をもつ寺院だったと考えられている。創建年代は 7 世紀中ごろ（白鳳時代初めごろ）とされている。

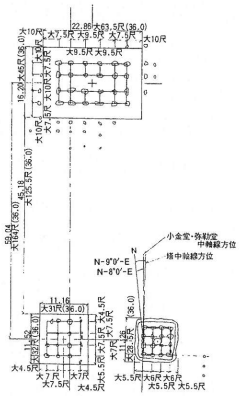
出土遺物として、大御堂廃寺軒瓦とよばれる瓦が非常に多く、軒丸瓦 15 型式 18 種、軒平瓦 5 型式、鬼瓦 2 型式 3 種に分類されている。瓦による編年で、第一段階として 7 世紀第Ⅲ四半期に創建され、第二段階として 7 世紀第Ⅳ四半期には本格的な整備がされ、第三段階となる 8 世紀前半には部分的な造営ないし改修が行われ、第四段階は 8 世紀第Ⅲ四半期以降で、改修・差替がされたと考えられている。瓦の他に、7 ～ 8 世紀の須恵器・土師器、佐波理匙、獣頭、像、磚仏、石仏、木簡、墨書土器などが数多く出土している。創建瓦は第一段階の単弁八弁蓮華文軒丸瓦（Ⅰ類）であり、組み合う軒平瓦はない。単弁八弁蓮華文軒丸瓦は、直径約 17cm で、くさび状の間弁をもち、1 ＋ 6 の蓮子を中房におく。百済系の山陰で最も古い瓦で、創建期（第一段階）の 7 世紀第Ⅲ四半期の年代が与えられている。7 世紀第Ⅳ四半期には、伽藍の本格的整備が行われたと考えられている。本格的整備期（第二段階）の瓦は、複弁八弁蓮華文軒丸瓦（Ⅱ～Ⅷ類）、四重弧文軒平瓦（Ⅰ・Ⅱ類）である。複弁八弁蓮華文軒丸瓦は外区に面違鋸歯文をもたないが、Ⅱ～Ⅴ・Ⅷ類を川原寺系、Ⅵ・Ⅶ類を藤原宮系とし、Ⅷ類は独特の線鋸歯文で、河原郡の大原廃寺などと瓦当文を共有しており、大御堂廃寺の位置する久米郡をこえて、瓦の供給体制をもっていると考えられている（真田・根鈴 2005）。また、これらの軒丸瓦は制作時期に差が認められ、造営工事が継続的に行われたものと考えられている。

8. 英賀（あが）廃寺　岡山県真庭市（旧上房郡北房町）上水田に所在する。英賀郡衙推定地である小殿遺跡の北東 2km の低段丘上に位置する。廃寺の西側は谷が南に深く入り込んでおり、谷に沿って古道がある。廃寺の位置する段丘は東が高くなっており、北と西に向かって低くなっている。この段丘上から広い範囲にわたって瓦が散布しており、高倉・大門・城ノ内・観音堂という小字名もあることから寺院以外にも官衙遺跡がある可能性が考えられている（平井編 1980）。

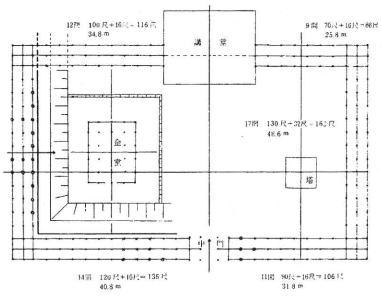
寺域はほぼ一町四方が想定されている。塔跡は塔心礎石が抜き取られているが、心礎石の位置した場所には現在石碑が建てられている。そのまわりは周囲の水田より約 60cm 高くなっていた。東基壇から塔の基壇は一辺が 15.6m と考えられている。講堂と推定される建物は塔の北側の寺域中軸線上に位置するが、基壇はほとんど削平されており雨落溝が一部確認されている。金堂は、塔の西側に観音堂という小字名が残っていること、東には塔が位置することから西に金堂が想定されている。塔よりも約 2m 低くなっており基壇はすでに削平された可能性が強く、瓦などは出土していない。この他に堂舎の一部と考えられる方形の掘立柱堀方を検出している。回廊は塔を囲むような形になっており、回廊南側の雨落溝が確認されている。南門は検出されておらず、寺院の中軸線は真北より東に 4 度偏しており、線上に南から南門、中門、講堂が並び、中門から回廊が左右に出て金堂・塔を取り囲み講



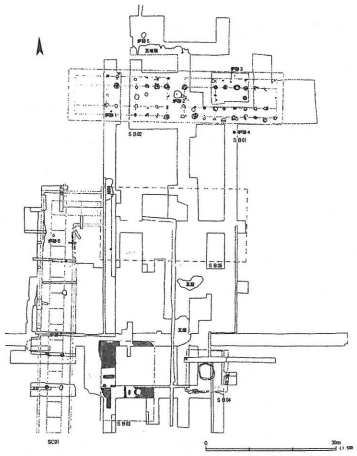
4　穴太廃寺（林編2001）



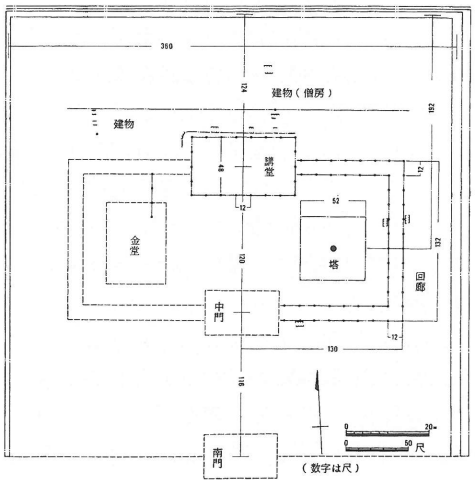
5　崇福寺（林編2001）



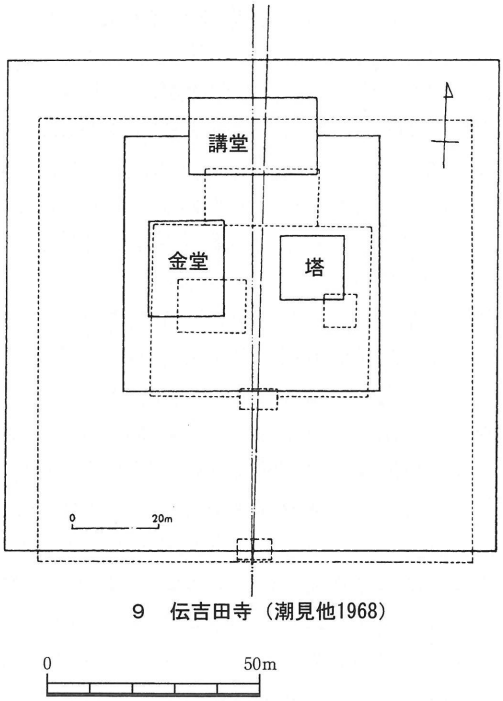
6　道成寺（水野編1980）



7　大御堂廃寺　（真田ほか 2001）



8　英賀廃寺（平井編1980）



9　伝吉田寺（潮見他1968）

図９　観世音寺式伽藍配置寺院集成２

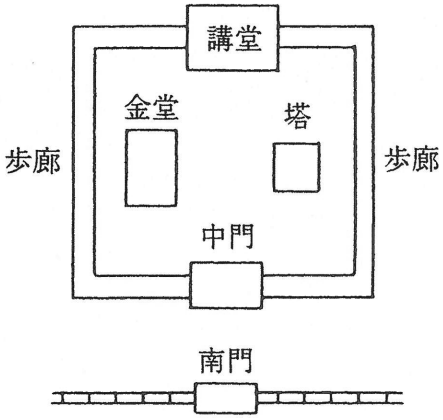
堂にとりつくと推定されている。このことから伽藍配置は法起寺式、観世音寺式のどちらかをとると考えられているが、南北棟の金堂が想定されていること、観音堂という小字名が残っていることから本論では観世音寺式に分類する。

遺物は、軒丸瓦6類、軒平瓦2類、丸瓦、平瓦、弥生式土器、須恵器、土師器、緑釉、鉄釘が出土している。瓦は塔の瓦溜まりから大量に出土し、次に講堂周辺から多く出土している。創建瓦は、重弁八弁蓮華文軒丸瓦（Ⅰ類）と無顎の重弧文軒平瓦の組み合わせである。重弁八弁蓮華文軒丸瓦は、直径15cmで蓮子は1＋8である。年代は白鳳期と推定され、寺院創建年代の根拠となっている。組み合わせられる軒平瓦については、報告書ではセット関係について特に記載はない。軒平瓦は、無顎の重弧文軒平瓦Ⅰ・Ⅱ類と唐草文軒平瓦Ⅲ類に分けられているが、唐草文軒平瓦Ⅲ類は1点のみの出土であるので、本論では軒平瓦Ⅰ類、Ⅱ類の重弧文軒平瓦を先の軒丸瓦とともに創建瓦として考え、表1においてはⅠ類を用いる。

9. 伝吉田寺　広島県府中市、芦田川中下流の沖積平野地帯の北西端にあり、国衙推定地の西方に位置する。町廃寺あるいは元町廃寺とよばれていたこともある。1968（昭和43）年の発掘調査により塔、講堂、回廊、中門の遺構が検出された（潮見ほか1968）。塔は基壇の一辺が14.5m（45.85尺）である。講堂は南・東南の基壇が確認されており、復元規模は桁行29m（95.7尺）以上×梁行17m（56.1尺）以上と考えられている。回廊の遺構は明確ではないが、根石または礎石と思われる石が残っていることから単廊と考えられている。中門は乱石積みの20～50cmの石列が基壇に想定されている。塔と伽藍中軸線の距離は約6mである。伽藍配置について、報告書では法起寺式伽藍配置であるとしているが、「規模の大きな金堂を推定するとすれば、塔の方向に向いた配置とならざるを得ない」という記述（潮見ほか 1968：p19）があり、金堂が東面し塔と向かいあうことが考えられているので、観世音寺式伽藍配置に分類する。また、国府に隣接するため、国府寺の性格をもち（潮見ほか 1968）、平安時代末頃まで存続したと考えられている（岡田2004）。

出土遺物は、軒丸瓦、軒平瓦のほかに、土師器、須恵器、鉄釘などがある。軒丸瓦は川原寺創建期のものと酷似しており、奈良時代前期の年代が与えられている。報告書では創建瓦の組み合わせが規定されていない。出土瓦には軒丸瓦12種、軒平瓦6種がある（岡田2004）。そのなかでも、藤原宮式の軒瓦であるⅡ型式軒丸瓦とⅡ型式軒平瓦はセット関係にあり、出土量が最も多い。Ⅱ型式軒丸瓦、軒平瓦はそれぞれ、Ⅱａ型式、Ⅱｂ型式に分類でき、ａからｂへと時代変遷がみられる（岡田2004）ことから、ここではⅡａ型式の軒丸瓦、軒平瓦の組み合わせを創建瓦とする。Ⅱａ型式軒丸瓦は複弁八弁蓮華文軒丸瓦で、直径17cmである。外区には外向鋸歯文があり、中房には1＋8＋8の蓮子がある。Ⅱａ型式軒平瓦は扁行唐草文軒平瓦で、外区に線鋸歯文をもち顎は段顎である。創建瓦の年代により、寺院の創建年代は白鳳期となっている。また、Ⅰ型式の軒丸瓦は川原寺式であり、川原寺式、藤原宮式の瓦が出土することから、造営に国家権力とのつながりが考えられている 。

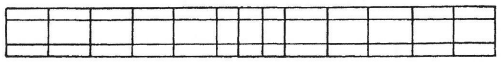
10. 上坂廃寺　福岡県京都郡みやこ町に所在する。寺域は方一町で、豊前国分寺跡の南方1.2㎞に位置する。1983（昭和58）年に県営総合パイロット事業に伴う遺構確認調査が実施され、塔・金堂・講堂の位置が推定されている（川本1998）。塔は、心礎石が確認されており、塔心礎は長さ2.8m、幅約2.2mの楕円形の花崗岩で、中心部に径85cm、深さ22cmの円形の柱座が彫り込まれ、中央部に円形舎利孔がもうけられている。金堂は塔心礎の西側、約25m～45m隔てたところにある瓦溜まり溝で区画された遺構と推定されている。講堂は塔心礎の北側約27.5mと約35mの地点で発見された礎石が

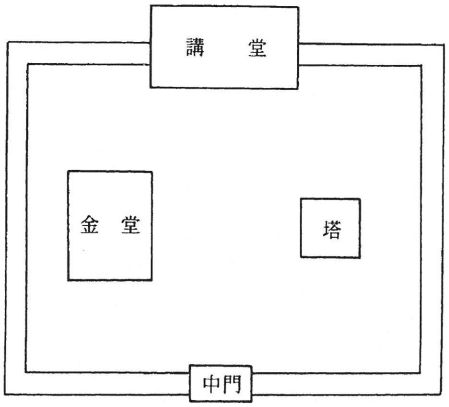


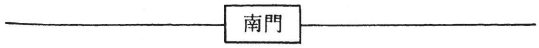
10　上坂廃寺（川本1998）

上：伽藍推定図　右：試掘箇所

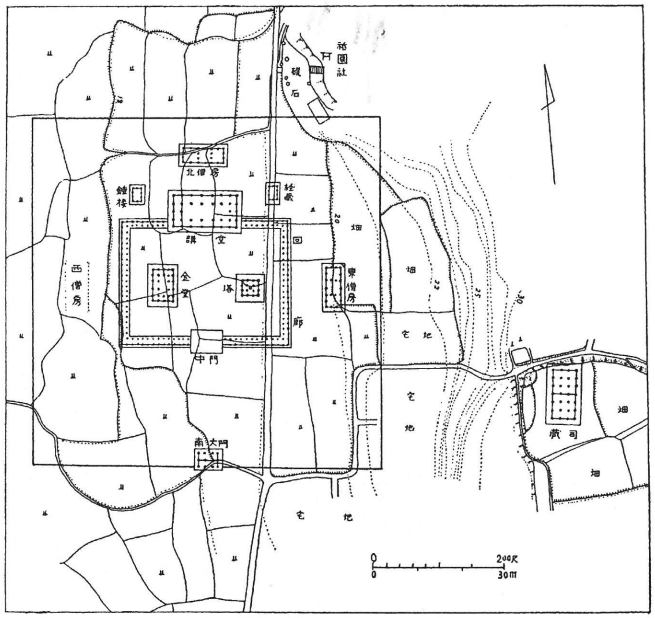
1　黄褐色土層瓦片を含む
2　同上
3　瓦片多し
4　弥生式～土師式土器片を含む
5　黄褐色土層・瓦片あり
6　同上
7　同上
8　同上（瓦だまり）
9　塔心礎
10　礎石
11　柱座のある礎石
12　黄褐色土層・瓦片多し







11　観世音寺（石松 2007a）



12　陳内廃寺（松本1965）

0　50m

図 10　観世音寺式伽藍配置寺院集成 3

その一部であると考えられている。伽藍配置については、遺構検出が不十分ではあるが『豊津町史』[25]において南北棟の金堂が想定されているため、本論では観世音寺式として扱う。出土瓦には百済系単弁八弁軒丸瓦、老司系単弁十九弁軒丸瓦、単弁七弁軒丸瓦、重弧文軒平瓦、老司系扁行唐草文軒平瓦があり、鴟尾も出土している。瓦による編年で、創建の時期は7世紀末とされ、9世紀前半ごろまで存続したと考えられている。創建瓦は単弁八弁蓮華文軒丸瓦と重弧文軒平瓦の組み合わせである。また、瓦当裏面に凸帯を設けた例があり、この特徴は川原寺式、藤原宮式と共通する。同系の瓦が豊前地方に集中して発見されており、百済系譜と考えられている（酒井・高橋 1984）。重弧文軒平瓦は厚さ3.1cmで、平部の端面に一本の沈線を施している。創建瓦のほかには、豊前国分寺跡、豊前国府跡から出土している瓦と同笵と考えられる単弁十九弁蓮華文軒丸瓦や、老司系の流れをくむ大宰府系の瓦として捉えられている扁行唐草文軒平瓦、豊前国分寺跡出土のものと同じ文様構成の扁行唐草文軒平瓦などが出土している。

11. 観世音寺　福岡県太宰府市観世音寺に所在する。大宰府政庁の東に位置し、観世音寺式伽藍配置の基準となる寺院である。天智天皇によって670年ごろに発願され、686（朱鳥元）年に一応の伽藍の完成を迎えた。発掘調査によって塔、金堂、講堂、南門、回廊、僧房、築地の遺構が確認されている（小田編 2005）。塔は「延喜五年観世音寺資財帳」などの史料によって五重塔であったことが知られている。発掘調査の結果、基壇は一辺15mで東西2か所に階段を設けた二重基壇であると考えられている。金堂は創建から明治期まで5期の基壇変遷がみられる。創建期の遺構（Ⅰ期:7世紀後半～末）は瓦積み基壇で、基壇規模は東西18m×南北24mである。地覆石として砂岩製切石を据えて、その上に老司Ⅰ式の平瓦を積んでおり、東側に階段が設けられている。Ⅱ期（8世紀初頭～前半）の基壇は、南北22m×東西16mの規模が推定復元されている。乱石積基壇で地覆石は設けず、直接花崗岩の自然石を並べている。基壇の北西から西側にかけて焼土層があり、1143（康治2）年の金堂火災によるものと考えられている。講堂の基壇にも変遷がみられ、創建期（Ⅰ期）の基壇は東西36.3m×南北22.8mの規模に復元されている。建物は柱間を4.5m間隔で、身舎桁行5間×梁行2間の四面廂建物と考えられている。Ⅱ期基壇はⅠ期基壇を30～40cmかさ上げして構築している。乱石積基壇で、規模は東西34.81m×南北20.47mに復元されている。階段は南辺に3か所、北辺に1か所設けられている。建物は身舎桁行5間×梁行2間の四面廂建物で、側柱桁行30.01m×梁行15.37mの規模である。Ⅲ期（8世紀初頭～前半）建物は身舎桁行5間×梁行2間の四面廂建物であると考えられている。南門は礎石が7個、礎石の抜き取り穴が2個検出されており、建物は間口3間の八脚門が復元されている。また、桁行33間×梁行4間、身舎桁行2間で南北両面に廂を設けた僧房跡が検出され、東西各5室の部屋をもつと考えられている。講堂側面中央より1間南にとりつく回廊遺構、東面築地の遺構が確認されている。なお、寺域は方3町であると考えられている（九州歴史資料館 2007）。

遺物は、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、文字瓦、鬼瓦などの瓦類と、須恵器、土師器、陶磁器などがある。軒瓦は、老司式をはじめとする軒丸瓦30型式51種、軒平瓦30型式42種が発見されている。また、川原寺出土の軒丸瓦と同笵の軒丸瓦が1点出土している。創建瓦は老司Ⅰ式の複弁八弁蓮華文軒丸瓦と扁行唐草文軒平瓦の組み合わせである。観世音寺出土の老司式軒丸瓦は、275A型式（老司Ⅰ式）と275B型式（老司Ⅱ式）にわかれる。275A型式は65.79%の出土率で、出土量が3点である

25　第3編古代第2章古代郷土の夜明け第3節豊津の初期寺院（378ページ）

275B 型式に比べ、904 点と圧倒的に多いため、創建瓦と考えられている。275A 型式（老司Ⅰ式）の複弁八弁蓮華文軒丸瓦は、直径 17.6cm で、中房に 1 ＋ 5 ＋ 10 の蓮子をもつ。老司式扁行唐草文軒平瓦（560 型式）は 5 種に分類されおり、その中でも 560Aa 型式（老司Ⅰ式）が 52.08％と最も多く出土しており、創建瓦と考えられている。560Aa 型式の扁行唐草文軒平瓦は上弦幅 30.8cm で、右から左に唐草の流れがあり、顎は段顎である。創建瓦のほかには、鴻臚館式の軒丸瓦や、川原寺の軒丸瓦 C Ⅲ類と同笵の複弁八弁蓮華文軒丸瓦が 1 点（265 型式 [26]）のほか、百済系単弁八弁蓮華文軒丸瓦など、多数の瓦が出土している。

12. 陳内（じんない）廃寺　熊本県熊本市（旧下益城郡城南町）陳内に所在する。瓦が出土することで廃寺の所在は古くから知られていた（松本 1965）。遺構については、礎石・根石はほとんど残っていないが、塔の版築層基壇が確認されており、一辺が 13m の基壇に復元され、五重塔が想定されている。心礎石は、砂岩製の心礎石が確認されており、大きさは 190cm × 180cm で、高さ 120cm である。心礎石と出土瓦の堆積状況から伽藍配置が復元されており、回廊の外に東僧房、西僧房をもち、講堂から伸びた回廊が金堂と塔を囲み、金堂は塔に向かって東面するとされている。寺域は方 160m に推定されている。伽藍配置については、法起寺式であるとする説（松本 1965、宮崎 1997）と観世音寺式であるとする説（森 1998）があるが、本論では「金堂は塔に向かって東正面を保ち、観世音寺式の様式をとる（松本 1965）」という観世音寺式の最大の特徴をもつため、観世音寺式に分類する。

遺物は老司式をはじめとする軒丸瓦 3 種、軒平瓦 3 種、鉄釘、金銅の蝶番、須恵器、土師器が発見されている。出土瓦は肥後地域における標識資料となっており、老司式、鴻臚館式の瓦は観世音寺出土のものと同じ型式である。出土の軒瓦には三つの組み合わせがある。老司Ⅰ式の組み合わせの 1 類、鴻臚館式の組み合わせの 2 類、単弁八弁蓮華文軒丸瓦と重弧文軒平瓦の組み合わせの 3 類である。1

26　観世音寺創建瓦（275A 型式）のモデルになった可能性が指摘されている（髙倉 1983）。

表 1　観世音寺式伽藍配置をとる寺院の創建瓦一覧（●は同笵瓦出土、○は関連性あり）

	寺名	創建軒丸瓦	創建軒平瓦	川原寺	藤原宮	百済	備考
1	多賀城廃寺	重弁八弁蓮華文軒丸瓦	重弧文軒平瓦				
2	郡山廃寺	重弁八弁蓮華文軒丸瓦	平瓦				多賀城瓦の祖型となる
3	夏井廃寺	複弁六弁蓮華文軒丸瓦	ロクロ挽き軒平瓦				
		複弁八弁蓮華文軒丸瓦	ロクロ挽き軒平瓦				
4	穴太廃寺	単弁八弁蓮華文軒丸瓦	素文軒平瓦				
5	崇福寺	複弁八弁蓮華文軒丸瓦	四重弧文軒平瓦	●			南滋賀町廃寺との同笵瓦が出土
6	道成寺	複弁八弁蓮華文軒丸瓦	扁行唐草文軒平瓦				
		複弁七弁蓮華文軒丸瓦	扁行唐草文軒平瓦				
7	大御堂廃寺	単弁八弁蓮華文軒丸瓦	なし			○	
8	英賀廃寺	重弁八弁蓮華文軒丸瓦	重弧文軒平瓦				吉備寺式と同じ文様構成
9	伝吉田寺	複弁八弁蓮華文軒丸瓦	扁行唐草文軒平瓦	○	○		
10	上坂廃寺	単弁八弁蓮華文軒丸瓦	重弧文軒平瓦	○	○	○	
11	観世音寺	複弁八弁蓮華文軒丸瓦	扁行唐草文軒平瓦	●	○		
12	陳内廃寺	複弁八弁蓮華文軒丸瓦	扁行唐草文軒平瓦				観世音寺式と同じ老司Ⅰ式

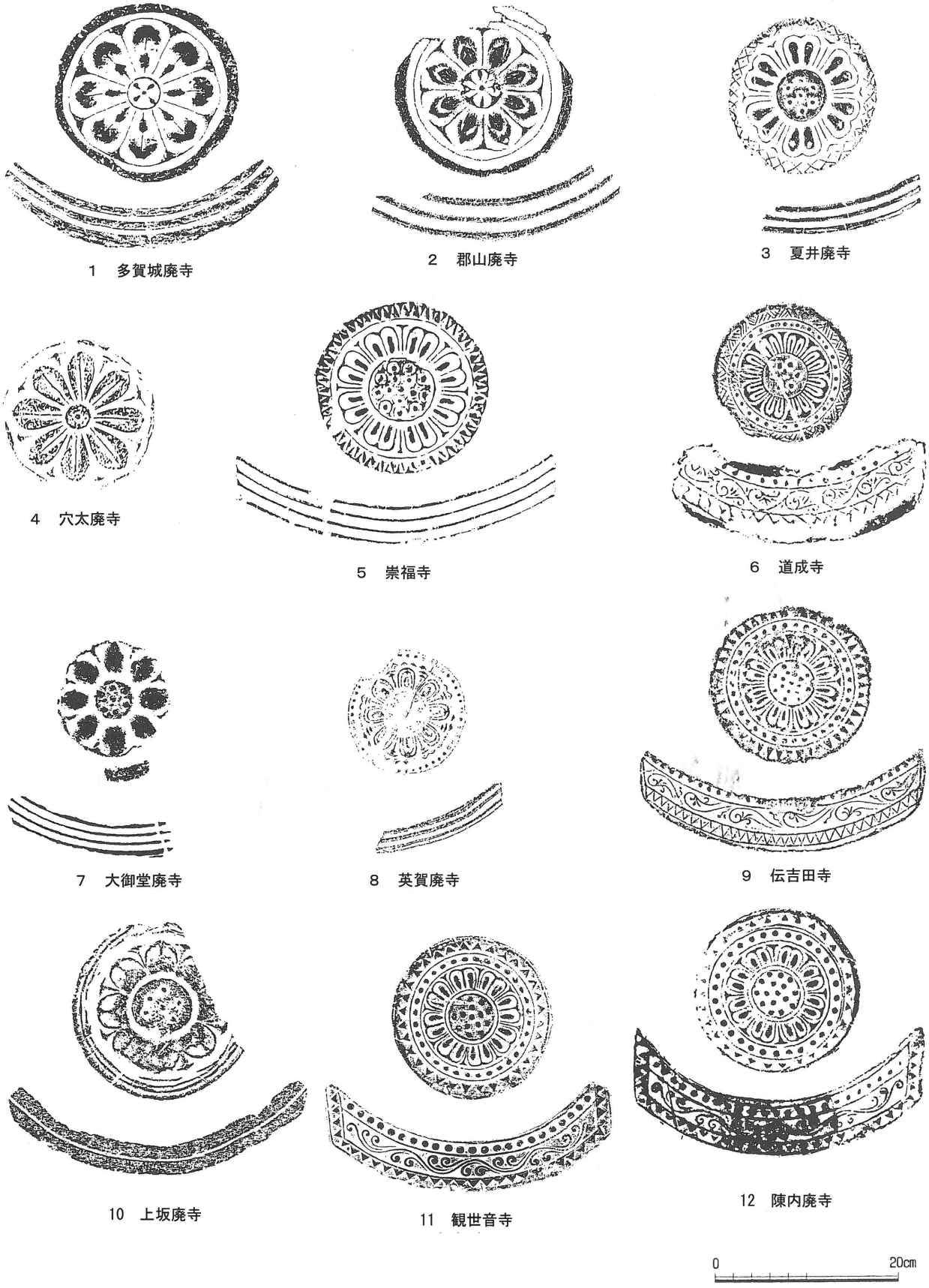


図 11　観世音寺式伽藍配置をとる寺院の創建瓦

表２　観世音寺式をとる寺院一覧表

	寺名	所在地	創建年代	年代の根拠	創建理由	検出遺構	主な出土遺物	出典
1	多賀城廃寺	宮城県多賀城市高崎	724	創建瓦が多賀城の瓦と同時期のものである	多賀城付属寺院として創建	塔・金堂・中門・築地塀・鐘楼・経蔵・大房東倉・西倉・小子房※	瓦（軒丸瓦・軒平瓦など、須恵器・土器・土塔など	伊東編　1970
2	郡山廃寺	宮城県仙台市太白区郡山	7世紀末～8世紀初頭	郡山遺跡のⅡ期官衙に付属する	郡山遺跡Ⅱ期官衙付属寺院として創建	講堂・僧房・金堂・材木列塀	瓦（軒丸瓦・軒平瓦・平瓦・鴟尾など）・木簡・土器類	長島編　2005
3	夏井廃寺	福島県いわき市平下大越	7世紀末～8世紀初頭	創建瓦の年代による（軒丸瓦ａ第一類など）	磐城郡衙付属寺院として創建か	塔・金堂・講堂・区画溝	瓦（軒丸瓦・軒平瓦丸瓦・平瓦など）赤焼き土器・土師器	廣岡・中山2004
4	穴太廃寺（後期穴太廃寺創建寺院）	滋賀県大津市穴太	7世紀大津宮期直前～大津宮期	遺構による	不明	西金堂・塔・西回廊・北方葛石列・階段状施設	瓦(軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦平瓦・道具瓦・鴟尾など)土師器・須恵器・陶器・磚仏など	林編　2001
5	崇福寺	滋賀県大津市滋賀里	白鳳期（650～685）	出土瓦の年代による	天智天皇の勅願	小金堂・塔・弥勒堂・（金堂・講堂）※別組織であるという説が有力	瓦(軒丸瓦・軒平瓦)舎利容器・荘厳具・磚仏陶硯・鏡など	柴田　1941 林　1989b
6	道成寺	和歌山県日高郡日高川町	8世紀初頭	創建瓦の年代による（道成寺軒丸瓦第Ⅰ類）	紀大臣道成が勅を奉じ、宮子夫人の祈願寺として建立	南大門・複廊回廊・中門塔・金堂・講堂・鐘楼僧房・瓦窯・倉院跡	瓦（軒丸瓦・軒平瓦）瓦釘片	水野編　1980
7	大御堂廃寺	鳥取県倉吉市駄経寺町	7世紀後半(650～675)	創建瓦の年代による(軒丸瓦Ⅰ類)	不明	金堂・講堂・僧房築地塀・導水施設	瓦（軒丸瓦・軒平瓦・鬼瓦・鴟尾など）土器・金属製品・磚仏など	真田　1986 松田他　2001 真田・根鈴　2005
8	英賀廃寺	岡山県真庭市	白鳳期(650～685)	創建瓦の年代による(軒丸瓦Ⅰ類)	不明	塔・講堂（推定）・金堂中門・回廊・その他建物	瓦（軒丸瓦・軒平瓦・線刻文様瓦・丸瓦・平瓦)須恵器・鉄釘など	平井編　1980
9	伝吉田寺	広島県府中市元町	奈良時代前期	川原寺創建期の出土瓦による	不明	塔・講堂・(回廊)・中門回廊は明確ではないが礎石による	瓦（軒丸瓦・軒平瓦・土師器・須恵器・鉄釘など	潮見他　1968
10	上坂廃寺	福岡県京都郡みやこ町上坂	7世紀末	出土瓦による（単弁蓮華文軒丸瓦１類）	不明	塔・金堂（瓦溜まりによる）講堂・溝(回廊または雨落溝)	瓦(軒丸瓦・軒平瓦)	酒井・高橋　1984 川本　1998
11	観世音寺	福岡県太宰府市観世音寺	686※	封200戸の施入	斉明天皇の菩提を弔うため天智天皇が発願	塔・金堂・講堂・南門回廊・僧房・築地	瓦(軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・鬼瓦など)須恵器土師器・陶磁器など	小田編　2005
12	陳内廃寺	熊本県熊本市	白鳳末～和銅	瓦の型式編年による	不明	塔・東側僧房・南大門金堂・中門は瓦の出土状況により想定	瓦(軒丸瓦・軒平瓦・銘のある瓦)鉄釘・金銅蝶番片須恵器・土師器など	松本　1965

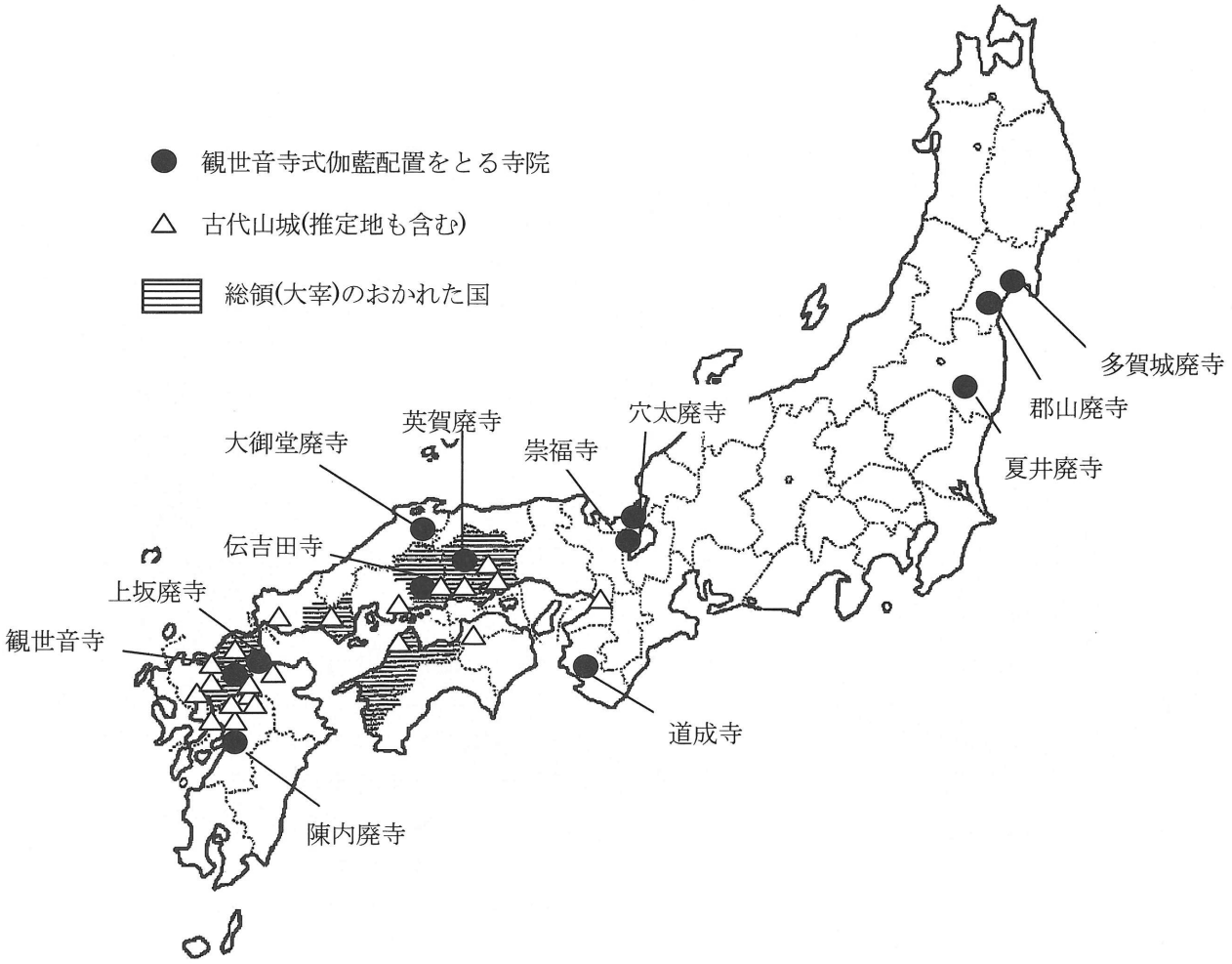


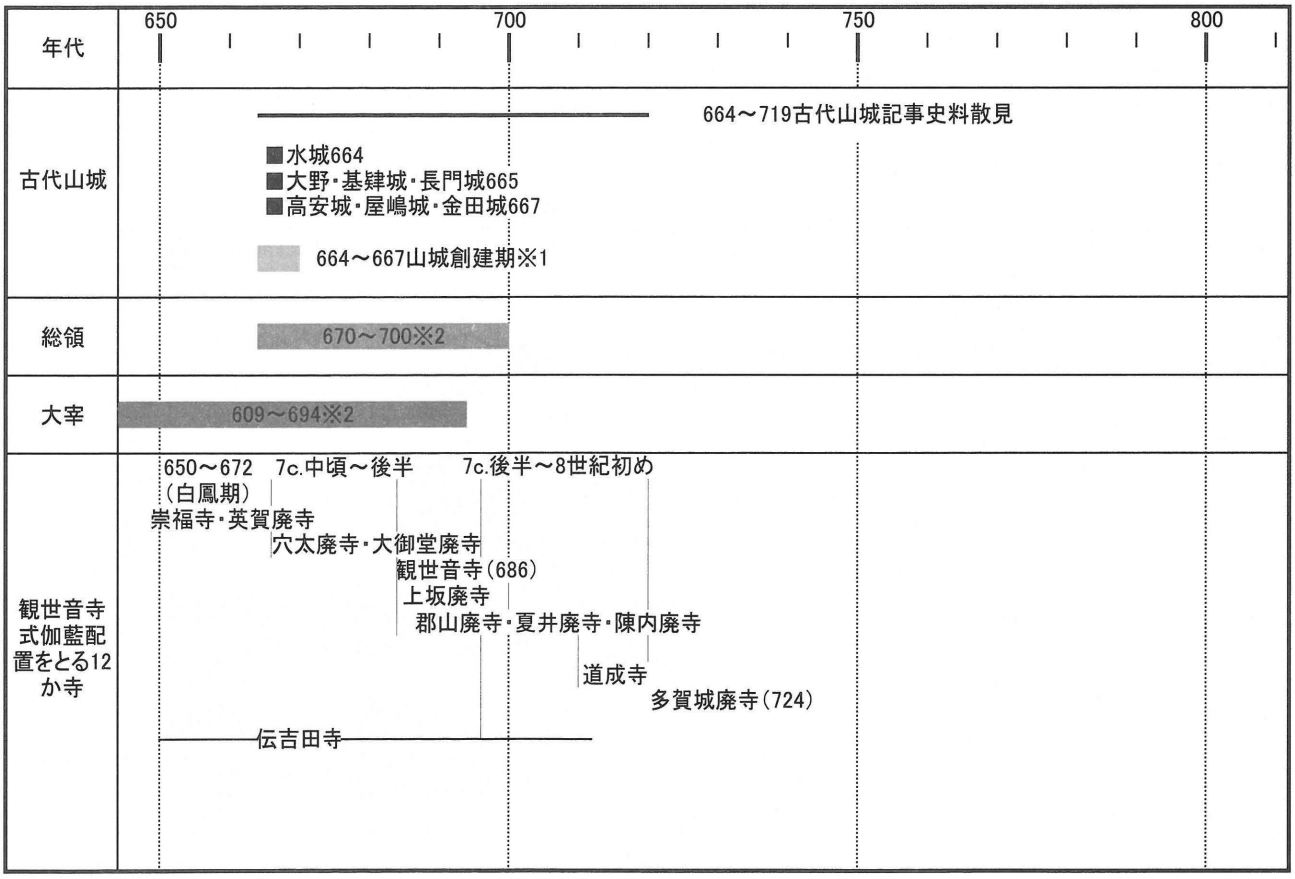
図 12　観世音寺式伽藍配置をとる寺院の分布

類と 2・3 類の間に年代の隔たりがあり、1 類が最も古く白鳳の終り～和銅頃とされており、創建瓦と考えられている。1 類の老司 I 式の複弁八弁蓮華文軒丸瓦は、直径が 19.5 ～ 20cm で外区に鋸歯文をもち、観世音寺出土の老司 I 式の系統をひく。組み合わされる軒平瓦は老司 I 式の扁行唐草文軒平瓦で、右から左へ唐草文が流れる。長さ 32cm、高さ 5.5cm である。観世音寺から出土の老司 I 式の瓦と同じ文様構成であるが、観世音寺出土のものよりやや大きいことが指摘されている。

（2）観世音寺式伽藍配置をとる寺院の創建瓦

これら 12 の寺院の創建瓦は、東北の多賀城廃寺、郡山廃寺、夏井廃寺出土の瓦には川原寺、藤原宮との関連がみられない。また、観世音寺と陳内廃寺の老司 I 式、鴻臚館式軒瓦の使用は共通しており、西海道の仏教の中心であった大宰府の観世音寺が陳内廃寺と何らかのかかわりをもっていたことが推測できる。伝吉田寺からは川原寺創建期の特徴を持つ瓦が藤原宮式の瓦とともに出土しており、国家権力とのつながりを考える根拠の一つとなっている。さらに、創建において天智天皇及び斉明天皇と関わりをもつ崇福寺と観世音寺から川原寺との同笵の瓦が出土しており、川原寺式の変化した形である観世音寺式という伽藍配置の関連性と同じように、瓦においても川原寺からの流れが想定される。

表３　古代山城、総領・大宰、観世音寺式伽藍配置寺院年代比較表



（３）分布からみた観世音寺式伽藍配置の特徴

総領・大宰、古代山城との類似点　図 12 に示すように観世音寺式伽藍配置をとる寺院は西日本に多く分布しており、日本列島の東西南北端に配されていることが注目される。先述したように、出土瓦からもこれら 12 の寺院には国家的な意図をもって建てられたと考えられる寺院が多い。国家による仏教政策の拠点となった可能性が考えられるのである。

第 2 部でふれたように、郡山遺跡のⅡ期官衙の政庁正殿北側の池は蝦夷の服属儀礼に使用したと考えられており、軍事施設の意味をもちつつ官衙として機能していた城柵に付属していた。多賀城は大宰府をモデルとしたとする見解が一般的になっており、その創建年代は 8 世紀前半とされているが蝦夷対策前線基地ともいえる位置に寺院を建立するということから、多賀城廃寺、そしてその前身である郡山廃寺、磐城郡衙付属寺院である夏井廃寺は仏教による教化政策の拠点であったことが考えられる。また、熊本県の陳内廃寺は地理的にも、そして大宰府系の瓦を使用していることからも、対隼人政策の仏教的拠点として配されたことが推測できる。

そして、これら 12 か寺のなかで創建年代の先行する西日本の 9 か寺の分布における共通点として、総領（大宰）のおかれた国ないし地域に多くが分布していること、そして総領（大宰）が管轄したとされる西日本地域に分布する古代山城の分布とも類似していることが挙げられる。その典型が大宰府の付属寺院である観世音寺にみられる。

大宰府は先述したように『日本書紀』にいう 536（宣化元）年に設置された那津官家が前身で、筑

紫大宰はそれを源として608（推古16）年ごろまでに成立した内政、軍事、外交的機能をもった中央政府の出先機関であるというのが共通見解となっている。大宰と同じ内容をもつ官職に総領がある。総領は筑紫、周防、吉備、伊予、讃岐におかれた。現在、大宰と総領は同一か否かで学説が分かれているが、総領（大宰）が軍事的要地におかれた官職で、その目的も軍事官的要素があったことは共通見解であるといえよう。また、総領（大宰）のおかれた国に古代山城の多くが分布している。この分布について、総領（大宰）は軍事的役割をもった官職であり、対外防衛上重要な軍事施設である古代山城を管轄し、その管理運営を行ったとする研究がある（森田1991、白石1992）。つまり、国家にとって特に重要とされた地には、総領（大宰）がおかれ、軍事的要衝地でもあるため後に山城が築かれている。そこに観世音寺式をとる寺院（観世音寺）が建立されたということになる。観世音寺の場合、天智天皇が母である斉明天皇の追福のために発願したが、建設途中で観世音寺の性格に鎮護国家の寺院としての役割が加わり、それにともなって本尊に変更があったため完成（供養）が遅れたとする説（錦織1976）がある。新たに本尊となった不空羂索観世音菩薩は、大慈大悲で衆生を救う観世音菩薩のなかでも剣と羂索で辟邪するいわば武闘派の観世音菩薩であり、軍事的要衝地におかれるのにふさわしい観世音菩薩像であるといえる。

観世音寺式伽藍配置をとる寺院のすべてが大宰府と観世音寺の関係には当てはまらないが、先の筑紫総領の管轄と考えられる西海道には観世音寺、上坂廃寺、陳内廃寺があり、吉備総領の管轄地域内には英賀廃寺、伝吉田寺がある。西日本の観世音寺式をとる9か寺の創建時期は、表3に示すように山城の管理運営を行ったとされる大宰・総領の史料散見時期および古代山城記事史料散見時期（664～719年）内にほぼおさまる。山城の築城と寺院との直接的な関係はみられないが、山城と同国内ないし同地域内に観世音寺式をとる寺院が創建されたことから、とくに要衝とされた地域に観世音寺式寺院がおかれたことが考えられる。さらに、穴太廃寺、崇福寺は大津宮をまもるための配置とも読み取ることができ、この論はすでに研究されている。

（4）四天王地名との関連性

ここでは前章までに述べた観世音寺のある大宰府、そして大御堂廃寺の位置する鳥取県倉吉市に「四天王寺」地名や寺名がみられることから、観世音寺式伽藍配置と四天王寺（四王寺）地名との関係について考えたい。なお、「金光明四天王護国之寺」である国分寺は関係国分寺を除き、第5部で扱う。

四天王とは、須弥山の中腹、欲界の第六天の四方を守護する天をいう。東方の持国天、南方の増長天、西方の広目天、北方の多聞天である。『金光明最勝王経』の経文のなかで、この経を広宣読誦する国王があれば四天王・弁財天などがその国土を擁護し人民を安穏ならしめ、また国王が正法をもって民衆を統治すれば、国土は豊楽、諸天善神が守護すると説いている。『金光明経』のわが国での文献上の初見は、『日本書紀』676（天武天皇5）年の条で、四方の国に使いを遣わして『金光明経』と『仁王経』を講説させたとある。これ以前にも593（推古天皇元）年に四天王寺を移建したという記事があり、推古朝にすでに『金光明経』が伝来していたとも考えられている。天武朝以降『仁王般若経』とともに護国の経典として全国的に講説読誦が

表4　四天王寺地名（吉田1969から作成）

読　み	地　名	国　名
シテン	四天王寺	摂津
	四天王寺	伊勢
	四天王寺址	羽後
シワウ	四王寺址	長門
	四王院址	筑前
	四王堂	羽後
	四王寺山	長門
	四王寺山	筑前
	四皇子峰	日向

行われていた。後にこの経典の信仰から聖武天皇が国分寺建立の詔を発布した（平岡 1981）。

四天王、あるいは四王という地名は、『大日本地名辞書』（吉田 1969）によると、表 4 のように分布している。このなかで、四天王寺あるいは四王寺という地名は、四天王寺（摂津）、四天王寺（伊勢）、四天王寺址（羽後）、四王寺址（長門）、四王院址（筑前）、四王堂（羽後）、四王寺山（長門）、四王寺山（筑前）、四皇子峰（日向）である。このうち、羽後の四天王寺址と四王堂は同一である。また、日向の四皇子峰は「鵜草葺不合尊の四皇子に起ると云うも詳ならず。」とあり、四天王とは関係のない地名である。これらをふまえると、四天王（寺）いう地名は、現在の大阪府の四天王寺、福岡県の四王寺、秋田県の四王院、山口県の四王司山、三重県の四天王寺の五つとなる。

秋田県の四天王寺（秋田城付属の四王院）　秋田市街の北西、雄物川河口近くの秋田市寺内に位置する標高約 40m の丘陵地に立地している。出羽国秋田城は 733（天平 5）年に出羽柵として創建され、その後 757 ～ 764 年（天平宝字年間）に改修に伴い秋田城と改称されたと考えられており、奈良時代から平安時代を通して行政と軍事の中心であった。

規模と構造は東西×南北約 550m で、地形上谷になっている北西部分は 6 分の 1 ほど欠けたような形をしているために、不整方形の外郭と東西約 94m、南北約 77m の政庁地区の二重の区画施設からなっている。北東隅の南 40m の位置に 5 期の時期変遷をもつ、門と考えられる建物がある。外郭の東西南北に出入り口の門が配置されると考えられているが、現在のところ東門のみ確認されている。外郭内（城内）には政庁のほかに建物群や倉庫群などが配置されていた。城外にも南東の鵜ノ木地区など秋田城と関わりをもつ建物が存在した。

また、秋田城東南隅の外側にあたる鵜ノ木地区から計画的な配置をもつ大規模な掘立柱建物跡が検出され、奈良時代から平安時代にかけてⅠ期～Ⅳ期の遺構変遷が把握されている（伊藤編 2008）。このうちの奈良時代のⅠ・Ⅱ期の遺構を秋田城付属寺院、Ⅲ・Ⅳ期を四天王寺跡とする説が提案されている[27]。Ⅰ・Ⅱ期の建物は、南側建物を金堂、北側建物を講堂、東側総柱建物を経蔵、西側建物を鐘楼と推定し、観世音寺式伽藍配置をとる可能性が強いと考えられている。建物の性格を官衙建物、迎賓館などとする別説もある。秋田城は多賀城とあまりかわらない建物の構成であり、役割も多賀城と同じように単に軍事的な基地としてだけではなく、官衙としての役割を担っていたと考えられている。

伊勢の四天王寺　『大日本地名辞書』によると、「本尊は薬師如来。俗説に国分寺なりと云は非なり、鎌倉武家の頃、邑王加藤氏の重興にや……（略）」とあり、鎌倉時代創建の寺院とされている。『津市史』[28] によれば、創建には諸説あるものの、中世には薬師堂とよばれていた。また、塔世という地名の由来として、「伝説によると四天王寺の境内には昔、塔があり、聖徳太子が四天王寺建立の際に山号を塔瀬山としたがのちに塔世になった」という記述[29] がある。

長門の四天王寺（四王寺山）　長門は周防とともに寺跡が少なく、国分寺、国分尼寺を含めてそれぞれ 3、4 寺ほど知られるのみであり、寺院建立の地域差が顕著にみられる（間壁 1970）。

『日本三代実録』貞観 9 年条によれば、867（貞観 9）年 5 月 26 日に清和天皇が異賊調伏のために四王院をおき、四天王像を伯耆、出雲、石見、隠岐、長門の 5 カ国に分かち、新羅の賊境を見下ろす高地の寺院、あるいは新規建立の寺院にその尊像を安置し国分寺あるいは国内の精進僧 4 人を講じて

27　貞清・髙倉 2010 で詳述している。

28　第 5 巻 400 ～ 403 ページ

29　同、第 3 巻 383 ページ

最勝王経、四天王護国品を昼夜厳修せしめている。これによれば長門国には四王院を設け、僧教勝、教林ら四人を置くとあるが、この長門国の四王院は現在の下関市長府町の北東に位置する四王司山頂と考えられている。山頂の東側の一段低い平坦地から格子叩き目、縄叩き目の施された瓦が発見されている。現在は毘沙門天をまつる四王司神社として存在している。また四天王寺は『延喜式』の主税をみると伯耆四王寺・出雲四王寺と並び、長門四王寺の修法にも主税が充てられていて、定額寺であった可能性もある（間壁 1970）と考えられている。

筑紫（大宰府）の四王寺　大宰府政庁の北側の大野山中にある。774（宝亀 5）年に対新羅の鎮護国家の祈祷のための寺として創建された。大野山の四峰にそれぞれ設けられた堂に四天王像の各 1 体を安置したと考えられており、四王院とも称される。北方の毘沙門天地区は大野山の最高所である標高 410m の鼓ヶ峯にあり、四王院の中心に想定されている。発掘調査によって 4 間× 5 間、内陣 1 間× 1 間の礎石建物が 1 棟検出されている。出土遺物としては、「四王」銘文字瓦、水晶製巻物軸飾り、土師器、陶器、瓦類がある（小田 1977）。

鳥取県・島根県の四天王寺　『大日本地名辞書』には記載がないが、鳥取県に四天王寺地名の例がみられる。鳥取県倉吉市の四天王寺跡である。1987（昭和 62）年度に圃場整備に伴い倉吉市教育委員会によって発掘調査が行われている。先述の『日本三代実録』にみえる 867（貞観 9）年の記事に、新羅の脅威に仏法で対峙するため、朝廷の命によって伯耆国に建立された四天王寺であると考えられている。正確な位置は明らかではないが、四王寺山頂付近であるとされている。四王寺山は久米ヶ原丘陵の裾部に位置する標高 172m の山で、伯耆国庁、国分寺にも近接している。山頂の堂に昭和 6 年まで多聞天像が安置されていたが、火災で焼けたとされている（朝倉ほか編 1978）。さらに、島根県松江市山城町の山城郷南新造院跡は、1993（平成 5）年度に島根県教育委員会によって発掘調査が行われた。先述の『日本三代実録』貞観九年条の下知に即応して「四天王像安置の寺」の代用の寺とされた『出雲国風土記』記載の「新造院」である可能性が高いとされている（足立・角田 1993）。

大宰府の四王院、長門の四天王寺、伯耆の四天王寺は朝廷の命によって新羅に対して仏法で対峙するという目的のもとにつくられたものである。総領と古代山城の関係について先述したが、そのなかで、表 4 の長門城を四王司山に比定する見解（伊東 2008）がある。そうであれば、古代山城は 663 年の白村江の戦い以降に防衛のために建てられたものであるため、山城の築造が四王院創建に先行する。このような例は、太宰府市の四王寺山と四王院にもみられる。

これらの四天王寺（四王寺）地名と観世音寺式伽藍配置をとる 12 か寺の分布を照らし合わせると、大宰府の四王院と観世音寺、伯耆の四天王寺と大御堂廃寺、秋田の四王院と鵜ノ木地区の観世音寺式伽藍配置寺院の組み合わせが考えられる。そして、これらの四天王寺地名の分布をみると、日本海側つまり朝鮮半島・中国大陸側に多く分布しており、異国に対する守りとして配置されていたことがその配置からも推測できる。そしてこの配置は、古代山城が主に瀬戸内海沿いに分布するのに対し、それを補完するような配置とも読み取ることができる。

以上のことから、観世音寺式伽藍配置は古代国家にとって特に重要な地におかれた、いわば鎮護国家の伽藍配置であり、その性格は多賀城廃寺（前身の郡山廃寺を含めて）と観世音寺が同じ観世音寺式伽藍配置をとり、日本列島両端の官衙に付属する寺院として鎮護国家のために創建されたことに読み取ることができる。

第 2 章　川原寺式伽藍配置

川原寺式伽藍配置は、一塔二金堂型式で、回廊内の東に塔を、西に南北棟の金堂を置き、両者の間の北に東西棟の金堂を置くものと定義される。川原寺式をとる古代寺院は、確認した限り川原寺、南滋賀町廃寺の 2 か寺である。以下に各報文に従い、両寺院の詳細を述べる。

（１）川原寺（弘福寺）

奈良県高市郡明日香村に所在する。1955（昭和 32）年から発掘調査が行われた（藤田編 1960、松村・冨永編 2004）。中金堂の遺構は、礎石が 28 個すべて残っており、白大理石製である。基壇は、外装は残っておらず、東西約 23.5m ×南北約 19.5m の規模で、北側の高さは約 1.5m である。桁行 3 間×梁行 2 間に周囲に庇を巡らせた、桁行約 16.8m ×梁行 12m の規模の建物であると考えられている。西金堂の遺構は、基壇地覆石下の玉石列、犬走りの玉石敷き（幅約 0.9 ～ 1m）、石組雨落溝（幅約 60 cm）が検出され、基壇は南北約 21.8m ×東西約 14.9m の規模で、東面と背面に幅 3.8m の階段がつく。塔は、一辺約 6m 四方で柱間は 3 間である。心礎石は浅い心柱孔をもつ花崗岩自然石である。基壇の一辺は約 12m、高さは約 1.5m であると考えられている。中門は基壇がほとんど削平されており、雨落溝から想定される基壇の規模は東西約 14.0m ×南北約 9.9m で、桁行 3 間×梁行 2 間の門であったと推定されている。回廊は、単廊で桁行・梁行ともに約 3.8m 等間である。僧房の遺構は、礎石、地覆石が検出された。建物は梁間 4 間のうち、中庭に面した部分がふき放しで、残り 3 間分が房になっている。桁行柱間は 2.3m 等間で、2 間分･3 間分の大小二種の室にわけられていると想定されている。東門は、基壇上面が削平されていたが、礎石の抜取り穴、雨落溝から門の規模が想定され、桁行 3 間×梁行 3 間に復元された。東門の規模が大きいのは寺の東側に主要道路が通じていたためと考えられている。

回廊内の東に塔、西に東面する金堂が配され、伽藍中軸線上に南門、中門、中金堂、講堂が一直線に並ぶ。川原寺式伽藍配置の基準となる寺院である。

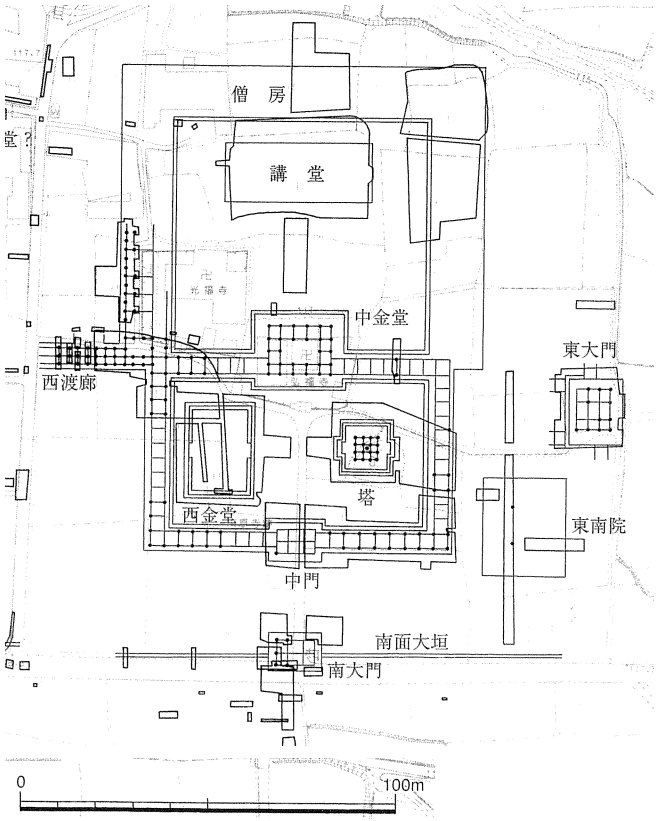
出土遺物には瓦類、塼、古銭、金銅製品、鉄釘、土器、陶器類、木製品などがある。瓦類は奈良時代の軒丸瓦 10 種、軒平瓦 3 種、平安時代の軒丸瓦 7 種、軒平瓦 15 種、鎌倉時代の軒丸瓦 9 種、軒平瓦 4 種など多数が出土した。創建瓦は複弁八弁鋸歯縁軒丸瓦と四重弧文軒平瓦の組み合わせである。創建期の瓦は軒丸瓦、軒平瓦ともに 5 種に分類される。

創建年代には諸説あるが、斉明天皇崩御（661 年）から近江大津宮遷都（667 年）までの間に、天智天皇が亡き母斉明天皇の飛鳥川原宮の故地に、母の冥福を祈り発願、建立したことが通説になっている。『日本書紀』での初出は 662（天武 2）年 3 月条で、「始めて一切経を川原寺に写す」とある。

（２）南滋賀町廃寺

滋賀県大津市南滋賀に所在する。北陸道と北白川に抜ける山中越えとの分岐する交通の要衝にある。古い瓦が出土することで寺院跡ではないかということが以前より知られていたが、実態は不明であった。1928（昭和 3）年からの発掘調査によって、塔、中金堂、西金堂、講堂、僧房が検出されている。寺域は方 3 町と推定されている（林 1989、福田編 2007）。

塔の遺構は、一辺約 40 尺（12.12m）の正方形の瓦積み基壇が検出された。礎石は開墾により除去されたと考えられている。高さ 1 尺 3 寸（39.39cm）～ 1 尺 8 寸（54.54cm）程度が残っていた。3 間



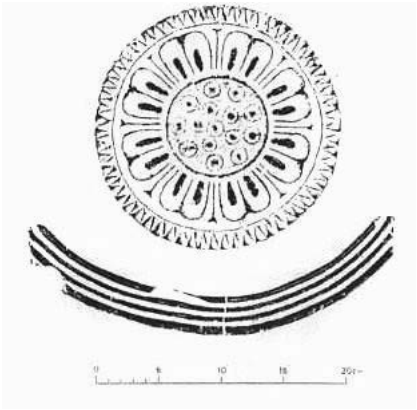
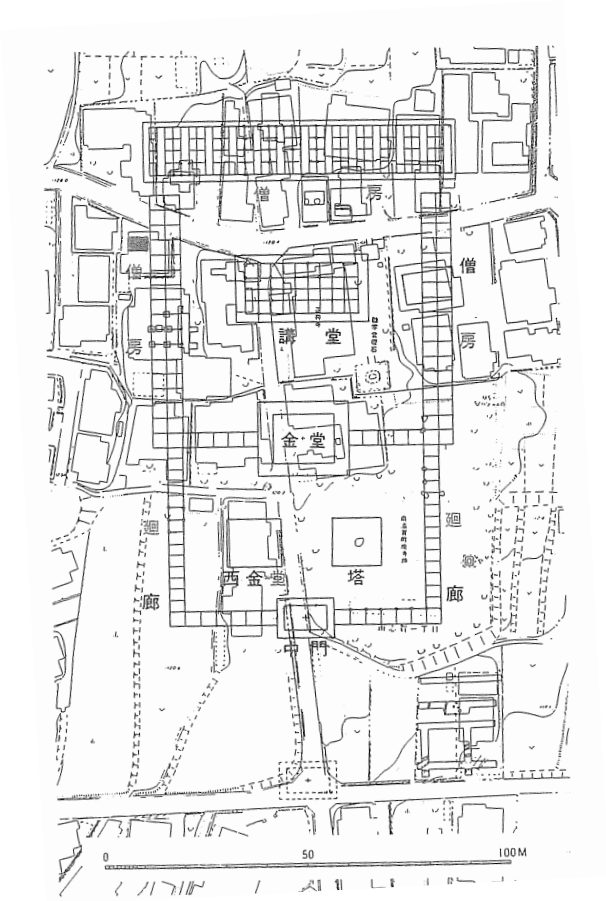


図 13　川原寺の伽藍配置と創建瓦（奈良文化財研究所 2004）



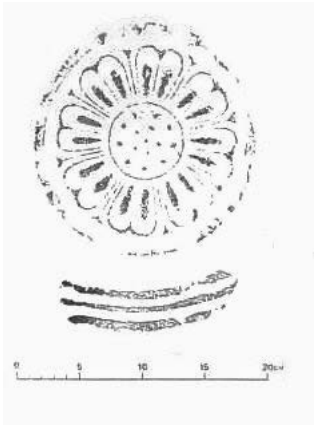


図 14　南滋賀町廃寺の伽藍配置と創建瓦（滋賀県文化財保護協会編 1993、林 1989）

四方の五重塔が想定されている。中金堂は、塔基壇の北 35 尺（約 10.6m）の地点にある。東西 75 尺（約 22.7m）×南北 60 尺（約 18.2m）の瓦積み基壇が確認されている。建物は東西 5 間×南北 4 間と想定されている。基壇正面と側面の比率が四天王寺や法隆寺に近く古い様相を呈している（林 1989）。西金堂の基壇は南北 40 尺（12.12m）×東西 44 尺（約 13.3m）の規模である。伽藍中軸線から塔西辺基壇までは約 17 尺（約 5.15m）、西金堂東辺基壇までは約 19 尺（約 5.76m）で、塔と左右対称の位置に配されたのではないことがわかっている。当初は西塔と考えられていたが心礎石が検出されていないので、現在では金堂と考えられている。

講堂の遺構は、金堂の基壇北辺より 65 尺（約 19.7m）の位置にある。側面全長 41 尺（約 12.4m）×正面全長 91 尺（約 27.6m）の建物であると推定されている。また、基壇縁の高さが 0.25m であるため、東西基壇長は 107 尺と推定された。回廊については、金堂基壇の東方約 60 尺（約 18.2m）の地点に南北に 9 尺（約 2.7m）等間に並ぶ礎石から東回廊が想定された。また、西回廊は金堂基壇の西 60 尺（約 18.2m）の地点に礎石が確認され、回廊が中門からのびて西金堂、塔を囲む形であると考えられている。伽藍配置については、西金堂が東西に長いので厳密には川原寺式とは異なるが、先学によって川原寺式の変化した形として位置づけられてきた。

出土遺物には、瓦、鴟尾、塑像、三彩陶器などがある。出土瓦は軒丸瓦 9 型式、軒平瓦 2 型式、丸瓦、平瓦である。瓦の年代は白鳳時代から平安時代までである。軒丸瓦Ⅰ～Ⅲ型式は複弁八弁蓮華文で、Ⅳ～Ⅸ型式は単弁系の文様構成である。軒丸瓦Ⅱ型式は、川原寺と同笵の複弁蓮華文軒丸瓦であることが確認されている。軒丸瓦Ⅰ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ型式は南滋賀町廃寺の西に位置する榿木原（はんのきはら）瓦窯で焼成されたものである。軒平瓦は重弧文のⅠ型式、横断面凹状の方形のⅡ型式に分類される。創建瓦は軒丸瓦Ⅰ型式と軒平瓦Ⅰ型式の組み合わせ、軒丸瓦Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ型式と軒平瓦Ⅱ型式の組み合わせの二系統であるが、これらは榿木原瓦窯の調査によってこれらは大津宮時代（667 ～ 672 年）にほぼ同時期に焼成、使用されたと考えられている。

また、南滋賀町廃寺は崇福寺、穴太廃寺、園城寺とならんで、大津京を防御する城の役割をもっていたのではないかという見解がある（林 1989）。

（３）川原寺式、観世音寺式伽藍配置をとる寺院

川原寺式をとる寺院と観世音寺式をとる寺院の分布を図 15 に示した。川原寺式をとる寺院が川原寺と南滋賀町廃寺のみであるのに比べ、観世音寺式をとる寺院は全国に分布していることが分かる。また、それぞれの創建年代を表にしたのが表 6 である。川原寺がまず、661 ～ 667 年の間に飛鳥の地に建てられ、ほぼ同時期に崇福寺が創建されている。続いて、南滋賀町廃寺が 667 ～ 672 年ごろに建てられている。その間 670 年ごろには観世音寺が発願され、686 年には斉明天皇の故地である筑紫で完成を迎える。7 世紀中頃～後半には観世音寺式をとる寺院が各地に建てられることがわかる。

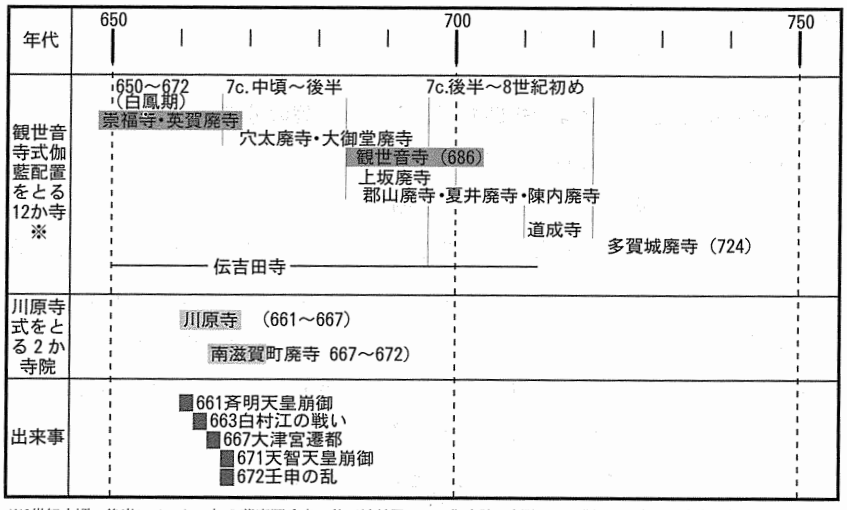
川原寺式をとる寺院の創建年代と創建瓦　川原寺は斉明天皇崩御から大津宮遷都までの 661 年から 667 年の間に創建されたと推測されており、南滋賀町廃寺は出土の創建瓦から大津宮時代の年代が考えられているので、川原寺の創建が先行する。川原寺は、天智天皇勅願の寺院で斉明天皇の冥福を願い建立された。南滋賀町廃寺の創建主体については、現在明らかにはされていない。

創建瓦は、川原寺が複弁八弁蓮華文軒丸瓦と四重弧文軒平瓦の組み合わせである。川原寺の軒瓦は川原寺式軒瓦とよばれ、日本列島に広く分布する。特に美濃地域に多く分布することが注目されてい

※＋３か寺は（貞清・髙倉 2010）による

図 15　川原寺式寺院と観世音寺式寺院の分布

表 5　観世音寺式をとる寺院、川原寺式をとる寺院の創建年代



※8世紀中頃～後半にはこれに加え薩摩国分寺、秋田城付属Ⅰ・Ⅱ期寺院が創建され9世紀には堂の前廃寺が創建される。

る。南滋賀町廃寺の創建瓦は、複弁八弁蓮華文軒丸瓦（Ⅰ型式）と重弧文軒丸瓦（Ⅰ型式）の組み合わせである。先述のように南滋賀町廃寺からは川原寺と同笵瓦（南滋賀町廃寺軒丸瓦Ⅱ型式）が数点出土しており、これらの寺院には何らかの関係があったことが推測される。川原寺式の変化した伽藍配置として、観世音寺式がある。観世音寺式をとる古代寺院は前章で示した 12 か寺に、後述のその後の秋田城付属寺院、堂の前廃寺、薩摩国分寺を加えた 15 か寺[30]であるが、そのなかで、崇福寺と観世音寺からは川原寺出土軒丸瓦の同笵瓦が出土している。

川原寺式から観世音寺式への変化　観世音寺式が川原寺式の簡略した形であることはすでに先学によって示されているが、ここでは川原寺式が観世音寺式に変化し、鎮護国家の伽藍配置という性格を付与され分布していったと仮定し、川原寺式から観世音寺式へ型式が変化した理由を考えてみたい。

川原寺式から観世音寺式への簡略化は、一塔二金堂型式から、一塔一金堂型式へ変化である。これにより、中金堂がなくなり、その場所に講堂は配される。その結果、それまでの講堂と中金堂の区画がなくなり、講堂前に空間ができる。建物の数が減るため、寺域、面積が狭くなる（東西幅）。また、講堂と中門が直接対峙する形になり、僧房が三面僧房ではなくなる。川原寺式を簡略化することで、東面する金堂がより強調されるということが考えられる。

基壇寸法の比較　川原寺式から観世音寺式への伽藍配置の型式変化を考えるため、講堂と金堂、塔の三つの建物の位置関係について、それぞれの建物の基壇復元寸法を比較する。川原寺式、南滋賀町廃寺に加え、先述の川原寺同笵瓦出土の観世音寺式をとる寺院である崇福寺、観世音寺も比較材料とする。

塔：基壇寸法（一辺）

川原寺	約 12 × 12m（39 尺）鎌倉時代の再建とされる。
南滋賀町廃寺	12.12 × 12.12m（42 尺）
崇福寺	約 10 × 10m （約 34 尺）
観世音寺	15 × 15m （約 50 尺）二重基壇である。

観世音寺の塔は、二重基壇をもつと考えられており、他寺院よりも規模が大きい。鎌倉時代の再建ではあるが、川原寺と南滋賀町廃寺の塔基壇はほぼ規模である。

金堂：基壇規模

川原寺西金堂	14.9 × 21.8m（49 × 72 尺）
川原寺中金堂	23.5 × 19.5m（80 × 64 尺）
南滋賀町廃寺西金堂	13.33 × 12.12m（約 45 × 40 尺）
南滋賀町廃寺中金堂	22.725 × 18.18m（約 76 × 61 尺）
崇福寺	11.4 × 11.6m（約 38.5 × 39 尺）
観世音寺	18 × 24m（約 60 × 81 尺）

川原寺西金堂、南滋賀町廃寺中金堂、観世音寺金堂の柱間数は 5 × 4、崇福寺は 3 × 3 である。川原寺中金堂の柱間数は 3 × 2、南滋賀町廃寺西金堂の柱間数は不明である。川原寺中金堂と観世音寺金堂の基壇の東西：南北の比率はほぼ 2：3 である。また、川原寺西金堂、中金堂と観世音寺金堂の

30　貞清・髙倉 2010 で指摘、詳述している。

短辺：長辺は、0.68、0.82、0.75 であり、観世音寺金堂の東西：南北の比率は、川原寺の中金堂と西金堂の東西：南北の比率の平均となっている。川原寺西金堂と南滋賀町廃寺西金堂の基壇は、川原寺が南北棟であるのに対し、南滋賀廃寺は東西棟であり大きく異なる。

講堂：基壇規模

川原寺　　40.6 × 16.0m（135 × 53 尺）掘り込み地業からの推定である。

南滋賀町廃寺　東西 32.421m（109 尺）

崇福寺　　22.7 × 15.8m（約 77 × 53 尺）

観世音寺　　36.3 × 22.8m（約 122 × 77 尺）

講堂の基壇規模は川原寺よりも観世音寺のほうが、やや規模が大きい。また、川原寺の講堂の東西:南北の比率は約 2.5 であり、川原寺の中金堂の東西：南北の数値は 1.25 であり、観世音寺の講堂の東西：南北は約 1.6 である。観世音寺の講堂の基壇寸法は、川原寺の講堂よりも中金堂に近い東西比率である。

寺域

川原寺　　東西規模不明×南北 3 町　正方形ではないと考えられている。

南滋賀町廃寺　方 3 町（地割から推定）

崇福寺　　北尾根（講堂が位置する）40 × 25m

中尾根（塔、金堂が位置する）40 × 18m

観世音寺　　方 3 町

川原寺の東西規模は不明であるが南北の規模は、南滋賀町廃寺、観世音寺ともに 3 町である。

回廊内の塔と金堂の距離については、表 6 のようになる。東西回廊間の距離（回廊部分も含む）は、川原寺約 80m、南滋賀町廃寺約 66m なのに対し、観世音寺は約 90m である。また、（西）金堂と塔の距離は、川原寺は約 20m、南滋賀町廃寺は約 11m で、観世音寺は約 30m である。そして、東西回廊間の距離に占める金堂と塔の間の距離の割合は、川原寺が 25%、南滋賀町廃寺が 17%、観世音寺が 33%であった。

金堂と塔の距離が川原寺に比べ観世音寺は特に広くなっている。川原寺の西金堂と塔の距離は、約 20m、観世音寺は約 30m であるので、より東面する金堂を強調したと推測できる。川原寺の発掘調査報告書においても、川原寺の伽藍配置は中枢部に建物が集中していることが気になる点として報告されている。南滋賀町廃寺は川原寺、観世音寺に比べ、西金堂と塔の距離が短いことがわかる。また、東西回廊の距離は、川原寺は約 80m で、観世音寺は約 90m であり、観世音寺の東西回廊間距離が川原寺の 1.125 倍であるのに対し、金堂と塔の距離は 1.5 倍となって

表 6　川原寺、南滋賀町廃寺、観世音寺の金堂と塔の距離

	川原寺	南滋賀町廃寺	観世音寺
東西回廊※	約 80m	約 66m	約 90m
（西）金堂と塔	約 20m	約 11m	約 30m
（西）金堂と塔／東西回廊※	25%	17%	33%

※回廊部分も含む

いる。

以上のように、川原寺と観世音寺は直接的な基壇寸法の接点は持たず、基壇寸法などの建築プランが継承されたわけではないことが改めて確認できる。川原寺と観世音寺では、観世音寺の方が塔の規模が大きいにも関わらず金堂と塔の距離がより離れていることからは、東面する金堂に配慮したプランであったことが考えられる。

（４）川原寺式の特徴と南滋賀町廃寺

以上のように川原寺式の定義、先学において川原寺式を簡略化して観世音寺式が成立したと考えられていることを確認した。続いて川原寺式伽藍配置の基準となる寺院である川原寺、先学により川原寺式の変化した形とされている南滋賀町廃寺の２か寺の詳細を述べた。これらに直接的な関わりは認められなかったものの、南滋賀町廃寺からは川原寺同笵瓦が出土している。また、川原寺、南滋賀廃寺の創建とほぼ同時期に崇福寺、観世音寺が創建され、その後も観世音寺式をとる寺院が各地に建てられていることを示した。次に、川原寺、南滋賀廃寺に加え、川原寺同笵瓦出土の観世音寺式をとる寺院である崇福寺、観世音寺も含めた建物基壇寸法の比較を行った。その結果、川原寺式から観世音寺式への変化に際して、直接的に寸法の継承はみられなかった。しかし、伽藍配置の成立、広がりを一元的な流れで捉えることはできないものの、基壇寸法において川原寺の中金堂と観世音寺の金堂の基壇の比率が近い点、金堂と塔の間の距離が広がりを見せている点から、川原寺の伽藍計画そのものを踏襲はしなかったが、東面する金堂を強調し、一塔一金堂型式の伽藍配置として中枢部分を抜き出して観世音寺式が成立した可能性が指摘できる。

阿弥陀信仰に重きを置いていた川原寺式から、東面する金堂という阿弥陀信仰は継承し、斉明天皇の追福のため講堂に観世音菩薩をおくための伽藍配置として新たに観世音寺式のプランが練られたのではないだろうか。観世音寺の位置する筑紫は斉明天皇の故地であり、発願も川原寺と同時期、天智天皇によるものである。観世音寺の完成が多くの年月を要したのは、斉明天皇追福という発願当初の目的に加え、国を護るという鎮護国家的性格を付与され、本尊に変更があったからと考えられる。

川原寺式をとる寺院は川原寺と南滋賀町廃寺の２か寺のみといわれているが、南滋賀町廃寺の西金堂の基壇は東西に長い。このような例はほかになく、単に川原寺式の一変化パターンとして考えることには疑問が残る。南滋賀町廃寺の西金堂と塔は川原寺、観世音寺に比べて近接しており、西金堂が南面するとも考えられる。また、仏の方位性からみれば金堂が南向きであるのは釈迦如来に対する信仰を表し、南滋賀町廃寺の西金堂が南面する場合、西金堂の本尊は釈迦如来と考えられる（菱田 2005b）ため、東面金堂をもつ川原寺式、観世音寺式とは異なるグループに属することとなる。一塔二金堂式の川原寺式から一塔一金堂式の観世音寺式への簡略化と同様に、南滋賀町廃寺の型式から一塔一金堂式へ簡略化すると、一塔一金堂式で南面する東西棟の金堂をもつ法起寺式となり、南滋賀町廃寺の伽藍配置型式が法起寺式の祖型である可能性が生じる[31]。これについては次章で詳述する。

以上のように、川原寺式をとる寺院は厳密には川原寺のみであり、川原寺式をとる寺院は観世音寺式の全国への展開とともに見られなくなる。このことから、護国の伽藍配置の完成形として観世音寺式が川原寺式を祖型として成立した伽藍配置であると改めて考えることができる。

31　髙倉洋彰は、南滋賀町廃寺を川原寺式の異型とし、観世音寺式→法起寺式の流れでとらえている（髙倉 2018b）。

第 3 章　法起寺式伽藍配置

前章で触れたように、南滋賀町廃寺にみられる、南面する金堂を伽藍の西に配する形の中枢部のみ抜き出すと、法起寺式伽藍配置となる。法起寺式伽藍配置は一般的に、一塔一金堂式で回廊内の東に塔、西に南面する金堂を配するものと定義される。日本全国の広範囲に分布していることが知られており、近年では伽藍配置による寺院の集成も行われている（菱田 2005、石松 2007、森 2008 など）。筆者がこれまでに確認した限り、法起寺をとるとされる寺院は 59（60）か寺が数えられる[32]。以下に、地域別にその概要を述べる。番号は図 16 ～ 16、表 7 と対応している。

(1) 畿内の法起寺式をとる古代寺院

1. 大宅廃寺（おおやけ）　京都府京都市山科区大宅山田に所在する。1958（昭和 33）年度、1985（昭和 60）年度の調査で塔、金堂、講堂、北側建物が検出されている。古代の遺構は 3 時期に分けることができると考えられている。南西建物（建物 1：推定金堂）は瓦積み基壇の一部と礎石据付穴が検出されている。据付穴の柱間は 3m である。建物の規模は不明。基壇は地覆石を伴う瓦積み基壇で外回りに幅約 1m 高さ約 0.2m の瓦積み下成基壇を伴う二重基壇となっている。相輪装飾の一部と考えられる青銅製品を検出したことから塔の可能性も指摘されている。炭化材が多く出土することから火災により焼失したものと考えられている。南東建物（建物 2）は、雨落溝から塔に想定されている。講堂の基壇は乱石積で、東西 26 ×南北 16m である。建物は四面廂、4 × 7 間、12 × 22.8m の礎石建物で、桁行の柱間は 3.48m、梁行は 3.3m と考えられている。回廊ではなく築地を採用し、講堂に囲繞する施設が直接取りつかない点が特徴である。

出土瓦には雷文縁複弁蓮華文軒丸瓦（紀寺式）1 種、重弧文軒平瓦 2 種、変形偏向忍冬唐草文軒平瓦 4 種が出土している。瓦の編年から 7 世紀後半の天武朝には造営が開始されていたとされる。伽藍地西側を下がったところに古北陸道が走っている（京都府教育委員会 1958、平方・菅田 1988）。建物 1 が塔の場合は、法隆寺式伽藍配置である可能性もあるものの心礎石が検出されておらず不明であるため、法起寺式あるいは塔はなく金堂・講堂を南北に配する型式である可能性が検討されている（網 1999）。

2. 大鳳寺跡　京都府宇治市西中菟道（とどう）西中に所在する。宇治市教育委員会の発掘調査によって金堂の遺構が確認されている。瓦積み基壇で、南北に下成基壇をもつ。基壇規模は 16.1（南北）× 19.2（東西）m である。創建瓦は川原寺軒丸瓦と重弧文軒平瓦の組み合わせで、文様の編年から 7 世紀後半の年代が想定されている。地形や地割、字界などから約 112m 四方の寺域をもつ法起寺式伽藍配置をとる寺院と考えられている（杉本編 1984、1985、1986、1987）。

3. 久世廃寺　京都府城陽市久世に所在する。1976 年から城陽市教育委員会により調査が行われた。寺域は東西 120m ×南北 135m に推定されている。

塔の基壇は瓦積みで、13.4m 四方である。礎石の抜き取り穴から心礎石は地下式であったと考えられている。階段は南北に設けられている。建物は 3 × 3 間、6.3m 四方の建物に復元されている。金

32　筆者が本論をまとめるなかで、（三舟隆之 2019a）において各伽藍配置別寺院数の集計表が発表された。三舟氏によれば法起寺式は 57 か寺とある。具体的な寺院名や内訳はそこでは示されていない。三舟氏の研究成果を踏まえ、今後も引き続き集成・検討を行いたい。

堂の遺構は 26.7 × 21.3m の盛土基壇が検出されていることから、東西棟の建物であったと想定されている。塔と金堂の間は 8.9m である。講堂の基壇遺構は 23.5 × 13m である。建物は 7 × 4 間、21 × 10.5m の建物に復元されている。掘立柱と礎石が併用されている。

出土遺物には瓦類（軒丸瓦 13 型式 15 種、軒平瓦 6 型式 13 種など）のほか、南門遺構の北側から金銅製誕生釈迦仏立像が出土している。区画施設は築地である。付近に官衙（正道遺跡）がある。創建年代は 7 世紀中葉～後半に想定されている（奥村・福山 1976、近藤ほか 1980）。

4. 高麗寺（こまでら）跡　京都府木津川市山城町に所在する。1918（大正 7）年から京都府などによって調査がなされたほか、山城町教育委員会による調査が 1989 年より行われた。寺域は東西 190 ×南北 178m とされている。塔遺構の基壇上面は削平されており建物規模は不明である。瓦積み基壇で外周を幅 1.7m の石敷が巡る。東辺では東回廊に伸びる石敷が確認されている。瓦積み基壇の内側で花崗岩製の石積が検出されている。基壇は一辺 12.7m である。階段は基壇南面に設けられている。金堂の遺構は、16.0 × 13.4m の基壇が検出された。建物は東西棟で 5 × 4 間、11.7 × 9.0m、柱間寸法は桁行 2.3m、梁行 2.1m である。塔との心々距離は約 22.7m である。講堂の遺構は、基壇が 23.7 × 19.5（推定）m、建物は 5 × 4 間、19.0 × 15.2m、柱間寸法は桁行約 3.8m、梁行 3.7m である。基壇外装に使用された瓦は伽藍草創期のもので 7 世紀第 4 四半期に編年されている（木津川市教育委員会 2008、2010）。また近年の調査で、南門が伽藍中軸線に乗らず、金堂の前面に当たる位置に配されることがわかっている（中島編 2011）。

出土瓦のうち大和の川原寺と同笵である複弁八弁蓮華文軒丸瓦が最も古く、川原寺の創建が 662（天智元）年から 674（天武 2）年までの間であり、創建初期に用いられた型式であることから、高麗寺の創建も川原寺創建からあまり時をおかず、670 年前後に開始されたと考えられている（中島 1997）。また、7 世紀後半に川原寺同笵瓦（A 類）の瓦笵が後に南滋賀町廃寺に持ち込まれていることが指摘されており、瓦笵が川原寺（勅願）→高麗寺→崇福寺（勅願）・南滋賀町廃寺へ移動している（辻本 1996、小笠原 2005）。

5. 里廃寺　京都府相楽郡精華町に所在する。土壇の存在から近世以来、古代寺院跡と知られており、1987 年の精華町史編纂委員会による発掘調査によって、寺域北辺とされる東西方向の溝と白鳳期の瓦が出土した。2000 年の同教育委員会による調査で、土壇は瓦積み基壇の一部で、基壇北辺部は白鳳期平瓦を平積みにした外装であることが判明した。基壇の南北規模は約 14m（47 尺）と想定され、高麗寺廃寺の金堂規模に近似していることから、建物は東西棟の金堂跡と考えられており、東側に塔跡を想定する場合には法起寺式をとる。基壇の北辺から伽藍整備期の鴟尾片が出土している。

出土瓦には、高麗寺式の複弁八弁蓮華文軒丸瓦のほか、久世廃寺と同笵の単弁十一弁蓮華文軒丸瓦など、軒丸瓦 4 型式 4 種、軒平瓦 5 型式 7 種が出土している。出土瓦から白鳳期の創建が想定されている（中島 2010c）。

6. 燈籠寺廃寺　京都府木津川市木津宮ノ浦に所在する。木津川を挟んで高麗寺廃寺の対岸に位置する。東西約 32m ×南北 18m、高さ 1.5m の土壇が一基残っており、周辺からは軒丸瓦 2 型式、軒平瓦 5 型式が採集されている。また、推定寺域東辺の旧河道で出土した須恵器には「造寺」銘墨書をもつ坏片もみられる。考古学的調査は実施されていないが、『木津町史』では、土壇を金堂跡ととらえ、法起寺式伽藍配置を想定している（中島 2010b）。

7. 法起寺　奈良県斑鳩町岡本に所在する。別名「岡本寺」「池尻寺」ともよばれ、法起寺式伽藍配置

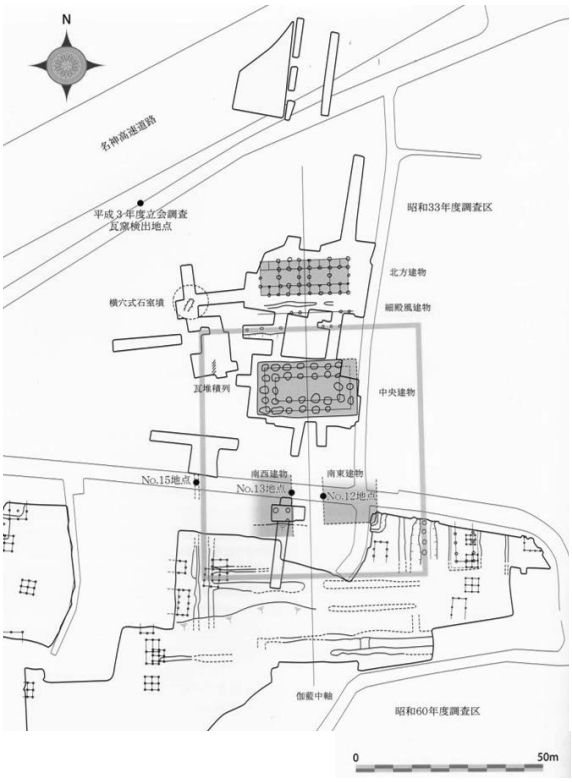
の標識となる寺院である。『法起寺塔露盤銘文』によれば、山背大兄王が聖徳太子の遺命により岡本宮を寺としたのち、638（舒明 10）年に福亮僧正が弥勒菩薩像を造立し金堂を建立し、685（天武 14）年には塔の造営工事が行われた。706（慶雲 3）年には塔の露盤が上げられ、工事には恵施僧正がかかわったことが記されている。

1960、1961（昭和 35、36）年に行われた境内の発掘調査によって、伽藍配置が塔を東に、金堂を西に置き、中門からのびる回廊が塔と金堂の北方の講堂に取りつく形であることが確認された。主要堂塔の遺構に関して金堂は、金堂推定地は後世のかく乱が大きく、金堂基壇の西面と考えられる南北溝と金堂推定地の北側から西側にかけて瓦堆積を確認するにとどまっている。講堂は、北面に東西溝を検出し、土層の変化から東西 30m に近い基壇規模が推定されている。回廊は塔と金堂の周囲をめぐって講堂前端部にとりつくと推定されており、西面回廊では幅約 3.3m の基壇跡が一部検出されている（町田 1977）。現存している三重塔については、柱間寸法において法隆寺五重塔との密接な関係が指摘されている。1968（昭和 43）年の発掘調査、1972（昭和 47）年から 1975（昭和 50）年に行われた解体修理において、三重塔に先行する建物遺構が検出されており、それらの建物の方位が三重塔と異なっていることから、いったん工事が中断され、685（天武 14）年に法起寺式の伽藍計画で再開されたと考えられている（森 1998）。なお、寺域は約方一町 に推定されている。昭和 51 年の調査で検出された遺物瓦には、素弁八葉蓮華文軒丸瓦（3 種）、複弁八弁蓮華文軒丸瓦（法隆寺式）、唐草文軒平瓦などがあり、素弁八弁蓮華文軒丸瓦のうち、飛鳥時代後期に比定されるものが金堂の創建瓦とされる（奈良県立橿原考古学研究所 1977）。

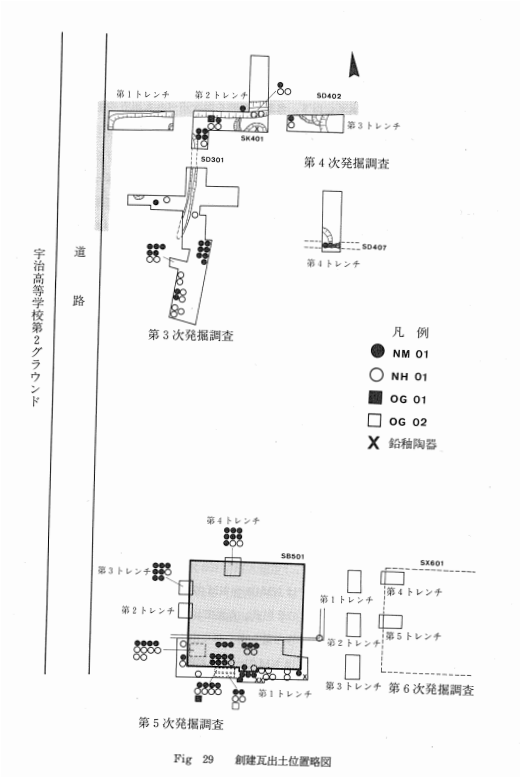
8. 長林寺跡　奈良県北葛城郡河合町に所在する。須佐神社境内地の一部に位置し、東側には現長林寺がある。本格的な発掘調査以前より寺院の存在は知られており、『奈良県史蹟勝地調査会報告書』第 3 回や『飛鳥時代寺院址の研究』（石田 1956）で、現長林寺境内に塔心礎石 1 個、須佐神社境内に礎石 2 個があることなどから、寺院伽藍について推定がされていた（網干 2006）。

1987（昭和 62）年からの発掘調査で寺院の範囲確認が行われ、金堂、講堂、中門、回廊の遺構が検出された。塔跡は、心礎石が移動していたが柱痕が確認され、その規模から三重塔が想定されている。金堂は 2 時期があり、創建金堂の基壇は盛り土で同位置で建て替えられたため規模は不明である。再建金堂は外装基壇は瓦積み、版築による造成である。基壇規模は東西 16.8 × 13.6m、建物は 5 × 4 間で、復元規模は桁行 11.8m ×梁間約 9.6m の建物に推定されている。再建金堂の時期は 8 世紀後半～中世である。講堂の基壇規模は、トレンチ調査で検出された溝から東西 20.5 ×南北 14.4m で、建物は東西約 17.5m ×南北約 10m、7 間× 4 間に推定されている。寺伝、文献史料『太子伝古今目録抄』、『聖徳太子伝記』から、推古天皇勅願の 46 か寺のうちの一つであると伝わっている（奈良県立橿原考古学研究所 1990、網干 2006）。出土瓦は金堂基壇周辺から確認されており、素弁八弁蓮華文軒丸瓦も見つかっているものの、法隆寺式の複弁八弁蓮華文軒丸瓦の数が多く、白鳳期の創建が想定されている（松本 2000）。

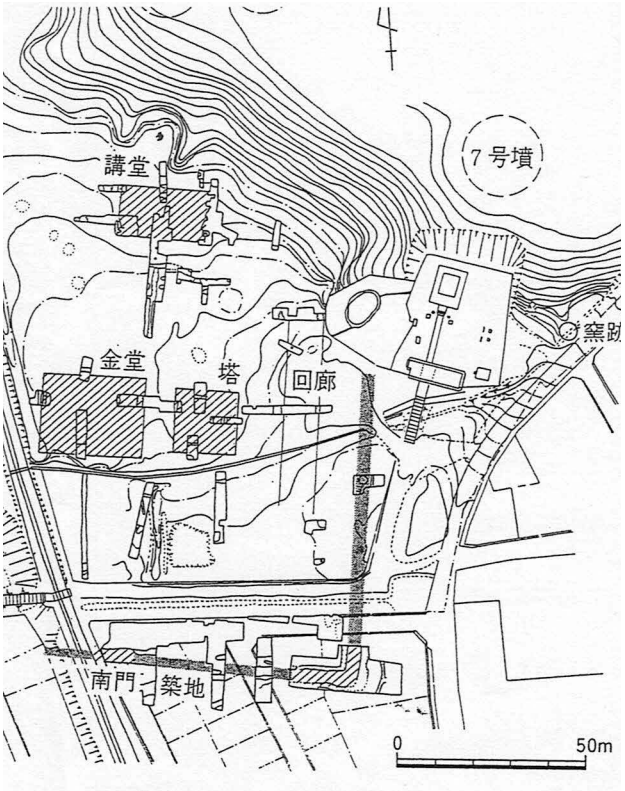
9. 西琳寺　大阪府羽曳野市古市に所在する。江戸時代、天和 3（1683）年の『河州古市西琳寺絵図』などによって寺院跡として知られていた。『西琳寺文永注記』の記述などから渡来系氏族で蘇我氏と関係の深い西文氏の氏寺であるとするのが定説である。創建年代は出土瓦の編年により 619（推古 27）年ごろに想定されている。1949、1973（昭和 24、48）年に大阪府教育委員会、石田茂作などによって調査され、塔、回廊の遺構の位置を確認、方 1 町の寺域をもつ法起寺式伽藍配置をとる寺院と推定



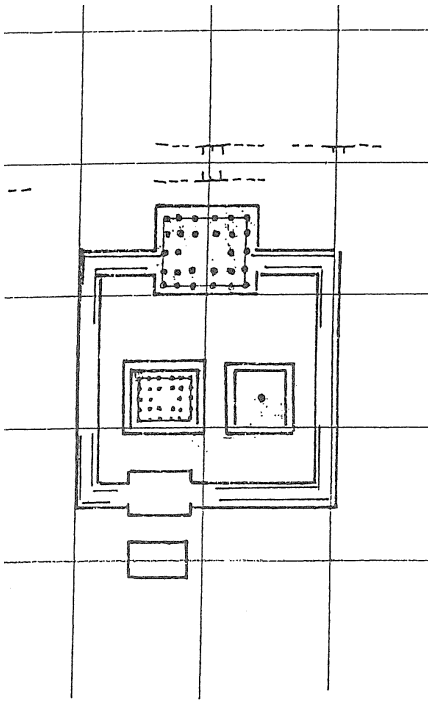
1. 大宅廃寺
（京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課編 2010）



2. 大鳳寺跡（杉本編 1987）

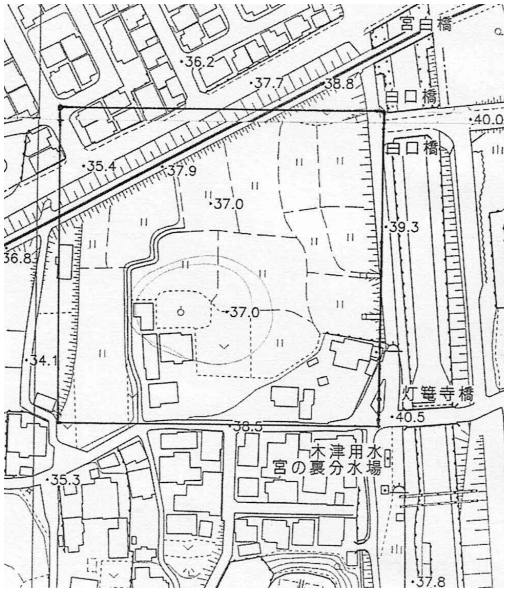


3. 久世廃寺（小泉 2010）

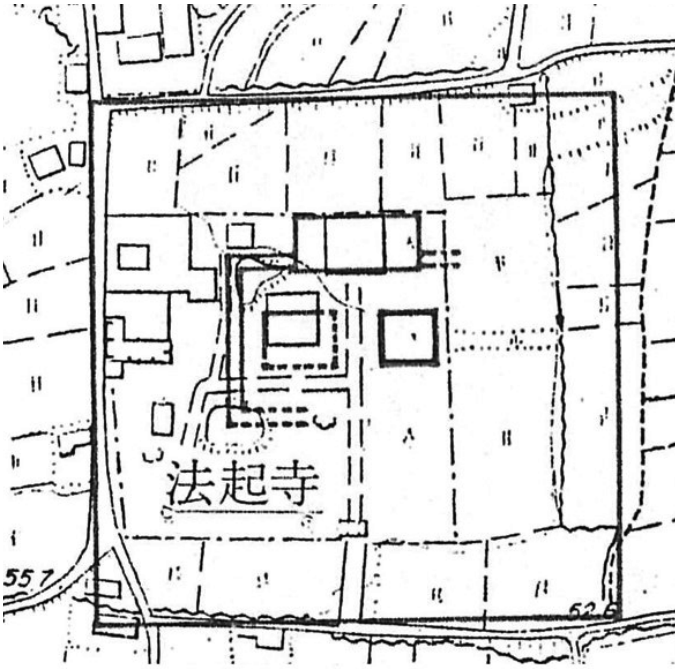


4. 高麗寺廃寺（中島 2010a）

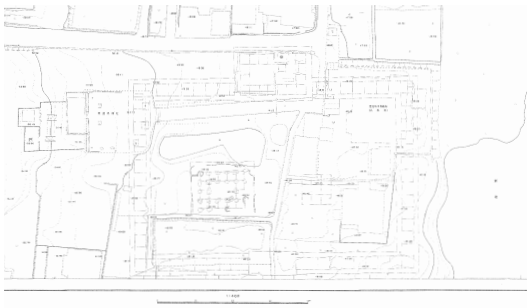
図 16　法起寺式伽藍配置寺院集成 1（1/2000）



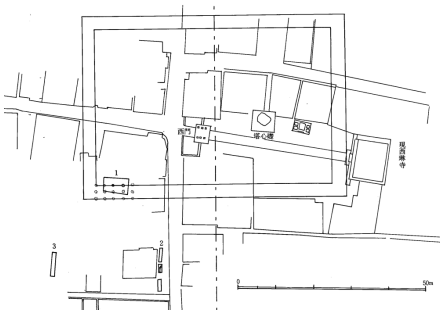
6. 燈籠寺廃寺（中島 2010b をトリミング）



7. 法起寺（町田 1977 をトリミング）

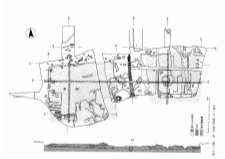


8. 長林寺廃寺
（奈良県立橿原考古学研究所編 1990 をトリミング）



9. 西琳寺（河野編 2004）

10. 衣縫廃寺（藤井 1984 をトリミング）



14. 天花寺廃寺（小玉・山田 1980 をトリミング）

図 17　法起寺式伽藍配置寺院集成 2（1/2000）

された。寺域内に長辺 3.2m ×短辺 2.6m ×高さ 1.5m の方形に近い形の花崗岩製の塔心礎石が残っている。塔基壇の掘り込み地業痕跡から一辺 12m の基壇規模が想定されている。1999（平成 11）年に行われた調査では金堂推定地から遺構は検出されていない（河内 1997、河内編 2004）。出土遺物には素弁蓮華文軒丸瓦などの軒丸瓦、軒平瓦、須恵器、土師器、鴟尾などがある（河内編 2004、近つ飛鳥博物館編 2013）。

10. 衣縫廃寺　大阪府藤井寺市国府衣縫に所在する。古くより寺院址の存在が知られていた。石田茂作や梅原末治らの調査、1971（昭和 46）年の大阪府教育員会による調査で、塔の基壇縁とみられる礎石抜き取り痕跡や回廊とみられる遺構が検出され、伽藍配置は法起寺式に想定された。衣縫廃寺礎石として伝わるものが 3 石あるが、元位置にないため、塔のものかは不明だが、花崗岩製で円形の柱座を造り出す。心礎石は中央に舎利孔を設けており、3.15 × 2.17m を測る。

創建時期の瓦としては、飛鳥寺式Ⅱ型同笵の軒丸瓦、豊浦寺式軒丸瓦が採用されており、7 世紀初頭～前半の年代が与えられている。寺域の西辺には東西方向に推定大津道が通る交通の要衝に位置している（藤井 1986、近つ飛鳥博物館編 2013）。

11. 池田寺　大阪府和泉市池田下町に所在する。1978（昭和 53）年から大阪府教育委員会により発掘調査が行われた。明確な建物遺構は検出されていないが、瓦の散布状態から法起寺式伽藍配置あるいは法隆寺式伽藍配置が想定されている。出土遺物には瓦類があり、創建瓦は池田寺Ⅰ式軒丸瓦（素弁八弁蓮華文）と池田寺式軒平瓦（偏行唐草文）で、7 世紀中葉の年代が与えられている。また「池田」銘文字瓦も出土している。造営主体として、池田首が想定されており、いわゆる郷名寺院と考えられている（近藤 1997）。

12. 信太寺跡（観音寺）　大阪府和泉市上代町に所在する。石田茂作により 1936（昭和 11）年に報告紹介されたことを研究の嚆矢とし、大阪府教育委員会によって 1976（昭和 51）年に本格的な発掘調査が開始された。遺構は 3 時期の重なりのある塼積基壇で、7 世紀の地覆石列、8 世紀末～ 9 世紀初めごろの塼積の基壇化粧が確認されているほか、築地、掘立柱建物などが確認されている。伽藍配置は法起寺式が想定されているが、明確な遺構配置は確認されていない。遺物は瓦類、土器類が多数検出された。軒丸瓦は 12 型式、軒平瓦は 9 型式に分類されている。軒丸瓦Ⅰ型式は素弁蓮華文軒丸瓦で、和泉市の坂本寺創建瓦と類似しており軽寺式軒丸瓦の模倣がなされている。また「信太寺」銘瓦が出土している。造営主体として、信太首が想定され、信太郷の名を冠する郷名寺院であるとされる。創建年代は軒丸瓦Ⅰ型式の年代から 7 世紀後葉に想定されている（広瀬 1982、近藤 1997）。

(2) 東海道の法起寺式をとる寺院

13. 嬉野廃寺　三重県一志郡嬉野町に所在する。戦前までは基壇が残存したと伝えられているが遺構は検出されていない(嬉野町教育委員会編 2002)。かつては法起寺式伽藍配置とわかるほど礎石が残っていたと伝わっており、天花寺廃寺と同系統の瓦が採集されている（新名 1997）。

14. 天花寺廃寺　三重県一志郡嬉野町に所在する。1980 年から三重県教育委員会によって調査が実施され、東に塔、西に金堂と推定される版築の掘り込み地形、塔・金堂の中軸にあたる南北溝などが検出されている。塔の遺構は、東西約 15.5m ×南北約 15m の掘り込み地形で、残存している基壇の南西よりに径約 3.9 × 3.3m、深さ約 1m の心礎石の抜き取り穴があるため、掘り込み地形の範囲自体が塔基壇の規模ではないことがわかっている。金堂の遺構は、塔の西側に東西約 20m ×南北約 17.5m の

掘り込み地形が検出されており、版築が認められている。礎石は検出されていない。付近には、瓦窯跡（天下寺瓦窯跡群）がある（野口 1992）。

出土遺物には、軒丸瓦 8 種、軒平瓦 6 種などの瓦類のほか、磚仏（菱形、長方形独尊仏）がある。創建期の瓦の組み合わせは、金堂では単弁八弁蓮華文軒丸瓦、単弁七弁蓮華文軒丸瓦、複弁八弁蓮華文軒丸瓦（川原寺系）、複弁七弁蓮華文軒丸瓦と重弧文軒平瓦が組み合うとされ、それにより、7 世紀後半～ 8 世紀前半の創建年代が考えられている（山田 1981）。

15. 東畑廃寺　愛知県稲沢市稲島町に所在する。1978（昭和 53）年から稲沢市教育委員会によって調査が実施されている。尾張国府跡の北辺にほぼ接した場所に位置し、北東約 4 ㎞に国分寺跡、東北東約 4 ㎞に国分尼寺跡がある。1989 年の調査で、東西 16.5 ～ 17m ×南北 15.5m の規模の建物基壇が検出され、金堂跡（5 間× 4 間）と考えられている。その東側約 10m の地点で、東西約 7.5m の版築遺構が見つかり、塔基壇と考えらた。また、礎石（1 か所）、根石（3 か所）などが北側で検出され、講堂跡と推定されている。本論では想定されている遺構の位置関係から、法起寺式として扱う。

遺物には瓦類（素縁素弁九弁蓮華文軒丸瓦など 5 型式、重弧文軒平瓦など 8 型式）のほか、塼仏が出土しており、瓦は、尾張国分寺と同笵が 4 種、塼仏は橘寺や川原寺裏山遺跡との類似が指摘されている。瓦の編年から 7 世紀中ごろの創建年代が想定されている（北條 1991 ～ 1995、神野 1990、梶原 2010a）。

16. 尾張元興寺　愛知県名古屋市に所在する。報文では寺域の推定から法起寺式または、法隆寺式の塔・金堂を併置する伽藍配置が想定されている。昭和初期の石田茂作による研究がその嚆矢で、その後の名古屋大学、名古屋市教育委員会による調査が実施されているものの、主要伽藍にかかる建物遺構は見つかっていない（服部編 1994）。法起寺式をとる可能性があるため、本論で取り扱う。出土遺物には軒丸瓦 9 型式、軒平瓦 5 型式が確認されている（梶原 2010b）

17. 尾羽廃寺　静岡県静岡市清水区に所在する。寺院の存在は近世以降、広く知られていたが、1971（昭和 46）年からの清水市教育委員会の発掘調査により、主要建物として創建金堂跡、再建金堂跡、講堂の遺構が確認された。創建金堂は東西約 18.6m ×南北約 14.6m、切石積基壇あるいは壇正積基壇の可能性が考えられている。再建金堂の規模は不明だが、出土遺物から建て替えは 10 世紀後半～ 11 世紀前半が想定されている。講堂遺構は金堂の 18m 北側にあり、基壇は東西約 23m ×南北約 17.2m の規模である。塔については、金堂の北で石造露盤が検出されたため、その存在が想定された。1996（平成 8）年度の調査で創建期金堂の東南で版築遺構が確認され、中門跡と考えらえている（大川 1988、2008）。塔・金堂の位置関係から法起寺式をとると考えられる。

出土遺物には、複弁八弁蓮華文軒丸瓦 2 種、重弧文軒平瓦 2 型式、平瓦などがある。大川敏夫は建物面積や出土遺物による検討から、尾羽廃寺の創建年代は 680 年以降とし、685（天武天皇 14）年の詔との関連性を指摘している（大川 2008）。

18. 竹林寺廃寺　静岡県島田市南原に所在する。島田市教育委員会による調査で、金堂、塔、講堂、掘立柱建物 13 棟、柵列、寺院外郭溝などの遺構が検出されている。遺構の時期は大きく創建期（8 世紀前葉～ 9 世紀初頭）、再建期（9 世紀前半～ 10 世紀後半頃）の 2 時期に分かれる。創建期の遺構は塔、掘立柱建物 5 棟、寺院外郭溝であるが、再建建物遺構の状況から、金堂・講堂もこの時期に存在した可能性が考えられるとされており、その場合は法起寺伽藍配置をとる可能性がある。塔跡は礫を敷いた版築基壇上に築造され、基壇規模は一辺 6.8m である。再建金堂の基壇は掘り込み地業と版

築によって築成された乱石積み基壇で、規模は東西 15.5 ×南北 13.5m である。9 世紀初頭に火災で失われた創建金堂の瓦が基壇の裏込に使われている。講堂も金堂と同様の乱石積み基壇で、東西 13.6m に推定されている。瓦だまりの上に版築がなされているため、創建期の建物が失われた後の建物であるとされる。寺院外郭溝は東西 92 ×南北 162m に想定されている（丸杉 2003）。

出土遺物には、瓦類、土器類、陶硯、墨書土器などがある。創建瓦は無子葉単弁九弁蓮華文軒平瓦、無子葉単弁十弁蓮華軒丸瓦、無文軒平瓦と考えられている。これらは山田寺系軒丸瓦にわけられる。土器の年代から創建寺院の年代は 8 世紀前葉～ 9 世紀初頭とされている（丸杉 2003）。

19. 寺本廃寺　山梨県春日居町に所在する。長く国分尼寺とされてきたが、1938（昭和 13）年に大場磐雄がその説を否定し、1948（昭和 23）年の川田瓦窯の発見、1950（昭和 25）年の石田茂作の研究により国分尼寺よりも 50 年以上前の寺院であること、法起寺式伽藍配置をとることなどが指摘された。1950（昭和 25）年からの春日居町教育委員会による発掘調査で、塔の心礎石、側柱礎石、金堂跡と考えられる整地層、軒丸瓦 4 種、軒平瓦 3 種などが検出された（内田・三沢編 1988）。

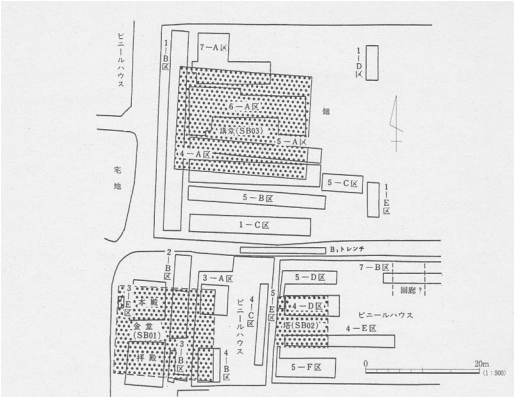
塔は、心礎石と根石から一辺長が約 5.4m（天平尺 18 尺）、金堂は、基壇周囲の河原石の散乱状況から東西約 18m、南北約 10 ～ 12m の基壇規模が推定された。講堂は、塔・金堂の間北方で内法幅約 0.6m、東西約 19m 分の石組溝が検出され、基壇東西幅約 18m、桁行 5 間の規模に想定されている。塔と金堂の北辺と講堂南辺が近接するが、広義の法起寺式伽藍配置をとると解釈されている（清水 1988）。創建瓦は、素弁八弁蓮華文軒丸瓦で、法起寺の創建期の瓦との類似が指摘されており、7 世紀後半の早い時期の年代が与えられている（佐野 1989）。

20. 影向寺（ようごうじ）　神奈川県川崎市宮前区に所在する。多摩丘陵の北東部、現在の影向寺寺域の範囲に影向寺跡遺構が位置している。「影向石」とよばれる塔心礎石が残る。塔の遺構は、堀りこみ地形が一辺約 12m で、版築層が確認されているが、基壇上面が削平されており、建物規模は不明である。金堂の基壇規模は、約 18 ～ 19m × 25m 以上に想定されている。伽藍配置は法起寺式をとるとされていたが、近年の調査では、別の伽藍配置をとる可能性も検討されている（服部・栗田編 2014）。また、寺院の前身建物と考えられる掘立柱建物が検出されたことから、豪族居宅あるいは評衙関連施設であった可能性も指摘されている。

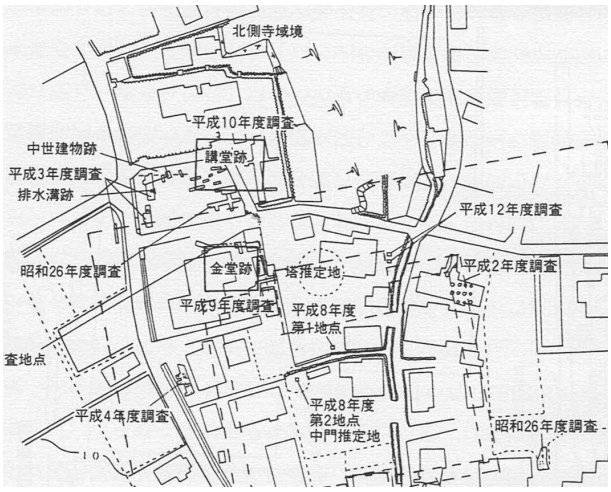
出土遺物には素縁鋸歯文単弁八葉蓮華文軒丸瓦、素縁単弁八葉蓮華文軒丸瓦、単弁八葉蓮華文軒丸瓦の三種があり、軒平瓦は三重弧文、四重弧文軒平瓦がある。創建瓦は、素縁鋸歯文単弁八葉蓮華文軒丸瓦（山田寺系）と三重弧文の軒平瓦の組み合わせである。出土平瓦には「无射志国任原評」銘のものがあることから、創建年代は 7 世紀第 4 四半期と考えられている。

21. 結城廃寺　茨城県結城市上山川、鬼怒川の西岸に所在する。1988（昭和 63）年度から 8 次にわたる発掘調査が結城市教育委員会によって行われた。寺域は、溝により区画されており、南東角を欠く南北約 259m 前後×東西約 180m の不規則な長方形である。

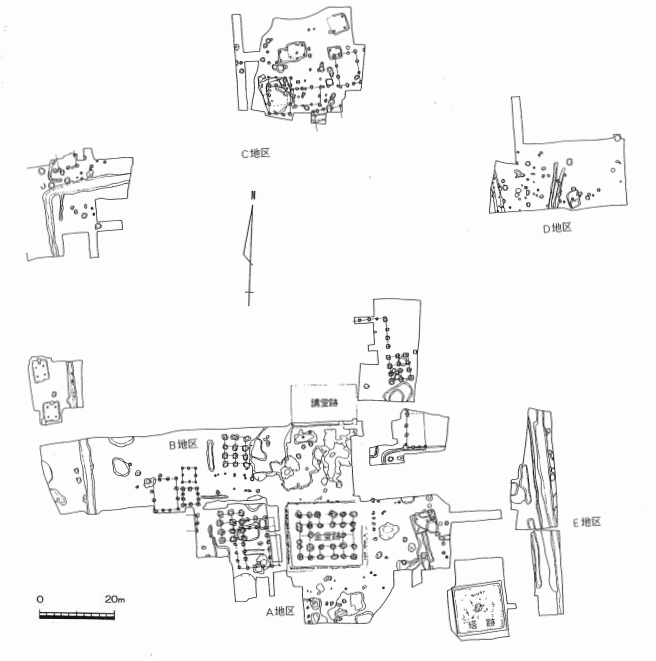
中枢伽藍の配置は、中門、講堂に取り付く回廊に囲まれた範囲に、西に金堂、東に塔が並び建てられた法起寺式で、南北 64m ×東西 74m の規模をもつ。金堂の遺構は、掘り込み地業と基壇外装の一部が検出されており、基壇規模は東西 13.7 ×南北 11.6m である。塔は、基壇掘り込み地業と心礎石が確認されている。基壇外装から方 11m の基壇規模が想定される。講堂は基壇掘り込み地業のみ確認され、上面の規模が東西 30 ×南北 17.3m である。講堂の北には僧坊と考えられる建物が配置されている。なお、南門等は確認されていない。



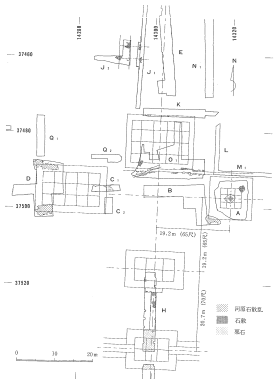
15. 東畑廃寺（愛知県史編さん委員会 2010 をトリミング）



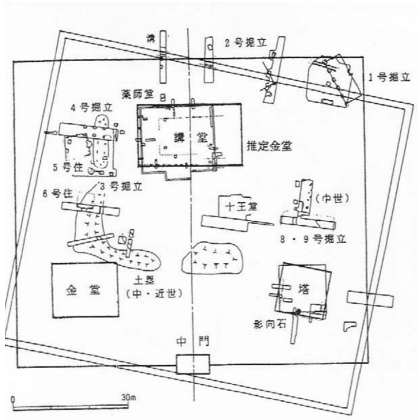
17. 尾羽廃寺（大川 2008 をトリミング）



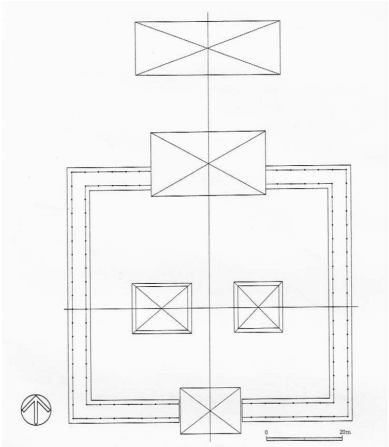
18. 竹林寺廃寺（丸杉 2003）



19. 寺本廃寺（内田・三沢編 1988）



20. 影向寺（玉川文化財研究所編 2007）



21. 結城廃寺（斉藤編 1999）

図 18　法起寺式伽藍配置寺院集成 3（1/2000）

出土瓦には下野薬師寺の系譜をひく軒平・軒丸瓦のほか、棰先瓦、多数の塼仏片、塑像片、風鐸、蓮華文が描かれた花崗岩製の舎利孔蓋などが検出された。このうち、南西回廊跡付近から法隆寺に原型を求められる塼仏・塑像が出土しており、東国ではまれな塼仏や棰先瓦、舎利孔蓋の蓮華文は、この寺院が極めて畿内的な特徴をもつことが指摘されている。また、創建期の瓦は、廃寺の北東約500mにある結城八幡瓦窯跡で生産されている。土器や瓦の年代から8世紀前半（720年代後半～740年代）に建立され、10世紀中頃～後半に焼失したとされる。「法成寺」とへら書きされた文字瓦も出土しており、『将門記』にみえる結城郡法城寺にあたる可能性が指摘されており、「法成寺」銘瓦から郡名寺院で法成寺としたことが分かっている。（斉藤1989、須田1998、辻2001）。

22. 龍角寺廃寺　千葉県印旛郡栄町に所在する。印旛沼と利根川に挟まれた台地上に立地する。1947（昭和22）年からの滝口宏をはじめとする早稲田大学による調査、その後1971（昭和46）年の同大学、1988（昭和63）年の千葉県文化財センターによる調査などで、金堂基壇、塔基壇が確認されている。

心礎石と門跡の礎石が現在の龍角寺境内に現存している。金堂の基壇は、東西51尺（15.65m）×南北41尺（12.42m）で、建物は3間四面に推定されている。塔の基壇遺構は36尺四方（約9.1m）の規模で、心礎石は2.5×1.8mの大きさで、中央の円形舎利孔は径64㎝、深さ13㎝である。寺伝の『龍角寺略縁起』に永和3（1377）年に三重塔の修造記事があるため、三重塔であった可能性がある。講堂については、2015（平成27）年の調査（城倉ほか2017）において、それまで講堂とされていた土壇が回廊跡に比定されている。金堂、塔の心々が東西線上にあり、心々距離は33.94m（112尺）である、その位置関係から法起寺式として知られる。出土遺物には、瓦類（軒丸瓦、軒平瓦丸瓦、平瓦のほか、瓦塔の破片）などがある。重圏文縁単弁八葉蓮華文鐙瓦は山田寺式で、7世紀第3四半期に位置付けられている（岡本1993）。

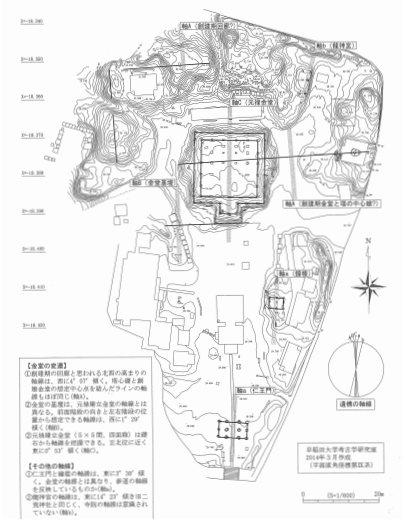
また、北方約500mに龍角寺瓦窯跡、五斗蒔瓦窯跡がある。このほか、銅像薬師如来像が伝わっている。白鳳仏の特徴を備えながら、685年作の興福寺仏頭（もと山田寺本尊）に比べて初唐様式が十分に理解されていない段階のものであると評価されている（神野2009）。

23. 木下別所（きおろしべっしょ）廃寺　千葉県印西市別所に所在する。1977（昭和52）年から早稲田大学を中心とする木下別所廃寺跡調査団による発掘調査で、中心部をなす3基の基壇が確認されており、位置関係からそれぞれ、講堂、金堂、塔に推定されている（滝口編1979）。推定金堂の基壇は東西約13m×南北約10mの長方形で、推定講堂の基壇は、東西約18.6m×南北約13.5mの長方形で、金堂が掘り込みを施していない野に対し、講堂は30㎝ほどの掘り込みが確認されている。推定塔の基壇は一辺8mの正方形であるが、遺構の周囲10m以内から瓦塔片が出土していることから、塔の建物を持たず、瓦塔を設置していた可能性が指摘されている。また、講堂基壇土中から瓦片が出土しておらず、三つの遺構は同時に構築された物ではなく、講堂基壇がほかの二つに先行して建てられたとみられている。

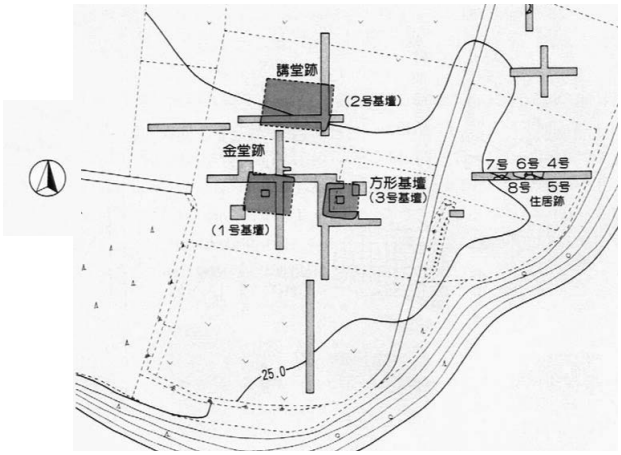
出土遺物には瓦類が多く、龍角寺式の三重圏紋縁単弁八葉蓮華文鐙瓦がある。組み合わせられる軒平瓦は三重弧文軒平瓦である。出土瓦は龍角寺同様、7世紀第3四半期の年代が与えられている。（小出ほか1993、辻1998）

（3）東山道の法起寺式をとる寺院

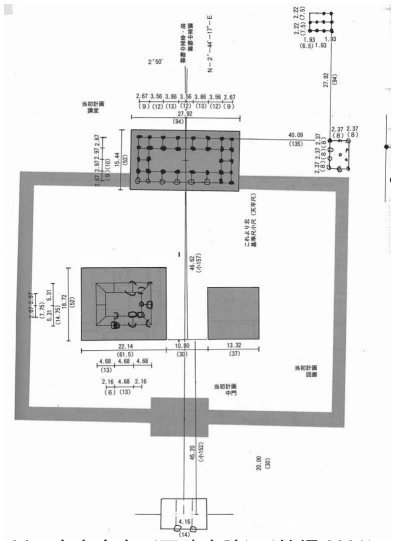
24. 穴太廃寺（後期穴太廃寺再建寺院）　滋賀県大津市唐崎・穴太に所在する。前出の後期穴太廃寺創建寺院同様、1984（昭和59）年度から1991（平成3）年にかけて滋賀県教育委員会・同文化財保



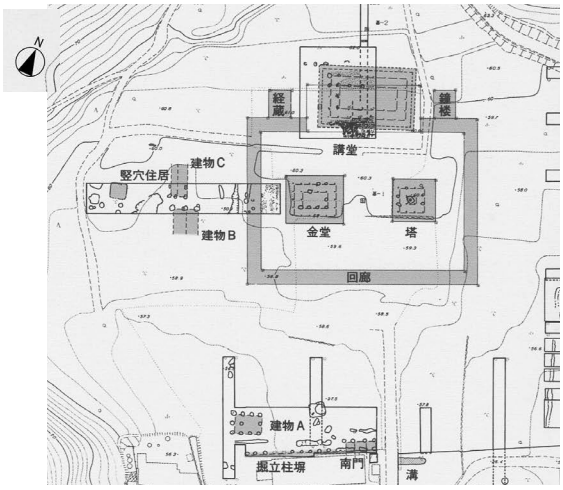
22. 龍角寺廃寺（城倉ほか 2017）



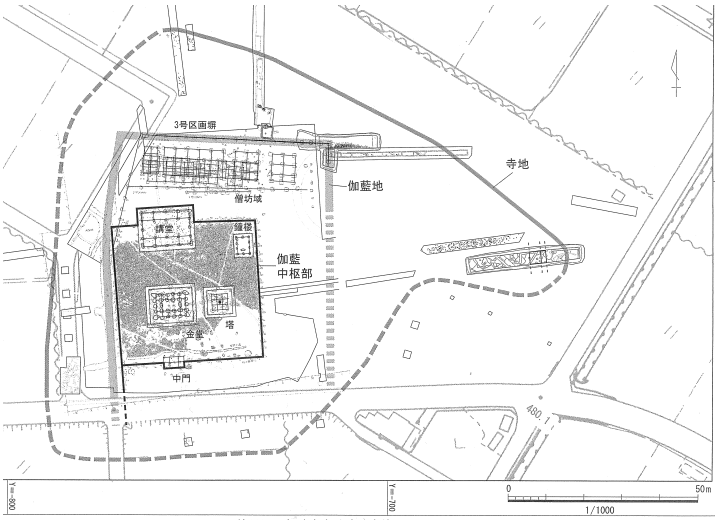
23. 木下別所廃寺（滝口編 1979）



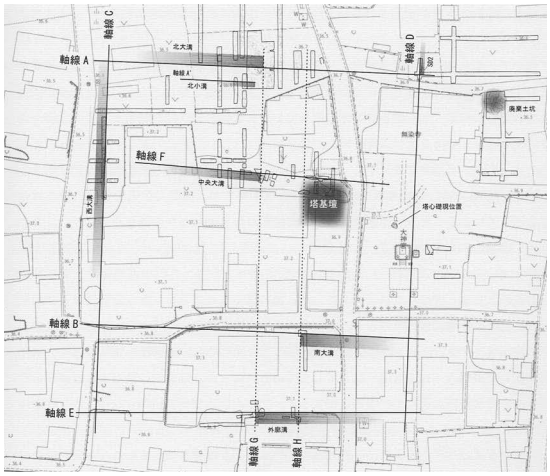
24. 穴太廃寺（再建寺院）（林編 2001）



25. 弥勒寺跡（田中 2008 をトリミング）



27. 杉崎廃寺（三好編 2012 をトリミング）



26. 山田寺（西村編 2010 をトリミング）

図 19　法起寺式伽藍配置寺院集成 4（1/2000）

護協会により調査が行われた（林ほか 2001）。検出されたのは、金堂、塔、講堂、東礎石建物、北礎石建物の遺構である。金堂跡は、基壇南辺の瓦積み基壇、北辺・東西辺基壇が検出され、東西 22.14m ×南北 18.72m の基壇規模となる。造営時の基準尺は 1 尺 0.36m である。建物については、礎石据え付け穴などから桁行 3 間×梁行 2 間の身舎に庇が巡り、南面する形に復元されている。金堂基壇の東辺から 10.8m 東に塔跡の西側基壇が位置する。西・北辺の地覆石は抜き取られ、据え付け穴のみが確認されており、一辺 13.32m の正方形の基壇が推定されている。北辺の礎石抜き取り穴から裏込め粘土が付着した半裁平瓦が出土していることから、塔の基壇も瓦積みであったと考えられている。心礎石は確認されていない。

講堂は、金堂跡基壇北辺から約 20m の位置で講堂基壇南辺が確認されている。基壇は東西 27.91m × 15.44m の規模である。金堂･塔の中軸線より 2 度 50 分東に偏っており、基壇の基準尺も一尺 0.297m（天平尺）である。また基壇外装には自然石を用いている。建物は、礎石から桁行 5 間×梁行 2 間の規模で、身舎に四面に 1 間の庇が巡る単層の建物とされる。周辺から瓦の出土がないことから、桧皮葺きあるいは板葺きの屋根であった可能性がある。講堂の創建時期は金堂・塔と創建時期が異なると考えられており、須弥壇から出土した銭「神功開寶」などから、8 世紀代第 4 四半期～ 900 年ごろに想定されている。講堂と塔・金堂に時期差があるが、塔・金堂の位置関係から法起寺式として扱う。

出土遺物として、軒丸瓦･軒平瓦などの瓦類、土師器、須恵器等がある。瓦は、複弁蓮華文軒丸瓦、重弧文軒平瓦の組み合わせである。複弁蓮華文軒丸瓦は川原寺式とよばれるタイプで、面違い鋸歯文の周縁をもつ。また、南滋賀町廃寺から笵を持ってきて作ったと想定される軒丸瓦が 3 点ある。講堂須弥壇からは塑像螺髪、塼仏、押出仏、銭（神功開珎）、三彩陶器ほか、主要伽藍区からは坩堝やふいごの羽口など、鋳造関連品が見つかっている（林編 2001）。

25. 弥勒寺跡　岐阜県関市池尻に所在し、長良川沿岸の要衝地に立地する。長良川北岸の限られた平地に寺院と官衙が計画的に配置される。1953（昭和 28）年から石田茂作らによる調査を嚆矢として、1956（昭和 31）年、1998、1999（平成 10、11）年に調査が実施されている（篠原・田中 2001、田中 2008）。塔の遺構は、方 11.5m で、高さ約 90 ㎝の石積み基壇と心礎石が残る。建物は 3 × 3 間、一辺 6.36m に想定される。金堂は東西 14.88 ×南北 12.42m の石積み基壇で、桁行 3 間×梁行 2 間の四面廂をもつ建物が想定される。講堂は、東西約 24 ×南北約 14m の基壇が見つかっている。桁行 5 間×梁行 3 間の建物に復元される。

出土した軒丸瓦は 3 種で、複弁八弁蓮華文軒丸瓦で面違鋸歯文をもつ川原寺式が大半を占める。組み合わせられる軒平瓦は四重弧文で、平瓦では全国的に類例が少ない凸面布目瓦と呼ばれる凸面に布目が残る瓦も見つかっている。7 世紀後半から 8 世紀にかけての須恵器類が出土していることなどから、寺院の創建は 7 世紀後半～末頃とされる。その他の出土遺物には、「大寺」墨書土器、螺髪、緑釉陶器がある。螺髪は高さ 3.9 ㎝ほどで、立像の場合は一丈六尺のいわゆる丈六仏が安置されていたと推定される。また、奈良県石神遺跡出土木簡から「乙丑年十二月三野国ム下評」荷札木簡が出土しており、「乙丑年」は 665 年と考えられることから、7 世紀中葉には「ム下評」が存在し、役所の機能を有していた。672 年に壬申の乱で活躍した身毛君広（むげつきみひろ）で知られるムゲツ氏による造営と考えられている。官衙遺跡群内の遺構変遷としては、Ⅰ期の 7 世紀後半～ 8 世紀初頭には、段丘の中央部の豪族居宅が東に移動し、後の郡庁院下層には大形建物跡が検出されている。西側丘陵に弥勒寺が造営され、伽藍南門は丘陵等高線に合わせるように東に向いており、対岸からの景観を重要視したとされる。Ⅱ

期の 8 世紀初頭～ 10 世紀後半には、段丘中央に正倉院、全面に郡庁院が配置される（田中 2008）。

南門の遺構が掘立柱塀であるという見解があるが、掘立柱塀は畿内の寺院でも四天王寺などでみられるほか、南滋賀町廃寺や、法起寺式・観世音寺式をとる寺院でも確認されており、寺院にみられる軍事的な要素の場合があるとして注目されている（甲斐 2010）。

26. 山田寺（さんでんじ）　岐阜県各務原市蘇原寺島町に所在する。各務原台地北端部の西側、半島状地形の最前線部に位置する。古くから古代瓦や須恵器が出土することが知られており、鴟尾も採集されている。周辺古墳の調査などにより、この一帯の開発は 5 世紀後葉（古墳時代後期）と考えられており、初期群集墳の特徴をもつ熊田山北古墳群は、その副葬品などから渡来系の新興勢力である可能性が指摘されている。6 世紀以降には、小型の前方後円墳のほか、群集墳が熊田山の山麓に築造されている。台地平坦部の土地利用に計画性がみられ、東西交通の要衝地であったとされている。

2005（平成 17）年度より開発などに伴い、寺院跡の範囲確認のための調査が 4 次にわたって行われた。その多くがトレンチ調査である。以下、報文（西村編 2010）に従い、その概要を述べる。

建物の明確な遺構は検出されていないが、北大溝、北小溝、西大溝、中央大溝、南大溝、外廊溝、そして、塔の遺構の一部が見つかっている。このうち外側の西と北の大溝は、寺院の外周を示すと考えられている。北大溝は深さ 1.2m（SX13）、深さ 1.14m（SX26）、幅は復元幅で 0.9m である。北大溝に並行して東西方向に小さな溝（SD13）が検出されている。幅 1.3m ×深さ 0.72m で、北大溝の東端ほぼ同じ地点で途切れている。西大溝は、南北方向に掘られており、北大溝とは直接交わらないものの、北へ直行すれば 90 度の角度で交わると想定されている。これにより、この交わる地点が伽藍の北西角とされている。第 12 トレンチで検出された溝（SD10）の幅は 0.9m だが、深さはほぼ北大溝と同規模の 1.11m である。北大溝の南側、伽藍の西半に東西に走る、中央大溝は幅 2.04m ×深さ 0.9m（SX16）、幅 1.74m × 1.06m（SD23）、幅 2.04m ×深さ 1.16m（SD01）で、溝幅は 2.13m に推定されている。SD01、SD23 では、溝に隙間なく瓦が入り込んでおり、報告者は、金銅製の風拓も検出されていることから、なんらかの堂塔が倒壊して埋まったものではないかと考えている。

また、南側に東西方向にのびる SX1 は幅 3.38m ×深さ 0.43m で、その位置から伽藍南回廊に伴う溝として想定されている。これらの溝群から、中心伽藍は南北 69m ×東西 82m の規模が与えられている。伽藍中心から東側の第 30A、第 32 トレンチで、塔基壇の版築が確認されている。地元住民の伝承による塔心礎石の元位置とも近いが、後の時代の削平を受け、版築遺構一部のみの検出であるため、詳細は不明である。

出土遺物のうち土器類はおおむね、造営以前（5 世紀後葉～末頃）、運営時期（7 世紀後葉～ 8 世紀、9 世紀）、廃絶後の 3 つの時期に分けられている。寺院運営時期の遺物としては、須恵器の灯明具（無台坏）、仏鉢、獣脚付火舎などがあり、廃棄土坑からまとまって検出された。このほか、陶塔、泥塔、転用硯、墨書土器、磚、風拓、釘が見つかっている。出土瓦は、軒丸瓦が複弁 1 ～ 3 型式、細弁型式、単弁型式で、単弁型式を除いて川原寺式系の複弁蓮華文が採用されている。複弁 1 型式は出土量が最多の約 70%を占める。他の古代寺院にみられない独自性の高いデザインである。細弁型式は、1 ～ 3 型式の異系で、音楽寺（愛知県江南市）に出土例がある。単弁式は 6.7%の出土で、すべて 1 種同笵である。軒平瓦は、無顎三重弧文、無顎四重弧文、無顎三重弧文 + 波状文、無顎四重弧文 + 波状文、無文の 5 類である。軒丸瓦との組み合わせについて報文（小川 2010a）では、中央大溝に遺存した瓦については、類型比率から軒丸瓦 1a 型式には厚手の四重弧文軒平瓦（1b）、軒丸瓦 1b 型式に厚手の

三重弧文の組み合わせ、北大溝に遺存した瓦については、軒丸瓦 1a と四重弧文（薄手）、軒丸瓦 1b と三重弧文の組み合わせとしている。なお、中央溝の瓦は伽藍整備時期のもので、北大溝の瓦は廃寺直後に近辺から寄せられたものであると指摘されている。これらのほかに丸瓦、平瓦、および刻印瓦がある。

伽藍配置型式については明確に述べられていないものの、瓦の散布状況などから、中央大溝付近に何らかの建物が建てられていたことが指摘されている。中央大溝が塔基壇の北端と東西がほぼ同じラインであること、中央大溝にかかる南北方向の遺構が検出されていないことから、東西方向に長い建物が推定され、復元的に法起寺式伽藍配置をとる可能性が指摘されている（小川 2010a）。

山田寺は、甲斐由美子によれば、壬申の乱で功績をあげた氏族寺院の多く分布する美濃に位置し、大和川原寺創建時の瓦と同笵品あるいは瓦当文様を範としたような同系統の瓦がみられる寺院に含まれる。山田寺の位置する各務郡は、小豪族である勝氏、村国氏、各牟氏の本拠地とされており、これらの豪族が壬申の乱の際の功績で朝廷側から寺院造営を許され、技術提供をうけたといわれている（甲斐 2010）。加えて、川原寺式がモデルとなった瓦が出土する範囲は、美濃国中 5 群、東西約 20 ㎞に限られる。甲斐の指摘する壬申の乱の功績者については、各務郡が本貫地である「村国男依」がそれにあたる。加えて、山田寺出土瓦の種類の豊富さ（9 種）は、美濃国分寺跡（10 種）に次ぐことは特筆される（小川 2010a）。

27. 杉崎廃寺　岐阜県飛騨市古川町に所在する。1991（平成 3）年から古川町教育委員会によって発掘調査が行われている（三好編 2012）。検出された金堂跡は塔跡と近接しており、三間四面である。基壇は掘り込み地業を伴う版築でなされた乱石積みで、規模は平面東西 13.5m × 10.8m、現存高は 0.4m で、玉石敷の二重基壇になっている。同様の二重基壇をもつものとして法隆寺の金堂・塔、飛鳥寺東金堂の遺構があげられる。塔の遺構も掘り込み地業を伴う乱石積み二重基壇で、方 8.1m の規模である。講堂も同様の基壇で、平面規模東西 15m ×南北 10.2m である。講堂跡の桁行柱間が偶数であることから飛鳥寺講堂との類似が指摘されている。伽藍地東側から寺院付属施設が検出されている。伽藍中枢部の北には僧房跡と考えられる遺構も見つかっている。

伽藍中枢部から出土した遺物として、浄瓶・水瓶・獣足火舎・鉄鉢・高盤などの供養具、丸瓦・平瓦・熨斗瓦などの瓦類、坏・埦、建築部材（木製品）などがある。瓦類はそのほとんどが金堂跡と塔跡付近からのみ検出され、伽藍西側の排水施設から多量の檜皮が発見されたことから、建物には瓦が葺かれておらず、桧皮葺であったと考えられている。そのため、創建年代がはっきりとしないが、講堂の基壇面や主要堂塔を区画する一本柱塀などから出土した須恵器や土師器の編年によって、7 世紀末～ 8 世紀初頭の創建年代が与えられている。また、寺院廃絶の原因は主要堂塔の火災による焼失が 8 世紀末～ 9 世紀初頭と考えられている。また、伽藍の内部には玉石が敷き詰められていた。

伽藍配置は法起寺式だが、報文では「伽藍の中軸線に対して西に寄った金堂の南北軸線上に中門と講堂を配置する、この並びは伽藍中軸線とは一致せず、層塔だけが東へやや張り出す形となり、他に例をみない、また小規模な伽藍として当時注目された」とあり、視覚的バランスを重視した意匠という解釈もされている。また、寺域内を石敷きにしていることも大きな特徴として挙げられている（河合・島田 1995、杉崎廃寺跡発掘調査団編 1998、三好編 2012）。

28. 山王廃寺　山王廃寺は群馬県前橋市に所在する。大正時代の初めに日枝神社の境内で塔心礎石が発見されたことで寺院の存在が明らかになった。1928（昭和）3 年に国の史跡に指定され、1974（昭

和 49）年度から発掘調査が行われた。2008（平成 20）年に追加で史跡指定が行われ、名称が「山王廃寺跡」となった。発掘調査で判明している各建物の遺構から復元されている基壇規模は、塔は一辺 13.6m。金堂は 22 × 21.7m、講堂は 37.8 × 24.5m である。伽藍配置は、塔・金堂の位置関係から法起寺式に復元されている。

遺物では、軒丸瓦、軒平瓦、文字瓦などの瓦類のほか、土器・陶磁器類、古銭、鉄製品などが検出されている。このほか石製の鴟尾が 2 体見つかっており、それぞれ形式が異なることから、別の 2 棟の建物に付属したものであったとされている。なお、法起寺式をとる寺院において石製の鴟尾は鳥取県大寺廃寺のほか山王廃寺の例が知られる。創建瓦は、山田寺式系の素弁八弁蓮華文軒丸瓦（Ⅰ類Ⅱ類）で、Ⅰ類は中央からもたらされた技術によるもの、Ⅱ類は飛鳥寺などの百済系の瓦当文様の影響が指摘されている（山下・阿久澤編 2012）。1981（昭和 56）年の発掘調査で見つかった文字瓦に「放光寺」をもつものがあり、寺名が放光寺であること、山上碑にみられる放光寺僧の記事と年代が合致することからこれらは同一の寺院で、造営主体は上毛野君（かみつけのきみ）と考えられている。創建年代は 7 世紀後半（第 3 四半期ごろ～）とされる（山下・福田・阿久澤編 2011）。

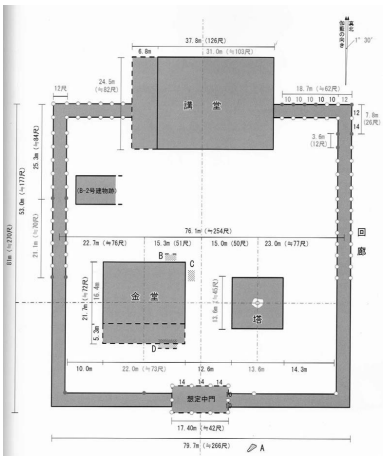
（4）北陸道の法起寺式をとる寺院

29・30 興道寺廃寺　福井県三方郡美浜町興道寺小字観音に所在する。寺域は方 120m に推定される。

遺構は、大きく分けて創建期・再建期の 2 時期の変遷があり、さらにそれぞれ、創建 1 期、2 期、再建 1 期、再建 2・3 期に分けられる（松葉編 2012、松葉 2019）。創建期の金堂は基壇規模は東西 16.8 ×南北 13.8m で、塔の基壇規模は一辺 12m の正方形で、7 世紀第 4 四半期～ 8 世紀第 1 四半期の時期である。講堂は、少し遅れて 8 世紀第 2・3 四半期の年代が与えられ、基壇規模は東西約 18 × 南北約 12m である。金堂・塔と南北軸にずれが見られる。再建期の塔の基壇規模は方 15.3m 前後で、時期は 8 世紀第 2・3 四半期ごろとされる。金堂基壇規模は東西 17.8 ×南北 14.1m で、基壇北辺の中央に幅 2.4m の階段が取りつく。塔・金堂の北側から東西約 16m の基壇状の高まりが確認され、講堂基壇の一部とされている。その時期は 8 世紀第 3・4 四半期～ 9 世紀後葉・10 世紀前葉ごろである。

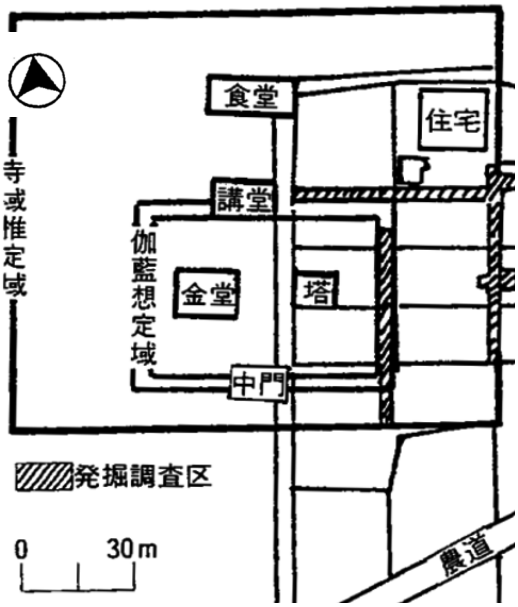
出土遺物には瓦がその多くを占めており、軒丸瓦、軒平瓦それぞれ 3 型式、山田寺式の単弁八弁蓮華文軒丸瓦と三重弧文軒平瓦、素弁十葉蓮華文軒丸瓦と三重弧文軒平瓦、素弁九葉蓮華文軒丸瓦と偏行唐草文軒平瓦の 3 種の組み合わせが考えられている。寺院創建期と考えられる 7 世紀後葉～ 8 世紀半ばごろの年代に収まるため、瓦の使用は初期伽藍に限定され、屋根部材が植物素材に変更された可能性が考えられている。土器類には、灯明皿（8・9 世紀の須恵器・土師器の皿・坏）があり、そのほか再建金堂北側から塑像螺髪が見つかっている。寺院造営の着手は、7 世紀第 4 四半期～ 8 世紀前半（第 1 四半期）で、8 世紀中葉（第Ⅱ・Ⅲ四半期）に整備が行われたと考えられている（松葉編 2012、松葉 2019）。

31. 弓波廃寺　石川県加賀市弓波町に所在する。寺院の存在は江戸時代から知られ、地誌に礎石の存在が記録されている。1970（昭和 45）年に金堂推定地の民家増築の際、瓦堆積層の一部が検出された。塔跡の礎石は忌浪神社の手水鉢として転用されている。幅約 170 × 190 ㎝、高さ約 85 ㎝、中央に 68.5 ㎝× 19 ～ 21 ㎝のほぞ穴をもち、凝灰岩質である。1977、1980（昭和 52、45）年の加賀市教育委員会による調査や、「トウ」「コンドウ」南方に「ナンモン」の地名が伝承などから、寺域は東西約 135m ×南木 115m で、中心伽藍は東西約 80m ×南木約 60m の法起寺式伽藍配置をとる寺院とされている。

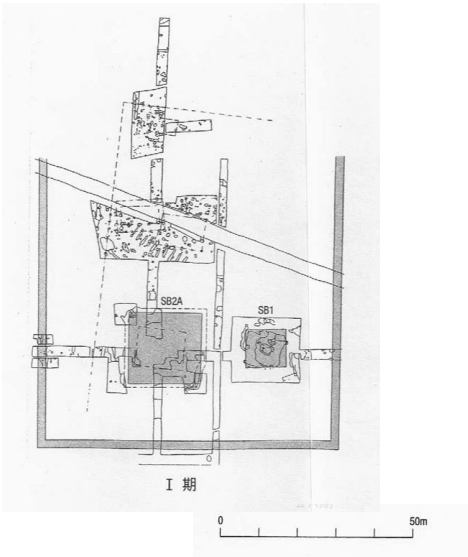


28. 山王廃寺（池田ほか編 2010）

29・30　興道寺廃寺（松葉 2019 をトリミング）



31. 弓波廃寺（小森編 1978 をトリミング）



32. 末松廃寺（文化庁 2009）

図 20　法起寺式伽藍配置寺院集成 5（1/2000）

出土遺物には、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、土師器、須恵器がある。軒丸瓦は複弁八弁蓮華文軒丸瓦、単弁九葉蓮華文、単弁八葉蓮華文の3種、軒平瓦は段顎の四重弧文である。弓波廃寺出土瓦は先述の末松廃寺出土瓦との類似が指摘されている。土器類の年代は7世紀末～8世紀前半、9世紀代に大別される（小森編1978、小森1987）。

32. 末松廃寺　石川県野々市市末松に所在する。1937（昭和12）年に地元有志による発掘調査により、1966、1967（昭和41、42）年には文化庁によって調査が開始された（木立1987a）。遺構は大きく2時期、Ⅰ期（7世紀後半）とⅡ期（8世紀後半～10世紀前半ごろ）に分かれている。ここでは法起寺式をとる創建期の寺院（Ⅰ期）について述べる。

創建当初の遺構としては、塔、金堂と回廊の代用としての土塀が確認された。東西土塀間は心々距離で78.4m、塔と東土塀の心々距離は17.9m、塔と西土塀の距離は60.5mである。金堂は基壇上部が完全に削平され、遺構の検出には至らなかったが、雨落溝と考えられる溝遺構から、基壇規模が東西19.8×南北18.4mに推定されている。金堂の創建時期は塔と同様に7世紀中頃～8世紀初頭とされている。塔は心礎石据え付け穴を中心に東西約8.5m×南北約10.5mの範囲に元の基壇土が残っていた。塔心礎石は224㎝×165㎝を測り、整形された頂部に径58㎝、深さ11㎝のほぞ穴が穿たれている。建物は方3間、一辺10.8mに復元される。塔の年代については、心礎石が地上に据え付けられている特徴から7世紀中頃～8世紀初めごろとされるが、金堂の規模に対して大きすぎるため、報文では8世紀初頭に遅れて建てられた可能性も指摘されている。

出土遺物として、丸瓦、平瓦、軒丸瓦、土器類、銅製品、鉄製品ほか。軒丸瓦は、A系統：単弁六弁蓮華文瓦で外周に二重に鋸歯文がめぐる、B系統：複弁八弁蓮華文瓦に大きく分類される。出土遺物に加賀南部・能美地方産の土器が多くみられることなどから南加賀の財部氏が建立に関与していた可能性が考えられている（文化庁記念物課文化財部門 2009）。

33. 能登国分寺　石川県七尾市国分町、古府（ふるこ）町に所在し、七尾市の海岸から約2.5㎞南に位置する。1971（昭和45）年から本格的な発掘調査が行われ、寺域、塔・金堂・講堂などの主要伽藍が発見された。金堂は削平を多く受けていたものの、2時期の変遷がみられた。基壇規模は東西22.35m×南北15.6m、建物は礎石建物で桁行5間（約15m）×梁行4間（約11m）に復元されている。塔跡は、周辺は「堂之辻」とよばれており、古くから堂宇の存在が想起されていた。ほぼ原位置を保つと考えられる礎石7個と礎石抜き取り穴、根固め石が確認されている。礎石は0.9m×0.6m前後の花崗岩質、平面形が円形を呈する径約1.2mの掘方に根固め石を配してすえられる。基壇は土盛りのみの検出で、規模は不明である。建物は柱間3間×3間、一辺14.5m、柱間1.5mの小規模な塔に復元されている。

講堂は基壇積土、礎石、礎石据付穴、基壇化粧の一部などが検出されている。基壇規模は南北約18.6×東西25mで、桁行7間（25m）×梁行4間（12m）に復元されている。中門は建物基壇は出土していないが、中門に伴うと考えられる柱穴と東西溝が検出されている。回廊は基壇積土、回廊柱列、回廊雨落溝となる溝が検出された。塔・金堂の位置関係から法起寺式伽藍配置が想定されている。

出土遺物として、鬼瓦、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、瓦塔、土器、土製品、塼仏、木製品、貨銭などがある。軒丸・軒平瓦の出土量が少なく、瓦を葺いたとみられる主要堂塔が平安時代後期に破壊され掘立柱建物に変わったためであるとされる。ともに白鳳時代末期の複弁八葉蓮華文軒丸瓦、三重弧文軒平瓦が検出されている。よって、大興寺として創建された年代は7世紀末～8世紀初頭とされ、

843（承和 10）年に国分寺に昇格された[33]と考えられている（七尾市教育委員会文化課 1989、土肥編 1994）。

(5) 山陰道の法起寺式をとる寺院

34. 丹波国分寺　京都府亀岡市千歳町字国分に所在する。1982（昭和 57）年度から亀岡市教育委員会を主体として発掘調査が行われ、塔、金堂、講堂、僧房、中門、回廊の遺構が検出されている（安井 1991、亀岡市文化資料館 2005）。

塔の遺構は古くから認識されていたようである。17 個の礎石が検出されている。中心礎石は 2.7m × 2.5m の花崗岩で部分的に柱座の輪郭がみられる。径は 1.3m と推定されている。塔基壇規模は一辺 16.4m をはかり、高さは 1.5m で、瓦積み基壇とみられている。西側部分では幅 60cm の犬走り、さらに外側に幅 40cm の雨落溝が検出されている。建物の規模は初層一辺 8.9m とされている。

金堂の遺構は、平安時代末頃に建てられ鎌倉時代後半に焼失した東西 19.6m × 15.4m の乱石積み基壇とその下層から東西幅約 25m の瓦積み基壇の南端が検出された。国分尼寺の金堂規模が東西約 27m ×南北 18m であることから同規模程度の規模が想定されている。講堂の遺構はトレンチ調査によって講堂南端と考えられる地覆石列と３か所の掘り方が検出されている。基壇規模は地覆石と堀り方の間が 2.9m であることから南北約 20.9m ×東西 32.8m、建物の規模は梁行 14.9m ×東西 26.8m と推定されている。僧房の遺構は、伽藍中軸線の東西に設定したトレンチによって建物跡基壇北端部と階段が検出され、僧房とされている。法起寺式伽藍配置をとると想定される。

出土した瓦類のうち、創建期の瓦としては、軒丸瓦は複弁八弁蓮華文軒丸瓦、忍冬文軒丸瓦、軒平瓦は均正唐草文軒平瓦が想定されている。唐招提寺の文様と類似することから、創建は奈良時代、8 世紀後半とされる（安井 1991）。

35. 桑寺廃寺　京都府亀岡市に所在する。1983（昭和 58）年から調査が行われ、トレンチ調査で築地状の遺構、掘立柱建物 3 棟、溝の遺構が検出されている。掘立柱建物のうち SB06 は一辺 40 ～ 50 cmの掘形をもち、径約 15 ～ 20 cmの柱痕跡を残す柱穴が東西に 2.4 ～ 3m 間隔に 4 間並び、南北方向に約 1.8m 間隔に 1 間以上並んでいるため、寺院関係の遺構とされる。伽藍配置は法起寺式とされる（三舟 2016a）。古代の遺物は須恵器、瓦類で、「寺」「吏」墨書土器、緑釉陶器が見つかっている。瓦類は、7 世紀後半の年代が想定されるものが多く、飛鳥末の様式を踏襲するもの（素弁八弁八弁蓮華文軒丸瓦）がみられる（森下 1984）。

36. 土師百井廃寺（はじももい）　鳥取県八頭郡八頭町（旧八頭郡郡家町大字土師百井）に所在する。以前より塔基壇が露出していたことから寺院跡として知られていた。1978（昭和 53）年度より発掘調査が行われ、塔、金堂、講堂、中門の遺構が検出された（久保 2017）。

塔は心礎石を中心に 17 個の礎石が原位置を保っており心礎石の柱穴は径 68 cmである。基壇は一辺 14m で、河原石と瓦を立てて並べた基壇外装が確認された。建物は三重塔であったと推定されている。金堂は東南部分で検出された花崗岩自然石の長さ 50 ～ 100m 列が創建当時のものと考えられることなどから、基壇規模は南北 16m ×東西 19m と考えられている。建物は桁行 5 間×梁行 4 間の堂が想定さ

33 『続日本後紀』843（承和 10）年

れている。講堂は4個の礎石が検出された。いずれも原位置を保っていたと考えられている。礎石は円形の造り出し礎石で柱座が径49cmのものが3個、径36cmのものが1個あり、2個は水切り溝をもつ。礎石の配置から桁行8間×梁行4間、29m × 15mとの規模と考えられている。中門は明確な遺構は検出されていないが、伽藍中軸線より9.8m東に4.7mにわたる9個の径30～60cmの花崗岩石の平石列が確認されており、中門基壇にそう雨落溝と考えられている。また寺域を区画したと考えられる築地痕跡が検出され、方1町の寺域が想定されている（清水ほか編1979、吉村編1980）。

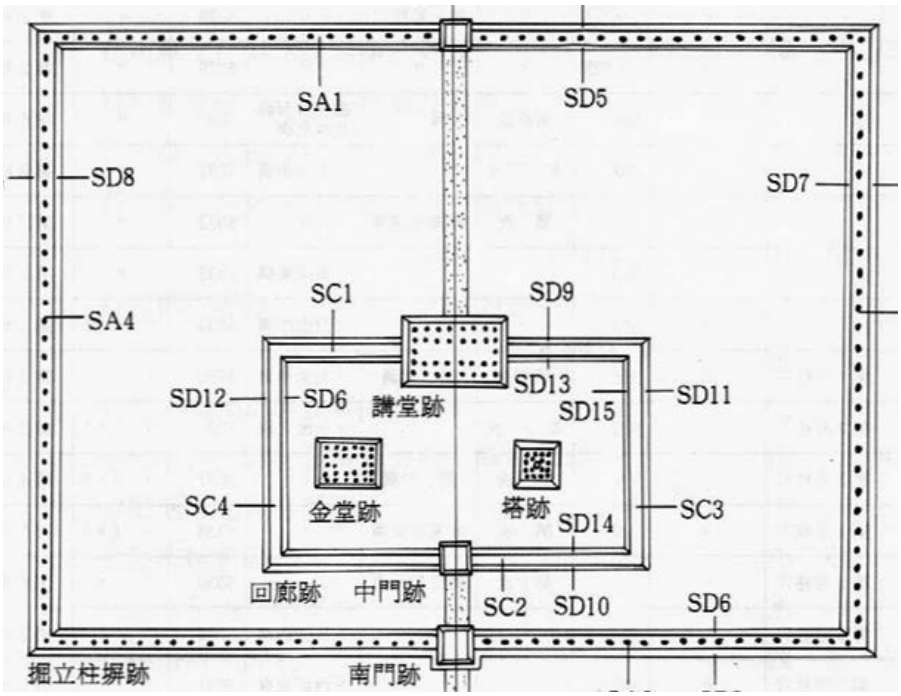
出土遺物には、瓦類、土師器、陶器、塑像、鉄釘などがある。報文では創建瓦はとくに検討されていないが、出土瓦から山田寺式の重圏文縁単弁八弁蓮華文軒丸瓦と三重弧文軒平瓦の組み合わせが想定されている（郡家町教育委員会編1980、久保2017）。瓦のほかに鴟尾片が出土している。寺院の創建は7世紀後半で、9世紀頃まで存続したと考えられている。

37. 岩井廃寺　鳥取県岩美郡岩井に所在する。旧岩井小学校敷地内に塔心礎石が現存し、古くより寺院跡と知られていた。1950（昭和25）年頃の校庭造成工事の際に瓦が多数出土している。1986（昭和61）年から岩井町教育委員会による調査が行われたが、寺院に直接関係する遺構は確認されていない。心礎石は凝灰岩製で長径3.64 ×短径2.36m、方形の柱座や二重孔式など白鳳時代の特徴をもつ。

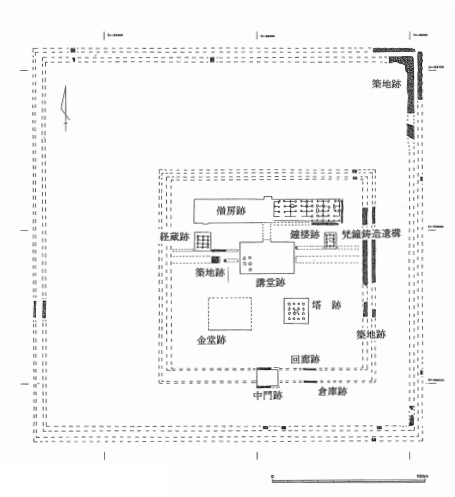
出土遺物には瓦、須恵器、土師器があり、8世紀ごろの土師器や、7世紀後半の単弁12弁蓮華文軒丸瓦、7世紀末の単弁八弁蓮華文軒丸瓦が検出されているほか、山陰系鴟尾も見つかっている（岸本2003）。出土遺物から7世紀後半の創建年代が与えられている。法起寺式伽藍配置をとる可能性が指摘されている（三舟2016a）。

38. 岡益廃寺　鳥取県岩見郡国府町岡益に位置する。「岡益の石塔」とよばれる石塔とその西側に寺院遺構があることが知られており、丘陵上の石塔（岡益の石塔）、西側の金堂と推定される建物が確認されている（川上1966）。1997年（平成9）年からの鳥取県埋蔵文化財センターの調査で金堂の掘り込み地業、講堂遺構（掘立柱建物）、回廊の一部が検出されている。金堂・講堂の基壇規模は不明である。現存する塔基壇は一辺6.6mである。出土遺物には、瓦類、土師器、須恵器、塑像片などがあり、土器類は7世紀末～9世紀ごろのものである。瓦は5種で、最も古い複弁八弁蓮華文軒丸瓦は7世紀末～8世紀初頭の年代が与えられている（岸本2003）。塔の形状やパルメット文から新羅仏国寺の多宝塔との類似が指摘されている（亀田2007）。

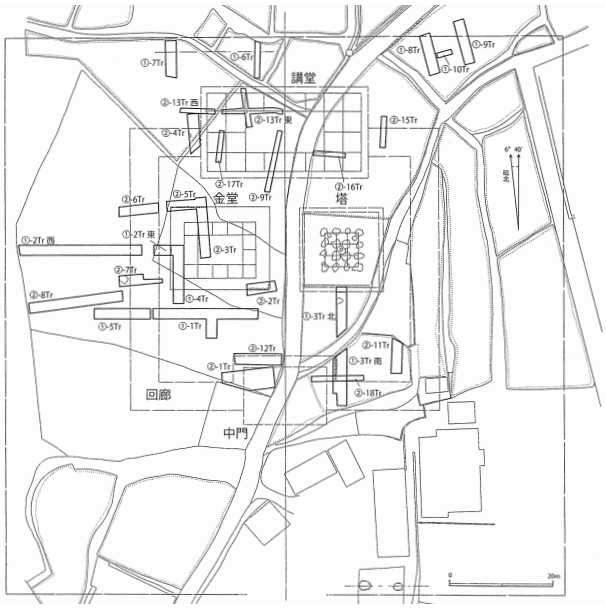
39. 大寺廃寺　鳥取県西伯郡伯耆町（旧岸本町大殿）に所在する。米子平野の南西部日野川左岸の河岸段丘上に位置する。瓦が出土することで古くから寺院跡の存在が知られていたが、1966（昭和41）年から鳥取県教育委員会によって発掘調査が行われ、塔、金堂、講堂、回廊の遺構が検出された（鳥取県教育委員会1967、鳥取県教育委員会社会教育課1966、岸本2003）。寺全体が東を正面としており、塔、金堂を南北に配置した寺院である。塔遺構は、地表面より50 cmほど下がっており、基壇上面が失われているものの基壇地形が残存しており、一辺11.9m（40尺）の基壇に推定されている。礎石は心礎石のみ残っており、南北2.4m ×東西2m、中央に径71 cm×深さ29 cmの柱穴をもちその中に径16 cm×深さ15 cmの舎利孔が穿たれている。金堂は瓦積み基壇をもつ。基壇規模は南北13.66m ×東西11.88mで、周囲には幅40 cmの雨落溝を設け、その外側に玉石を並べている。基壇上面が削平されており、柱位置は不明とされたが、3間× 3間か、5 × 4間（柱間各8尺）の建物が考えられている。講堂は基壇のおおよその規模のみわかっている。基壇南北約28.18m ×東西約17mで、外側に幅1.6mの犬走りを設けていたとされる。回廊は西南隅のみの調査で、残存していた礎石から桁行柱間2.95m



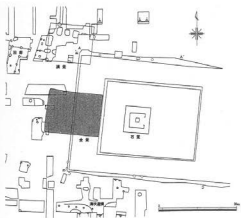
33. 能登国分寺（善端ほか 2000 をトリミング）



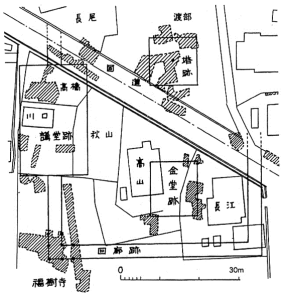
34. 丹波国分寺（亀岡市文化資料館 2005 をトリミング）



36. 土師百井廃寺（久保 2017）



38. 岡益廃寺
（岸本 2003）



39. 大寺廃寺
（鳥取県教育委員会 1967）

図 21　法起寺式伽藍配置寺院集成 6（1/2000）

×梁行 3.10m と推定されている。伽藍自体の方位が東を正面とし、塔と金堂が南北に並ぶ変則的な法起寺式伽藍配置をとる。

遺物としては、石製鴟尾、塑像 、瓦類（軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、塼など）が確認されている。創建瓦は、軒丸瓦Ⅰ類の複弁八弁蓮華文軒丸瓦と軒平瓦Ⅰ類の重弧文軒平瓦の組み合わせで、存続年代は 7 世紀後半から 9 世紀と考えられている（鳥取県教育委員会社会教育課 1966）。なお、大寺廃寺は西伯耆に位置し、観世音寺式をとる寺院である大御堂廃寺（東伯耆）とは約 40km 離れている。また、大寺廃寺、大原廃寺で出土している鴟尾は縦帯の前面に沈線で鱗状の文様を配置することに特徴があり、「山陰型鴟尾」とよばれ、兵庫県から島根県にかけてみられることが指摘されている（妹尾 2011）。

40. 大原廃寺　鳥取県倉吉市大原字亀井谷口、寺の谷、大門谷口に所在する。旧日下郷にあたるとされる。古くより寺跡の伝説があり、寺跡と考えられていた。1985（昭和 60）年から倉吉市教育委員会による発掘調査が行われた。1998（平成 10）年度までに確認された遺構としては、塔、金堂、講堂、中世の礎石建物がある（岸本 2003）。

塔の遺構は基壇北辺と、北東辺石列、心礎石が確認されている。基壇規模は一辺約 11m に想定されているが、基壇上面が削平されている。塔心礎石は原位置を保っていないが、2.9m × 2.8m の規模で中央に径 65 cmの柱穴をもつ。金堂基壇は、塔跡の西側 4.5m の地点にある。基壇上面が失われており、東西 17m で南北の規模は不明である。鳥取県内の他寺院の金堂基壇との比較から東西 17m ×南北 14.8m で 5 間× 4 間の建物が復元されている。講堂遺構として、桁行 7 間×梁行 4 間の四面庇付掘立柱建物跡が検出されている。建物の規模は、身舎部分が桁行約 10.5m ×梁行 5.6m で、庇部分を含め桁行 14.3m ×梁行 9.6m である。寺域は地形などから約 76m 四方と推定されており、礎石は出土していないものの根石状の集石が見つかっており、礎石建物に建て替えられた可能性がある。

出土遺物には瓦類（軒丸瓦 7 種、軒平瓦 4 種など）、須恵器、土師器、塼仏、玉などがある。創建瓦は複弁八弁蓮華文軒丸瓦（軒丸瓦Ⅰ類）と三重弧文軒平瓦（軒平瓦Ⅰ類）の組み合わせである。創建年代は、講堂の整地層から 7 世紀後葉の須恵器が出土したことなどから、7 世紀末頃と考えられている。伽藍配置は、東に塔、西に金堂、金堂の真北に講堂という変則的な法起寺式である（加藤ほか編 1999）。

41. 下府廃寺　島根県浜田市に所在し、国分寺から 1.5 kmと近接して位置する。1990（平成元）年度から 4 次にわたる調査が浜田市教育委員会によって実施され金堂、塔の遺構が検出されている（原編 1990、1993）。金堂基壇は、東西 15.22 ×南北 11.96m で、基壇南縁は確認されていない。塔は、基壇上面に心礎石と四天柱、側柱の礎石が 1 個残されており、基壇の一辺は東西 13.26m で、建物の一辺は 7.2m に推定されている。金堂・塔は、光背の丘陵に接近させており北側には講堂を配置する空間がなく、講堂が配されない可能性のほか、別の場所に設けられていた可能性も指摘されている。

出土遺物には瓦類、須恵器類のほか鴟尾がある。創建瓦は、単弁十六葉蓮華文軒平瓦（ⅢＡ類）または単弁十二葉蓮華文軒丸瓦（ⅠＤ類）と鋸歯文をもち珠文をめぐらす軒平瓦（ⅠＡ類）の組み合わせで、白鳳時代末に位置付けられている。このほか、8 世紀中葉に『続日本紀』に名がみえる[34]岩見国分寺・国分尼寺創建瓦もみられる（原編 1993）。

34　天平勝宝 8（756）年 12 月巳亥項

(6) 山陽道の法起寺式をとる古代寺院

42. 大海(だいかい)廃寺　岡山県美作市（旧英多郡作東町）に所在する。1987（昭和 62）年から圃場整備事業に伴って岡山県教育委員会、作東町文化財保護委員会によって発掘調査が行われ、金堂、塔、講堂、中門、南門、築地、塀などの遺構が検出された（正岡･岡本編 1978、1979)。出土遺物には多量の瓦類、須恵器、土師器、硯、水煙などがある。金堂は東西 3 間×南北 2 間分の礎石が検出され、いずれも原位置をとどめていたが、基壇の削平がみられることから、規模は不明ながら桁行 5 間×梁行 2 間の建物に復元されている。塔は、一辺 10.8m の基壇が検出され、心礎石は原位置を保っている。心礎石は砂岩製、東西 1.7 ×南北 1.1m、厚さ 60 ㎝、上面中央に直径 21 ㎝×深さ 13 ㎝の円形の舎利孔をもつ。

寺域は南北約 130m ×東西約 105m と推定されている。7 世紀第 3 四半期ごろに造営が開始され、7 世紀末には金堂を中心とする寺院として完成し、8 世紀後半ごろに大規模な改修が行われ塔、講堂を備えた本格的な寺院となり、9 世紀ごろに廃絶したと考えられている。美作の白鳳Ⅰ期に編年される軒丸瓦Ⅰ類（素弁八弁蓮華文）が造営開始期の瓦と考えられており、軒平瓦第 1 類の顎面施文軒平瓦は軒丸瓦Ⅰ類よりやや下る白鳳時代後期の年代が与えられている（湊・亀田 2006)。軒丸瓦 1 類は、奈良県法起寺、大阪府高井田廃寺などに類似している（湊 1992)。

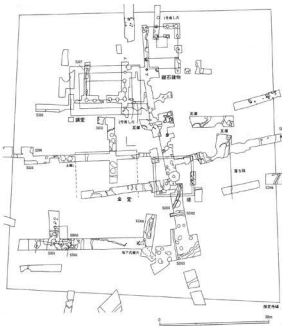
大海廃寺の位置する英田郡には 5 か寺が確認されている。大海廃寺の北北東約 2 ㎞には大原町川戸 2 号墳があり、英田郡最有力の古墳と考えられていることから、古墳時代以来の首長の氏寺という性格をもっていた可能性が指摘されている（湊 1992)。

43. 備中国分寺　岡山県総社市上林に所在する。岡山県教育委員会により 1971（昭和 46）年に調査され、南門、中門、築地などの遺構が検出されている。伽藍中心部は現国分寺の境内であるため未調査であり主要堂塔の遺構は検出されていない。中門の東約 50m の寺域東南隅に掘立柱建物があり、これを塔とする場合には、周辺の地形などから法起寺式伽藍配置をとると推定されている。創建瓦は、単弁八葉蓮華文軒丸瓦と均整唐草文軒平瓦の組み合わせで、8 世紀中葉頃に比定される（湊・亀田 2006)。

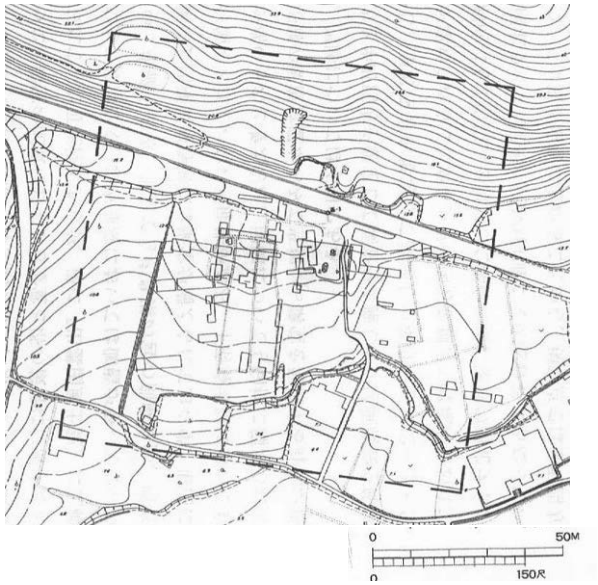
44. 寺町廃寺　広島県三次市向江田町に所在。昭和 53 (1978) 年から寺町地区の圃場整備計画に伴い、三次市教育委員会によって 1979 年から 1983 年にかけて発掘調査が行われた。塔、金堂、講堂、回廊などの遺構が確認されている。塔の遺構は塼、瓦積み基壇約 11m 四方、金堂の遺構は塼、瓦積み基壇 15.7m × 13.4m、講堂の遺構は、塼、石積基壇 25.1m × 14.7m。出土遺物としては、瓦類、搏、三彩陶器、鴟尾などが出土している。創建瓦は素弁八弁蓮華文軒丸瓦（S 類）で、これに組み合わせられる明確な軒平瓦は出土していない。素弁蓮華文の採用された創建年代は 7 世紀後半と考えられている（鹿見編 1980、1981、1982)。寺域は方 100m と考えられている（湊・亀田 2006)。瓦は水切り瓦とよばれる瓦であることに特徴がある。素弁八弁蓮華文軒丸瓦は岡山県の栢寺廃寺出土例と同范であり、范傷などから、栢寺廃寺から寺町廃寺への流れが確認されている。

また､『日本霊異記』上巻第七「亀の命を購いて放生し現報を得て亀に助けらえし縁」にみえる「三谷寺」に推定されていることが知られる。備後三谷郡の大領の先祖が、天智 2 年の白村江の戦いの際に誓願を立て、その後百済から招いた僧侶弘済によって三谷寺が創建されたという記述である。

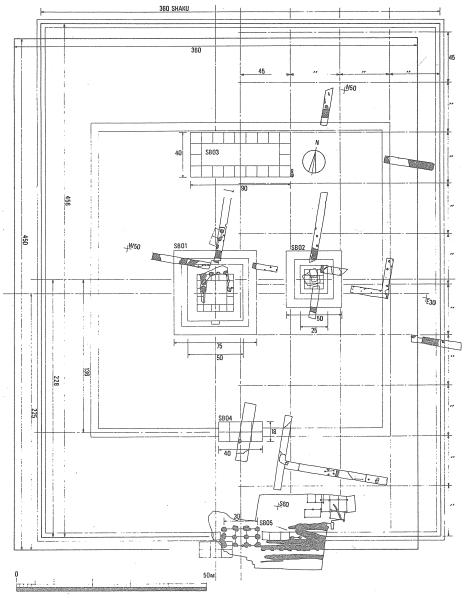
45. 備後上山手廃寺　広島県三次市に所在し、寺町廃寺の南西約 1.1Km に位置する。1976（昭和 51）年度から始められた圃場整備に伴って広島県教育委員会による調査が行われ、金堂、講堂の遺構が検



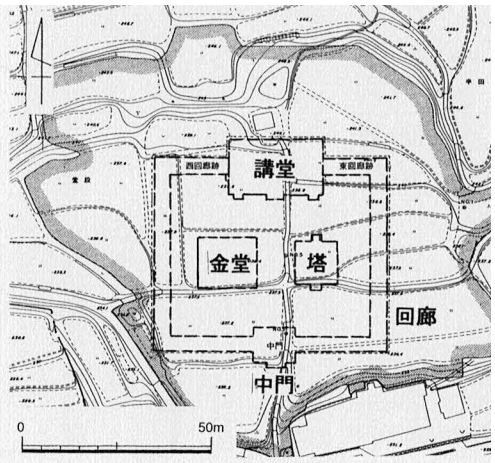
40. 大原廃寺（岸本 2003）



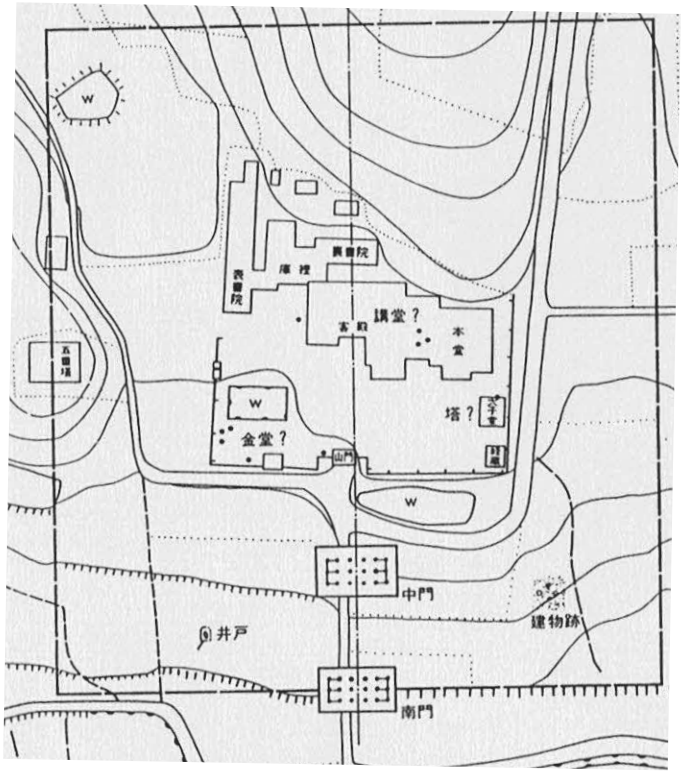
41. 下府廃寺（原編 1993 をトリミング）



42. 大海廃寺（正岡・岡本編 1979）

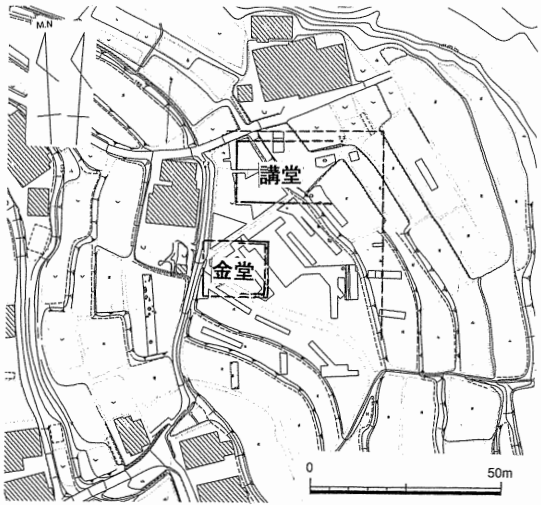


44. 寺町廃寺（湊・亀田 2006）

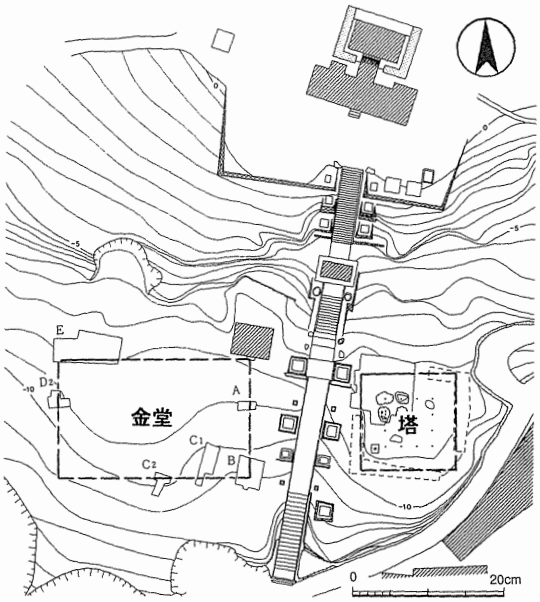


43. 備中国分寺（湊・亀田 2006）

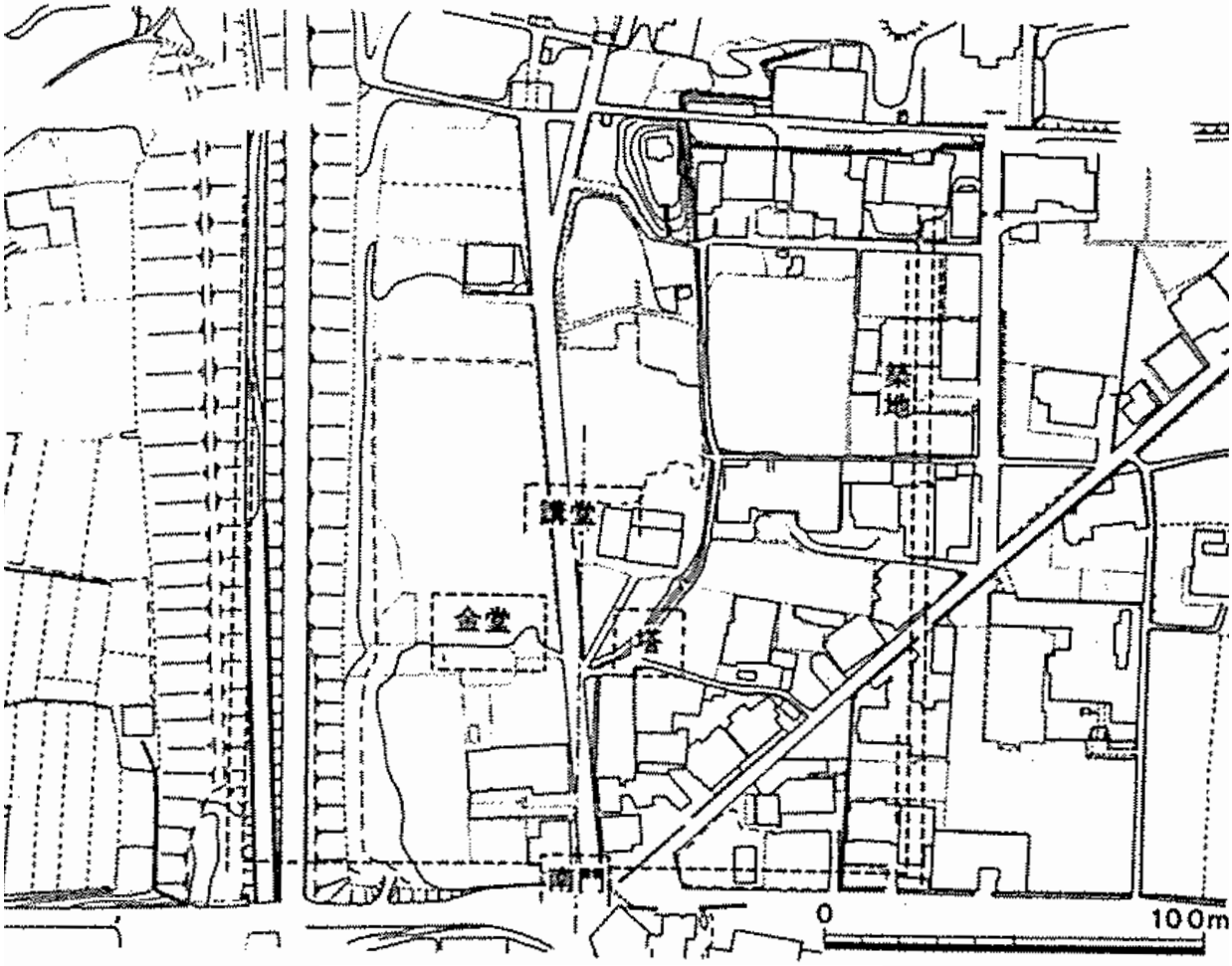
図 22　法起寺式伽藍配置寺院集成 7（1/2000）



45. 備後上山手廃寺（湊・亀田 2006）



46. 備後宮の前廃寺（湊・亀田 2006）



47. 備後国分寺（湊・亀田 2006）

図 23　法起寺式伽藍配置寺院集成 8（縮尺不同）

出された（広島県教育委員会編 1979、桑原編 1980）。金堂は 14.9m × 17m の下成乱石積基壇、上成塼、瓦積み基壇が 13.35m × 15.2m、講堂は 16.0 × 25 ～ 28m と推測される建物跡が確認された（湊・亀田 2006）。塔の遺構は確認されておらず、塔をもたない寺院であった可能性が考えられている。遺物としては、瓦類、土師器などの土器類、異形土器、硯、鉄釘などが検出された。軒丸瓦は複弁八弁蓮華文軒丸瓦で、いわゆる水切り瓦である。寺町廃寺の FIa 式に比定できることが指摘されている（桑原編 1980）。報告書では、特に創建瓦について記載されていない。寺町廃寺と近接し、瓦にも共通点があることなどから、寺町廃寺と造営主体が同族である可能性や、のちの国分尼寺も塔をもたないことから尼寺として建てられた可能性も考えられており（湊・亀田 2006）、本論では法起寺式の可能性をもつものとして扱っている。創建年代は 7 世紀末とされている。

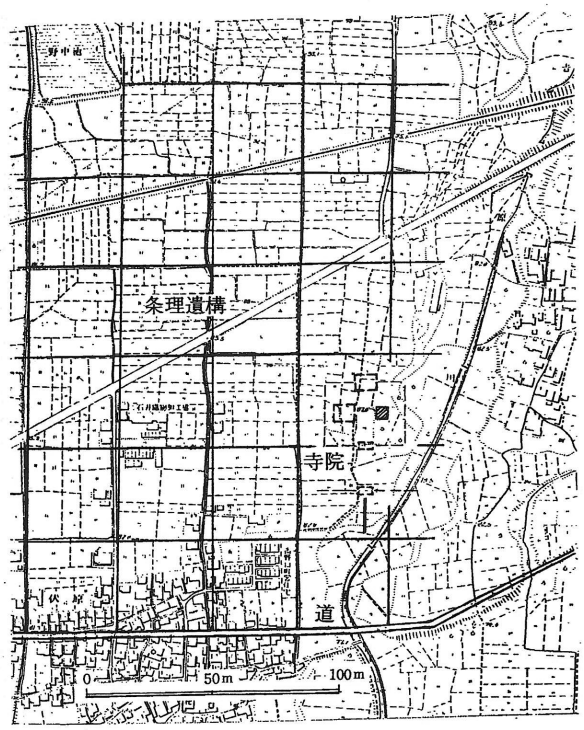
46. 備後宮の前廃寺　広島県福山市に所在し、生土八幡神社の参道付近に位置する。戦前に早稲田大学などによる調査を経て、1950、1951（昭和 25、26）年に広島県史跡調査委員会によって発掘調査が行われた。金堂、塔の遺構が検出されている。講堂・回廊などは確認されておらず、周辺の地形などから講堂は立てられなかった可能性も推測されている（湊・亀田 2006）。出土遺物には瓦類、土師器、須恵器などの土器類、鉄製品類、塼仏が一体出土している。出土瓦のうち最も古い型式である複弁八弁蓮華文軒丸瓦（第一種Ⅲ類）、唐草文軒平瓦（第一種Ⅲ類）の組み合わせが創建瓦と考えられている。創建年代は奈良時代前期末～後期（7 世紀後半以降）と考えられている（島巡編 1977）。一帯は、創建当時は海岸線に近く、交通の要衝であったと推測されている。

47. 備後国分寺　岡山県神辺町御領に所在する。広島県教育委員会により 1972 ～ 1976（昭和 47 ～ 51）年に調査が実施された。伽藍中軸線は真北に対して、10 度 52 分西偏する。金堂の基壇規模は東西 29.4m ×南北 20m である。塔は金堂の南東、方 18m の基壇に復元される。講堂は寺域のほぼ中心に位置しており、東西 30m の基壇が見つかっている。建物の東西規模は 7 間と推定された。また、寺域を区画する東面築地が検出されており、古代山陽道は南門に接し、東西に通過していたと推定されている。出土遺物には、瓦類、須恵器、土師器、緑釉陶器などがある。軒丸瓦は重圏文のものが主体をなし、創建期のものと考えられるため寺院の創建は 8 世紀中葉頃とされている（湊・亀田 2006）。

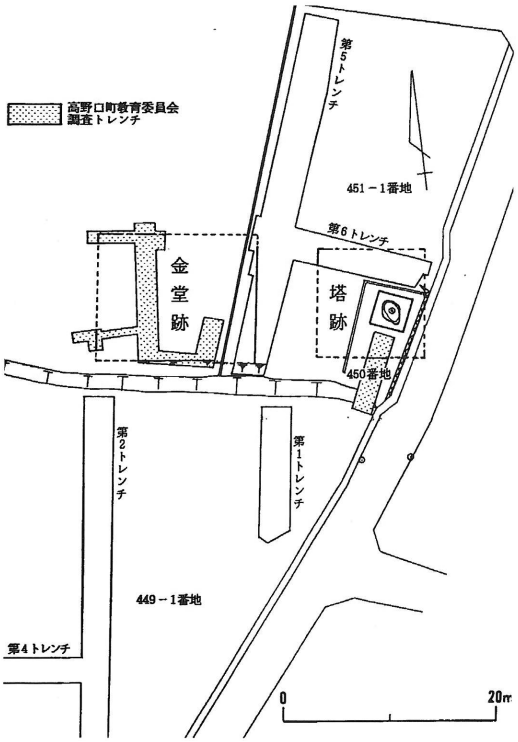
(7) 南海道の法起寺式をとる寺院

48. 神野々（このの）廃寺　和歌山県橋本市神野々に所在する。1976（昭和 51）年に発掘調査が行われた（久貝 1977、橋本市教育委員会 1977、松田編 1983）。塔基壇と塔心礎石が現存している。他の礎石は移動、散逸しており原位置をとどめていない。心礎石は長さ 2.86m ×幅 1.35m の緑泥片岩の巨石を東西方向の横長に据えていて、中央部に径 86cm ×深さ 9.3cm の一重孔を穿っている。塔基壇は一辺約 12m の規模と考えられており、心礎石から 6.5m の地点に河原石を乱石積みにした基壇の一部が残っている。基壇は版築されている。塔のほかの堂宇は確認されなかったが、周囲の地形から法起寺式の伽藍配置が想定されている。遺物には、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、塼仏などがある。創建瓦は出土した中で最も古い川原寺式の複弁八弁蓮華文軒丸瓦（Ⅰ・Ⅱ類）であると考えられ、組み合わせられる軒平瓦は検出されていない。川原寺式の軒丸瓦が出土していることから、7 世紀後半～奈良時代後半の寺院であると考えられている。名古曽廃寺と同范の軒丸瓦が出土している。寺域は不明である（橋本市教育委員会 1977）。

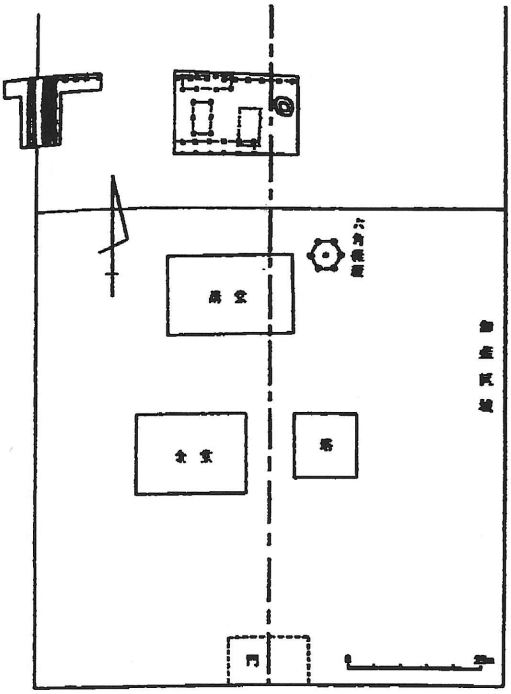
49. 名古曽廃寺　和歌山県橋本市（旧伊都郡高野口町）に所在する。俗に「護摩堂」とよばれている



48. 神野々廃寺（小谷 2002）

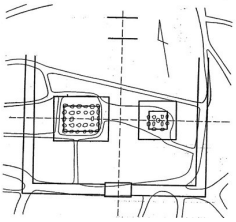


49. 名古曽廃寺（村田・佐伯編 1991）

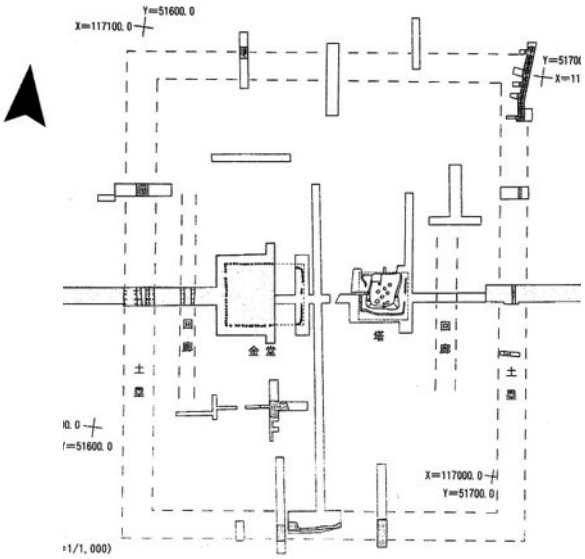


50. 佐野廃寺（石松 2007b）

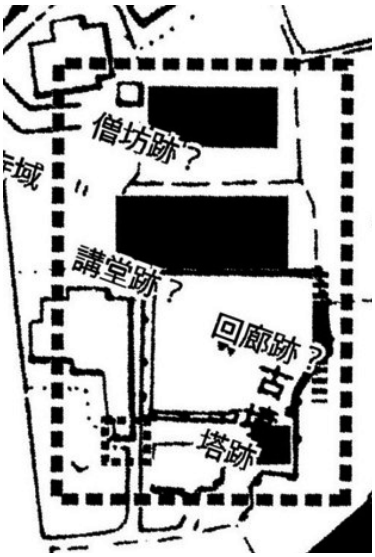
図 24　法起寺式伽藍配置寺院集成 9（縮尺不同）



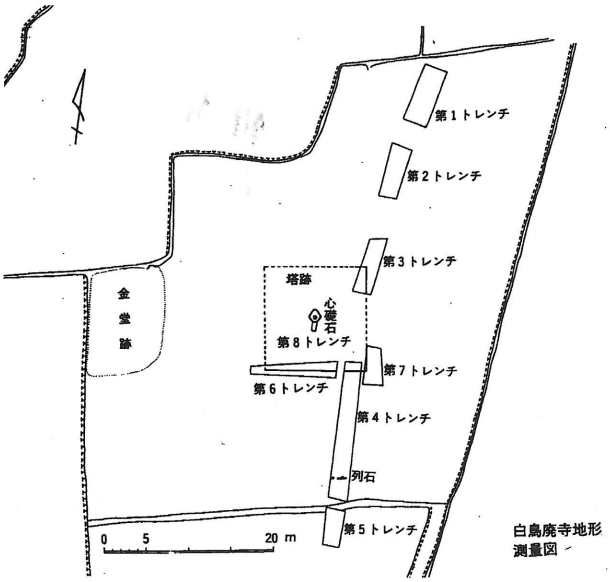
51. 石井廃寺（三木ほか 1962）



52. 郡里廃寺（木本 2006）



54. 開法寺（香川県埋蔵文化財センター 2011）



53. 白鳥廃寺（香川県教育委員会 1983）

図 25　法起寺式伽藍配置寺院集成 10（1/2000）

。1995（昭和 30）年ごろ、付近の道路を改修中に瓦が発見され、古代寺院跡であると知られるようになった。1989（平成元）年に高野口町教育委員会、1991（平成 3）年に和歌山県教育委員会により発掘調査が行われ、塔と金堂の遺構が検出された。法起寺式伽藍配置に推定されている（和歌山県教育委員会 1991）。塔心礎石は緑泥片岩で長さ 2.23m ×幅 1.33m で、中央に二段の柱座孔をもつ。孔の外径は 59cm、深さ 7cm で、その中心に径 22.5cm ×深さ 14cm の内孔をもつ。創建瓦は出土状況から、金堂が川原寺式の複弁八弁蓮華文軒丸瓦と三重弧文軒平瓦の組み合わせで、塔が本薬師寺式のセットである。出土した佐野廃寺と同范の軒丸瓦、軒平瓦から、佐野廃寺と同時期の 7 世紀後半の創建年代が考えられている（小谷 2002）。

50. 佐野（狭屋）廃寺　和歌山県伊都郡かつらぎ町に所在する。寺域は南北約 540 尺×東西約 270 尺と推定されている。金堂、塔、講堂、中門の遺構が検出されている（笠井 1977、藤井 1977、和歌山県文化財研究会 1978）。金堂は、基壇が削平されていたが、雨落溝などから東西約 15m ×南北 13.5m の規模に復元されており、5 間× 4 間の柱間をもつ南面する建物と考えられている。塔は金堂から約 9m 東方に位置し、一辺約 12m で基壇は版築されていた。講堂は、金堂と塔の北側に位置し、中心がやや西寄りである。基壇の南面、東西面が確認され、規模は東西約 24m ×南北 15m 前後に推定されている。柱間数は不明だが、正面 7 間×奥行 4 間の構造と考えられている。また、金堂基壇中心から約 34m 南の地点で幅 1.45m ×深さ 0.2m の東西方向の雨落溝の一部が検出され、南門に伴うものと推定されている。出土遺物として、軒丸瓦、軒平瓦、鬼瓦、鴟尾、塼仏、須恵器などが検出されている。

また、『日本霊異記』中巻第十一話にみられる「桑原狭屋寺」は佐野廃寺をさすといわれており、「文忌寸」とその妻上毛野公大椅も同話に登場する。文忌寸は伊都郡内で主要ポストをしめた一族で、上毛野公大椅は渡来系氏族の田辺史が改姓したものであることから、佐野廃寺の造営氏族は郡司級の豪族の文忌寸と考えられている。また、神野々廃寺、名古曽廃寺の造営氏族も郡内に居住していた渡来系氏族であった可能性が考えられている（小谷 2002）。

和歌山県紀ノ川流域の寺院の出土瓦には大和と関係が深い瓦当文様が用いられていることが知られている。佐野廃寺の金堂周辺から川原寺式の複弁八弁蓮華文軒丸瓦（A 類）と三重弧文軒平瓦の組み合わせ、塔周辺から本薬師寺式軒瓦、巨勢寺式軒瓦が出土している。川原寺式軒丸瓦には同じ系統として B 類に分類されるものがあり、紀ノ川流域以南に分布していることから、川原寺式の細かい別型式として「佐野廃寺式」と呼ばれている。名古曽廃寺からも川原寺式の複弁八弁蓮華文軒丸瓦が出土しており創建瓦と考えられているので、名古曽廃寺の創建年代は佐野廃寺とほぼ同時期とされている。佐野廃寺から西に約 8 kmのところに名古曽廃寺、そこから東に約 1 kmのところに神野々廃寺が位置する。神野々廃寺出土の川原寺式軒丸瓦（Ⅰ C 類）は伊都郡に分布する川原寺式軒丸瓦のなかでもっとも川原寺創建瓦に酷似しており、神野々廃寺の創建年代は 670 年前後に想定されている（小谷 2002）。紀伊（和歌山県所在）の法起寺式をとる 3 か寺は、ほぼ同時期に創建されており、出土瓦にもそれぞれ同范関係がみられる。創建瓦について金堂は川原寺系瓦、塔は本薬師寺系瓦を用いていることも 3 か寺の共通点である。

51. 石井廃寺　徳島県名西郡石井町に所在する。1957 ～ 1959（昭和 32 ～ 34）年に発掘調査が行われ、塔と金堂の遺構が検出された。塔の遺構は、心礎石とそれを取り囲む 10 個の礎石、基壇の一部が現存している。心礎石は南北 94 ×東西 66.6 cmである。建物は 3 間× 3 間で、規模は方 5.38m（17.8 尺）である。三重塔に推定されている。金堂の遺構は、塔の心礎石から 21.2m の距離にある。礎石 28 個

全て現位置を保って残っており、5 × 4 間で、柱間はすべて 1.88m である。金堂建物の規模は 9.4m × 7.5m で、基壇の規模は雨落溝から東西 14.0 × 12.12m に復元されている。塔、金堂ともに天平尺を用いたと考えられている。伽藍配置は伽藍全体が南面していると想定されており、法起寺式をとることが通説になっている。出土遺物としては軒丸瓦、軒平瓦鬼瓦、須恵器、土師器などが検出されているが報告書では創建瓦について言及はされていない（三木ほか編 1962）。7 世紀後半～ 8 世紀前半の創建が推定されている（岡山 2000、2003）。

52. 郡里廃寺　徳島県美馬市美馬町に所在する。1967、1968（昭和 42、43）年に徳島県教育委員会、美馬町教育委員会によって遺跡確認の調査が行われ、2005（平成 17）年に史跡整備に伴い再び発掘調査が行われた。塔、金堂、回廊の遺構が検出されている（木本 2006、木本編 2007、2008、2009、2011）。塔は、基壇の一部（東西約 7m ×南北約 10m）が残存しており、掘り込み地業から基壇規模は一辺 12.1m（40 尺）に復元されている。基壇上面では心礎石抜き取り穴、礎石抜き取り穴が検出されており、礎石は、検出された二つのうち一つが原位置を保っていた。初重の一辺は約 6.42m（21.2 尺）に復元されている。また、心礎石が 2 面検出されていることから塔は一度倒壊したのち再建されたと考えられている。

金堂の遺構は基壇が検出されず、金堂推定値のトレンチ調査によって、礎石抜き取り穴にたまったと考えられる瓦片の堆積、基壇築成土の層、わずかに検出された溝などから、東西 15m ×南北約 12m の基壇規模が推定されている。回廊の遺構は、金堂の西方約 7m の地点で、幅約 3.5m で南北に帯状にのびる石敷、塔跡の東方約 8m の地点で幅約 5m の南北の帯状の石敷が検出されており、位置関係から東西回廊にあたる建物であると考えられている。寺域は石敷、土塁遺構から東西 94m ×南北 120m に想定されている。伽藍配置は塔と金堂の位置から法起寺式と想定されているが、講堂の遺構は検出されていない。そのため講堂のない伽藍配置であった可能性も考えられている。

主な出土遺物は瓦、須恵器、土師器である。軒平瓦の出土量が 1 点であり極端に少ない。また、徳島県内で唯一鴟尾が出土している。白鳳期に創建され、平安時代ごろまで存続した寺院であると考えられている。

阿波国のなかでも特に古い寺院が郡里廃寺である。郡里廃寺の川原寺系の複弁蓮華文軒丸瓦はかなり退化した形式となっていることが指摘されている（石松 2007b）。

53. 白鳥廃寺　香川県東かがわ市（旧大川郡白鳥町）に所在する。1968（昭和 43）年度に白鳥町教育委員会によって発掘調査が行われ、塔、列石の遺構が検出されている（森下 1996）。塔は、心礎石が検出された。心礎石は長径約 1.6m ×短径約 1.4m で、上面 1.2m 四方の面が整えられ、その中央に直径 40cm ×深さ 8cm の円形の柱座が設けられている。心礎石のまわりの土には高さ約 40cm の版築が行われた跡がみられ、土壇の高さは 1.2m 前後であったと推定されている。土壇の規模が一辺約 12.3m であることから基壇の規模は方 41 尺前後と考えられている。1982（昭和 57）年度年報の地形測量図に金堂が想定されており、法起寺式伽藍配置をとる。寺域は方一町に推定されている。出土瓦から創建は白鳳期で、奈良時代後期には伽藍が整備され最盛期を迎え、平安後期に火災で廃寺となったと考えられている。創建期の瓦には法隆寺式、奈良時代後期の瓦には平城宮式の影響がみられ、中央との密接な関係が想定される（真鍋・西岡編 1983）。

54. 開法寺跡　香川県坂出市に所在する。讃岐国府域の南西角付近に位置しており、平安時代に讃岐国司として在任した菅原道真の『菅家文草』に登場する「開法寺」に相当するものとして取り扱われ

ている。古くから塔跡の土壇が注目されており、1970（昭和 45）年に坂出市教育委員会によって発掘調査が行われた。

塔の遺構は周囲の水田より 1m ほど高くつくられており、西側で凝灰岩切石による壇上積の基壇約 6m が検出されている。礎石は心礎石を中心に四天柱礎石、側柱礎石ともに 17 個が揃っている。心礎石は東西 2.15m ×南北 1.25m のほぼ方形で、二重孔式である。柱座は径 87cm ×深さ 8cm で、中央に径 4cm ×深さ 15.5cm の穴が穿かれている。心礎石に接するように四天柱 4 個、その外側に側柱 12 個が並べられている。塔基壇は約 11.2m（37.7 尺）四方で、高さ約 80cm となり、側柱礎石は 5.8m（20 尺）四方で、塔は三重塔であったと推定されている。塔の南、北から礎石、西から瓦の包含層が金堂に比定されており、法起寺式の伽藍配置が想定されている[35]（川畑・松本 1977）。2003 年の調査では、塔基壇下から西に約 5m70cm の地点で南北に幅約 3m の瓦だまりが検出され、推定伽藍の中心軸にほぼおさまることから、寺院遺構に関連する瓦だまりと考えられている（坂出市教育委員会 2004）。

出土遺物には、素縁素弁八葉蓮華文軒丸瓦、複弁八弁蓮華文軒丸瓦などの軒丸瓦、偏行唐草文軒平瓦、重弧文軒平瓦などの軒平瓦がある。素縁素弁蓮華文軒丸瓦の型式から白鳳時代の創建が考えられている（藤井 1978、宮崎 2010）。素弁瓦は、高句麗系瓦の系譜に入り、蘇我氏または秦氏が関わると考えられており、畿内主流派の瓦の変形例としてとらえられている（亀田 1995）。開法寺跡は奈良時代には讃岐国府に付属する寺院として機能したと考えられており、奈良時代の出土瓦には讃岐国分寺、国分尼寺の軒丸瓦と同范のものがみられる（宮崎 2010、宮崎編 2011、渡部 2002）。

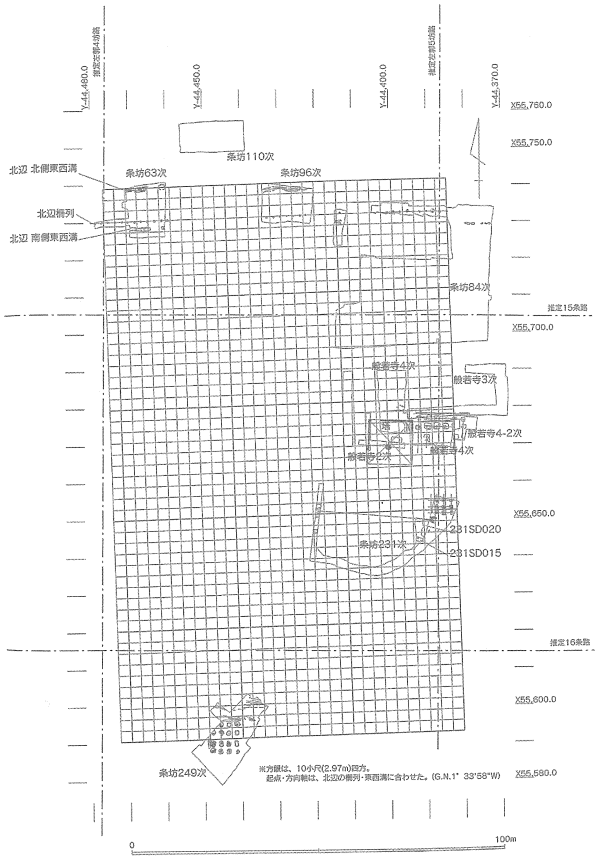
（8）西海道の法起寺式をとる寺院

55. 般若寺　福岡県太宰府市南（旧大字南字般若寺）に所在する。大宰府条坊左郭 14 条 4 坊に位置する。1979（昭和 54）年からの発掘調査によって、塔は一辺 11.9m（一尺 29.75 cmで 40 尺）の規模の瓦積み基壇をもつことがわかっている（九州歴史資料館 1980、1988）。出土遺物には、軒丸瓦（5 型式）、軒平瓦（3 型式 5 種類）、道具瓦、丸瓦・平瓦、須恵器、土師器、金属器などがある。創建瓦の組み合わせは特に言及されていないが、軒丸瓦 1 型式（複弁八弁蓮華文）、軒平瓦 1 型式（偏行唐草文）の出土量が多い。ここでは、この組み合わせを創建瓦として扱う。出土瓦、土器から塔の創建年代は、7 世紀末～ 8 世紀初頭と考えられている。また 7 世紀末～奈良時代に入り定額寺に列せられている。近年まで残っていた基壇、地名、瓦の出土地から法起寺式をとると考えられている。

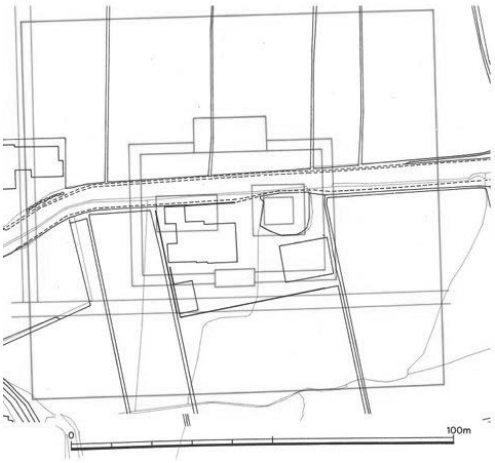
56. 大分（だいぶ）廃寺　福岡県飯塚市大分に位置する。地元では古くから廃寺として知られており、1991（平成 3）～ 1995（平成 7）年度まで行われた発掘調査によって、塔の遺構が検出された（横田編 1997）。塔の遺構は、17 個全ての礎石が検出されたが、原位置を保っているものは、13 個であった。柱間は四天柱、側柱ともに礎石の心々距離 2.35m であることから、建物の規模は 7.05m（桁行）× 7.05m（梁行）で、約 7m（24 尺）四方（一尺 0.294m）に復元されている。心礎石は 2 段の造り出しをもち、心柱のくり込みから 2 本の排水溝を設けたつくりになっている。基壇は掘り込み地業で、規模は約 12.75m 四方であるが、整数値として一尺 0.294m × 4 ＝ 12.936m（4 尺四方）、高さは 1.2m（4 尺）前後と考えられている。現状の地形や溝などから法起寺式伽藍配置が想定されている。

遺物には、瓦類（軒丸瓦 4 型式 6 種類、軒平瓦 6 型式、鬼瓦、丸瓦、平瓦）、土器類（須恵器、中

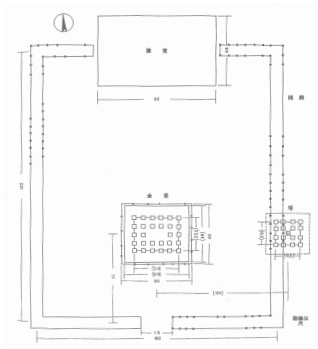
35　石松 2007b「南海道の古代寺院」『天武・持統朝の寺院造営―西日本―』では、法起寺式に分類されていない。



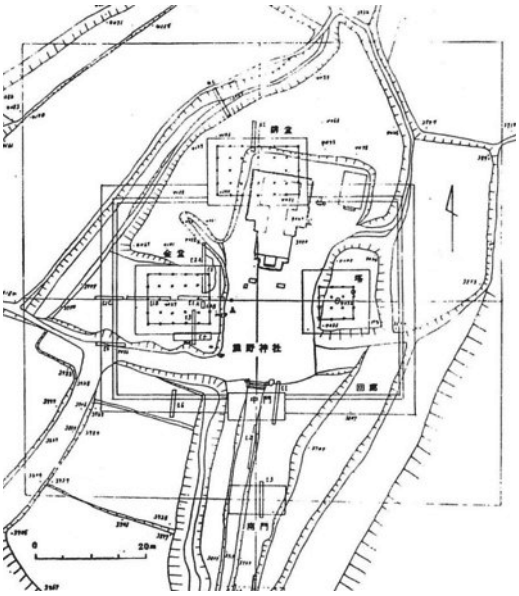
55. 般若寺（太宰府市教育委員会 2007）



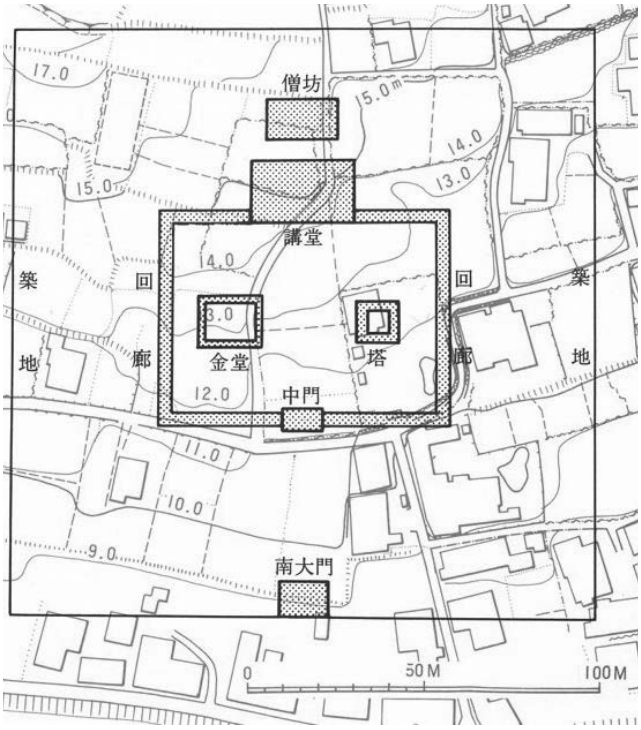
56. 大分廃寺（横田編 1997）



57. 豊前天台寺（横田編 1990）



58. 肥後稲佐廃寺（松本・高野 1977）



59. 興善寺廃寺（江本 1980）

図 26　法起寺式伽藍配置寺院集成 11（縮尺不同）

国製輸入陶磁器、日本製陶磁器、土師器)、鋳造関連遺物などがある。創建瓦は軒丸瓦Ⅱ類（天台寺跡Ⅴ類、複弁八弁蓮華文で、いわゆる新羅系軒丸瓦）と軒平瓦Ⅲ類（垂水廃寺出土軒平瓦Ⅱ類と同范、偏行唐草文）を主流とした新羅系軒瓦の組み合わせと推定されており、創建年代として、7 世紀末～8 世紀初めの年代が考えられている。

57. 豊前天台寺　上伊田廃寺ともよばれている。福岡県田川市伊田に所在する。1990（平成元）年の発掘調査によって、金堂、講堂、塔、回廊の遺構が検出、確認された（横田編 1990)。金堂は、礎石 27 個が検出されたが、いずれも動かされていた。金堂造営の際の足場穴と考えられる柱穴列が、礎石を囲む形（東西南北）で検出された。柱穴の位置関係と鏡山猛復元案から、金堂の基壇は東西 15.15m (50 尺) ×南北約 13.6m (45 尺) 程度で､建物は 5 間× 4 間で四面庇をもち､柱間寸法は約 2.06m (6.8 尺）等間と復元的に考えられている。講堂は、礎石 15 個が検出されたが、すべて原位置を保っておらず、基壇の掘り込み地業の痕跡から基壇規模は、東西約 28m（92 尺）×南北約 17.5m（58 尺）と推定された。塔は、心礎石と礎石 8 個が検出されたが、これらも原位置を保っておらず、塔の存在を明確に示すような掘り込み地業などの痕跡が見つかっていない。報文では、鏡山猛の計測、復元をもとに、創建期には塔はなく、回廊の廃絶後のある時期に金堂との心々距離で約 30.6m（101 尺）の位置 に 3 間× 3 間の規模の塔が建てられたと考えられている。回廊については、南面回廊・東西隅、東面回廊、北面回廊･東北隅･西北隅で掘立柱の 2 本柱列が確認され、心々距離で東西約 55m（182 尺)、南北約 67m（221 尺）の規模の回廊が明らかにされた。伽藍配置は、塔が回廊の廃絶後に建てられたと考えられている。

出土遺物として、軒丸瓦 5 型式、軒平瓦 3 型式、丸瓦、平瓦、須恵器、土師器、土製品、金属製品などが検出されている。創建瓦は軒丸瓦Ⅰ類の単弁八弁蓮華文軒丸瓦と軒平瓦Ⅰ・Ⅱ類の重弧文軒平瓦の組み合わせであると考えられている。寺院の創建年代は出土瓦から 7 世紀末頃、廃絶の時期は出土土器から 9 世紀後半代と考えられている。

58. 肥後稲佐廃寺　熊本県玉名郡玉東町に所在する。1953（昭和 28）年に田辺哲夫によって調査が行われ、古代寺院跡であることは知られていた。1971（昭和 46）年に農道の整備に伴い礎石が運び出される危険が生じたため松本雅明、高野啓一、佐藤伸二らを主体として伽藍配置の調査が行われた。塔の遺構は、礎石 2 個が検出された。心礎石は長径 1.75m、短径 1.50m で花崗岩製である。中央に径 55Cm のほぞ穴がある。もう一つの礎石は安山岩製で、原位置を保っていなかった。礎石の抜き取り穴の間隔は等しく 190 cm、もしくは 192 cmであり、6 尺 3 寸の柱間であると考えられた。やや大きめの三重塔であった可能性が指摘されている（廣瀬 1984)。

講堂の礎石はほとんどが動かされていた。礎石の抜き取り穴と土層の状態から基壇は、東西約 18.18m（60 尺）×南北 12.12m（約 40 尺）と復元された。建物の規模は東西約 14.5m（約 48 尺）×南北約 8.5m（約 28 尺）で、講堂の東西は 6 間×南北 4 間と考えられている。金堂の遺構はトレンチ調査によって、基壇が削られているが瓦片の出土状態、土層状態などから復元が行われた。基壇の規模は、東西約 13.6m（約 45 尺）×南北 12.12m（約 40 尺）以上とされている。また、建物の規模は、東西約 11.5m（約 38 尺）×南北約 9.7m（32 尺）余で、5 間× 4 間と推定されている。伽藍配置は法起寺式に推定されている（松本・高野 1977)。出土遺物は、軒丸瓦 6 種類、軒平瓦 3 種類が確認されている。創建年代は奈良時代末期とされている（田辺 2005)。

59. 興善寺廃寺　熊本県八代市興善寺町に所在する。1961（昭和 36）年に松本雅明らによって調査

された。地形や残存する礎石などから法起寺式の伽藍配置をとると推定された（野田編 1980）。中門跡と推定される地点の建物の基壇とみなされる粘土層からなる人為的遺構、金堂の南辺にあたる地点で基壇端の石敷が検出された。この遺構は基壇の端を固めるための地下の遺構と推定され、同時に根石列らしきものが検出された。講堂の中心より北寄りの地点で礎石の根固め石が 1 か所で検出された。また、講堂および僧房推定地は、講堂 18 か所、僧房 5 か所について礎石ないし礎石の根石らしい遺構が確認され、講堂は約 19.5m ×約 10m の規模で、5 間（唐尺 12・14・14・14・12 尺）× 4 間（唐尺 11・12・11 尺）、僧房は 6 間（唐尺 10 尺等間）× 3 間（唐尺 10 尺等間）の規模に推定されている。寺域は 168 m 四方（唐尺 570 尺）以上と考えられている。

出土遺物には、瓦類（軒丸瓦、軒平瓦、平瓦、丸瓦）、須恵器などの土器類がある。軒瓦は多種多様だが、いわゆる一本造りの技法[36]をもつ軒丸瓦、鬼面紋軒丸瓦が出土していることが特徴的である。創建瓦は、複弁八弁蓮華文軒丸瓦と均正唐草文軒平瓦の組み合わせである考えられている。創建年代は瓦の年代から 8 世紀中葉と考えられている。また、「寺」と刻まれた 9 世紀前半の土師器が出土している。

以上のように法起寺式をとる寺院は、全国で 59（60）か寺が集成[37]できた。

（9）法起寺式をとる寺院の様相

法起寺式をとる寺院の創建年代と分布　表 9 は各寺院の創建年代（幅）を示したものである。まず、全体として創建年代は、675 年前後～ 700 年まで、725 年以降に大きく二分される。おおむね、西日本に所在する寺院のほうが東日本のものより創建が先行する傾向にある。

前者を中心にその時期の様相とともにみていくと、638 年に法起寺（7）[38]が建てられ、その後、都に近い久世廃寺（3）、東畑廃寺（15）が建立される。7 世紀中葉に創建されたとされる大阪府和泉市の池田寺については、瓦散布状況からの推定伽藍であり、遺構については不明である。久世廃寺は付近に官衙跡である正道遺跡が立地する廃寺として知られている。東畑廃寺は尾張国府の北辺に接しており、国府付属寺院として理解されている。いずれも官衙付属寺院としての性格が想定されている。

7 世紀第 3 四半期ごろまでに龍角寺廃寺（22）、弓波廃寺（31）、末松廃寺（Ⅰ期）（32）、寺本廃寺（19）、大宅廃寺（1）、大鳳寺（2）、高麗寺廃寺（4）、信太寺（12）、神野々廃寺（48）、石井廃寺（51）、郡里廃寺（52）、大海廃寺（42）、寺町廃寺（44）、土師百井廃寺（36）、大寺廃寺（39）が創建される。この時期の情勢としては、639 年に、舒明天皇により百済大寺（吉備池廃寺）の造営が始まり、初めてわが国の宮廷に仏教が入った（森 1998）。百済大寺は 650 年代には完成したとされ、宮と大寺のセット関係の嚆矢となる。

この間、645 年の乙巳の変を経て、孝徳天皇が即位、難波宮に遷都される。造寺援助の詔よって、仏教界の管理機構を整備し、天皇により仏教が政治に取り入れられている。649 年には部民制から評

36　瓦当裏面に丸瓦部としてつくった円筒を接合し、円筒のうち不要な部分を切り取るもので、円筒を切り取る際に、瓦当裏面からすこし離れたところで切り取るため、瓦当裏面に堤状の部分が残る。

37　またこれらの 60 か寺のほか、熊本県の田島廃寺が法起寺式に比定されているが、創建年代が 10 世紀末～ 11 世紀初めとされている（松本 1972、1987）ため、本論では詳しく触れない。

38　カッコ内の数字は第 3 部第 3 章の番号、表 9 の番号と対応する。

表７　法起寺式寺院一覧　1/2

		国名	県名	所在地	寺名	創建年代	塔基壇一辺	金堂基壇（東西×南北）	講堂基壇	創建理由	川原寺系軒瓦	山田寺系軒瓦	備考
1	畿内	山城	京都府	京都市山科区大宅	大宅廃寺	7C.後半	不明	不明	26×16	—	—	—	古北陸道に近接。水煙の一部が出土。大宅氏氏寺か？法隆寺式または法起寺式が想定されている
2	畿内	山城	京都府	宇治市菟道西中	大鳳寺跡	7C.後半	不明	19.2×16.1	不明	宇治氏によるか	○	—	北陸道沿いに位置する
3	畿内	山城	京都府	城陽市久世	久世廃寺	7C.中葉～後半	13.4	26.7×21.3	23.5×13	—	○	—	付近に久世郡衙(正道遺跡)あり 塼仏、金堂製誕生釈迦如来像出土
4	畿内	山城	京都府	木津川市 （相楽郡山城町）	高麗寺跡	667年頃 （670年前後）	12.7	16.0×13.4	23.7×19.5	—	●	○	塼仏、鴟尾ほか出土
5	畿内	山城	京都府	木津川市 （相楽郡精華町）	里廃寺	白鳳期 （7C.後半～8C.初頭）	—	不明×14	—	—	○	—	高麗寺式の複弁八弁蓮華文軒丸瓦、久世廃寺同笵瓦が出土、鴟尾出土
6	畿内	山城	京都府	木津川市	燈籠寺廃寺	7C.後葉	—	32×18	—	—	—	—	高麗寺の対岸に位置する
7	畿内	大和	奈良県	斑鳩町岡本	法起寺	638～685年以降 （7C.前半～）	12.4	約16×12.7	29.6×13.8	山背大兄王が聖徳太子遺命により岡本宮を寺とする	—	—	法起寺式標識寺院。 685(天武14)年に法起寺式伽藍計画か
8	畿内	大和	奈良県	北葛城郡河合町	長林寺	7C.半ば～8C.初頭	不明	16.8×13.6	20.5×14.4	推古天皇勅願46か寺の一つ（寺伝）	—	—	金堂は再建期の遺構
9	畿内	河内	大阪府	羽曳野市古市	西琳寺	619年頃	12	—	—	渡来系氏族西文氏の氏寺か	—	○	西文氏創建寺院
10	畿内	河内	大阪府	藤井寺市惣社	衣縫廃寺	7C.初頭～前半	12	—	—	衣縫氏関係か	—	○	『霊異記』の井上寺かといわれている。 東回廊遺構も検出されている
11	畿内	和泉	大阪府	和泉市池田下町	池田寺跡	7C.中葉	不明	不明	不明	池田首の氏寺か	—	○	瓦の散布状況から法起寺式または法隆寺式に推定
12	畿内	和泉	大阪府	和泉市上代町	信太寺跡 （観音寺）	7C.後葉	不明	不明	不明	氏族（信太首）と考えられている	—	—	地覆石列が検出され、法起寺式が想定されている
13	東海道	伊勢	三重県	松阪市 （一志郡嬉野町）	嬉野廃寺	7C.第4四半期頃	—	—	—	—	—	—	戦前までは基壇、礎石が残存していたと伝わる
14	東海道	伊勢	三重県	松阪市 （一志郡嬉野町）	天花寺廃寺	7C.後半～8C.前半	11	20×17.5	—	—	○	—	塼仏出土。金堂と塔出土瓦型式が異なる 掘り込み地業による基壇寸法
15	東海道	尾張	愛知県	稲沢市稲島町	東畑廃寺	7C.中頃	9～10	16.5～17.0×15.5	23.1×18.0	国府付属寺院あるいは中島連氏による創建か	○	—	尾張国府北辺に位置する。塼仏出土。尾張国分寺と同笵瓦が多い。
16	東海道	尾張	愛知県	名古屋市	尾張元興寺	7C.後半	—	—	—	伝承によれば、氏族の氏寺	○	○	寺域の推定から法起寺または法隆寺式に推定 伽藍は未検出、鴟尾出土
17	東海道	駿河	静岡県	清水市	尾羽廃寺	7C.第4四半期	不明	約18.6×14.6	約23×17.2	盧原氏の氏寺か	○	—	盧原氏との関係が指摘、東側隣接地で公的施設の可能性のある建物あり、瓦塔、塼仏出土
18	東海道	駿河	静岡県	島田市	竹林寺廃寺	8C.前葉	6.8	（15.5×13.5）	東西13.6	—	—	○	金堂・講堂は再建建物からの推定、陶硯出土
19	東海道	甲斐	山梨県	笛吹市春日居町	寺本廃寺	7C.後半	5.4	18×10～12	18×14	氏族の氏寺か	—	—	素弁蓮華文軒丸瓦Ⅰ類は法起寺出土瓦に酷似） 塔基壇は、心礎石からの推定
20	東海道	武蔵	神奈川県	川崎市	影向寺	7C.第4四半期 （寺伝では739年）	12	18～19×25	—	行基により郡寺として創建か	—	—	谷を挟んで東に橘樹郡家の正倉群が確認 郡家との関連が注目されている
21	東海道	下総	茨城県	結城市上山川	結城廃寺	720年代後半 ～740年代	11	13.7×11.6	30×17.3	—	—	—	南西回廊跡付近から法隆寺に原型を求められる塼仏・塑像が出土、「法成寺」銘瓦から郡名寺院「法成寺」
22	東海道	下総	千葉県	印旛郡栄町	龍角寺廃寺	7C.第3四半期 （寺伝では702年）	9.1	15.65×12.42	—	—	—	○	奈良時代前期の様式をもつ銅造薬師如来座像あり。 寺伝「龍角寺縁起」に(1377)に三重塔修理の記事があり、三重塔の可能性
23	東海道	下総	千葉県	印西市別所	木下別所廃寺	7C.第3四半期	8	13×10	18.6×13.5	—	—	○	三つの堂宇の版築が異なるため、時期が異なると考えられている、講堂が先行か
24	東山道	近江	滋賀県	大津市穴太	穴太廃寺 （再建寺院）	～700年前後	13.32	22.14×18.72	27.91×15.44	官の影響をうけた渡来系氏族の氏寺か	○	—	講堂は塔・金堂より後 （8世紀第4四半期）の創建とされる
25	東山道	美濃	岐阜県	関市池尻	弥勒寺跡 （池尻廃寺）	7C.後葉～8C.初頭	11.5	14.88×12.4	24×14	ムゲツ氏の氏寺か	○	—	ムゲツ氏の氏寺か、武義郡衙に隣接
26	東山道	美濃	岐阜県	各務原市蘇原	山田寺	7C.後葉～8C.	不明	—	不明	—	○	—	川原寺式がモデルとなった瓦が出土 磚・鴟尾・灯明具・獣脚付火舎出土
27	東山道	飛騨	岐阜県	吉城郡古川町	杉崎廃寺	7C.末～8C.初頭	6.6(8.1)	13.5×10.8	15.0×10.2	—	—	—	伽藍東側に寺院付属雑舎が検出 伽藍内部に玉石が敷かれる、瓦を葺かない寺院
28	東山道	上野	群馬県	前橋市総社町	山王廃寺	7C.第4四半期 ～8C.初頭	13.6	22×21.7	37.8×24.5	—	—	—	放光寺ヘラ書き瓦出土
29	若狭	若狭	福井県	三方郡美浜町	興道寺廃寺 （創建期）	7C.第4四半期 ～8C.第1四半期	12	16.8×13.8	—	—	—	—	山田寺系軒丸瓦出土
30	若狭	若狭	福井県	三方郡美浜町	興道寺廃寺 （再建期）	8C.中葉	15.3	17.8×14.1	18×12	—	—	—	屋根部材は植物素材とされる 灯明皿、塑像螺髪出土

表 8　法起寺式寺院一覧　2/2

		国名	県名	所在地	寺名	創建年代	塔基壇一辺	金堂基壇（東西×南北）	講堂基壇	創建理由	川原寺系軒瓦	山田寺系軒瓦	備考
31	北陸道	越前	石川県	加賀市弓波町	弓波廃寺	7C.第3四半期	不明	不明	不明	—	—	—	心礎石検出
32		加賀	石川県	石川郡野々市町末松	末松廃寺（Ⅰ期）	660年代（7C.第3四半期初頭）	8.5×10.5	（19.8×18.4）	—	—	—	—	和同開珎出土 道、江沼、財氏らの共同開発か
33		能登	石川県	七尾市国分町・古府町	能登国分寺跡	7C.末	不明	22.35×15.6	約25×18.6	大興寺→国分寺	—	—	能登臣の私寺であった大興寺を →843(承和10)年昇格して国分寺
34		丹波	京都府	京都府亀岡市	丹波国分寺	8C.後半	16.4	（27×18）	32.8×20.9	国分寺	—	—	国分尼寺に近接(450m) 唐招提寺の瓦との関連が指摘されている
35		丹波	京都府	京都府亀岡市	桑寺廃寺	7C.後半	不明	不明	不明	—	—	—	推定法起寺式
36		因幡	鳥取県	八頭郡八頭町（八頭郡郡家町）	土師百井廃寺跡	7C.後半	14	19×16	（33.5×19.3）	—	—	○	塑像螺髪、鴟尾片出土
37	山陰道	因幡	鳥取県	岩美郡岩美町	岩井廃寺	7C.後半	不明	不明	不明	—	—	—	塔心礎石などから法起寺式が推定 山陰系鴟尾出土
38		因幡	鳥取県	鳥取市国府町岡益	岡益廃寺	7C.末葉	6.6	不明	不明	—	—	—	金堂跡は掘込地業のみ検出。
39		伯耆	鳥取県	西伯郡伯耆町（西伯郡岸本町）	大寺廃寺跡	7C.後半	11.9	13.7×11.9	19×42	—	—	—	伽藍全体が東面する。螺髪、塑像出土 高さ27mの塔に復元、石製鴟尾出土
40		伯耆	鳥取県	倉吉市大原	大原廃寺跡	7C.末ごろ	11	（17×14.8）	19.5×13.4	—	—	—	大御堂廃寺(観世音寺式)と近接200m 塼仏、塑像片などが出土
41		石見	島根県	島根県浜田市	下府廃寺	8C.初め	13.26	15.22×11.96以上	—	—	—	—	国分寺に近接(1.5km)
42	山陽道	美作	岡山県	美作市（英田郡作東町）	大海廃寺	7C.第3四半期～末	10.8	不明	規模不明	—	—	—	金堂は基壇が削平されており、礎石のみ残る 金堂→塔で伽藍整備、鴟尾、面硯、水煙片出土
43		備中	岡山県	総社市上林	備中国分寺	8C.中葉	不明	不明	不明	国分寺	—	—	中門・南門遺構を検出 推定法起寺式
44		備後	広島県	三次市向江田町	寺町廃寺	7C.後半	11	15.74×13.4	25.1×14.7	—	—	—	『霊異記』に記載のある三谷寺に比定
45		備後	広島県	三次市向江田町	備後上山手廃寺	7C.末	—	16.98×14.93	25～28×16.02	—	—	—	寺町廃寺と近接(1.2km) 塔をもたない伽藍か
46		備後	広島県	福山市蔵王町	備後宮の前廃寺	7C.後半	12.6	25.3×15.5	—	—	—	—	塼仏出土
47		備後	広島県	神辺町御領	備後国分寺	8C.中葉頃	18	29.4×20	30×？	国分寺	—	—	
48	南海道	紀伊	和歌山県	橋本市神野々	神野々廃寺	7C.後半	約12	—	—	氏族の氏寺か	○	—	塼仏出土
49		紀伊	和歌山県	橋本市（伊都郡高野口町）	名古曽廃寺	7C.末	約9	不明	—	—	○	—	
50		紀伊	和歌山県	伊都郡かつらぎ町	佐野廃寺（狭屋寺）	8C.（670年代説もあり）	約12	（15×13.5）	24×15前後	—	○	—	『霊異記』の「狭屋寺」に比定 木製燈籠あり、塼仏出土
51		阿波	徳島県	名西郡石井町	石井廃寺	白鳳期（7C.後半～8C.初頭）	10	14×12.12	—	—	—	—	
52		阿波	徳島県	美馬市美馬町	郡里廃寺	白鳳期（7C.後半～9C.初頭）	12.1？	約15×12	—	—	—	—	青銅製水煙の破片出土か
53		讃岐	香川県	東かがわ市（大川郡白鳥町）	白鳥廃寺	7C.後半（675～740年頃）	約12.3	7以上×9	—	—	—	—	南海道に面する
54		讃岐	香川県	香川県坂出市	開法寺	7C.末～8C.初頭	約11.2	不明	不明	—	—	—	国府付属寺院として機能
55	西海道	筑前	福岡県	太宰府市大字南字	般若寺跡	7C.末～8C.初頭	11.9	—	—	—	—	—	大宰府政庁に近接(800m) 近年まで残っていた基壇による推定
56		筑前	福岡県	飯塚市大分	大分廃寺	7C.末～8C.初頭	約13	—	—	—	—	—	地形や溝などからの推定 鋳造関連遺物出土
57		豊前	福岡県	田川市	豊前天台寺跡	7C.末ごろ～	不明	（15.15×13.）	（27.6×17.4）	—	—	—	回廊廃絶後に塔を建立、礎石のみ検出
58		肥後	熊本県	玉名郡玉東町	肥後稲佐廃寺	8C.中葉	不明	（13.6×12.12）	（18.18×12.12）	—	—	—	
59		肥後	熊本県	八代市興善寺町	興善寺廃寺	8C.後半	—	不明	不明	—	—	—	八代郡寺か

寺名アミは金堂後方に講堂が位置するもの、遺構未検出は—、礎石のみなど規模不明は不明とした。
基壇の値は推定値を含む（単位：m）

表 9　法起寺式寺院創建年代と分類

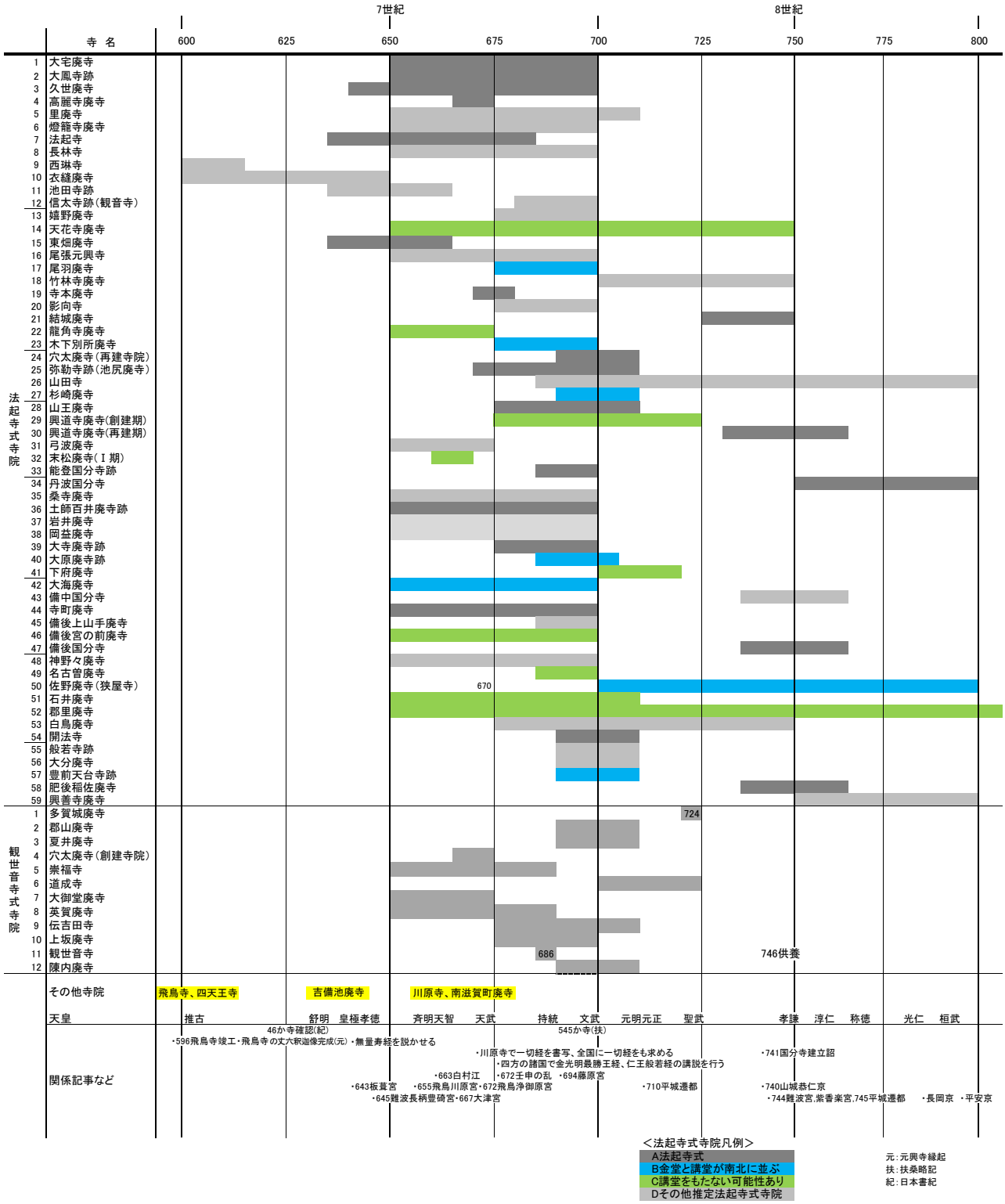


図 27　法起寺式をとる寺院の分布

制への変換が始まり、新たな国整備のイデオロギーとして仏教が大きな役割を果たすこととなる。このような流れが地方支配と首長層の造寺活動の活発化を生み、王家の仏教採用が与えた影響の一つとして、後述するように山田寺系の単弁軒丸瓦が全国でみられる。

7 世紀第 4 四半期、天武朝には、673 年に僧官制の改革、大官大寺の整備や、食封の停止が行われる。685 年には「諸国に、家毎に、仏舎を作りて、乃ち仏像および経を置きて、礼拝供養せよ」という詔が発布される。692 年段階では、全国で 541 か寺が数えられており（『扶桑略記』）、諸国（郡単位）の地方寺院の造営が活発化したことが想定される。694 年には諸国に『金光明経』を置かせ、701 年に僧尼令が説かれる。鎮護国家的な仏教思想とともに僧尼の統制が図られている。

およそこの時期の寺院として、山王廃寺（28）、杉崎廃寺（27）、木下別所廃寺（23）、穴太廃寺（24）、影向寺（20）、尾羽廃寺（17）、興道寺廃寺（29）、嬉野廃寺（13）、名古曽廃寺（49）、備後上山手廃寺（45）、大原廃寺（50）、白鳥廃寺、開法寺、般若寺、大分廃寺、豊前天台寺（53 ～ 57）が建てられている。関東から九州に至るまで全国の広範囲に広がるが、畿内一帯ではあまり建てられていないことが特徴である。その中で、穴太廃寺（再建寺院）が法起寺式として再建されていることには注目される。

地方に目を向けると、名古曽廃寺、備後上山手廃寺は 7 世紀第 3 四半期に造営された法起寺式寺院に近接して建てられている。影向寺は橘樹郡衙に近接し（約 400m）、開法寺については、讃岐国府の一角に建てられているなど、地方支配と仏教の結びつきもみえる。

川原寺式軒瓦と山田寺式軒瓦　前述したように地方においては、7 世紀後半に寺院の増加がみられる。この時期に創建される地方寺院では、大和の寺院に用いられる瓦を標識とした瓦を採用していることが広く知られている。川原寺式、山田寺式、法隆寺式、紀寺式などがその代表例で、元の型式に極めて近い例から模倣によって変形したものまであるが、瓦当研究においては型式として整理されている。また、山田寺式軒瓦は東日本に多く分布し、近畿地方やそのほかの地域には不均衡に分布する一方、川原寺式軒瓦はほぼ全国的に分布することが指摘されている（菱田 1994）。ここでは、川原寺と山田寺の軒丸瓦に系統をたどれる瓦を出土する法起寺式をとる寺院について述べる。

川原寺の創建瓦を代表して、川原寺式軒瓦とよばれているタイプがある。『川原寺発掘調査報告』において、川原寺式軒瓦は、面違鋸歯縁複弁八弁蓮華文軒丸瓦（A ～ C 種）、斜縁の素紋縁複弁八弁蓮華文軒丸瓦（E 種）の 4 種に分けられている。これらの文様は他地域に広く影響を与え、複弁の蓮華文は瓦当文様として広く分布することが知られる。

川原寺式の軒瓦がみられる各地の寺院には、法起寺式をとる寺院として、穴太廃寺、高麗寺、里廃

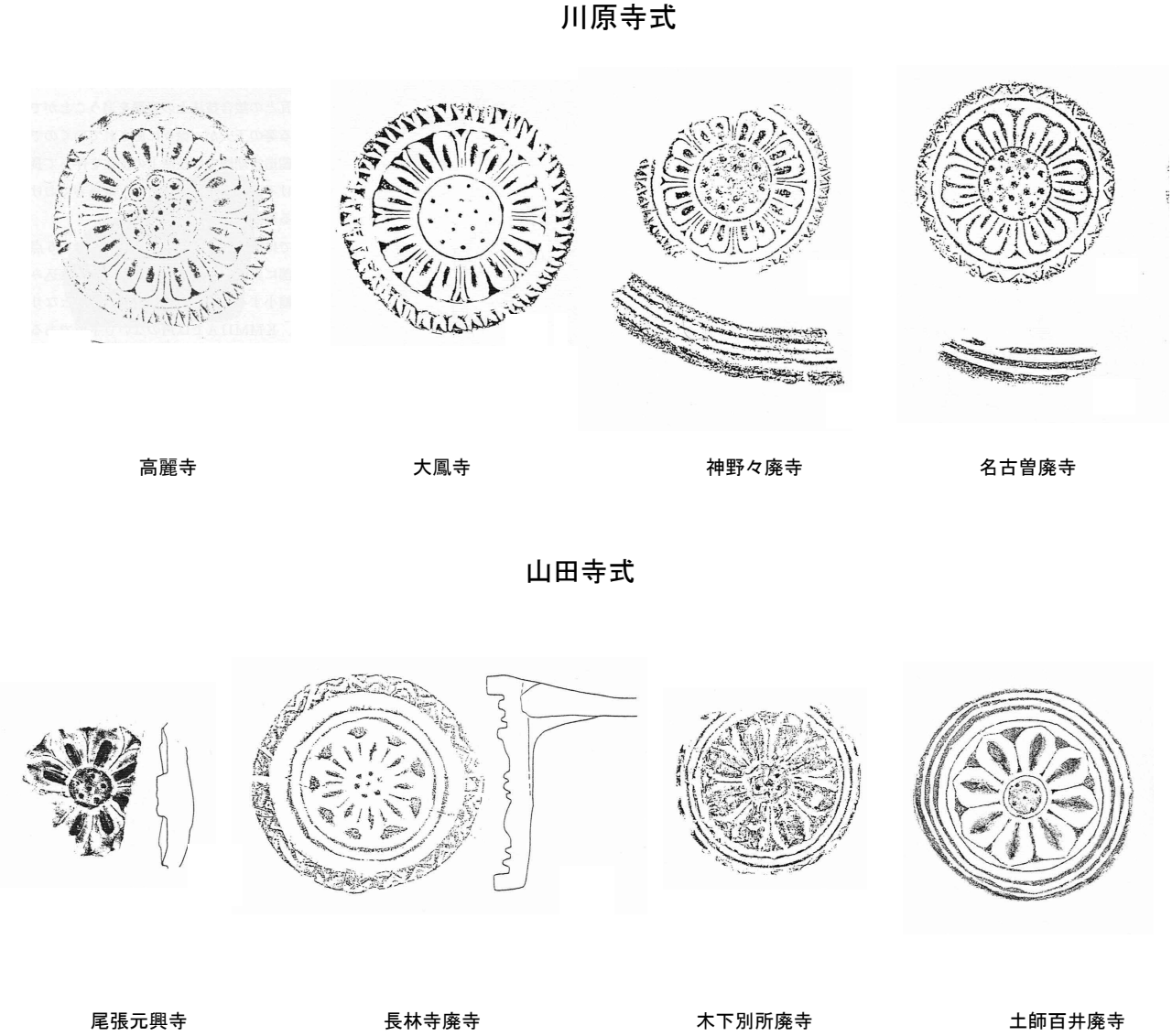


図 28　法起寺式をとる寺院出土の川原寺式、山田寺式の瓦（古代瓦研究会編 2005、2009 より作成、S=1/6）

寺（高麗寺式）、大鳳寺、久世廃寺（高麗寺式）、天花寺廃寺、神野々廃寺、名古曽廃寺、佐野廃寺、東畑廃寺、尾張元興寺、弥勒寺、尾羽廃寺がある（奈良文化財研究所 2009）。

南山城においては、川原寺式軒瓦が多くの寺院にみられる。特に相楽郡･久世郡には密集しており、壬申の乱の功績や交通路として木津川を掌握するといった意義づけがなされてきたが、この地域においては、高麗寺の創建を契機として展開していくことが指摘されている（中島 2009）。前述のように高麗寺からは川原寺創建瓦と同笵の瓦が見つかっており､そこから派生した一群は高麗寺式とよばれ、在地化し、里廃寺、久世廃寺などに分布していくことがすでに指摘されている（中島 2010a）。

また、寺院の伽藍配置に拘わらず、美濃地域は特に多く川原寺式軒瓦がみられる。南海道では川原寺式瓦自体の数が少ない。西海道では大分県の宇佐地域にみられる。川原寺式軒瓦をもつ寺院の伽藍配置には法起寺式のほか、法隆寺式、四天王寺式などがあり、多様で、特に関西地方は法隆寺式・四天王寺式が多く、中国地方においては四天王寺式、観世音寺式（伝吉田廃寺、大御堂廃寺）がみられる。このほか崇福寺（観世音寺式）、南滋賀町廃寺では、穴太廃寺で見つかった川原寺式軒瓦との関係性が指摘されているほか、後述する下野薬師寺においても川原寺式軒瓦がみられる。法起寺式をとる寺院は、畿内より西側にも全国的に多く分布しているが、そのなかでも川原寺式軒瓦がみられる寺院は畿内よりも東側に多く分布していることがその特徴として指摘できる。

文献史料にみられる「百済大寺」に比定されている吉備池廃寺の造寺司であった左大臣阿倍倉梯麻呂は、右大臣蘇我倉山田石川麻呂とともに孝徳朝の仏教政策の中枢を担った人物である。蘇我倉山田石川麻呂によって建てられた山田寺の瓦は、吉備池廃寺や四天王寺の同笵の軒丸瓦とよく似た文様をもっており、百済大寺の瓦に系譜をたどれる。この形式の瓦は現在、山田寺式軒丸瓦とよばれ、7 世紀後半には中央から最初に普及していく瓦となったことが知られる。

山田寺式軒瓦は、有子葉単弁八弁蓮華文軒丸瓦でＡ～Ｆの 6 種に細分されている（佐川・西川 2005）。法起寺をとる寺院では、西琳寺、池田寺、衣縫廃寺、高麗寺、尾張元興寺、竹林寺廃寺、龍角寺、木下別所廃寺、土師百井廃寺で確認されている。畿内と愛知県、静岡県、千葉県の分布であり、山田寺式については（菱田 1994）での指摘が改めて追認できた。

法起寺をとる寺院の分類と伽藍の特徴　これらの法起寺式をとる寺院は、伽藍の特徴から大きく 4 タイプに分類することができる（表 9）。A:法起寺式､B:講堂が金堂の後方に位置し南北に並ぶもの､C:講堂をもたない伽藍計画であった可能性が指摘されているもの、Ｄ：推定法起寺式（明確な遺構が検出されていないものの法起寺式と推定されるもの）である。

A:法起寺式寺院　大宅廃寺、久世廃寺、高麗寺跡、法起寺、長林寺、東畑廃寺、寺本廃寺、結城廃寺、穴太廃寺（再建寺院）、弥勒寺跡、山王廃寺、興道寺廃寺（再建期）、能登国分寺跡、丹波国分寺、土師百井廃寺、大寺廃寺、寺町廃寺、備後国分寺、肥後稲佐廃寺である。畿内、地方寺院、国分寺と実に地域も時期もバリエーション豊かに採用されている。大寺廃寺のみ伽藍全体が東面する。

B：金堂と講堂が南北に並ぶもの　尾羽廃寺、木下別所廃寺、杉崎廃寺、大原廃寺跡、大海廃寺、佐野廃寺、豊前天台寺跡である[39]。

先学により、東伯耆地方の白鳳期の寺院には、大原廃寺（法起寺式）、大御堂廃寺（観世音寺式）

39　なお、高麗寺においては、伽藍整備初期のものではないが、中門が伽藍中軸線上ではなく金堂の南に位置している（中島 2010a）。

斎尾廃寺（法隆寺式）のいずれも塔、金堂間の南北軸から金堂側に講堂をずらしているとの指摘があり、類似した例として、天台寺跡と杉崎廃寺（法起寺式）が挙げられている（加藤ほか 1999）。また、双塔式伽藍の出雲地方への伝播について、妹尾周三は金堂をはさんで東西に塔をもつ変則的な来美廃寺の伽藍の造営に 100 年前後という時間を要していることから、一時的に塔の西に金堂を配す場合もあり得ると想定している。また、出雲地方には造瓦技術が伯耆西部（上淀廃寺式軒丸瓦）、備後北部（寺町廃寺式軒丸瓦）から導入されていることなどから、最初に建てられたと考えられる金堂の建立時点では、他の堂塔の造営を計画していなかった可能性について触れている。また、伽藍配置の分布の際、丹波の三ツ塚廃寺（金堂の東西に塔を配置）を経由し、情報が二次的に出雲に伝わった可能性も指摘されている（妹尾 2011）。

これらの指摘からは、それぞれの建物の年代などを再考する必要があるが伽藍中軸線上に講堂中軸をあわせる法起寺式（A）と金堂と塔が南北に並ぶ法起寺式（B）の二つのタイプがある可能性を考えさせる。加えて、講堂が金堂側にずらされている例には法起寺式が多いということも注目される。

C：講堂をもたない伽藍計画であった可能性が指摘されているもの　天花寺廃寺、龍角寺廃寺、興道寺廃寺（創建期）、末松廃寺（Ⅰ期）、下府廃寺、備後宮の前廃寺、名古曽廃寺、郡里廃寺である。

講堂は仏法を講じる堂としての役割をもち、金堂の後方、伽藍中軸線上に設置されることが多い。金堂より広い空間を確保し、僧域を構成する建物として位置づけられる。奈良時代以降、法会の際には講堂と周辺は儀礼空間として機能していた（坂詰編 2003）。

C のうち創建時期が 7 世紀後半～ 8 世紀初めのものに末松廃寺（Ⅰ期）がある。660 年代に創建されたが、建て替え途中で瓦が弓波廃寺へ供給されている。塔の規模が大きいことが特徴であるが、講堂をもたないことと関係があるかは不明である。興道寺廃寺では 8 世紀中葉の再建寺院において、講堂が建立されている。

天花寺廃寺では、金堂は 7 世紀後半、塔は 8 世紀初めに建てられ、金堂・塔の北辺は揃えられたと考えられている（山田 2008）。金堂を中心に塼仏が出土しており、大御堂廃寺（観世音寺式）と同系であることが指摘されている（岸本 2003）。下府廃寺では、金堂・塔の北側には講堂を配置する空間がないことから、講堂が配されない可能性のほか、別の場所に設けられていた可能性も指摘されている（原編 1993）。出土瓦のうち軒丸瓦では大原廃寺との類似が指摘されている。備後宮の前廃寺では、周囲の地形から講堂が建てられなかった可能性が指摘されている。軒丸瓦、軒平瓦のほか、文字瓦「軽部君黒女」「紀臣石女」などが出土しており、尼寺の可能性も考えられている（近藤 2003、湊・亀田 2006）。

Ｄ：推定法起寺式　上記以外のものは推定法起寺式として分類し、図 27 では A と同じ記号で示した。大鳳寺跡、里廃寺、燈籠寺廃寺、西琳寺、衣縫廃寺、池田寺跡、信太寺跡、嬉野廃寺、尾張元興寺、竹林寺廃寺、影向寺、山田寺、弓波廃寺、桑寺廃寺、岩井廃寺、岡益廃寺、備中国分寺、備後上山手廃寺、神野々廃寺、白鳥廃寺、開法寺、般若寺跡、大分廃寺、興善寺廃寺である。これらには行政発掘以前の調査や伝承によって法起寺式が推定されたものが多い。地形や土壇の痕跡、位置関係から伽藍配置が想定されているものや塔礎石などの塔の痕跡による推定も含んでいる。A と同様に時期幅、分布範囲ともに広いが、創建年代は 7 世紀後半～ 8 世紀初頭に比定されるものが多い傾向にある。

その他の特徴　このほかに、外郭施設として掘立柱柵をもつものがみられた。寺院は宗教施設であり、

回廊で囲まれた空間は聖域として意識される。回廊の外側を掘立柱柵で囲むことは防御施設としての役割を帯びていたことを意味する指摘（甲斐 2010）もある。B タイプの杉崎廃寺は回廊をもたず掘立柱塀で区画している。また、寺院と官衙が計画的に配置された弥勒寺でも、南門施設が掘立柱塀であるという見解がある。このような施設は、畿内寺院でも四天王寺などでみられるほかに法起寺式をとる寺院以外でも、南滋賀町廃寺、観世音寺式をとる寺院で確認されており、寺院にみられる軍事的な要素の場合があるとして注目されている。

また造営技術の研究では、瓦積み基壇の採用について、近江と大和を結ぶ地域で従来の大和の寺院の影響を受けたものが展開することが指摘されている（網 2005）。法起寺式寺院では、高麗寺、大鳳寺、大宅廃寺、久世廃寺、穴太廃寺、丹波国分寺、大寺廃寺、大原廃寺、寺町廃寺、備後上山手廃寺に瓦積み基壇がみられる。

基壇の版築と堀込地業の工法分析では、7 世紀後半における爆発的な寺院数の増加に伴い、寺院の格式に応じた工法が適用されたとする見解（青木 2016）がある。そのなかで、寺院の増加に呼応して適応された B´ 工法を用いるものとして天花寺廃寺（金堂）、高麗寺跡（金堂･塔）、大原廃寺（塔）、般若寺跡（塔）があげられている。飛鳥地域を中心として七堂伽藍を備えた本格的寺院に用いられる B 工法がみられるものとして、山王廃寺（金堂・塔）があり、それに準する AB 工法を用いるものとして大分廃寺（塔）、弥勒寺（金堂）、寺本廃寺（塔ほか）が述べられている。青木の指摘する B・AB 工法を採用したものには、今回、法起寺式 A タイプに分類したものが多いことが指摘できる。

（10）法起寺式をとる寺院の金堂基壇規模

大和の主要寺院の金堂と、法起寺式をとる寺院、法起寺式をとる寺院のうち、各創建時期、上記の B･C タイプ、山田寺、川原寺系の瓦が出土する寺院の金堂基壇の南北／東西規模を比較を試みた（表 10・11）[40]。

飛鳥・白鳳時代の寺院金堂は一般的に 5 間× 4 間の柱間で、建物の桁行と梁行の比はほぼ 13:10 となることが指摘されている（宮本 1979）。基壇規模と建物規模を同様に扱うことはできないが、この場合、梁行／桁行は 0.769 となる。まず、今回集成した全法起寺式の平均は 0.827 となった。

川原寺西金堂 0.67 と法隆寺式をとる最初の寺院とされる吉備池廃寺 0.676 は近い値である。南滋賀町廃寺の西金堂は 0.9 で、より正方形に近い形となる。法起寺式をとる寺院の中で、法起寺の 0.794 に近いのは龍角寺廃寺 0.7936、久世廃寺の 0.977 である。

0.79 台では、南滋賀町廃寺中金堂 0.79、興道寺廃寺（再建期）0.792、久世廃寺 0.797 があげられる。高麗寺においては、伽藍計画において当初川原寺式を志向したことが想定されており、法起寺よりも川原寺、南滋賀町廃寺との数値の類似が指摘されている（山城町教育委員会編 1989）。また先に触れたように出土瓦において近江との関連が指摘されている。

次に B・C タイプについてみる。B の金堂の北に講堂を配するタイプのものとしては、木下別所廃寺 0.769、尾羽廃寺 0.784、杉崎廃寺 0.8、大原廃寺 0.87、豊前天台寺跡 0.897、佐野廃寺 0.9 となる。これらの創建時期は佐野廃寺がやや後出するものの、おおむね 7 世紀第 4 四半期ごろ～ 8 世紀初頭である。B の平均は 0.837 である。C では、備後宮の前廃寺 0.612、下府廃寺 0.785、郡里廃寺 0.8、興

40　観世音寺金堂については、東西／南北比とした。

表 10　法起寺式をとる寺院および関連寺院の金堂基壇の南北 / 東西比

燈籠寺廃寺	0.5625	全法起寺式平均	0.827
備後宮の前廃寺	0.612648221	8世紀前半～	0.829
寺本廃寺	0.666666667	弥勒寺跡（池尻廃寺）	0.833333333
丹波国分寺	0.666666667	高麗寺跡	0.8375
川原寺西金堂	0.67	大鳳寺跡	0.838541667
吉備池廃寺金堂	0.676	B:金堂の北に講堂	0.8370758
備後国分寺	0.680272109	土師百井廃寺跡	0.842105263
能登国分寺跡	0.697986577	畿内以外	0.844
観世音寺金堂	0.75	穴太廃寺（再建寺院）	0.845528455
～8世紀前半	0.752	結城廃寺	0.846715328
木下別所廃寺	0.769230769	川原寺式軒瓦をもつ寺院	0.847
畿内	0.773	寺町廃寺	0.85133418
C:講堂がない可能性あり	0.78481794	飛鳥寺東金堂	0.86
尾羽廃寺	0.784946237	飛鳥寺西金堂	0.86
下府廃寺	0.785808147	影向寺	0.862068966
南滋賀町中金堂	0.79	石井廃寺	0.865714286
興道寺廃寺(再建期)	0.792134831	大寺廃寺跡	0.868613139
龍角寺廃寺	0.793610224	大原廃寺跡	0.870588235
法起寺	0.79375	竹林寺廃寺	0.870967742
久世廃寺	0.797752809	天花寺廃寺	0.875
杉崎廃寺	0.8	備後上山手廃寺	0.879269729
郡里廃寺	0.8	肥後稲佐廃寺	0.891176471
長林寺	0.80952381	豊前天台寺跡	0.897689769
～7世紀前半	0.82	南滋賀町西金堂	0.9
飛鳥寺中金堂	0.82	佐野廃寺（狭屋寺）	0.9
川原寺中金堂	0.82	東畑廃寺	0.911764706
～7世紀後半	0.821	末松廃寺（Ⅰ期）	0.929292929
興道寺廃寺(創建期)	0.821428571	山王廃寺	0.986363636
山田寺式軒丸をもつ寺院	0.823	白鳥廃寺	1.285714286

全法起寺式平均	0.827
～7世紀前半	0.82
～7世紀後半	0.821
～8世紀前半	0.829
8世紀前半～	0.752
畿内	0.773
畿内以外	0.842
B:金堂の北に講堂	0.709
C:講堂がない可能性あり	0.863
川原寺式軒瓦をもつ寺院	0.847
山田寺式軒丸をもつ寺院	0.654
飛鳥寺中金堂	0.82
飛鳥寺東金堂	0.86
飛鳥寺西金堂	0.86
川原寺中金堂	0.82
川原寺西金堂	0.67
南滋賀町中金堂	0.79
南滋賀町西金堂	0.9
観世音寺金堂	0.75
法起寺金堂	0.794
吉備池廃寺金堂	0.676

表 11　法起寺式をとる寺院の金堂基壇 / 塔東西規模

久世廃寺	1.993	興道寺廃寺（創建期）	1.4
高麗寺跡	1.26	興道寺廃寺（再建期）	1.163
法起寺	1.29	末松廃寺（Ⅰ期）	2.329
天花寺廃寺	1.818	丹波国分寺	1.646
東畑廃寺	1.7	土師百井廃寺跡	1.357
竹林寺廃寺	2.279	大寺廃寺跡	1.151
寺本廃寺	3.333	大原廃寺跡	1.545
影向寺	2.417	下府廃寺	1.148
結城廃寺	1.245	寺町廃寺	1.431
龍角寺廃寺	1.72	備後宮の前廃寺	2.008
木下別所廃寺	1.625	備後国分寺	1.633
穴太廃寺（再建寺院）	1.662	佐野廃寺（狭屋寺）	1.25
弥勒寺跡（池尻廃寺）	1.294	石井廃寺	1.4
杉崎廃寺	1.667	郡里廃寺	1.24
山王廃寺	1.618	平　均	1.642137931

道寺廃寺（創建期）0.821、穴太廃寺（再建）0.845、石井廃寺 0.865、末松廃寺（Ⅰ期）0.929 となる。C の平均は 0.784 となる。B よりも数値の幅が広いのが特徴といえよう。いずれも同じタイプのなかで共通の特徴を見出すのは難しい。

金堂建物の柱間については、地方においては 5 間× 4 間のものと、7 間× 4 間のものがほぼ同程度分布する（宮本 1979）。平城京においては、薬師寺金堂や唐招提寺金堂や興福寺東西金堂など、金堂が中門の正面に配されるため、規模を大きくしてその壮観を示そうとしたもので、細長い平面をとることからは、回廊との連続性を重んじた意匠であると解釈されている。近年の古代寺院金堂基壇の集成分析（大川 2008）では、7 世紀末には 0.8 台のものと 0.6 台のものが混在していることから、7 世紀から 8 世紀にかけて金堂の形状が徐々に変化していった可能性が指摘されており、（宮本 1979）での指摘が改めて確認されている。

法起寺式をとる寺院においても 0.6 台～ 0.8 台が混在しているが、大まかな時期別にみると、7 世紀代では 0.821、8 世紀前半まででは 0.829、8 世紀前半以降～では 0.752 となり、古代寺院全般と比較すると、より東西・南北規模が近い数値の正方形に近い形に寄った結果となった。このことは、東西に長い金堂を配し壮観を示す意匠とは対照に、塔と金堂を並置することに重きをおいた傾向によるものと解釈できるのではないだろうか。

また、吉備池廃寺（法隆寺式）と法起寺式寺院全体平均は遠い値となったが、これは吉備池廃寺の金堂がこの時期の金堂としては破格に大きいことによるものとも考えられる。先述した法隆寺式は金堂と塔を同時に礼拝することを意識した伽藍という説を鑑み吉備池廃寺の塔の規模をみると、一辺 32m に推測されている（小澤編 2003）。法起寺式をとる寺院の塔の基壇規模（一辺）は、法起寺が 12.4m、比較的大型の穴太廃寺が 13.32m、興道寺廃寺が 15.3m であり、吉備池廃寺のような規模は法起寺式には類例をみない。しかし、吉備池廃寺金堂基壇の東西規模と塔の一辺は 37m：32m で、金堂の東西基壇は、塔の 1.15 倍程度となる。法起寺の金堂基壇規模が塔の 1.29 倍であるので、バランスとしては塔と金堂を同列に扱っているとも考えられる。

法起寺式をとる寺院のうち、塔と金堂の基壇規模が確認されている寺院について、それぞれの東西基壇規模の比較を行った（表 11）。数値が小さいほど、塔と金堂の基壇規模が近い値となる。これらの平均は 1.64 でおよそ塔の 1.5 倍強の金堂東西幅である。法起寺式の 1.29 と近いものとしては、弥勒寺跡 1.294、高麗寺跡 1.26 があげられる。

以上から、法起寺式をとる寺院の基壇東西比は、古代寺院全般よりもやや東西幅が短い傾向にあるものの、法起寺、法隆寺式寺院の初現とされる吉備池廃寺、二金堂式の川原寺式、南滋賀町廃寺のなかで、南滋賀町廃寺中金堂と畿内の法起寺式寺院の金堂南北／東西規模が近い値であることを指摘したい。

（11）法起寺式伽藍配置と尼寺

『法隆寺伽藍縁起并流記資財帳』や『元興寺伽藍縁起并流記資財帳』によれば、7 世紀前半には、わが国で尼寺が創建されていることが知られる。『日本書紀』敏達天皇 6（577）年 11 月に「百済国の王、還使大別王等に付けて、経論若干巻、并律師・禅師・比丘尼・呪禁師・造仏工・造寺工、六人を献る。遂に難波の大別王の寺に安置らしむ。」とあり、すでにこの段階で、僧寺と尼寺が建立されていたか、僧院と尼院が設けられていたと考えられている（森・甲斐 2012）。

初期の尼寺については（森・甲斐 2012）でまとめられており、豊浦寺、中宮寺、橘寺、坂田寺、法起寺、葛城尼寺（和田廃寺）、奥山廃寺がある。以下では、（森・甲斐 2012）にしたがって、これらの尼寺の概要を述べる[41]。

豊浦寺（別名、桜井寺）（奈良県高市郡明日香村）　蘇我氏の建立した尼寺で『元興寺縁起』の推古天皇元（593）年「等由良寺の宮を寺と成す。等由良寺と名づく。」から、推古天皇が豊浦宮から小墾田宮に遷られたあとを寺としたとされている。

1980・1985（昭和 55、60）年の広厳寺境内の発掘調査で、基壇版築層が確認され、基壇は東西 30m ×南北 15m の規模で、講堂跡と推定されている。創建年代は出土瓦の検討から 7 世紀初頭と考えられている。僧寺である飛鳥寺と対をなす尼寺と考えられているが軒瓦は飛鳥寺と異なる系統のものであり、寺院の造営についても飛鳥寺とは異なる系統の技術が使われたものとされている。

史料では、『日本書紀』朱鳥元（686）年 12 月天武天皇崩御のあとに行われた無遮大会の記事で、大官大寺・飛鳥寺・川原寺・小墾田豊浦寺・坂田寺の 5 か寺があげられており、その名が確認され、官寺の大官大寺、川原寺、それに準ず飛鳥寺とともに私寺として名前を連ねていることが注目される。大会を催した持統天皇の意向と解釈されている（森・甲斐 2012）。

中宮寺　（奈良県生駒郡斑鳩町）　1963（昭和 38）年に石田茂作によって発掘調査が行われ、塔と金堂が南北にならぶ伽藍配置が確認された。塔の心礎石は基壇上面から約 2.5m の深さに位置する地下式である。心礎石上面で、耳環などの舎利荘厳具が発見されている。また、1983（昭和 58）年の発掘調査で築地が確認され、寺域が東西約 130m ×南北約 165m と報告されている。出土瓦には百済系と古新羅系の両者が一緒に用いられており、平群氏に造営の平隆寺と同笵瓦であることが指摘されている。

史料では、『法隆寺伽藍縁起幷流記資財帳』推古天皇 15（607）年に「天皇、歳は丁卯に次る、小治田大宮御宇天皇幷東宮聖徳法王、法隆学門寺、幷に四天王寺、中宮尼寺、橘尼寺、蜂岳寺、池後尼寺、葛城尼寺乎、敬造仕え奉る」と、聖徳太子建立の七か寺があげられており、そのなかで「中宮尼寺」と記されているため、奈良時代には尼寺であった可能性が考えられている。

坂田寺　（奈良県高市郡明日香村）『日本書紀』推古天皇 14（606）年に「天皇の為に、金剛寺を造る。是今、南淵の坂田尼寺と謂う。」とあり、『日本書紀』の記述によって、7 世紀代に尼寺として坂田寺が存在したことが想定されていた。1972 ～ 1980（昭和 47 ～ 55）年まで行われた発掘調査で初めて仏堂の遺構が検出された。須弥壇の遺構中央部からは、地鎮供養の際に収められた銅銭「神功開寶」が見つかっており、8 世紀後半の金堂のものと判明した。奈良時代には、この寺に信勝尼がおり、東大寺大仏の脇侍造像の発願をしている。7 世紀代の遺構は未検出だが、飛鳥寺創建時のものと同時期の瓦が出土しており、7 世紀に存在し、8 世紀後半に至っても尼寺の金堂を創建できるほどの勢力があったことがわかる。

橘寺　（奈良県高市郡明日香村）『日本書紀』天武天皇 9（680）年 4 月 11 日「橘寺の尼房」に失火して、十房を焚く」とあり、尼寺として知られている。

出土軒丸瓦のなかに、少量の飛鳥寺創建時の瓦と似た文様をもつもの、川原寺や本薬師寺などの軒

41　15-56 ページ、第 2 章飛鳥時代の尼寺を要約している。

丸瓦の同笵品や同系品があり、本格的な寺院造営工事は7世紀後半～天武朝のことであったとされる。このほかにも奈良時代の軒瓦も数多くみられることから、かなりの規模で、造営工事が奈良時代以降も進められていたと考えられている。遺構は、塔の礎石、地下式の塔心礎石、基壇の一部、南北約20m×東西約17mの金堂基壇、講堂の礎石据え付け穴跡、回廊基壇、南北11×東西約9mの門跡が見つかっている。門は川原寺の伽藍中軸線にあわせて建てられており、川原寺を意識したものと理解されている。また、四天王寺式をとる伽藍全体が東面していることが特徴として挙げられる。

法起寺　奈良県生駒郡斑鳩町岡本に所在する。別名「岡本寺」「池尻寺」ともよばれる。「法起寺塔露盤銘文」によれば、山背大兄王が聖徳太子の遺命により岡本宮を寺とし、638（舒明10）年に福亮僧正が弥勒菩薩像を造立し金堂を建立した。685（天武14）年には塔の造営工事が行われ、706（慶雲3）年には塔の露盤が上げられ、工事には恵施僧正がかかわったことが記されている。この露盤銘文に関しては、長く真偽が論じられていたが、現在では銘文の読み方には諸説あるが、その存在自体は認められているようである。上記の『法隆寺資財帳』推古天皇15（607）年にあげられる聖徳太子建立の七か寺のなかで「池尻尼寺」と記されているため、奈良時代には尼寺であったとされている。

葛城尼寺（和田廃寺）　上記『法隆寺資財帳』などの史料に推古天皇と聖徳太子が建立した七か寺の一つとして、名前が見える。和田廃寺とよばれる寺院跡が比定されている。

発掘調査が1974、75（昭和49、50）年に行われ、大野塚とよばれる場所で塔の基壇が検出された。大野塚には古くから司馬達等が感得した舎利を収めたとの伝承があった。出土軒丸瓦から塔の年代は7世紀後半と考えられている。このほか完形に近い鴟尾と5個体分の破片が出土していることから、鴟尾の載る建物として塔以外にも金堂・講堂が配されたと想定されている。

奥山廃寺　『日本書紀』朱鳥元（686）年12月1日、天武天皇追善の無遮大会が設けられた。明日香村奥山に所在する、奥山久米寺の境内で基壇が見つかっている。

昭和40年代に調査が行われ、現在の本堂の下から金堂基壇が見つかっている。復元長東西23.4m×19.2mで、高さは1m以上と復元されている。塔基壇は一辺約12m、高さ1.45mに復元されている。出土した山田寺式軒丸瓦から塔造営の年代は7世紀後半とされる。講堂は未調査で、金堂の北約25mの一が推定地とされている。金堂の南約130mの地点で東西方向の掘立柱柵が見つかっており、廃寺の南限の柵遺構と考えられている。

某尼寺　このほか、飛鳥の地に、場所は不明であるが『日本書紀』舒明天皇即位前紀（627年）に登場する尼寺が存在したことがわかっている。

僧寺と尼寺の対応関係として、飛鳥寺（僧寺）と（豊浦寺）、法隆寺（僧寺）と中宮寺（尼寺）、法輪寺（僧寺）と法起寺（尼寺）が想定されている。また、寺院を囲繞する防御施設と想定される柵列が奥山廃寺のような尼寺にもみられることを指摘している。これらの伽藍配置は、四天王寺式のように主要伽藍を一列に並べたものが多く、法起寺のみ法起寺式をとる（森・甲斐2012）。

第3部でも述べたように、法起寺が尼寺であることや法起寺式をとる寺院が創建される段階において、すでに僧侶にならび尼の統制が行われていたこと、畿内には（森・甲斐2012）で指摘されるように法起寺とほぼ同時期に尼寺が多く存在したことから、法起寺式をとる寺院のなかには、佐野廃寺や備後上山手廃寺のほかにも尼寺が一定数含まれている可能性がある。しかしながら、先述のように推定法起寺式が多いため、今後の調査の進展を待ち、考察を加えたい。

以上のことから、法起寺式をとる寺院は、これまでの検討のなかでは特定の信仰と結びつけることは難しい。だが、特徴を抽出しづらいということは汎用性が高いともいえ、その要因が何かしら存在しているはずである。法起寺式は 7 世紀半ばまでの畿内や中央の動きをふまえ、畿内の高麗寺などでは早い段階で採用され、瓦とともに周辺に広まっていく。隣接した寺院の存在や、創建後の官とのつながり、地方における長期間の流行は、造寺主体となった氏族や勢力の世代交代を経てもなお、法起寺式が採用され続けたようにも想像できる。伽藍型式の情報が瓦や公人とともに広まり、各地で造寺活動が行われたなかで、地方において中核的寺院に特に採用され、民衆に寄り添った伽藍配置といえるのではないだろうか。

第4部　国土防衛と寺院

ここでは、第2部で述べた国家防衛から、第1章では肥後地域における鞠智城と寺院を例に軍事的施設と信仰の関係について考えてみたい。第2章では南海道の法起寺式をとる寺院を例に官道との関係を考察する。

第1章　肥後の寺院と古代山城

(1) 鞠智城

第2部で述べた大宰府羅城の2列目に位置し、国家の南端守護をになう古代山城が鞠智城である。鞠智城は熊本県北部の菊池市と山鹿市にまたがって所在する。文献史料では『続日本紀』698（文武2）年5月条に大野城、基肄城とともに修理を行ったとする記事が初見である。大野城、基肄城と同時期に修理されていることから、築城時期も同じ665年ごろと考えられてきた。

山城は標高145mの通称「米原台地」上に築かれており、比較的標高が低いのが特徴である。山域の総面積は55haで土塁線と崖線で囲繞された外周は3.5kmである。1967（昭和42）年から発掘調査が行われており、72棟の建物遺構が平坦部を中心に分布している。これらは八角形建物、掘立柱建物、礎石建物、礎石・掘立柱併用建物に区分される。建物の年代は、創建期の7世紀後半から10世紀第3四半期までの5期にわけられる（矢野2012）。現在鼓楼として復元されている八角形建物跡の存在や、貯水池跡から出土した菩薩立像など百済系の遺構・遺物が注目されている。鞠智城出土木簡と大宰府および西海道関係の荷札木簡には形状に共通点があることから、大宰府の出先機関としての機能を有していたと考えられている（西住1999）。鞠智城の瓦は7世紀末までに生産されたと考えられているが、肥後地域に8世紀からの大宰府系瓦

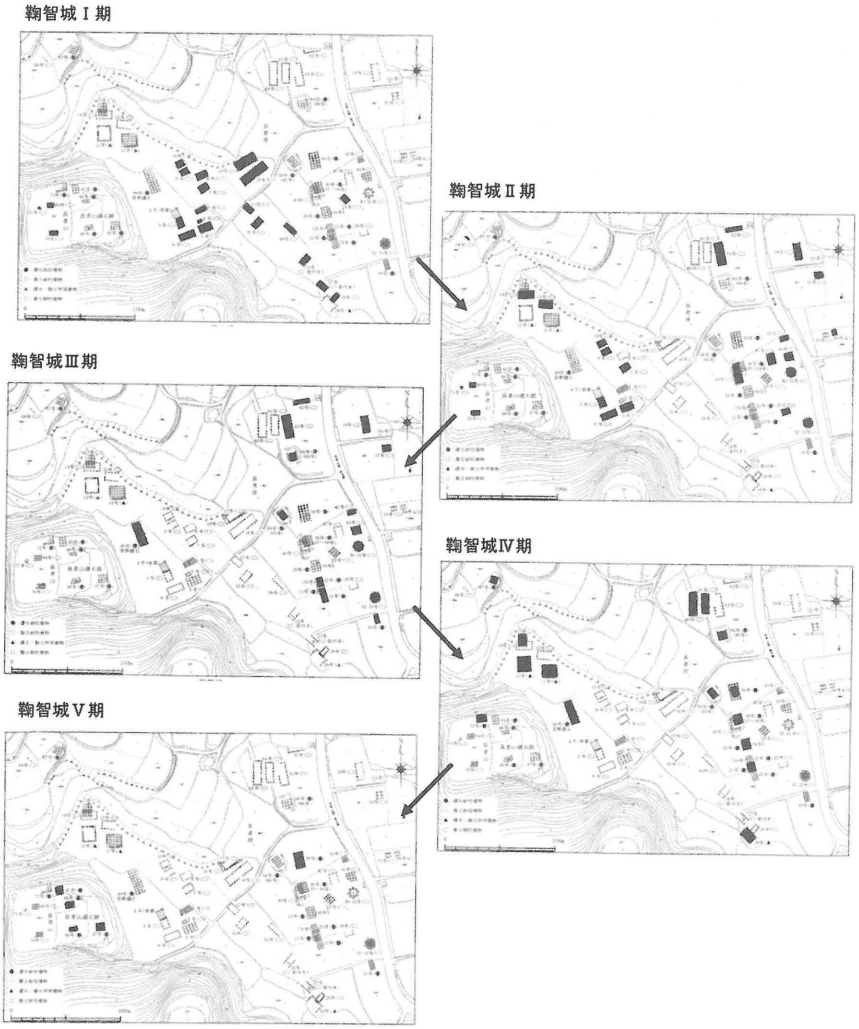


図29　鞠智城の遺構変遷（矢野2012）

の導入される時期にも流通はみられない（中山 2008、西住ほか編 2012）。

以下、報文（西住ほか編 2012）に従い、概要を述べる。鞠智城の遺構時期は、Ⅰ期：7 世紀第 3 四半期～第 4 四半期、Ⅱ期：7 世紀末～ 8 世紀第 1 四半期前半、Ⅲ期：8 世紀第 1 四半期後半～ 8 世紀第 3 四半期、Ⅳ期：8 世紀第 3 四半期～ 9 世紀第 3 四半期、Ⅴ期：9 世紀第 4 四半期～ 10 世紀第 3 四半期の 5 時期に区分される。

Ⅰ期は鞠智城の草創期にあたり、663 年の白村江の敗戦を契機として築城されたと考えられている。城内には掘立柱建物の倉庫、兵舎を配置していたが、主に外郭線を急速に整備した時期であるとされている。貯水池から出土した百済系菩薩立像から大野城や基肄城と同様に百済の亡命人の関与が想定されている。Ⅱ期はコの字型に配置された「管理棟的建物群」、八角形建物などが建てられて城内施設の充実化が図られているので、隆盛期と考えられている。『続日本紀』698 年（文武 2）年の繕治の時期にあたる。また、Ⅲ期は転換期とされている。Ⅱ期の「管理棟的建物群」、八角形建物は存続しつつ、掘立柱建物が礎石建物に建て替えられる。この時期の土器などの出土が皆無に等しいため、最低必要人数のみ城の維持のために配置された時期ととらえられており、Ⅲ期とⅣ期の間に城の機能の変化が想定されている。Ⅳ期では、Ⅱ・Ⅲ期の「管理棟的建物群」が消失しており城の機能が大きく変容したと考えられている。礎石建物群が大型化していることから、食糧の備蓄施設　としての機能が主体を帯びたと考えられている。Ⅴ期には鞠智城は終末をむかえる。城内の建物数が減少しつつ大型礎石建物が建てられ、食糧備蓄機能は維持される。10 世紀第 3 四半期には城の機能が停止する（矢野 2012）。

鞠智城Ⅰ～Ⅲ期は管理棟的建物が建てられ、初期段階では南九州の有事にそなえた大宰府の出先機関としての役割ももっていた（岡田 2010）ことから、対外的な軍事施設としての機能が主体であり、Ⅳ・Ⅴ期になると食糧備蓄がその大きな役割となる。その築城時期については、肥後国府の成立前にさかのぼる可能性が高く、初期には官衙的性格をもっていた可能性も考えられている（鶴嶋 2011）。

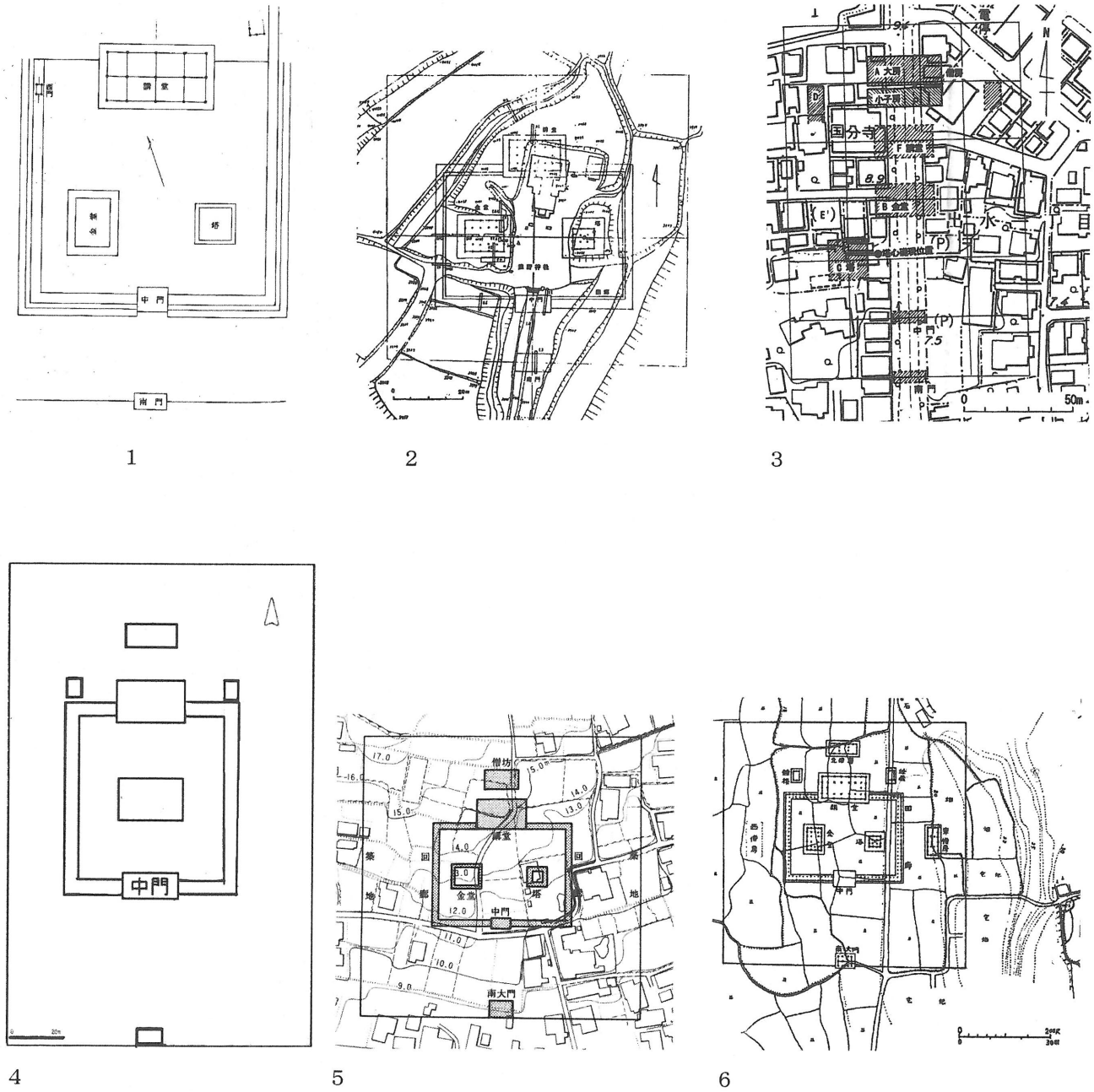
次節では為政者側による仏教政策と古代山城の関係性について、各寺院のとる伽藍配置とその分布を考察を行う。鞠智城が主に対外的な軍事施設としての役割を担っていたとされるⅠ～Ⅲ期まで、具体的には 7 世紀後半から肥後国分寺建立時期までに創建された寺院を中心として扱うことにしたい。

(2) 肥後の古代寺院

肥後の古代寺院の伽藍配置は、松本雅明以来の研究によって観世音寺式ないし法起寺式の一塔一金堂式をとると想定されているもの、大官大寺式などその他の伽藍型式と推定されているもの、心礎石のみ残り伽藍配置が明確でないもの、塔のみの一堂式伽藍として扱われているものに分類できる。これらの寺院のなかで、鞠智城Ⅰ～Ⅲ期および肥後国分寺、国分尼寺までに創建されたと考えられている寺院についてみていきたい。

・玉名郡

立願寺廃寺　熊本県玉名市立願寺に所在する。1954（昭和 29）年に田辺哲夫らにより発掘調査が行われ、瓦の出土状況から伽藍配置は法起寺式をとると想定されていた。1991（平成 3）年から玉名市史編纂事業の一環として発掘調査が行われ、Ⅰ～Ⅲ期の遺構変遷が明らかとなった。Ⅱ・Ⅲ期の遺構は観世音寺式をとると想定されている。Ⅱ期の年代は 8 世紀はじめから 8 世紀中頃まで、Ⅲ期は 8 世紀中頃から末までと考えられている。また、玉名郡衙付属寺院（郡寺）と考えられている（坂田



1: 坂田編 1994、2: 松本 1977、3：鶴嶋俊彦氏のご提供による、4: 美濃口 2011 から作成、5：江本 1980、6： 松本 1965

図 30　肥後の寺院伽藍配置（縮尺不動）

1994)。軒丸瓦、軒平瓦など多数の遺物が出土している。報文では伽藍配置が観世音寺式となっているものの、遺構からの想定は難しいことが明らかとなった[42]。図 33 では観世音寺式の可能性を残す寺

42 『玉名郡衙』では観世音寺式とされており、拙稿「西海道の法起寺式伽藍配置をとる寺院の検討」において、観世音寺式として扱ったが、発掘調査を担当された竹田宏司氏のご教示では、観世音寺式として扱うには証拠不十分とのことである。

院として扱っている。

稲佐廃寺　第3部で述べたように熊本県玉名郡玉東町に所在する法起寺式をとる寺院である。1953(昭和28）年に田辺哲夫によって調査が行われ、古代寺院であることは知られていた。1971（昭和46）年に農道の整備に伴い礎石が運び出される危険が生じたため松本雅明、高野啓一、佐藤伸二らを主体として伽藍配置の調査が行われた。塔礎石、講堂の礎石、金堂の遺構が検出されている。創建年代は奈良時代末期とされている（田辺2005)。

・菊池郡

十蓮寺廃寺　菊池郡七城町に所在し、菊地平野を一望する台地上に位置する。現在は農道の畑の端に礎石を残す状態である。本格的な発掘調査は行われておらず、礎石が3、4個検出されているのみである（松本1987)。軒丸瓦、軒平瓦が発見されており、陳内廃寺の軒瓦のモチーフを受け継いだものと考えられており、奈良後期の創建年代が想定されている（廣瀬1984)。また、菊池郡寺と考えられている。

・飽田郡

伝大道寺跡　熊本市京町に所在する。遺構は残っておらず、7世紀代の瓦、8～9世紀の瓦のみが出土している（美濃口2011)。『肥後国誌』によれば、「大道寺」という天台寺院があったとされている。台地上に位置すること、地形が起伏にとんでいるので、密教寺院の伽藍ではないかとされている（廣瀬1984)。

池辺寺　熊本市池上町に所在する。「池辺寺縁起絵巻」によれば和銅の創建とされているが、熊本市教育委員会による池辺寺根本中堂跡（百塚遺跡C）の発掘調査では、9世紀後半の土師器が出土しており、和銅年間ごろの遺構は確認されていない。また、塼敷きの本堂、石積みの塔などが検出され、平安初期の堂塔伽藍の貴重な例として注目されている（大城1996、美濃口2011)。

・詫麻郡

肥後国分寺　熊本市出水に所在する。1970（昭和45）年から松本雅明による調査が開始され、法隆寺式の塔を回廊で囲み塔、金堂の南側にそれぞれ中門を設けた伽藍配置に推定されたのち、熊本県教育委員会、熊本市教育委員会によって調査が行われている（金田1996)。伽藍配置は変形大官大寺式とする復元案がある。創建年代は、8世紀第2四半期末～第3四半期ごろ、756（天平勝宝8）年12月の仏具の下賜された国名に肥後があることから、瓦の使用がみられる8世紀第2四半期末以降、第3四半期の前半つまり745年ごろから763年ごろまでには創建されたと考えられている（金田1997、2005)。

陳山廃寺（国分尼寺）　熊本市水前寺公園に所在する。1971（昭和46）年の松本雅明による調査によって塔をもたない変形四天王寺式の伽藍配置が想定されている。創建年代には8世紀中頃の年代が与えられている（稲津1996)。

渡鹿廃寺（大江遺跡群渡鹿B遺跡）　熊本市大江に所在する。1959（昭和34）年からの松本雅明による調査報告（松本1987）では、伽藍配置は法起寺式をとされる。近年の熊本市による発掘調査で伽藍の痕跡が確認されていない（網田1996）ため、第3部では法起寺式としては扱っていない。出土遺物には軒丸瓦、軒平瓦、鬼瓦などがある。出土の軒先瓦は陳内廃寺の鴻臚館式軒先瓦を祖形として作られたと考えられるため陳内廃寺よりやや下る奈良時代後期ごろの建立と考えられている（廣瀬1984)。

水前寺廃寺　熊本市水前寺公園に所在する。1957（昭和 32）年に小林久雄、松本雅明らによって調査が開始された。塔心礎石と礎石の柱間から三重塔を復元、法起寺式の伽藍配置が想定された。その後の調査では寺院の遺構が検出されず、塔のみの寺院であったと考えられている。1993（平成 5）年の熊本市教育委員会の調査によって 9 世紀代の溝が検出されている（金田 1996）。

・益城郡

陳内廃寺　熊本県熊本市（旧下益城郡城南町）陳内に位置する。瓦が出土することで廃寺の所在は古くから知られていた（松本 1965）。遺構については、礎石・根石はほとんど残っていないが、塔の版築層基壇が確認されており、一辺が 13m の基壇に復元され、五重塔が想定されている。砂岩製の心礎石が確認されており、大きさは 190 ㎝× 180 ㎝で、高さ 120 ㎝である。第 3 部で述べたように観世音寺式伽藍配置をとる。遺物は老司式をはじめとする軒丸瓦 3 種、軒平瓦 3 種、鉄釘、金銅の蝶番、須恵器、土師器などが発見されている。老司Ⅰ式の瓦の組み合わせから、創建年代は 7 世紀後半～ 8 世紀初頭と考えられている（松本 1965）。

・八代郡

興善寺廃寺　熊本県八代市興善寺町に所在する。1959（昭和 34）年に竜峯村が八代市との合併に先立ち村史の編纂を立案し、1961（昭和 36）年に松本雅明らによって調査された。地形や残存する礎石などから法起寺式の伽藍配置をとると推定された。中門、金堂、講堂、僧房の遺構が検出されている。創建年代は瓦の年代から 8 世紀中葉と考えられている。また、「寺」と刻まれた 9 世紀前半の土師器が出土している（江本 1980）。

・出土瓦の先行研究

肥後地域の瓦は鶴嶋俊彦、金田一精などによって整理、編年されている。7 世紀中頃～後半に単弁軒丸瓦において鞠智城から陳内廃寺への影響がみられ、665 年ごろの鞠智城の築城を契機として瓦当はめ込み式技法が伝播している（鶴嶋 1991、金田 1997）。7 世紀後半から 8 世紀初頭にかけて鞠智城出土の単弁を祖型とする軒丸瓦の同范関係が陳内廃寺と渡鹿 A 遺跡においてみられ、この時期の軒平瓦においては、陳内廃寺出土の二重弧文のものと鞠智城出土のものに同じ調整方法がみられることから同一の工人集団による造瓦の可能性が考えられている（金田 1997）。興善寺廃寺において陳内廃寺の系譜をひく軒丸瓦、鬼瓦がみられる一方で、立願寺廃寺は豊前、畿内系瓦を使用している。

西海道全体の動きからみると、7 世紀後半～ 8 世紀初頭に観世音寺の本格的な伽藍整備が行われ、大宰府政庁がⅡ期に入る。これらを契機として 8 世紀初頭から肥後地域に大宰府系瓦が導入され、郡寺の整備がなされる。陳内廃寺で老司Ⅰ式、鴻臚館式瓦が使用される。ついで陳内廃寺の鴻臚館式を祖型とした瓦を用い、渡鹿廃寺が創建される。立願寺の忍冬唐草文軒平瓦は観世音寺のものを祖型としており、この時期に伽藍が整備されたと考えられている（金田 1997、2005）。

8 世紀中頃からは、国分寺、国分尼寺の建立を契機に肥後国分寺系瓦が分布、多くの寺院が建立される。肥後国分寺創建瓦を祖型とするもの、あるいは同范瓦を使用する遺跡として、十蓮寺、渡鹿 A 遺跡、古保山廃寺があげられ、肥後国分寺造営に協力した地方豪族による寺院造営と考えられている。国分寺と稲佐廃寺に同范関係、軒丸瓦においては、肥後国分寺から立願寺廃寺、稲佐廃寺、大道寺への流れがみられる。一方、渡鹿廃寺、興善寺廃寺は大宰府系瓦を補修に用いているほか、浄水寺跡も興善寺廃寺、肥後国分寺瓦の影響がみられることが指摘されている（鶴嶋 1991）。また、立願寺廃寺出土の人面表現を施した軒丸瓦の類似例が百済の弥勒寺から出土しており、興善寺廃寺や新羅の皇龍

寺跡からも鬼面文軒丸瓦が出土していることから、直接的には両者を結びつけられないが、注目すべきであるとされている（石松 2007b）。

また、肥後の寺院草創期である 7 世紀後半に鞠智城に単弁軒丸瓦がみられ、665 年ごろの鞠智城の築城を契機として瓦当はめ込み式技法が肥後に伝播したと考えられており、鞠智城と陳内廃寺との関連が指摘されている。7 世紀末～ 8 世紀初頭の観世音寺の伽藍整備と大宰府政庁Ⅱ期を契機に大宰府系瓦が流入し、陳内廃寺で老司Ⅰ式、この頃に観世音寺式に建て替えが行われたという説もある立願寺廃寺で老司Ⅰ・Ⅱ式瓦、興善寺廃寺では老司Ⅱ式軒丸瓦と鴻臚館系軒平瓦が出土している。

(3) 百済の古代山城

西海道の大宰府をとりまく古代山城による羅城構造は、朝鮮半島、特に百済泗沘期の扶蘇山城とそれを取り囲む羅城とよく似ていることが先行研究によって指摘されている。泗沘都城と大宰府城郭は平面プランの酷似しており、条坊制をもつこと、羅城の構造をもつことなどがその共通点として挙げられている（成 1993）。

朝鮮半島の古代山城の数はは約 2000 城といわれており、半島全域に広がって分布している。都周辺の城は、王城、王城の周りに関連する拠点の城、その外側の要衝の地に拠点となる城をおくという三重の構造をもち、都を中心とした防衛体制を敷いていることが特徴である。『三国史記』などの記録から 475 年に高句麗の侵攻をうけて陥落した王都が漢城で、現在のソウル市の漢江以南にあったとされている。百済史の前期は漢城時代とよばれ、古代国家としての体裁を整えたのは 4 世紀の中ごろと考えられている。百済への仏教伝来は 384（枕流王元）年であることが知られているが、漢城時代の寺跡は確認されていない（田中 1989）。その後 475 年に文周王が熊津に遷都してから 538 年に泗沘（扶余）に遷都するまでの時代を百済中期として、熊津時代とよんでいる。熊津は現在の忠清南道公州市にあたる。538 年に聖王が熊津から泗沘に遷都し、660 年に滅亡するまでの 123 年間は扶余に都がおかれた。

百済では、中期の熊津（公州）で、公山城の周囲 10 km位の範囲内に主要交通路に沿って山城が築かれている。後期の泗沘(扶余)でも同様に主要交通路に沿って周囲約 10 kmの範囲内に東には青馬山城、南東に石城山城、南に聖興山城、北西に甑山城などが配されており、その外郭の拠点にも拠点となる城を築いている（亀田 2008）。

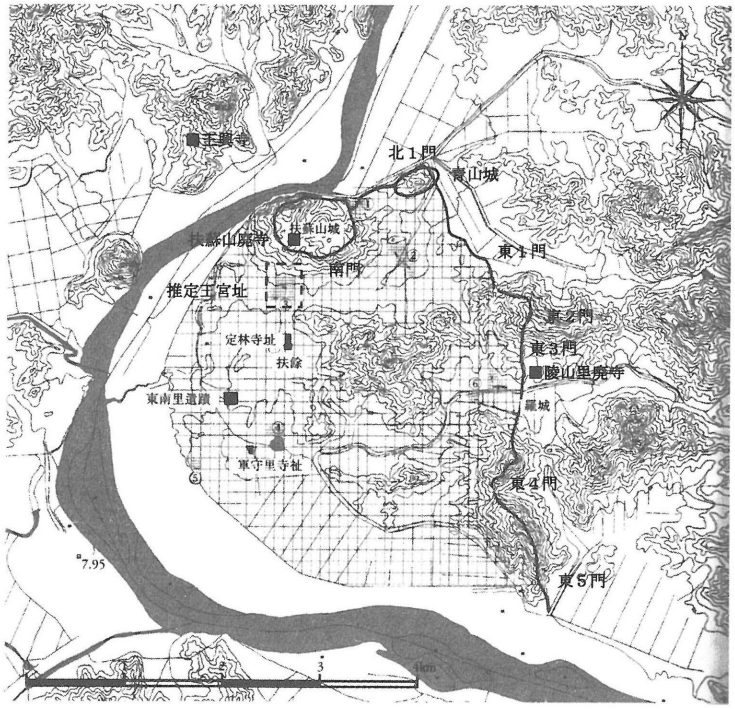


図 31　泗沘羅城（朴 2011 を一部改変）

扶蘇山城　扶余の中心に位置すると考えられている泗沘都城の扶蘇山城は、白馬江が曲流する地点の自然の地形を利用して築かれている（図 31）。

1992 年から行われた調査によって、

方形鉢巻式城壁は統一新羅時代に築造されたものであることが明らかになり、百済時代の城壁は総延長約 2.5 ㎞の包谷式版築壁で東門、南門、北門などの施設をもつことがわかっている。東門跡付近出土の「大通」銘瓦片から 527 年ごろには築造が完了していたと考えられている（朴 2011）。泗沘都城の羅城について、扶蘇山城の東から青山城に至る 900m、青山城―石木里―陵山里―塩倉里につながる羅城 5.5 ㎞、総延長 6.3 ㎞で半月形であることが確認されており、築造時期も扶余遷都以前かほぼ同時期であると考えられている（朴 2011）。

泗沘都城内部の主要施設の造営は 538 年の遷都以前に完成していたと理解されており、都城の設計は熊津時代に計画され、都城の工事には高句麗土器の出土から旧高句麗統治下の人民が従事した（朴 2011）。都城の中央に位置し、泗沘期を代表する寺院である定林寺は遷都以前に築造され、遅くとも 541 年以降に完成したと理解されてきたが。近年の研究では内城外郭型都城として解釈し、扶蘇山城は中国都城制の後苑に類似するとする見解もある（朴 2013）

（4）扶余の古代寺院

泗沘城への遷都は意図的に行われ、都城も整備された。泗沘城には王城と王都をとりまく羅城があり、羅城の内外に寺院があり、外側に古墳群がある。

定林寺跡　扶余の平坦部、街並みの中心部に位置する。現在 5 層の石塔と高麗時代の石仏が残っている。1942 年からの発掘調査で、一塔一金堂式の伽藍配置が確認されている。中門の基壇は東西 13.1 ×南北 7.1m、金堂の基壇は 20.55m × 15.60m、講堂の基壇は 27.05m × 13.10m、回廊基壇は幅 5.2m である。各基壇の中軸線は一直線には並ばない。近年の国立扶余文化財研究所の再調査で、講堂が北回廊と直接連結せず、講堂の左右に独立した建物が存在することがわかっている（李 2012）。高麗時代に再建される前に、創建伽藍が一度焼失している。百済時代の泗沘都城の中心、王宮の南に位置し、泗沘遷都直後の 6 世紀中頃に創建されたと考えられている（申 2007）。泗沘時期の百済寺院ではもっとも早い時期に編年される。『三国史記』にみられる 541 年に聖王が梁に使節を派遣し、涅槃経などとあわせて工匠、画師を請うたことは定林寺の造成と関連すると理解されており、遷都に先立ち定林寺などの新都の主要施設の整備を行っていたと考えられている（朴 2011）。出土した高麗時代の瓦に「定林寺」銘のものがあり、定林寺とよばれている。また、塑像の検討から南朝仏教の影響が考えられている（李 2010b）。

扶蘇山廃寺（西腹寺跡）　扶蘇山中腹に位置する。1942 年に調査が行われ、南門、中門、塔、金堂の遺構が検出された。建物が縦に一列に並ぶ伽藍配置である。講堂の遺構は検出されていない（田中 1987）。はじめから講堂をもたない伽藍配置であったのであれば、百済王宮跡に推定される官北里と隣接していることから、百済王室の祈願寺や内仏堂であった可能性がある（李 2012）。出土瓦の年代から百済後期の年代（7 世紀前・中葉）が考えられている（申・洪 1993）。弥勒寺跡出土品と類似した七葉単弁蓮華文軒丸瓦、鴟尾などの瓦類、定林寺跡出土品と類似した塑造像などが出土している（申 2007）。

軍守里寺跡　宮南池の西 200m ほどに位置する。1935、36 年の発掘調査によって、仏像、塔心礎石が発見され寺跡と判明した。2005 年から整備復元のため行われた調査によって、木塔跡の基壇は一辺約 14.14m の方形でまわりに長方形の塼を横に立てめぐらせている。心礎石は、地表下 1.8m のところから検出された。花崗岩で、一辺 94 ㎝の方形である。金堂の基壇は東西 27.27 ×南北 20m である（金

2011)。講堂基壇は46m × 18mである。南から塔、金堂、講堂がならぶ一塔一金堂式の伽藍配置であると考えられているが、一塔三金堂式とする説もある（田中1989)。心礎石の西辺に傾斜路が確認されており、王興寺の木塔跡との類似が指摘されている（金2011）

陵山里寺跡　扶余の羅城の東門跡と陵山里古墳群の間に位置する。1992年に陵山里古墳群の駐車場建設のための試掘調査で発見された。金堂、木塔、中門の遺構とそれらを囲む暗渠、その北側に講堂、工房の遺構が確認されている。金銅製博山香炉が出土したことで注目されている。威徳13（567）年に聖王のために安置した旨を記した石造舎利龕が出土している（梁2008)。2011年には出土瓦の分類による編年で講堂、東西付属建物についで金堂、塔、回廊の順に建てられたことが明らかとなった。講堂と付属建物（東堂と西堂）について聖明王の陵墓を祀る祠堂であり、567年の仏塔建立を契機として仏教寺院として機能するようになったとする李炳鎬の見解（李2012）が注目されている。

王興寺跡　扶蘇山とは白馬江を隔てた対岸の蔚城山の山腹に位置する。1934年に「王興」銘瓦が出土したことから、現位置が王興寺跡に比定された。国立扶余文化財研究所による発掘調査で2002年に百済時代創建伽藍の東回廊、寺域南辺の石築、木塔の遺構などが検出された（申2007)。木塔跡（14m × 14m）の心礎石の南端付近に設けられた舎利装置の青銅製外合に刻まれた銘文から577（威徳王214）年に創建されたことが明らかとなった（金2011)。

東南里寺跡　軍守里の北500mほどに位置する。6世紀後半を中心時期としている。塔をもたず、中門、金堂、講堂が一直線に並び、講堂左右の回廊の北端それぞれに別途建物が付属するような伽藍配置が想定されている（李2011b)。

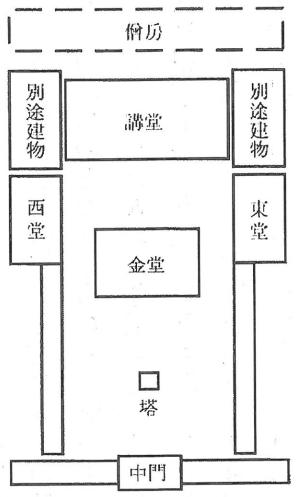
龍井里寺址　青馬山城の北西に所在する。1991年に扶余文化財研究所によって木塔跡の一部と金堂跡が調査され、一塔一金堂式の伽藍配置をもつことがわかっている。金堂の遺構の下層には建物跡が確認され、上層の基壇土内部から下層建物で使用したと推定される蓮華文軒丸瓦が多数出土している。そのなかに、高句麗系の蓮華文軒丸瓦および龍井里寺跡独特の形態の軒丸瓦があることから、創建時期を熊津時期の5世紀末～6世紀初半ごろの泗沘都城築造工事と関連させる見解がある（申2007)。また、高句麗式瓦当が使用されていたことから、寺院ではなく祠堂あるいは国家的な社廟と関連する建物とみる見解もある（朴2011）

金剛寺跡　白馬江からさらに西に約8㎞の扶余中心部からはやや離れた扶余郡恩山面琴公里に所在する。1964、1965年に発掘調査が行われた（金2000)。百済時代に建てられたあと、統一新羅時代、高麗時代に改築されたことがわかっており、伽藍配置は典型的な一塔一金堂式であるが、東から西に中門、塔、金堂、講堂が並ぶ（田中1987)。

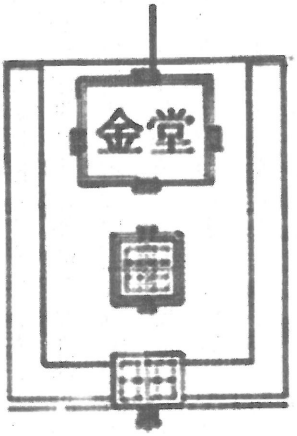
また、扶蘇山には東腹にもかつて寺跡があったとされているほか、百済時代の尼寺の後身との伝承のある皐蘭寺や、錦城山の南側に佳塔里寺跡、扶余村東には佳増里寺跡などがある（田中1989）

泗沘時期の百済寺院の多くは定林寺に代表される回廊内に中門、塔、金堂、講堂を一直線に配する形を基本とし、講堂と回廊の連結部分が講堂左右の別途建物にもつながる型式をとる（李2012)。講堂と回廊の連結部分が直接つながっているか、独立した建物があるのかで、仏地と僧地の区別もふまえた日本の飛鳥寺式、四天王寺式の成立過程が注目されている。定林寺式は大阪府新堂廃寺の伽藍配置との関連性、扶余陵山里廃寺と陵山里寺古墳群との位置関係の類似も指摘されている（李2011a, b)。

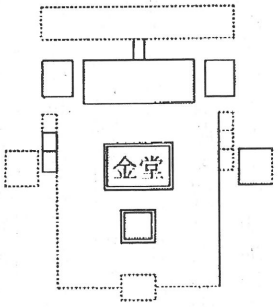
王興寺と陵山里廃寺は威徳王（昌王）の時代に造営されたこと、王室の寺院であること、都城の外



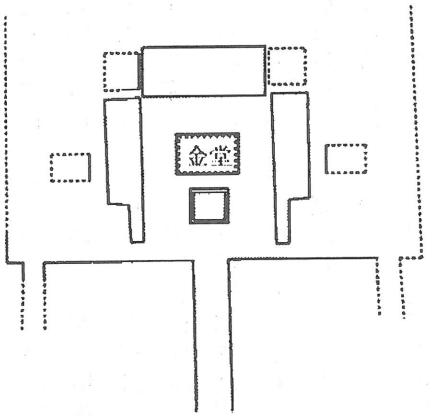
1



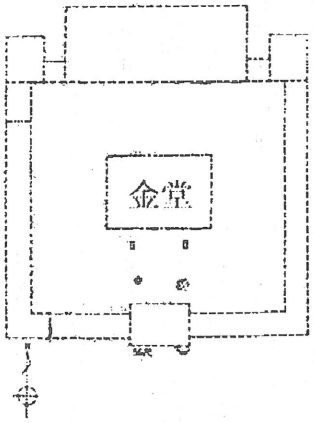
2



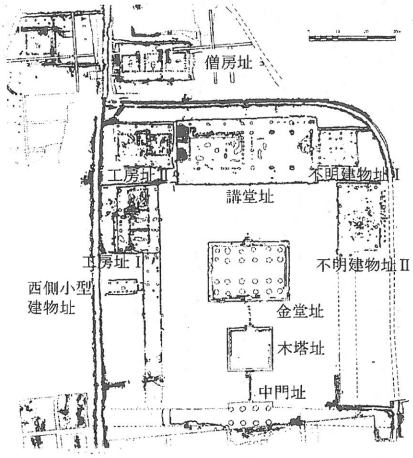
3



4



5



6

1定林寺　2軍守里廃寺　3扶蘇山廃寺　4王興寺　5東南里廃寺　6陵山里廃寺

図 32　扶余の古代寺院の伽藍配置（李 2012 を一部改変）

側に位置すること、舎利を奉安することが共通している（佐川 2010）。王興寺が扶蘇山城のすぐ外側に位置し、陵山里廃寺は扶蘇山東側の羅城の切れ目付近に位置しており、立地も類似している。660 年の百済滅亡後には、王興寺、定林寺などは残るが、陵山里廃寺は廃棄されることについて、位牌のような性格をもつと考えられる木簡や文字を刻んだ木製陽物が出土していることなどから、殉国者のための祈りの場としての護国寺院としての機能をもっていたとする見解もある（李 2010）。

定林寺式伽藍配置は 538 年の泗沘遷都以降に成立し、6 世紀半ばに陵山里廃寺、軍守里廃寺、王興寺が建立され、6 世紀末には一部の建物が建立されない変化を生じた伽藍配置をとる東南里寺跡、扶蘇山廃寺が建てられている（李 2011ab、2012）。

熊津時代から陵山里廃寺の時期、6 世紀中頃に羅城と王宮、官衙建物の一部、6 世紀中葉から 7 世紀初頭まで定林寺、東南里遺跡、軍守里廃寺などの瓦建建物が建てられており、7 世紀前半～後半に都市空間が拡大している（朴 2011）。また、王興寺、陵山里廃寺の舎利にみられる銘文から、釈迦信仰の要素がみられることが指摘されている（鈴木 2010）。

（５）扶余の寺院と西海道、肥後の寺院

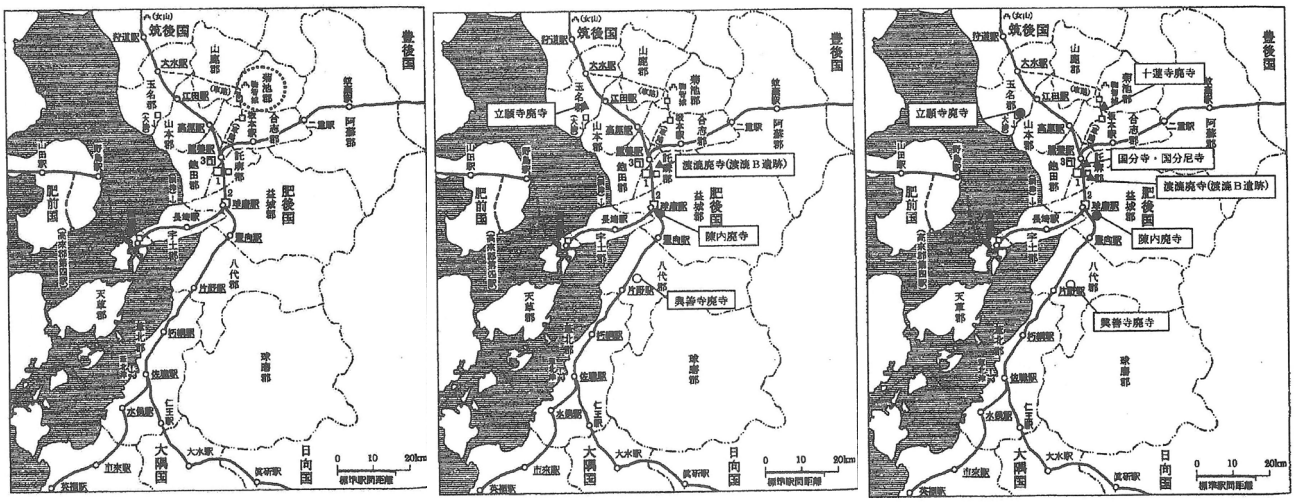
大宰府羅城のみられる北部九州に点在する寺院において、第 3 部で述べたように官寺的性格をもつ伽藍配置である観世音寺式をとる寺院は、確認した限り府の大寺である観世音寺、豊前の上坂廃寺、肥後の陳内廃寺である。

泗沘期の百済の場合、わが国の場合と伽藍の型式それ自体は異なるものの、都城の中心に位置する定林寺、山城に位置する扶蘇山廃寺、聖明王の陵墓のとなりに所在する陵山里廃寺、都城の南に位置する軍守里廃寺は定林式の伽藍配置をとっており、扶余の寺院の中で官寺的性格をもつと考えられる寺院において木塔などの類似例もみられる。また、定林寺、軍守里廃寺、扶蘇山城廃寺は王族のような人によって建てられた可能性があり、貴族によって建てられた寺院も多かったとする見解もある（亀田 2000）。仮に、百済寺院特有の祠堂のような建物の性格に官衙的要素があったとすると、定林寺は都城の中心に早い段階から営まれた官寺とみて、陵山里廃寺はその創建理由から観世音寺に類似した性格を読み取ることも可能であろう。都城の南端に位置する軍守里廃寺は陳内廃寺、王興寺は白馬江の北に位置するため上坂廃寺、扶蘇山廃寺は定林寺と創建時期が開くことから十蓮寺廃寺といったような対応関係にも推測できる。直接的な対応･類似関係をみるのは飛躍しているが、まず都城の中心、ついで都城の南端、羅城の要衝に寺院を配置する点は共通していると考えられないだろうか。

そうであれば、扶余の寺院の性格については各寺院の伽藍配置が類似していることや講堂付属建物の性格についての分析、都城の都市計画の面からも検討が必要であり、伽藍配置型式のみで論を進めることは避けたい。加えて、日本の北部九州に所在する寺院の伽藍配置は一定ではなく、百済でみられるような伽藍配置は九州内では豊前の椿市廃寺があげられる。鞠智城周辺のみならず西海道の寺院と大宰府羅城との総体的な比較も含め、、北部九州にみられる一堂式伽藍の検討が必要と考えるが、これについては今後の課題としたい。

・鞠智城と古代寺院の分布

官道と古代肥後　律令国家が国家体制を構築するなかで最も重要であった国家整備のひとつに道の整備があげられる。中央集権国家の整備には、中央と地方の間の情報の伝達、文物の運搬が必要となり、有事の際の軍備構築にも道は必要不可欠であった。701 年の大宝律令制定により中央集権体制を成立



1.鞠智城Ⅰ期　　2.鞠智城Ⅱ期　　3.鞠智城Ⅲ期前半

●観世音寺式寺院　○法起寺式寺院　▲その他伽藍配置をとる寺院

※但し、立願寺廃寺については観世音寺式の可能性のある寺院として図示した

図 33　鞠智城時期区分における肥後の感動と寺院（木下 2009 に加筆）

させ、五畿七道の行政地域区分に加え、いわゆる国郡郷制度が施行された。肥後国は 690（持統 4）年ごろに成立したと考えられている。肥後地域は古代国家の西海道支配体制において、大宰府についで重要視されていたことは言うまでもない。

肥後国内の古代駅路･駅の研究は木下良、鶴嶋俊彦らによって行われている。木下によって「車路」地名が古代官道の呼び名の変化したものと位置づけられ（木下 2009)、鶴嶋は肥後地域の車路地名による考察をおこなっている。官道は国府と国府とを結ぶのが基本であるので、鞠智城と（7 世紀後半には国府を兼ねていた）詫麻評家との連絡路であるとする木下説、鞠智城下を通る駅路と肥後・豊後連絡路に接続する車路があるとする鶴嶋説がある。どちらの説も初期駅路の鞠智城を経由する車路を含む軍事ルートから『延喜式』に残るルートへ変化したことが想定されている（鶴嶋 2011)。肥後地域の官道の設置時期について、鞠智城のまわりの初期軍事道路については 7 世紀後半の肥後国成立前の段階での整備も考えられている。

律令国家の政策のひとつに仏教による地方支配があげられるが、駅路にそって国分寺が分布することが多いことが知られている（木下 2009)。

肥後の寺院分布と鞠智城の変遷（Ⅰ期～Ⅲ期前半）　前述した鞠智城Ⅰ～Ⅲ期における肥後地域の古代寺院の分布をまとめると図 33 のようになる。各時期に沿って、分布を整理する。

・鞠智城Ⅰ期：7 世紀第 3 四半期～第 4 四半期

鞠智城築城。文献史料では『続日本紀』698（文武 2）年 5 月条に大野城、基肄城とともに修理を行ったとする記事が初見で、大野城、基肄城と同時期に修理されていることから、築城時期も同じ 665 年と考えられてきた。

・鞠智城Ⅱ期：7 世紀末～ 8 世紀第 1 四半期前半

陳内廃寺の創建、伽藍整備が行われ、立願寺廃寺が創建される。渡鹿 B 遺跡にも渡鹿廃寺が建てられる。鞠智城築城からほどなく、陳内廃寺と立願寺廃寺の創建・整備時期となる。7 世紀末～ 8 世紀初頭の大宰府系瓦の導入期にあたって、伽藍の整備が行われたと想定できる。Ⅰ・Ⅱ期において、鞠

智城より南に陳内廃寺がおかれている。陳内廃寺は球磨駅の所在地に比定されている城南町宮地から東に3㎞の位置にあり、大隅、日向を意識したとされる車路豊肥支路よりも南に位置する。

鞠智城Ⅲ期前半：8世紀第1四半期後半～国分寺建立まで

興善寺廃寺が八代に創建される。筑後国と接する玉名郡に所在する立願寺廃寺が玉名郡衙付近に建てられ、一堂型式のⅠ期からⅡ期伽藍に建て替えられたとする見解がある（玉名市・秘書企画課1994）。また、740年以降、8世紀第3四半期ごろまでに国分寺、国分尼寺（陳山廃寺）が創建される。十蓮寺廃寺の創建年代もこの時期にあたる。

観世音寺式伽藍配置をとり、老司系瓦を使用する陳内廃寺寺院が初期に建てられており、薩摩、日向、大隅に至る駅路の球磨駅のほど近くに位置する。車路（初期の軍用道路）が日向大隅を意識したものであったという鶴嶋の研究（鶴嶋1997など）を踏まえると、早い段階で鞠智城出土瓦を祖型とする瓦を導入している点からも陳内廃寺が鞠智城以南（薩摩、日向）を意識して創建されたことが想定できるのではないだろうか。

第2章　南海道の法起寺式をとる寺院と官道

古代国家形成において重要なインフラとして、軍路や流通の動脈となる官道の整備があげられる。南海道においては陸路のみならず、瀬戸内海を通る海路も想定することが必要であるが、ここでは陸路と第3部で集成した法起寺式をとる寺院の位置関係についてみていく。

(1) 南海道の古代山城と寺院

紀伊の法起寺式をとる3寺院の位置する伊都郡のかつらぎ町萩原には平城京から南下するルートとして萩原駅が比定されている。811（弘仁2）年に旧萩原駅は廃され、名草駅に替わる駅として萩原

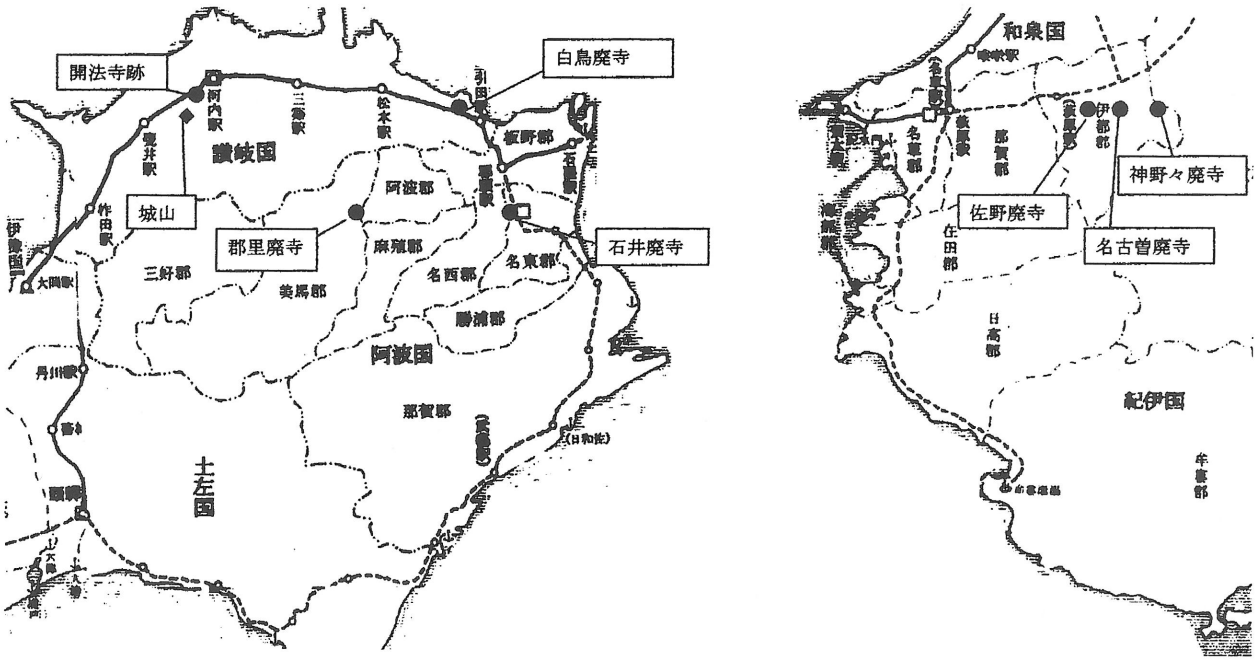


図34　南海道の法起寺式をとる寺院の分布と官道（木下2009を一部改変）

駅をおいたと解釈されている（木下 2009）。

讃岐の開法寺跡は河内駅推定地に近接しており、駅、国府、国分寺・国分尼寺が一つの平野に集中して分布している。古代山城である城山城跡と開法寺跡は約 2 ㎞の距離であることも注目される。また、瀬戸内海沿岸には 8 世紀から東大寺や法隆寺などの畿内寺院の初期荘園がおかれたことが知られている。讃岐国山田郡には 8 世紀初めから弘福寺（川原寺）の所領があり、施入時期は天智朝前半あるいは 673（天武 2）年に遡る可能性が指摘されている（松原 2008）。弘福寺所領のおかれた山田郡は現高松市林町とされている。同市三谷町付近には三谿駅が比定されており、想定駅路の南の日山には烽の存在が考えられている（木下 2009）。阿波の法起寺式寺院はいずれも官道とは離れた場所に位置している。石井廃寺は国府推定地である観音寺遺跡から程近く、国府には 718（養老 2）年から 797（延暦 16）年まで土佐方面への駅路が伸びていたと考えられている（木下 2009）。

畿内王権の 4・5 世紀における瀬戸内海の交通の主ルートは摂津、吉備、讃岐、伊予、豊前・豊後の順であったこと、道後平野の久米官衙遺跡群などから、伊予が瀬戸内海交通において重要な地域であったことが指摘されている（松原 2008）。伊予には法起寺式をとる寺院が分布していない。法隆寺の荘が設置されていること、久米郡の管理氏族がその結びつきに関与していたことが考えられている（松原 2008）。

『日本書紀』持統天皇 3 年 8 月辛丑条に「辛丑に、伊予総領田中朝臣法麻呂等に詔して曰はく、「讃吉国の御城郡に獲たる白鷰、放ち養ふべし」とのたまふ。」とあり、伊予には総領がおかれたことが知られている。総領、大宰に関する研究、議論は盛んに行われており、総領と大宰は同一か否か、またその設置範囲も全国規模であったのか、限られた一部の地域におかれたのかで、現在もなお意見が分かれている（坂元 1964、渡部 1983、直木 1983、中西 1985、亀井 2006 など）。総領が軍事的要地におかれた官職で、その目的も軍事官的要素をもち、国家の要衝におかれたことは共通見解のようである。

また、総領は軍事的役割をもった官職であったとする流れをうけ、大宰・総領と朝鮮式山城の関係についての指摘がなされている。森田梯は、総領は対外防衛のため天智朝から大宝令施行まで西日本におかれた軍事官の性格をもつとし、長門、周防、安芸は周防総領、備後は吉備総領、讃岐は伊予総領が管轄したと考えられ、山城、神籠石は筑紫大宰ないし三総領管轄内にあるとし、総領が山城、神籠石の管理運営に携わっていたとしている（森田 1991）。白石誠二は、総領は国宰の上にたつ上級官職ではなく国宰とかわらない地方官で併存していたとして、伊予総領の管轄範囲は讃岐、伊予の二か国で、各地の総領は山城などの軍事的施設の管理維持などを行う対外的軍事的役割を担っていたと解釈している（白石 1992）。狩野久は、国宰、大宰・総領は大化の評制とほぼ同時期からおかれた官職で、なかでも大宰・総領は斉明朝から天武朝初年にかけておかれ、総領は、筑紫、吉備、周防、伊予に、大宰は筑紫と吉備に限っておかれたとしたうえで、中国では道を軍隊の軍区編成に使ったという例から、筑紫と吉備、越などの特定の地域に限って 7 世紀後半に特別な道制が布かれた時期がある可能性を指摘し、7 世紀後半の地方の行政組織の生まれてくる過程で特定の地域には軍区としての道制が布かれたのではないかと述べている（狩野 2005）。

これらの先行研究から、伊予総領の管轄範囲は讃岐、伊予の 2 か国で、伊予の永納山、讃岐の城山、屋嶋城を管理していたことが想定できる。伊予には法起寺式をとる寺院は分布していないが、讃岐の城山は坂出市城山の国府の西北に位置している。坂出市の開法寺跡は奈良時代に国府付属寺院として

機能したことが想定されている。城山は記録には見えないいわゆる神籠石式古代山城であるが、西日本の古代山城は 664（天智 3）年～ 667（天智 6）年の時期に一連のものとしてつくられたとする狩野の見解に従えば、城山の築城の後に、同郡内に開法寺が創建され、その後国府付属寺院の機能を付与されたことになる。讃岐国府が城山の使用に関与した可能性が考えられており（宮崎編 2011）、開法寺は国府付属寺院の実質的な前身であった可能性が生じる。また第 3 部でも軍事的要衝地におかれた官寺的性格をもつ寺院の伽藍配置として観世音寺式をあげ、鎮護国家思想を付与された伽藍配置であることを指摘してきたが、開法寺は法起寺式伽藍配置をとる可能性が想定されている。

南海道に所在する法起寺式をとる寺院は、藤原宮系、畿内系瓦の出土瓦などからその造営に畿内系勢力との繋がりも言及されている。とくに、紀伊の寺院に関しては川原寺式軒丸瓦が出土しており、川原寺造営にかかわった集団との関係性も指摘されていることから、伽藍配置の決定にも畿内系勢力とその影響が想定される。また、寺院の創建年代はいずれも、7 世紀後半～ 8 世紀前半、白鳳期に想定されている。この時期は全国的に寺院が多く創建されることが知られている。分布の特徴としては、紀伊の 3 か寺が同時期に創建されていること、官道との関係として、紀伊、阿波は駅路、讃岐は南海道に近接した位置に法起寺式寺院が分布していることがいえる。また、讃岐の城山は開法寺跡と近接しており、直接的関係は見出せないものの、今後、拠点寺院と国府、国分寺との関係を考える際に重要な事例になると思われる。

第5部　国家仏教と伽藍配置

第1章　観世音寺式伽藍配置と大寺

ここでは、官寺川原寺と府の大寺とよばれ西海道の仏法の中心であった観世音寺の伽藍配置について「大寺」制度に代表される国家仏教政策との関係を考察する。

「大寺」制「大寺」制は、『日本書紀』680（天武9）年4月条の天武天皇の勅願「勅。凡諸寺者、自今以後、除為国大寺二三、以外官司莫治。唯其有食封者、先後限三十年。若数年満三則除之。且以為、飛鳥寺不可関于司治。然元為大寺面官司恒治。複嘗有功。是以猶入官之例。」からその区分が始まり、この詔によって、国大寺二、三の官が治める寺院、30年に限り食封を有する寺院、それ以外の官が治めない寺院に分けられた。ここでの国大寺二、三は、百済大寺（のちの大官大寺）、川原寺、薬師寺の勅願寺院とこれに飛鳥寺を加えた4か寺であるといわれている。

大寺（国大寺）制度の先行研究としては、中井真孝は内裏の内道場のような建物か、宮室を転用あるいは改作したものを「大寺」と称したと理解し、大寺制は7世紀後半に展開を始める国家仏教の段階において、仏教統制の中枢を担い国家の宗教機能を遂行するため、創設されたとした（中井1991）。宮廷と国大寺の関係について若井敏明は、国大寺は内廷的性格をもつ仏事を執り行い、藤原遷都に伴い宮中での仏事が中断した時期に公的儀礼を行ったことで国大寺制が確立したと解釈した（若井1992）。大橋一章は「大寺」は舒明天皇の天皇家初の勅願寺を推古朝以来の一般寺院と峻別するため、「大」を冠して用いていたものが、舒明天皇勅願寺を指す語となり、その後律令体制の中に組み込まれ、680（天武9）年4月の詔において国家官寺として大官大寺、川原寺、薬師寺、飛鳥寺が律令国家における最高の寺格を保証されたとした（大橋1996）。

また、竹内亮は大寺の起源は勅願寺にあり、舒明朝から天智朝には百済宮と百済大寺、難波長柄豊崎宮と四天王寺、後飛鳥岡本宮と弘福寺（川原寺）、近江大津宮と崇福寺のように宮都と勅願寺が一対で設置され、国家的仏事は宮中で行われるのが通例で、天武朝に始まった大寺制は国家的仏事に奉仕する僧侶を養成し、配置するための機能を大寺に集中させることを本質とした。藤原京遷都まで宮中と大寺の両方で仏事が行われ、国家による一切経の整備も大寺に限定して行われた。そして、藤原京以降には宮と大寺の機能分化がなされたため宮中での仏事が行われなくなったと考えている（竹内2009）。

これに関連して森郁夫は官による寺には、直接的に官による造営がなされたものとして、百済大寺、大官大寺、川原寺、飛鳥寺の4寺に加え、天武朝までに官が関与した寺院として山田寺、法隆寺、中宮寺、法起寺、四天王寺、薬師寺、観世音寺をあげており、これらの寺院を官が統括して維持した理由として、その地域が官の管轄地であったとする考えを述べている（森1998）。

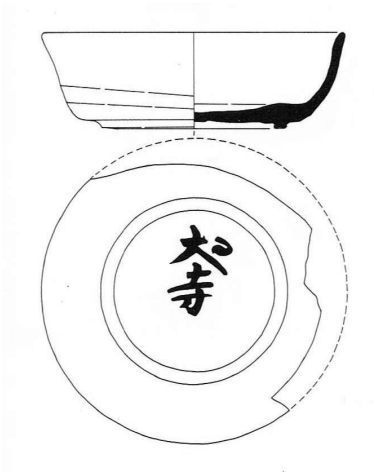


図35　長安寺廃寺跡出土
「大寺」銘墨書土器
（姫野・赤司2002）

以上のように、天武9年の詔によって定められた「大寺」は官によって規定された別格寺院であると理解されている。川原寺は天武9年の詔によって名実ともに官寺の地位が保証された勅願寺院であり、律令国家の官寺「大寺」として機能していた。観世音寺は天武9年の詔で

は「大寺」とはされていないものの、天皇勅願寺院であることに加えて686（朱鳥元）年には30年に限っての封戸200戸が施入されており、その後の大宝令・養老令での「權」の5年以下という規定が738（天平10）年までに適用されていない（水野1993）ことから、持統朝には大寺に相当するものされていたといえよう。

「大寺」とよばれる寺院　大橋一章は文献にみえる「大寺」とよばれる寺院には、1：大寺が単独で普通名詞として用いられたもの、2：大寺単独で特定の寺院を指すもの、3：寺院名称の一部として用いられたものの3種があるとし、大寺は舒明天皇勅願寺院を一般寺院と区別するために用いられたもので、天武9年4月の詔によって第二の勅願寺が国家の官寺として律令体制に組み込まれたことにより大官大寺を改めて大寺とよぶ必要がなくなったため、大官大寺は大安寺と名を変えたと解釈している（大橋1996）。寺院名称の一部として用いられる「大寺」には、西大寺、東大寺などがあげられるが、平城京に関わる官寺の創建年代は大安寺よりも後となり、それらの寺院の伽藍配置は大安寺式をとっている。

福岡県朝倉市須川（旧朝倉郡朝倉町大字須川）の長安寺廃寺跡として史跡指定されている「朝倉橘広庭宮跡」石碑周辺、長安寺廃寺跡の推定寺域北端周辺から「大寺」、「寺□」、「知識」「玄倀」などの墨書土器の出土が報告されている（玉泉・鏡山1937、姫野・赤司編2002）。1933、1934（昭和8、9）年の調査では、3間×5間の礎石建物と基壇が検出され、「大寺」などの墨書土器から40人程度の僧侶をもつ大寺院の跡と考え、寺名も「朝倉大寺」などが提案された（図35）。出土土師器には8世紀中頃～9世紀初めの年代が与えられている。この長安寺廃寺跡の位置する長安寺区は長年、朝倉橘廣庭宮の推定地とされてきた。発掘調査成果から、朝倉宮跡の遺構とする見解は否定されたものの、出土瓦や墨書土器から寺院の存在（長安寺廃寺跡）が考えられている（姫野・赤司編2002）。

そのほか、「大寺」関係の寺院としては、法起寺式をとる寺院であり、8世紀前半の創建とされている茨城県の結城廃寺から「大寺」銘墨書土器が出土している。また、鳥取県の大寺廃寺など大寺地名に由来するものがあげられるほか、国分寺の遺構から「大寺」銘墨書土器などの大寺に関連する遺物が出土する例がよくみられることが知られている。「大寺」とよばれる寺院には、国大寺、国大寺に匹敵する大寺、東大寺や西大寺などの寺院名称の一部として用いられる「大寺」、大寺銘墨書土器などの出土資料から大寺と考えられるもの、寺院所在地の大寺地名による発掘調査後の呼称による大寺名をもつものが考えられる。

一切経と官寺　国家による仏事として経典の読誦、一切経の写経などがある。天武朝初年頃の大寺制において一切経の整備は、大寺の成立とともに一切経を読誦する僧侶を大寺で養成し集中して配置することがその目的の一つであった（竹内2009）ことは先述した。

一切経とは非正統経典を排除した正当な経典の総集であり、収録対象とすべき経典のリストに基づき構成される（竹内2009）。弘福寺（川原寺）では、673（天武2）年に一切経の写経が始まり、675（天武4）年には使を四方に派遣し一切経を博捜させている。677（天武6）年には飛鳥寺において斎会が設けられ一切経読経が実施されている。このような一切経読誦集団がおかれたのは「大寺」制度成立期であり、「大寺」制は都城制の一部をなすものとして評価されている（田村2004、竹内2009）。

国家による読経・説経では、660（斉明6）年に『仁王経』が読まれている。676（天武5）年11月には『金光明経』、『仁王経』が説かしめている。680（天武9）年には4月の詔により官寺の制がしかれ、5月には初めて『金光明経』を宮中および諸寺に説かしめている。681（天武14）年には「諸

国に、家毎に、仏舎を作りて、乃ち仏像及び経を置きて、礼拝供養せよ」との詔が出される。持統朝に入ると、694（持統 8）年、696（持統 10）年に『金光明経』が読まれている。孝徳期前後の 7 世紀中頃に護国仏教の基礎が確立し、この段階で『金光明経』などの護国経典が導入され、7 世紀後半に劇的に増加する地方寺院においても、仏教の普及に加え、護国思想の広まりが志向されて国家の統合を強化する役割が仏教に付与されていた（菱田 2005a）。また、先述したように若井敏明は平城京遷都に伴う宮中仏事の中絶期に国大寺において鎮護国家的な儀礼が行われており、この時期に国大寺本来の内廷的性格に加え、公的な儀礼も行われるようになり儀礼の場として、国大寺が確立したと述べている（若井 1992）。天武・持統朝に造営された寺院は護国という目的のなかでそれぞれの寺に与えられた役割を担っていた（甲斐 2010）。その後の神亀・天平年間には、般若経、『金光明経』の読経の記事が多くみられ、鎮護国家的仏教観が再び顕著となる。観世音寺では、『続日本紀』735（天平 7）年 8 月 12 日条に「府の大寺」で金剛般若経を読誦させたことが記されている。

表 12　護国経典記事年表　（菱田（2005a）、田村（2004）を参考に作成）

		西暦	月	記事
白雉	2	651	12	宮中で一切経を読ませる
斉明	6	660	5	仁王会を設く
天武	2	673	3	川原寺(弘福寺)で一切経の写経を始める
	4	675	10	四方に使を遣わせ、一切経を博捜させる
	5	676	11	四方の国(諸国)で金光明経と仁王経を説かせる
	6	677	8	飛鳥寺で斎会が設けられ、一切経読経が行われる
	9	680	5	この日はじめて金光明経を宮中および諸寺で説かせる
	14	685	3	諸国の家ごとに仏舎を作らせ、仏像、経を置いて礼拝させる
朱鳥	元	686	7	金光明経を宮中に読ませる、大官大寺に観音経を説く
持統	7	693	10	仁王経を百国(諸国)で講じさせる
	8	694	5	金光明経を諸国におき、毎年正月上弦に読ませる
霊亀	2	716	5	諸国寺家の荒廃を防ぐため、寺院を併合させる
				諸国寺家の財物、田園を検校させる
神亀	2	725	7	七道諸国の寺院清掃、金光明経・最勝王経を読ませる
	5	728	12	金光明経を諸国に10巻ずつ頒下する
天平	元	729	6	仁王経を朝堂と諸国で講じる
	7	735	7	府の大寺および大宰府管内諸国の寺に金剛般若経を読ませる

「大寺」と伽藍配置　先述のように塔、金堂を並置し、塔と金堂を同時に礼拝できる伽藍配置は 7 世紀前半代に採用されたと考えられ、この時期は僧官の任命をはじめとして、宮中での初めて仏典が誦され、宮中に仏教が入っていった時期である（森 1998）。天武朝に行われた「大寺」制によって「大寺」とされた寺院は、勅願寺である。天武朝以降に官寺で採用されたのは塔を回廊外にだす型式であったが、その後列島の支配拠点に配置されていったのは、官寺川原寺の流れをくむ伽藍配置である観世音寺式をとる寺院であった。天武朝以降の「大寺」制による「大寺」の出現とほぼ同時に何らかの伽藍配置採用の要因が存在したことが推測される。

大寺制度と観世音寺について、小田富士雄は藤原京遷都以降の中央宮都における宮と大寺の関係を、大宰府都城における政庁と観世音寺の関係におきかえて理解することは妥当であり、近畿の都城制の規模を小さくした形態をとっていると考えた（小田 2010）。これは藤原京遷都以降に原則として宮中では仏事が行われず、宮と大寺の機能分化が行われた（竹内 2009）ことによる。観世音寺は 670 年ごろ天智天皇勅願により造寺が開始され、686（朱鳥元）年には川原寺の伎楽が筑紫に移されており、その移送先は観世音寺であると考えられることなどからこの段階において伽藍は一応の完成を迎えていたと考えられている（髙倉 1983）。

観世音寺の選地について赤司善彦は、その性格は未だ不明瞭であるとしたうえで、筑紫大宰が 7 世紀前期以降筑紫大宰として存在していたこと、大宰府を防御するように配置される筑紫の古代山城の大野城の築城開始時期が白村江敗戦以前より企画されていた可能性があることなどから、大宰府政庁Ⅰ－1 期建物と朝倉橘廣庭宮の遷居が何らかの関係をもつとし、観世音寺の位置選定も朝倉宮の場の記憶を考慮したものである可能性を指摘している（赤司 2010）。そうであれば、先述の天智朝までの

段階における京と宮、京と大寺の関係にあてはめて理解することができるのではないだろうか。そして、天武朝における「大寺」制により、まず中央の勅願寺院の寺格が上げられた際には観世音寺の名は見えないものの、文献にみえる 735（天平 7）年の段階では、すでに「府の大寺」として機能していたことが考えられる。

朝倉橘廣庭宮の候補地としては、赤司説の大宰府のほか、朝倉市須川、同山田、杷木町志波などに比定する朝倉説があげられる。小田和利は朝倉宮を杷木町志波に比定しており、観世音寺「資財帳」庄所章にみえる上座郡杷枝庄について薗地が志波地区にあった朝倉宮跡地の一部を含んだため観世音寺に施入されたと考えている（小田 2010）。朝倉市須川では、現在まで朝倉宮と考えられる遺構は検出されていないが、仮に朝倉宮が現朝倉市に所在した場合、朝倉宮に隣接する寺院として「大寺」があり、それがのちの観世音寺として大宰府に移転した場合も想定できる。しかしながら、先述した長安寺廃寺跡では「大寺」銘墨書土器が検出されているが、土器の年代は 8 世紀以降とされている。観世音寺が事実上の「大寺」として機能する 8 世紀の段階において、同じ地域に勅願寺観世音寺、国分寺のほかに「大寺」とされた寺院があったとは考えにくく、観世音寺の末寺があった可能性も考えられるものの「資財帳」に朝倉荘に該当するものは見受けられない。

7 世紀後半の宮と京、宮と大寺の関係について、667 年に遷都された近江大津宮において、北西方は崇福寺、北方は穴太廃寺、南滋賀町廃寺、南方には園城寺全身寺院、東方には琵琶湖対岸宝光寺、観音堂廃寺跡、花摘寺跡と寺院が宮都出入り口の四方に配置されている（葛野 2002）。これらの寺院は大寺ではないものの、崇福寺は天智天皇勅願寺院であり、山岳寺院という形態ではあるが、広義では観世音寺式をとる。大津宮遷都と同年、高安城、屋島城、金田城が築城されており、このような緊迫した情勢の中でこれら近江の寺院は大津宮を守護する配置であったことが考えられよう。

また、南滋賀町廃寺について、大津宮の中軸線と南滋賀町廃寺の寺域南北中軸線が一致する可能性が指摘されている（黒崎 2010）。また林博通は、南滋賀町廃寺は崇福寺、穴太廃寺、園城寺とならんで、大津京を防御する城の役割をもっていたのではないかという見解を示している（林 1989）。穴太廃寺は、観世音寺式（後期穴太廃寺創建寺院）から法起寺式（後期穴太廃寺再建寺院）へと建て替えられているが、これがどのような思想に基づいて行われたものであるかは、いまだ議論が行われている。第 3 部で検討したように観世音寺式と法起寺式は金堂のとる方位によって区別されるが、観世音寺式に比べ、法起寺式をとる寺院は圧倒的に多く分布しており、何らかの思想、性格の違いがあったものと考えている。国府と仏教政策の関係について、早い段階での護国法会は国庁で行われた例もあるとの考えもあり（鬼頭 1989）、地方寺院への法起寺式の分布展開とともに、このような都城制における仏教寺院のあり方と伽藍配置の区別がどのように行われたのかということについては今後の課題としたい。

天武朝において盛んになる国家仏教の流れをうけ各地の寺院で行われた一切経や護国経典の読経は、講堂、あるいは講堂前庭をも使って行われたことも想定できる。天武朝以降の主要寺院の伽藍配置は塔、金堂を並置した形が多くみられる。特に一塔一金堂式の場合、中門から講堂までに空間をもつ。仏教寺院である以上、経典の読誦は、塔、金堂、講堂を備えた寺院は「大寺」とよばれた、あるいは大寺名をもつ寺院に限って行われたことではないだろう。しかし、地方においては講堂をもたない伽藍配置をとる寺院もあり、国家による仏事をとり行うことのできるよう主要伽藍をそなえることはその寺院が一定の寺格なり経済的基盤を有していただろうこと示していることは想像に難くない。

以上、「大寺」と称され、類似している伽藍配置をとる観世音寺と川原寺について「大寺」制とその目的とされた国家仏事との関係から考察した。観世音寺式の原型である川原寺式をとる川原寺は天武 9 年の詔によって定められた「大寺」であった。観世音寺は天武 9 年の詔によって「大寺」とする記録は残っていないが、686（朱鳥元）年に封戸が施入されていること、勅願寺という性格などから、実質的な大寺として機能していたことが想定できる。「大寺」がおかれた目的の一つとして、先行研究によって一切経などの読経を行うことがあげられており、「大寺」とされた官寺川原寺もその一つであり、川原寺では盛んに国家による仏事が行われている。また天武 9 年の詔による「大寺」制によって、「大寺」とされた寺院では一切経を講じる準備のための費用とする目的があったとする指摘から、この時期に「大寺」とされた寺院では封戸によってその準備を行い、国家による仏事が執り行われたことが考えられる。

「大寺」制度をはじめとする国家仏教政策が行われた天武朝以降、寺院の伽藍配置は、塔と金堂を並置する伽藍配置型式が広がりをみせることとなる。そのなかでとくに金堂が東面するという方位性による性格は機能しつつ、観世音寺式はその後の分布展開とともに鎮護国家的性格を付与されていた。その一方で、大寺と呼ばれた寺院には地方官衙と隣接し、郡寺として機能していたものもある。そのなかには、法起寺式をとる穴太廃寺（後期穴太廃寺再建寺院）、弥勒寺などの寺院もあった。このような天武朝から始まる「大寺」制度などの国家仏教の整備段階において一塔一金堂式で、さらに講堂前に空間をもち、東面することの意義を強調したのが観世音寺式だったのではないだろうか。そしてその伽藍配置をとる代表寺院たる観世音寺は、当初の寺院発願の段階では国家的仏事と宮が一体をなしていたための寺院選地が行われ、その後本尊の変更を行ったため、寺全体の完成が 746（天平 18）年に至ったのではないかという可能性を指摘しておきたい。

第 2 章　国分寺

聖武天皇の詔により、全国 64 か国と多褄、壱岐、対馬島分寺に国分寺（国分僧寺・国分尼寺）が設置され、各国国分寺では、国家の安寧を目的とした法会が行われた。

国分寺建立以前の為政者による仏教政策としては、673 年～ 686 年の天武朝、690 年～ 697 年の持統朝において仏教が奨励され、寺院は増加をみせることとなる前段階があった。7 世紀代に地方における寺院造営を地方豪族たちに奨励し、律令国家が確立後には律令に基づき国家が仏教、僧尼を統制する国家仏教政策を展開するための諸国内緒仏教統制を進める機能も担ったことが指摘されている（佐藤 2011）。

国分寺は、国分僧寺：金光明四天王護国之寺と国分尼寺：法華滅罪之寺の二寺で構成される。法会で読まれる経典について、『金光明最勝王経』には四天王による国土の擁護、除災の効力が期待され、『法華経』には経典の力で国の諸々の罪を滅ぼすことが期待された。ここでの罪とは、天平 7、9 年に流行した疫病（瘡）を指すとされる。また、734（天平 6）年に畿内七道地震、745（天平 17）年に天平地震が起きており、仏法による国家安寧を願う一因となったことも想定される（有富 2014）。

古代において王宮での仏教行事は、難波長柄豊碕宮で初めて本格的に行われ、「天下僧尼」を屈請し仏教によって国家・王権の護持を図るものであった。法会の空間についてははっきりとはわかっていないが、7 世紀後葉になると大津宮に「内裏仏殿」、飛鳥浄御原宮に「御窟院」のあったことがしられており、内裏の主要殿舎が用いられて国家的法会が行われていた。737（天平 9）年に大極殿で

初めて法会が行われてのち、767（天平景雲元）年の正月に最勝王経の講説会が行われていたことが、のちの大極殿御斎会の起点となっている（吉川 2007）。大極殿で最勝王経講讃が行われている間には、諸国の国分寺でも最勝王経転読がなされており、中央と地方が連動する法会の形態は、695（持統 9）年に始まった『金光明経』読経会に淵源をもつ（吉田 1995）。諸寺院において毎年の試験で得度を得た年分度者の人数が 696（持統 10）年は 10 人であったことが知られ[43]、天平年間には数百人から数千人にまでなった（薗田 1967）。

また、天平感宝元（749）年の安居で、実態は不十分でありつつも全国的に完成したとし、天平神護 2 年（766）の安居に国分寺と国分尼寺両方をふくめた国分寺制度の完成の画期があったとする見解もある（堀 2015）。安居とは、雨期の間に寺院に籠り修行を行うもので、わが国では「7 世紀後半にはその存在が確認でき、その後諸大寺や国分寺などの天皇が創建に直接関与した寺院の安居は特に国家の経済的支援も厚」かったようだ（堀 2015）。貞観 5（863）年に作成されたと考えられている「安居縁起」『東大寺要録』巻八によれば、安居は天武 9（680）年 5 月に宮中と諸寺での『金光明経』講説から始まり、天平 13（741）年の国分寺建立詔発布の後、天平 20（748）年 8 月に国分寺の安居での『金光明最勝王経』の講説を命じたと記している。実際の実施は、その翌年の天平 21 年とされる（堀 2015）。

また護国経典の導入と安居については、7 世紀後半の天武朝で護国経典が導入された後も持統朝まで宮中での安居が確認されており、安居は国家の仏事の中心であったと考えられているが、694（持統）8 年の藤原京遷都後は、全国的な正月の『金光明経』読経が命じられている[44]。講経を行う能力をもつ僧侶の育成は、8 世紀以降には安居などを通して主に大寺で行われた。諸国においては 676（天武 5）年 11 月に（『日本書紀』天武 5 年十一月甲申条）「遣使於四方国説金光明経仁王経」とあるように、中央派遣の人物によって、経典の理解を浸透させている段階にある。こののち、8 世紀前半までには大宝律令施行後、大宝 2 年に大寺の僧侶を国師として派遣していることから、諸国への派遣が可能な僧侶の教育がなされていた背景があったが、国分寺や国府において恒常的に講説を行うには至っていなかった（堀 2001）。

国分寺の伽藍計画　国分寺の段階は、Ⅰ期：天平 9 年から 741 年、Ⅱ期：国分寺建立詔～天平 19 年の造営催促、Ⅲ期：国分寺造営催促～ 756 年の聖武天皇崩御……（以下、筆者略）に分けられる（須田 2013a）。なかでも東国の国分寺は、Ⅱ期の造営催促年により近い天平 17、18 年頃の造営であったと考えられている。

七重塔の建立を命じた詔であったが、国分寺の伽藍配置は各国の造営事情が反映され、一律ではない。国司の主導により国府の財源を使用して造営が開始されるが、なかなか順調に建立されなかったことが 747 年の詔から読み取れる。発掘調査が行われておらず、堂塔の配置が解明されていない例も多いが回廊で金堂の前面東西いずれかに塔を配するものと、南北に並ぶ堂塔を囲む回廊の外に塔を配置するものの二つに大きく分かれ、さらに細分化される（須田 2013a）。諸国の造寺造仏意識の受容がその多様性に現われており、全国一律に伽藍を定型化する意識は求められていなかったとする見解（網 2014）もある。

43 『日本書紀』持統 10 年 12 月朔条

44 『日本書紀』持統天皇 8 年 5 月条

国分寺と観世音寺式、法起寺式伽藍配置　前章までで述べた観世音寺式をとる寺院のほかに、時代は下るが、国分寺の例がある。出羽国分寺（堂の前廃寺）と薩摩国分寺である[45]。すなわち陸奥において、郡山廃寺が多賀城廃寺へ移転、出羽において秋田城Ⅰ・Ⅱ期寺院が堂の前廃寺に遷移したが伽藍配置型式を継承して行われていること、陳内廃寺と薩摩国分寺の位置関係、それぞれの伽藍が観世音寺式をとると考えられることから、隼人対策のための軍事拠点の南進にともなって陳内廃寺を南進させたのが薩摩国分寺であると考えている。筆者らは7世紀後半～8世紀初頭ごろの観世音寺式をとる寺院の性格として、鎮護国家的とあらわしたが、天武・持統朝の護国的な仏教思想の後、国分寺建立詔以降の国体的な鎮護国家思想にも寺院伽藍の性格が受け継がれていると理解が可能である。

また、法起寺式をとる国分寺としては、備中国分寺、備後国分寺、丹波国分寺、能登国分寺がある。すでにみたように能登国分寺は、氏族の寺院が国分寺に列せられた事例だが、氏族の寺院が国分寺と関係をもっていたと考えられるものとして、寺本廃寺がある。寺本廃寺は甲斐国分寺の北西4㎞に位置し、南に国府遺跡が隣接している。寺本廃寺で使用された瓦は、甲斐国分寺・国分尼寺でも使用されていることから、国分寺建立の中心勢力であった可能性が指摘されている（猪股ほか2013）。このように国分寺においても、官衙とセットで護国的性格を付される観世音寺式と地方に展開する法起寺式の採用がみられることは、能登国分寺のようにすでにあるものを転用する場合を除くと、造営にあたった諸国のおかれた立場や意識に、国分寺としての役割に加えて少なくとも金堂のとる方位とその選択には意義があったものと想定できるのではないだろうか。

第3章　観世音寺と下野薬師寺

761（天平宝字5）年、下野薬師寺・筑紫観世音寺に戒壇が置かれた（『東大寺要録』）。国の東西に置かれた両寺院はいずれも7世紀後半に発願、創建されたという共通点をもつが、伽藍配置が異なっている。

下野薬師寺　下野薬師寺は、栃木県下野市薬師寺に所在する。1966（昭和41）年から栃木県教育委員会等によって発掘調査が行われ、金堂、講堂、西金堂、東金堂、塔、僧房、中門、回廊などの遺構が検出されている。

須田勉によって発掘調査の成果や研究史、論点がが整理されている（須田2013bほか）。創建年代については、創建期の鐙瓦（101型式）の製作時期によって7世紀第3四半期の天智朝説や天武朝説があるが、考古学上は天武朝とする考えが多いことがまとめられている。文献史料では、『東大寺要録』などでは天智9年に天智天皇によって発願・創建されたとされ、『類聚三代格』[46]の嘉祥元年（848）年の太政官符などでは天武朝に創建されたという記事がみられる（佐藤2007）。また、天平5（733）年『正倉院文書』「右京計帳」にその名がみえ、下野薬師寺造寺工として「於伊美吉子首」が赴任したことが記されている。この小首は従六位上であることから、造寺技術者集団の指導者であったと考えられている。このことなどから、官寺的性格をもっていた寺院と解釈されており、天武朝に発願され、持統朝から文武朝にかけての時期（7世紀末ごろ～）に造営が開始された可能性が高いと考えられている（須田2013b）。

45　貞清・髙倉2010ですでに指摘している。

46　（巻2太政官符）平安時代に編纂された法令集。編者は不明。

創建当初の東金堂や西金堂の規模は飛鳥寺中金堂などと同規模で、飛鳥的な特徴をもつが、その頃の伽藍は、中金堂・東金堂・塔、一本柱塀の回廊が完成していて、西金堂が造営途中の段階であったことが発掘調査によって確認されている。創建当初の伽藍は、三つの金堂を品字型に配し、塔をその中央全面に置く形は、新羅の芬皇寺の創建期の模倣である可能性が指摘されている。官寺化された具体的な時期は、中金堂の建て替えにあたり興福寺からもたらされたと考えられる出土瓦の分析から養老6（722）年ごろと想定されている。その時期に寺院の中金堂が9間×4間に建て替えられ、これが平城京薬師寺の講堂と類似する8世紀型の建物として造営される。

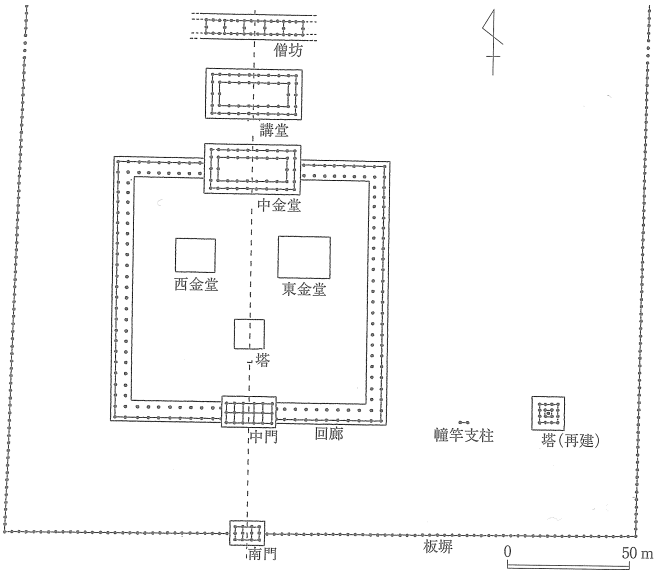


図 36　下野薬師寺の伽藍配置（須田 2013b）

またその選地については、東山道にほぼ沿った位置に建てられていることから、寺院、官道の整備の両方が同時期に行われた可能性が指摘されている（佐藤 2007）。近年では、隣接地（落内遺跡）で寺院関連遺構が見つかっている。寺院の西側で掘立柱建物塀が南北方向に9間分確認されており、下野薬師寺の創建期に造られた塀の可能性が考えられている（木村 2016）。周囲の建物遺構と合わせて造寺にかかる施設が存在した可能性が検討されている。

下野薬師寺は伽藍の規模や、中央との関係性の高さなどから、創建当初からある程度官寺的性格を持っていたとも考えられている。創建に際して、下野の在地勢力における有力者と考えられている下野朝臣古麻呂の関与を大きく評価するむきもあるが須田は、養老6年ごろという時期は多賀城・多賀城廃寺の創建開始時期でもあるため、官寺化に伴う造営の促進は国家的視点からとらえる必要があり、当初国家的性格を有した下毛野朝臣氏の氏寺として創建された寺院が蝦夷の反乱などに伴う政策を背景に、坂東8か国と陸奥・出羽の10か国を代表する国家的寺院（下野薬師寺）としての性格をもって官寺化されたと分析している（須田 2013b）。ほぼ同時期（養老7年）に元正天皇の勅によって沙弥満誓が「造筑紫観世音寺別当」として筑紫に派遣されていることや天平宝字元（749）年に平城京の諸大寺と並び、下野薬師寺、筑紫観世音寺に500町の墾田知限が定められていることから、両寺院の経営・整備を686年ごろから行われた一連の国家による拠点的官寺化政策としてとらえている。

（筑紫）観世音寺はすでに述べた通り、670（天智9）年に天智天皇によって発願され、686（朱鳥元）年に伽藍の完成を迎え、746（天平18）年に本尊である不空検索観世音菩薩像の開眼供養が行われ、寺として「完成」した。筑紫観世音寺の本尊は不空羂索観世音菩薩であり、斉明天皇の追福と護国を兼ね備えた観世音菩薩である（髙倉 2018a）。

これまで述べてきたように寺院の伽藍配置は教義を示していると考えられ、寺院の伽藍配置から教義を読み取る試みは先学により長く試みられている。須田は「下野薬師寺が薬師如来に由来する薬師寺という寺名であったのは、西方の守護である筑紫観世音寺に対し、東方の守護を目的として設立さ

れたから」で「直接侵攻にさらされる脅威からの救済を願った、護国的観音信仰としての性格が強い陸奥観世音寺[47]や筑紫観世音寺に対し、坂東諸国の民生安穏の功徳を重視した仏教政策がとられたのは、これまでもっていた陸奥・出羽国に対する背後地としての役割がさらに強化された政策であった」（須田 2013b）としている。

686 年段階で主要伽藍は完成しており、寺院の諸活動が行われていた観世音寺と 722 年ごろに官寺化・整備された下野薬師寺では、創建の経緯が異なることは先述したとおりである。下野薬師寺の官寺化とほぼ同時期に観世音寺では「供養」が行われており、観世音寺式の伽藍計画を踏まえたうえで、下野薬師寺の伽藍配置・整備が決定され、須田の指摘する下野薬師寺による薬師信仰も踏まえた一連の仏教政策が図られた可能性もあるのではないだろうか。そうであれば、戒壇の設置や伽藍整備の時期など類似点が多くみられる下野薬師寺と筑紫観世音寺が、一連の政策によって創建・整備等が行われたとしても、両寺の伽藍配置が異なっていることは、翻って寺院のとる伽藍配置が教義やその寺院に付与された性格を示しており、それが政権による仏教政策において区別されていたためであると理解が可能であろう。

47　ここでいう陸奥観世音寺は多賀城廃寺をさしている。

第 6 部　伽藍配置の意義

第 1 章　観世音寺式と法起寺式をとる寺院の性格

前部までのまとめ　第 1 部では、わが国への仏教伝来と寺院造営の背景について概観し、わが国の伽藍配置が中国・韓国に比べ、バリエーションに富み、独自の変化を遂げていることを述べた。先行研究においては、当初一塔三金堂式の飛鳥寺式から、四天王寺式、一塔一金堂式で塔・金堂を並置するタイプに変化し、全国に分布していくことが指摘されている。一塔一金堂式で回廊内の西に金堂を配し金堂が東面する観世音寺式は川原寺式の流れとしてとらえられ、朝廷の仏教官の変化や特手の仏像に対する信仰の区別など、説は様々あるが、金堂が南面する法起寺式と区別されるものの明確にその意義についてはわかっていない。そこで本論では網羅的な集成とそれによる分析を試みるにいたったことを述べた。

第 2 部では、古代国家における地方支配と寺院が密接に結びついていたことについて、大宰府と多賀城を事例に述べた。大宰府では観世音寺が、多賀城では多賀城廃寺が官衙に付属する寺院として機能していた。また地方官衙に寺院が付属する例として岐阜県弥勒寺官衙遺跡群を挙げた。

第 3 部では、観世音寺式、川原寺式、法起寺式伽藍配置について集成し、主としてその分布や各伽藍配置をもつ寺院にみられる特徴からその性格について論じた。第 1 章では、観世音寺式は近年まで川原寺式の流れをくむ伽藍配置として整理されてきたが、全国に 12 寺院（15 寺院）が分布しており、官衙・城柵との関係、古代山城と総領との関係などから、国家東西南北端におかれた鎮護国家的性格を付与された寺院とした。

第 2 章では、観世音寺式の祖型である川原寺式に立ち返り、先学によって川原寺式とされている川原寺と南滋賀町廃寺について検討した。この形をとるものは川原寺のみで、これまで川原寺式とされていた南滋賀町廃寺は金堂のとる方位が南向きであり、川原寺式の西金堂を東西棟にした形であることから、法起寺式の祖型と考えられることを指摘した。

第 3 章では、前節で南滋賀町廃寺式の簡略化した形とした法起寺式をとる寺院について全国的に集成を行い、59（60）か寺を確認した。法起寺式寺院は爆発的に寺院が増加する 7 世紀後半以降において全国広範囲に分布することが知られていたものの、先行研究では各地域や出土瓦による分析が中心で、全体を通した検討はあまり行われていなかった。本論での新たな集成をもとに法起寺式寺院全体を検討した結果、法起寺式とされる寺院には、A 法起寺式、B 講堂の南に金堂が配されるもの、C 講堂をもたない可能性があるもの、D 推定法起寺式に大きく 4 分類できることを示した。また、法起寺式寺院の金堂基壇寸法は、吉備池廃寺や飛鳥の主要寺院、観世音寺と比較すると、その平均値がより正方形に近い傾向が認められた。また分布の特徴としては、関東以南の広範囲に長期間みられることが挙げられ、氏族による造寺活動や各地の勢力に採用されるもの（高麗寺）や、地方官衙と一体となって整備されたもの（弥勒寺）、国分寺で採用する事例（備後国分寺など）があり、その様相は多様である。

法起寺式寺院の本尊については、先行研究で南面金堂の方位性から釈迦如来が考えられているが、法起寺の金堂本尊は弥勒菩薩であり、本論で集成した寺院からも対応関係を見出すのは難しい。信仰面の手がかりの一つとして、法起寺、佐野廃寺、備後上山手廃寺が尼寺とされていることから、ほか

にも尼寺が含まれている可能性が指摘できる。

第 4 部では、第 1 章で九州の肥後における古代山城と寺院の分布について、大宰府羅城を構成する熊本県の鞠智城を事例に検討した。観世音寺式、法起寺式をとる寺院を含む寺院の分布について、百済の扶余における山城と寺院のセット関係、都城の中心ついで南端、要衝に寺院を配する点が共通項として挙げられる。第 2 章では、南海道の法起寺式をとる寺院と官道の関係について検討し、駅路や官道に近接した位置に法起寺式寺院が分布することを指摘した。

第 5 部では、国家仏教政策と伽藍配置の関係について論じた。第 1 章では天武 9（680）年に始まる「大寺」制と観世音寺・川原寺の伽藍配置について、一切経の写経や国家による読経などの行事と官寺の関わりから、天武 9 年に大寺とされた川原寺の伽藍配置を簡略化し、朱鳥元（686）年に伎楽が移され実質的な大寺であったと想定される観世音寺式伽藍配置はこのような国家的な流れを受けて計画されたものであった可能性を指摘した。第 2 章では国家仏教の完成形ともいえる国分寺・国分尼寺の伽藍配置についてそれに至るまでの護国経典導入の流れを踏まえ、観世音寺式、法起寺式をとる国分寺が見られることから、国分寺建立段階においても、金堂のとる方位による伽藍配置の区別が行われていたことを指摘した。第 3 章では、761（天平宝字 5）年に戒壇がおかれた下野薬師寺と観世音寺が異なる伽藍配置をとることについて、その伽藍配置採用の背景を探った。670 年に発願された観世音寺と 7 世紀末ごろに造営が開始された下野薬師寺は、749（天平宝字）元年に両寺に 500 町の墾田知限が定められていることなどから一連の地方寺院対策として解釈されるが、仮に一連の政策下で整備されたものだとすると、下野薬師寺が三金堂式の伽藍を採用していることからは、寺院のとる伽藍配置が仏教教義や本尊、付与された性格によって区別されていたことを示すと考えられる。

法起寺式と法会　さて、法起寺式とならんで東西に金堂・塔を配する法隆寺式は吉備寺廃寺（百済大寺）が最も古い。吉備池廃寺の伽藍は、中軸から西寄りの位置に中門が位置する（小澤編 2003）。その理由について、菱田哲郎は塔と金堂を並立させる伽藍が成立する際に、中門の位置が金堂前面を意識したことを示すとした。のちの大官大寺、薬師寺、東大寺では中門が金堂の前面に位置していること、いずれも大寺院であり中門が法会の際に重要な役割を果たしていることから中門の機能が考慮されたと分析、高麗寺は過渡的な様相を示していると評価し、その後の護国法会との関係から長く中核寺院として機能したとする（菱田 2019）。法会については、多くの地方寺院が法起寺式をとっていることから、その地方寺院において行われている法会で用いられる経典について『日本霊異記』等の例から『法華経』『涅槃経』『金剛涅槃経』が多く、護国の経典である『金光明最勝経』が少ないこと、法会の目的としては、追善供養、懺悔悔過が主で、現世利益的な信仰が中心であり、古代東アジアにおける仏教的な世界と相違ないことが指摘されている（三舟 2019b）。その事例の一つには佐野廃寺（法起寺式）があり、地方の集団における信仰が垣間見える。この様子からも、観世音寺式をとる寺院と法起寺式とは明確に区別がなされていたことが看守される。

法起寺式をとる寺院には、金堂と塔が南北に並ぶ形、伽藍中軸線から西寄りに講堂が位置する形がみられる。法起寺式 B グループとした尾羽廃寺、杉崎廃寺、大原廃寺、大海廃寺、佐野廃寺、豊前天台寺である。これらのうち中門が金堂を意識した可能性があるものは、杉崎廃寺、大海廃寺である。杉崎廃寺が二重基壇をもち玉石敷の伽藍であること、佐野廃寺が高麗寺と同様、「霊異記」に登場することは注目される。

観世音寺式と法起寺式のつながり　また、山林寺院に注目している上原真人は、平地寺院とネットワー

クをなす形で、山林寺院を造営した事例として、崇福寺を挙げる（上原 2011）。大津宮に位置する南滋賀町廃寺と崇福寺をセット関係でとらえ、平安時代前期の真言宗寺院における山上の寺＋山麓の寺の関係が 7 世紀にさかのぼる事例ととらえている。南滋賀町廃寺は筆者が法起寺式の祖型とした寺院、崇福寺は観世音寺式とした寺院であり、直線で約 1.5 ㎞の位置にある。上原はこのほかに、鳥取県の大原廃寺：山地（法起寺式）と大御堂廃寺：平地（観世音寺式）、愛知県の北野廃寺：平地（四天王寺式）と真福寺東谷遺跡（山地：伽藍不明）の 2 例を示し、平地寺院と山林寺院がセットで機能するという情報が 7 世紀後半に各地に伝播したと想定している。大原廃寺と大御堂廃寺は約 2.5 ㎞に位置し、瓦が同笵関係にあることなど、南滋賀町廃寺と崇福寺の関係に似ていることが指摘されている。

以上のことから、同じ一塔一金堂式で回廊内の西に金堂、東に塔を配し、金堂が東面する観世音寺式と南面する法起寺式の性格について以下のように考えられる。

観世音寺式（東面金堂）は川原寺式の流れをくみ、日本列島の東西南北端に位置する寺院にみられることから、国家の地方支配に密接に結びついた鎮護国家的思想が付与されていた伽藍配置で、金堂本尊は不空羂索観音菩薩像といえよう。一方、法起寺式（南面金堂）は、南滋賀町廃寺の流れをくみ、主に地方寺院において全国に広く長く採用されていることが改めて明らかとなった。官的要素や護国思想に限らず、現世利益や地域・氏族的なつながりに寄り添った汎用性の高さからは、在地的な仏教信仰の基盤として、例えば観音信仰の広がりにみられるように安置された本尊を礼拝・供養することがより容易な南面金堂が生じたことが想定できるのではないだろうか。

第 2 章　伽藍配置の意義

古代寺院の伽藍配置は、6 世紀後半の飛鳥寺式、四天王寺式などの金堂、塔を縦置し、講堂の全面に建物をおく形から 7 世紀後半ごろには塔と（西）金堂を並置し、その間を広くとる形式の川原寺式、そして塔と金堂を一つずつ配すものとして法隆寺式、観世音寺式、法起寺式、大官大寺式（文武朝）、そのなかで塔を二つもつものとして薬師寺式がそれぞれ方位性などの性格を付与されつつ発生したと考えられる。塔と金堂の位置関係に注目すると、遅くとも 650 年代以降には野中寺式にみられるような塔と金堂を並置する形、川原寺に代表される塔を東、金堂を西に配し、講堂前面に空間をもつ形が現れ、文武朝には塔と金堂の間に空間をもち、金堂から伸びた回廊によって講堂が一つの空間として区分される大官大寺式が現れ、藤原京から平城京への遷都に伴い大安寺式へと変化していく。

飛鳥寺は、蘇我馬子が戦勝を祈願し発願した寺であるが、わが国最初の寺院である。飛鳥寺の塔と仏像について、当時の仏教と政治、外交という視点から松木裕美によって検討が行われている。飛鳥寺の仏舎利は百済国から贈られ、舎利を心礎石におさめる儀式の盛大な様子が『元興寺縁起』の逸文「飛鳥寺系縁起」に残されている。金堂では、当初、中金堂には弥勒仏が収められたのち、『日本書紀』推古天皇 13 年に至り、東西金堂は渡来系の人々によって建てられ、中金堂の弥勒仏を東金堂へ、釈迦丈六三尊像は中金堂、釈迦丈六仏の繡仏は西金堂へ安置したという。この際、高句麗から黄金が贈られている。これらのことから、中国北魏―隋で盛んだった弥勒仏への信仰を取り入れた蘇我氏の動きの後、推古朝に釈迦仏信仰を中心として王権による仏教隆盛を意図したとし、その後、舒明天皇によって塔への信仰が百済大寺へと受け継がれ、塔と金堂を併置する、仏舎利と塔を同時に礼拝する伽藍配置で、九重塔をもつ吉備池廃寺（百済大寺）が建てられたと解釈している（松木 2010）。

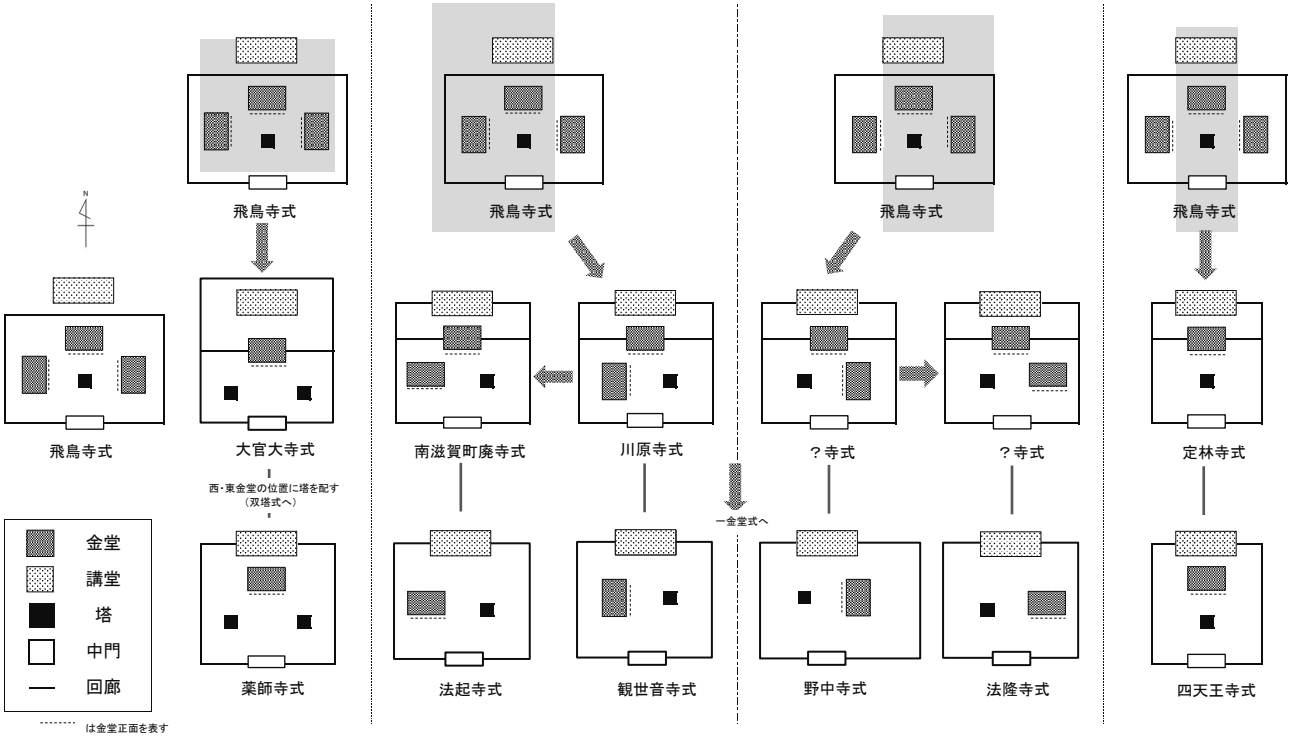


図 37　伽藍配置の変遷図

前章までに論じてきた川原寺式から観世音寺式、南滋賀町廃寺式から法起寺式への伽藍型式変化が想定できるが、この展開は飛鳥寺の伽藍配置の一部を抽出し変化した流れとして整理することができる。すなわち、図 37 のとおり、飛鳥寺式から中・西金堂・講堂・塔・中門を抽出すると、一塔二金堂式の回廊内の西に金堂を配する形となり、川原寺式となる。その西金堂が南面すると南滋賀町廃寺式、さらに中金堂を省略し、金堂と塔をそれぞれ一つ配する形として、金堂が東面する観世音寺式、南面する法起寺式へと展開する。東西対称に同様に、一塔二金堂式の回廊内の東に金堂を配する形として東金堂が西面、南面するものに分かれる。さらに中金堂を省略し、金堂が南面する法隆寺式、西面する野中寺式へと展開する。飛鳥寺式の中金堂・講堂・塔・中門を抽出すると定林寺式、四天王寺式（同講堂と金堂の区画を省略）となる。同様に、西金堂・東金堂を塔に置き換えた形として、大官大寺式、薬師寺式（同区画を省略）となる。造営主体が重要視する信仰や教義、金堂のとる方位や仏舎利への信仰などに合わせた伽藍配置の成立・採用の流れとして、理解が可能である。

本論において、法起寺式は南滋賀町廃寺の簡略形であり、川原寺→観世音寺式、南滋賀町廃寺→法起寺式への流れ（図 37）を示したことは、先行研究における金堂のとる方位が特定の仏像への信仰を示す仏の方位性論自体を否定するものではない。飛鳥寺式から特定の信仰や教義に従って堂塔の配置を選び、一部を抽出し成立・採用したと考えることで、寧ろ積極的に何らかの教義や信仰の存在が浮かび上がる。

また図 37 に示した通り、全国に普及していく伽藍配置の金堂はいずれも南面する形となり、その次の段階では伽藍配置の企画性が失われる。国分寺創建にあたっては、法名を同じ「金光明四天王護国之寺」としているが伽藍配置が一様ではなく、第 3 部でみたように各地の四天王寺は法名を「四天

王寺」とし護国の寺として置かれており、伽藍配置にかわり法名にその意義が込められている。

このように伽藍配置の採用の差は、翻って、同じ金堂を東西に配して並置する形でありながら観世音寺式が法起寺式と区別されていたことを示している。これらとは東西対称の形である法隆寺式（吉備池廃寺式）は百済大寺の建立に際して採用され、寺は官や権力と結びついていたため、地方寺院には採用されづらかったとも想像できる。全国に普及していく伽藍配置の金堂はいずれも南面する形となることからも、法起寺式は多面的に民衆の現世利益や地域・氏族的なつながりに寄り添うための南面金堂をもつ伽藍配置として採用され、広まったのではないだろうか。

おわりに

一塔一金堂式の回廊内の西に金堂を配すタイプである観世音寺式と法起寺式を中心に考察を行った。先行研究において観世音寺式がその特徴的な分布から官衙付属寺院的性格をもつことはすでに指摘されており、筆者も日本列島東西南北端におかれた鎮護国家的性格を付与された伽藍配置であると指摘していたところであったが、改めてその祖型となった川原寺式を通して検討することで、一塔一金堂式で金堂を西に配すタイプの伽藍変遷を読み取ることができた。法起寺式伽藍配置をとる寺院は7世紀後半から多数が分布することは知られていたものの、全国的な分布全体を通して比較することは近年まであまり行われていなかった。法起寺式をとる寺院は分布する期間も長く、際立った特徴がみられず、南面する金堂の汎用性や在地の多義的な教義に沿った性格を示しているようにもみえる。しかし、本論を通して、全国の法起寺式をとる寺院全体の様相をほぼ網羅的に把握できたことは、今後、伽藍配置のようなハード面からのみではなく、各地域における瓦や工人、僧侶の移動など、ソフト面からも、多角的な視野でさらなる分析を行う際の基礎資料となりうるものであると考える。

本論では、法起寺式寺院における金堂の基壇寸法を比較したが、柱間寸法による検討や基壇工法の比較、伽藍を構成する各建物の創建時期差、講堂をもたないタイプの伽藍配置、法隆寺式寺院との比較分析など、まだ課題が多く残されている。近年の朝鮮半島における百済王興寺の伽藍付属建物とわが国の飛鳥寺式との関係性など様々な角度からアプローチを試みる必要があろう。また、法起寺式と東西反転した形である法隆寺式については、先行研究において王権に採用された伽藍配置とされているが、全国に普及していく伽藍配置の金堂はいずれも南面する形となり、その次の段階では伽藍配置の企画性が失われていく。本論で扱った寺院伽藍配置と後の国分寺建立以降の段階における仏教の民衆への広がり、いわゆる村落寺院・村落周辺寺院との関わりについて、地方寺院において広くみられた法起寺式をとる寺院の存続年代からの視点も必要と考える。より一般化していく仏教信仰と伽藍の関係も含めて、今後の課題としたい。

＜引用・参考文献＞

愛知県史編さん委員会編 2010『愛知県史』（資料編 4）考古 4 飛鳥～平安．愛知県

青木敬 2016「寺院造営技術からみた白鳳」『國學院雑誌』117 号：17-35．國學院大學

青木和夫ほか 1990『続日本紀』二　岩波書店

青木和夫ほか 1992『続日本紀』三　岩波書店

赤司善彦 2010「筑紫の古代山城と大宰府の成立について―朝倉橘廣庭宮の記憶―」『古代文化』第 61 巻第 4 号：568-579．古代学協会

朝倉秋富・名越勉・倉吉博物館編 1978『倉吉の文化財』倉吉市教育委員会

足立克己・角田徳幸 1994『島根県松江市山代町所在・山代郷南新造院跡』島根県教育委員会

阿部義平 1991「日本列島における都城形成―大宰府羅城の復元を中心に」『国立歴史民俗博物館研究報告』36 号：3-34．国立歴史民俗博物館

網干善教 2006『大和の古代寺院跡をめぐる』学生社

網伸也 1999「大宅廃寺再考」『瓦衣千年』：43-60．森郁夫先生還暦記念論文集刊行会

網伸也 2005「日本における瓦積基壇の成立と展開 -- 畿内を中心として」『日本考古学』第 20 号：75-92．日本考古学会

網伸也 2014「国分寺の伽藍配置」『季刊考古学』129 号：56-59．雄山閣

網田龍生 1996「大江遺跡群（渡鹿Ｂ遺跡）」『新熊本市史』史料編第一巻　考古資料：991-992．熊本市

有富由紀子 2014「金光明四天王護国之寺と法華滅罪之寺」『季刊考古学』129 号：17-20．雄山閣

有光教一・坪井清足編 1959『大宅廃寺発掘調査概報』京都府教育委員会

池田史人・綿貫綾子・山下歳信・福田貫之編 2010『山王廃寺―平成 20 年度調査報告―』前橋市教育委員会

池田史人・綿貫綾子編 2007『山王廃寺跡―平成 18 年度調査報告―』前橋市教育委員会

池畑耕一 1991「鹿児島県における寺院建立の開始と広がり」『黎明館調査研究報告』第 5 号：1-20．鹿児島県立歴史資料センター黎明館

石田茂作 1956『飛鳥時代寺院址の研究』聖徳太子奉賛会

石田茂作 1978『仏教考古学論攷』思文閣出版

石原道博編訳 1951『新訂魏志倭人伝・後漢書倭伝・宋書倭国伝・隋書倭国伝』岩波書店

石松好雄 2007a「観世音寺式伽藍配置について」『観世音寺　考察編』：205-212．九州歴史資料館

石松好雄 2007b「南海道・西海道の寺院造営」『シンポジウム報告書　天武・持統朝の寺院造営―西日本―』：89-121．帝塚山大学考古学研究所

伊藤武士編 2008『秋田城跡Ⅱ－鵜ノ木地区－』秋田市教育委員会・秋田城跡調査事務所

伊東信雄編 1970『多賀城廃寺跡』多賀城調査報告Ⅰ．吉川弘文館

稲沢市史編纂委員会 1983『新修稲沢市史　資料編 6』新修稲沢市史編纂会事務局

稲津暢洋 1996「陳山廃寺」『新熊本市史』史料編第一巻　考古資料：1053-1057．熊本市

猪股喜彦・瀬田正明・古淵忠秋 2013「甲斐国分寺」『国分寺の創建　組織・技術編』：342-376．吉川弘文館

今泉隆雄 2006「郡山遺跡の時代」『東北―その歴史と文化を探る―』東北大学出版会

上原真人 2011「国分寺と山林寺院」『国分寺の創建　思想・制度編』：118-143．吉川弘文館

上原真人 2014『古代寺院の資産と経営』すいれん舎

宇治市歴史資料館編 2006『菟道遺跡（菟道籔里 14）発掘調査報告書―大鳳寺跡西外区の発見―』宇治市教

育委員会
内田裕一・三沢孝昭編 1988『寺本廃寺：第 1・2・3 次発掘調査報告書』春日居町教育委員会
梅原三千ほか 1961『津市史』第三巻・第五巻．津市役所
嬉野町教育委員会編 2002『釜生田辻垣内瓦窯鴟尾と嬉野の古代寺院』嬉野町教育委員会
江本直 1980『興善寺Ⅱ』熊本県教育委員会
近江俊秀編 1991『池田寺遺跡Ⅲ』大阪府埋蔵文化財協会
大川敬夫 1988「地形からみた尾羽廃寺」『考古学叢考』: 239-263．斎藤忠先生頌寿記念論文集刊行会編
大川敬夫 2008『尾羽廃寺跡の研究』同成社
大阪府教育委員会編 1978『西琳寺跡範囲確認調査概要 1』大阪府教育委員会
大阪府立近つ飛鳥歴史博物館 2013『考古学からみた推古朝』大阪府立近つ飛鳥博物館
大城康雄 1996「池辺寺跡」『新熊本市史』史料編第一巻 考古資料：800-801．熊本市
大橋一章 1996「大寺考」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第 41 輯．第三分冊：105-121．早稲田大学大学院文学研究科
岡崎健一 2008「丹波国分寺とその前史」『京都府埋蔵文化財情報』107 号．財団法人京都府埋蔵文化財研究センター
小笠原好彦 2005『日本古代寺院造営氏族の研究』東京堂出版
岡田茂弘 2004「多賀城廃寺の再検討」『東北歴史博物館研究紀要』5：1-15．東北歴史博物館
岡田茂弘 2010「古代山城としての鞠智城」『古代山城鞠智城を考える』41-54．熊本県教育委員会
岡田容子 2004「備後伝吉田寺について―近年の発掘調査から―」『考古論集』河瀬正利先生退官記念論文集: 691-704．河瀬正利先生退官記念事業会
尾形與典編 1975『堂の前遺跡第 1 次調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告集書第 5 集．山形県教育委員会
尾形與典編 1976『堂の前遺跡 昭和 50 年度調査略報』山形県埋蔵文化財調査報告集書第 7 集．山形県教育委員会
岡寺良編 2007a『観世音寺　遺物編』九州歴史資料館
岡寺良編 2007b『観世音寺　考察編』九州歴史資料館
岡本武司編 1989『近畿自動車道和歌山線建設に伴う池田寺遺跡―発掘調査報告書―』大阪府埋蔵文化財協会
岡本武司編 1990『池田寺遺跡Ⅱ近畿自動車道松原海南線建設に伴う発掘調査報告書』大阪府埋蔵文化財協会
岡本東三 1993「下総龍角寺の山田寺式軒瓦について―その分布が意味するもの―」『千葉史学』22 号：15-42．千葉歴史学会
岡本東三 1996『東国の古代寺院と瓦』吉川弘文館
岡山真智子 2000『石井遺跡―徳島県立名西高等学校施設新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告―』徳島県埋蔵文化財センター
岡山真智子 2003『石井城ノ内遺跡　石井曽我団地地区県営住宅（石井曽我団地）建設工事関連埋蔵文化財発掘調査報告書』徳島県埋蔵文化財センター
小川貴司 2010a「鐙瓦から見た山田寺」『山田寺』各務原市文化財調査報告書第 50 号：233-260．各務原市教育委員会
小川貴司 2010b「山田寺伽藍推定の経緯と発掘の成果」『山田寺』各務原市文化財調査報告書第 50 号：264-269．各務原市教育委員会

奥村清一郎・福山敏男 1976「久世廃寺発掘調査概報」『城陽市埋蔵文化財調査報告書第 4 集』: 1-17. 城陽市教育委員会
小澤毅編 2003『吉備池廃寺発掘調査報告―百済大寺跡の調査―』奈良文化財研究所
小澤毅 2011「7 世紀の日本都城と百済・新羅王京」『日韓文化財論集Ⅱ』: 1-21. 独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所・大韓民国国立文化財研究所
小田和利編 2005『観世音寺　伽藍編』九州歴史資料館
小田和利編 2006『観世音寺　寺域編』九州歴史資料館
小田和利 2010「朝倉橘広庭宮と観世音寺－宮の所在地についての再検討－」九州歴史資料館研究論集 35 号: 21-42. 九州歴史資料館
小田富士雄 1977『九州考古学研究』歴史時代篇. 学生社
小田富士雄 1985『九州考古学研究』文化交渉篇. 学生社
小田富士雄 1997「西日本古代山城に関する最新の調査成果」『古文化談叢』第 37 集：57-85. 九州古文化研究会.
小田富士雄 2000「日本の朝鮮式山城の調査と成果」『古文化談叢』第 44 集：131-170. 九州古文化研究会
小田富士雄 2003「百済熊津・泗沘時代の都城制と倭」『古文化談叢』第 49 集：177-222. 九州古文化研究会
小田富士雄 2006「筑紫・観世音寺創建年代考」『古文化談叢』第 55 集：167-190. 九州古文化研究会
小田富士雄 2010「都城制と「大寺」」『古文化談叢』第 65 集：7-19. 九州古文化研究会
甲斐弓子 2010『わが国古代寺院にみられる軍事的要素の研究』雄山閣
香川県教育委員会編 1983『新編　香川叢書』考古編　香川県教育委員会
香川県埋蔵文化財センター 2010『讃岐国府を探る』香川県埋蔵文化財センター
笠井保夫 1977『和歌山県伊都郡かつらぎ町佐野廃寺発掘調査概報』和歌山県教育委員会
梶原義実 2010a「東畑廃寺」『愛知県史』（資料編 4）考古 4 飛鳥～平安：50-57. 愛知県
梶原義実 2010b「尾張元興寺」『愛知県史』（資料編 4）考古 4 飛鳥～平安：130-135. 愛知県
梶原義実 2010c『国分寺瓦の研究：考古学からみた律令期生産組織の研究』名古屋大学出版会
加藤誠司・松田恵子・世浪由美子編 1999『史跡大原廃寺発掘調査報告書』倉吉市教育委員会
金田一精 1996「水前寺廃寺」『新熊本市史』史料編第一巻 考古資料：1050-1052. 熊本市
金田一精 1997「文様・技法からみた肥後の古瓦」『肥後考古』第 10 号 ：20-40. 肥後考古学会
金田一精 2005「肥後国分寺跡の創建瓦について」『肥後考古』第 13 号：80-88.　肥後考古学会
狩野久 2005「筑紫大宰府の成立」『九州史学』第 140 号：44-56. 九州史学研究会
亀井輝一郎 2004「大宰府覚書　筑紫大宰の成立」『福岡教育大学紀要 第 2 分冊 社会科編』: 47-65. 福岡教育大学
亀井輝一郎 2005「大宰府覚書（二）吉備の総領と大宰」『福岡教育大学紀要 第 2 分冊 社会科編』: 7-23. 福岡教育大学
亀井輝一郎 2006「大宰府覚書（三）―国宰・大宰とミコトモチ―」『福岡教育大学紀要第 2 分冊 社会科編』第 55 号：第二分冊社会科編：1-17. 福岡教育大学
亀岡市文化資料館 2005『シンポジウム丹波国分寺を考える』記録集Ⅰ. 亀岡市文化資料館
亀田修一 1995「瀬戸内海沿岸地域の古代寺院と瓦」『瀬戸内海地域における交流の展開』古代王権と交流 6: 269-318. 名著出版

亀田修一 2007「山陽道・山陰道の寺院造営」『シンポジウム報告書　天武・持統朝の寺院造営―西日本―』: 25-121．帝塚山大学考古学研究所
亀田修一 2008「日韓古代山城の比較」『古代武器研究』9：72-81．古代武器研研究会
亀田修一 2015「考古学からみた仏教の多元的伝播」『仏教文明の転回と表現』: 465-484．勉誠出版
亀田博 2000『日韓古代宮都の研究』学生社
河合英夫・島田敏男 1995「飛騨の伽藍―杉崎廃寺の調査―」『月刊文化財』3 月号：23-35．第一法規
河内一浩 1997「西琳寺跡」『古代寺院の出現とその背景』: 1028-1029．香芝市二上山博物館・埋蔵文化財研究会
川上貞夫 1966『岡益の石堂』矢谷印刷所
河上麻由子 2011『古代アジア世界の対外交渉と仏教』山川出版社
河野一浩編 2004『羽曳野市内遺跡調査報告書―平成 13 年度―』羽曳野市教育委員会生涯教育部文化財保護課文化財保護係
川畑進・松本豊胤 1977「開法寺跡（香川県）」『佛教藝術』116：81-91．毎日新聞社
川本義継 1998「仏教の伝播と初期寺院」『豊津町史』: 372-389．豊津町
岸本浩忠 2003『鳥取県立博物館所蔵古代寺院関係資料集』鳥取県立博物館
木立雅朗 1987a「末松廃寺」『北陸の古代寺院』: 213-216．桂書房
木立雅朗 1987b「国分廃寺（能登国分寺跡）」『北陸の古代寺院』: 231-237．桂書房
木津川市教育委員会 2008『史跡高麗寺跡第 8 次発掘調査概報』木津川市教育委員会
木津川市教育委員会 2010『史跡高麗寺跡第 10 次発掘調査概報』木津川市教育委員会
鬼頭清明 1989「国府・国庁と仏教」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 20 集：121-137．国立歴史民俗博物館
木下良編 2009『事典　日本古代の道と駅』吉川弘文館
木村友則 2016「下野薬師寺隣接地に関連遺構―栃木県下野市落内遺跡」『季刊考古学』第 137 号：95-98．雄山閣
木本誠二 2006『郡里廃寺跡第 3 次発掘調査概要報告書』美馬市教育委員会
木本誠二編 2007『郡里廃寺跡第 4 次発掘調査概要報告書』美馬市教育委員会
木本誠二編 2008『郡里廃寺跡第 5 次発掘調査概要報告書』美馬市教育委員会
木本誠二編 2009『郡里廃寺跡第 6 次発掘調査概要報告書』美馬市教育委員会
木本誠二編 2011「郡里廃寺跡第 7・8 次発掘調査概要報告書』美馬市教育委員会
九州歴史資料館 1980『般若寺跡　大宰府史跡昭和 54 年度発掘調査概報別冊』九州歴史資料館
九州歴史資料館 1988『般若寺跡Ⅱ　大宰府史跡昭和 62 年度発掘調査概報別冊』九州歴史資料館
九州歴史資料館 2002『大宰府政庁跡』九州歴史資料館
九州歴史資料館 2007『観世音寺』九州歴史資料館（伽藍篇、寺域編、遺物編、考察編を一括）
京都府教育委員会 1958『大宅廃寺発掘調査概報』京都府教育委員会
京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課編 2010『飛鳥白鳳の甍～京都市の古代寺院～』京都市文化財ブックス第 24 集．京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課
金聖雨 1998「韓国百済の扶余寺址を中心として観た一塔一金堂形式の変化」『日本建築学会計画系論文集』第 510 号：243-249．日本建築学会

金誠亀 2000「韓国古代寺院の伽藍配置」『帝塚山大学考古学研究所研究報告Ⅱ』: 1-26. 帝塚山大学考古学研究所
金洛中 2011「泗沘期の百済都城と寺刹」『宮都飛鳥』: 170-84. 学生社
郡家町教育委員会編 1980『土師百井廃寺跡発掘調査報告書Ⅱ』郡家町教育委員会
久貝健 1977「神野々廃寺」『仏教芸術』116 : 69-72. 毎日新聞社
日下正剛 1999『石井城ノ内遺跡　石井・神山線地区―主要地方道石井・神山線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―』徳島県埋蔵文化財センター
葛野泰樹 2002「寺院配置からみる大津宮遷都」『日本仏教の形成と展開』: 47-63. 宝蔵館
久保穰二朗 2017「土師百井廃寺の瓦について」『調査研究紀要８』: 1-32. 鳥取県埋蔵文化財センター
熊本県立装飾古墳館分館歴史公園鞠智城・温故創生館編 2011『鞠智城とその時代』熊本県教育委員会
黒崎直 2010「近江大津宮の再検討―その中軸線と南滋賀町廃寺をめぐって―」『坪井清足先生卒寿記念論文集：埋文行政と研究のはざまで』下 : 1017-1024. 坪井清足先生の卒寿をお祝いする会
栗田則久編 2009『栄町龍角寺跡―首都県自然歩道整備事業埋蔵文化財調査報告書―』千葉県環境生活部
桑原隆博編 1980『上山手廃寺発掘調査概報 (2)』広島県教育委員会編
小泉裕司 2010「久世廃寺」『南山城の古代寺院』: 43-59. 同志社大学歴史資料館
小出紳夫・西川修一・山路直充 1993「千葉県印西町木下別所廃寺の鎧瓦」『古代』96 号 : 148-157. 早稲田大学考古学会
古代瓦研究会編 2000『古代瓦研究Ⅰ』奈良文化財研究所
古代瓦研究会編 2005『古代瓦研究Ⅱ』奈良文化財研究所
古代瓦研究会編 2009『古代瓦研究Ⅱ』奈良文化財研究所
小谷徳彦 2002「瓦からみた紀ノ川流域の古代寺院」『帝塚山大学考古学研究所研究報告４』: 53-86. 帝塚山大学考古学研究所
小玉道明・山田猛 1980「Ⅲ. 一志郡嬉野町天華寺廃寺」『昭和 54 年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』: 15-24. 三重県教育委員会
小森秀三編 1978『弓波廃寺跡範囲確認発掘調査報告』加賀市教育委員会
小森秀三 1987「弓波廃寺」『北陸の古代寺院』: 175-178. 桂書房
近藤康司 1997「池田寺跡（明王院)」『古代寺院の出現とその背景』第 42 回埋蔵文化財研究集会 : 1036-1037. 香芝市二上山博物館・埋蔵文化財研究会
近藤康司 2003「備後・宮の前廃寺出土人名瓦考」『考古学論叢』関西大学考古学研究室開設五拾周年記念考古学論叢刊行会
近藤義行･梶本敏三･鷹野一太郎 1979「久世廃寺第 3 次発掘調査概報」『城陽市埋蔵文化財調査報告書第 9 集』: 15-23. 城陽市教育委員会
近藤義行ほか 1980「久津川遺跡群」『城陽市埋蔵文化財調査報告書第 9 集』: 24-41. 城陽市教育委員会
斉藤伸明編 1989『結城廃寺　第 1 次発掘調査概報』結城市教育委員会
坂出市教育委員会 2002『坂出市内遺跡発掘調査報告書』平成 13 年度国庫補助事業報告書. 坂出市教育委員会
坂出市教育委員会 2004『坂出市内遺跡発掘調査報告書』平成 15 年度国庫補助事業報告書. 坂出市教育委員会

酒井仁夫・高橋章 1984「豊前地方の 8 世紀代の軒瓦について―上坂廃寺出土瓦を中心に―」『九州考古学』第 59 号：47-57．九州考古学会
坂田邦洋編 1994『玉名郡衙』玉名市・秘書企画課
坂詰秀一編 2003『仏教考古学辞典』雄山閣
坂本太郎ほか 1993『日本書紀』下．岩波書店
坂元義種 1964「古代総領制について」『ヒストリア』第 36 号：19-39．大阪歴史学会
狭川真一 1999「朝倉橘廣庭宮と筑紫」『古代文化』51 号：253-270．古代学協会
佐川正敏 2010「王興寺と飛鳥寺の伽藍配置・木塔心礎設置・舎利奉安形式の系譜」『古代東アジアの仏教と王権　王興寺から飛鳥寺へ』：159-202．勉誠出版
佐川正敏・西川雄大 2005「山田寺の創建軒丸瓦」『古代瓦研究Ⅱ』1-18．奈良文化財研究所
佐々木洋昭・名和達郎ほか 1980『堂の前遺跡－昭和 53・54 年度調査略報－』山形県埋蔵文化財調査報告書第 30 集．山形県・山形県教育委員会
貞清世里 2009「観世音寺式伽藍配置をとる古代寺院の性格」『平成 21 年度九州考古学会総会研究発表資料集』九州考古学会
貞清世里 2011「川原寺式伽藍配置の検討」『西南学院大学大学院国際文化研究論集』第 5 号：155-175．西南学院大学大学院
貞清世里 2013「南海道の法起寺式伽藍配置をとる古代寺院の検討」『西南学院大学博物館研究紀要』創刊号: 29-38．西南学院大学博物館
貞清世里 2013「肥後地域における鞠智城と古代寺院について」『鞠智城と古代社会』第 1 号．平成 24 年度鞠智城跡「特別研究」論文集：23-42．熊本県教育委員会
貞清世里 2014「西海道の法起寺式伽藍配置をとる寺院の検討」『西南学院大学大学院国際文化研究論集』第 8 号：77-102．西南学院大学大学院
貞清世里 2014「観世音寺式伽藍配置と大寺」『東アジア古文化論攷 2』：442-455．中国書店
貞清世里・髙倉洋彰 2010「鎮護国家の伽藍配置」『日本考古学』第 30 号：21-46．日本考古学協会
佐藤庄一・野尻侃 1984『沼田遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第 78 集．山形県・山形県教育委員会
佐藤禎宏 1986「コシオウ神社と出羽国」『致道』財団法人致道博物館報第 22 号：2-3．致道博物館
佐藤信 2007『古代の地方官衙と社会』山川出版社
佐藤信 2009「下野薬師寺の古代史」『栃木県立文書館研究紀要』第 13 号：1-12．栃木県立文書館
佐藤信 2011「古代の寺院制度と国分寺・国分尼寺」『国分寺の創建　思想・制度編』：230-248．吉川弘文館
佐野勝廣 1989「寺本廃寺の軒瓦について」『山梨考古学論集Ⅱ』：317-327．山梨県考古学協会
真田廣幸 1986「伯耆国大御堂廃寺考」『山陰考古学の諸問題』山本清先生喜寿記念論集刊行会
真田廣幸ほか 2001『史跡大御堂廃寺跡発掘調査報告書』倉吉市文化財調査報告書第 107 集．倉吉市教育委員会
真田廣幸・根鈴智津子 2005「倉吉市大御堂廃寺の調査」『地方官衙と寺院－郡衙周辺寺院を中心として－』: 101-116．奈良文化財研究所
沢村仁 1985「遺構について」『国指定史跡薩摩国分寺跡環境整備報告書』川内市教育委員会
潮見浩ほか 1968『伝吉田寺跡発掘調査概報』広島県教育委員会

滋賀県教育委員会編 1975『衣川廃寺発掘調査報告書』滋賀県文化財保護協会
滋賀県文化財保護協会編 1993『南滋賀遺跡』滋賀県教育委員会文化財保護課
鹿見啓太郎編 1980『備後寺町廃寺―推定三谷寺跡第 1 次発掘調査概報』三次市教育委員会
鹿見啓太郎編 1981『備後寺町廃寺―推定三谷寺跡第 2 次発掘調査概報』三次市教育委員会
鹿見啓太郎編 1982『備後寺町廃寺―推定三谷寺跡第 3 次発掘調査概報』三次市教育委員会
重松敏彦 2009「大宰府の成立過程―その対外的機能の展開を中心として―」『考古学ジャ―ナル』7 月号：8-13．ニュ―・サイエンス社
篠川賢 1996『日本古代国造制の研究』吉川弘文館
篠原英政・田中弘志 2001「弥勒寺跡・弥勒寺東遺跡―美濃国武義郡衙と郡寺―」『古代』第 110 号：169-193．早稲田大学考古学会
柴田実 1941『崇福寺阯』大津京阯・下　滋賀県史蹟調査報告第 10 集．滋賀県
島田滋編 1981『上山手廃寺発掘調査概報（3)』広島県教育委員会編
島巡賢二編 1977『史跡宮の前廃寺跡―調査と整備―』福山市教育委員会
清水真一 1988「Ⅷ章考察編 1．伽藍配置」『寺本廃寺　第 1・2・3 次発掘調査報告書』：86-91．山梨県春日居町教育委員会
清水真一・吉村博恵編 1979『土師百井廃寺跡発掘調査報告書Ⅰ』郡家町教育委員会
城陽市教育委員会社会教育課編 1980『城陽市埋蔵文化財調査報告書第 9 集』城陽市教育委員会
白石成二 1992「古代総領制をめぐる諸問題―伊予総領を中心に―」『ソ―シアル・リサ―チ』5 号：13-34．ソ―シアル・リサ―チ研究会
城倉正祥・ナワビ矢麻・渡辺玲・青笹基史 2017「下野龍角寺の発掘（Ⅱ期 3 次）調査―遺構編―」『プロジェクト研究』第 12 号：15-42．早稲田大学総合研究機構
申光燮・洪性彬 1993「百済扶蘇山廃寺の発掘」『仏教藝術』207 号：54-72．毎日新聞社
申鍾國（武末純一訳）2007「(資料）泗沘都城発掘調査の成果と意義」『福岡大学人文論叢』第 39 巻 1 号：205-238．福岡大学研究推進部
新川登亀男編 2015『仏教文明と世俗秩序』勉誠出版
新名強 1997「嬉野廃寺」『古代寺院の出現とその背景』：529．香芝市二上山博物館・埋蔵文化財研究会
神野信一 1990「二．仏教政治の展開」『新修稲沢市史　本文編』考古第 2 章：93-107．新修稲沢市史編纂会事務局
神野信編 2009『龍女建立―龍角寺古墳群と龍角寺―』千葉県立房総のむら
杉崎廃寺跡発掘調査団編 1998『杉崎廃寺跡発掘調査報告書』古川町教育委員会
杉原敏之 2011『遠の朝廷・大宰府』新泉社
杉本宏編 1984『大鳳寺跡第 4 次発掘調査概報』宇治市教育委員会
杉本宏編 1985『大鳳寺跡第 5 次発掘調査概報』宇治市教育委員会
杉本宏編 1986『大鳳寺跡第 6 次発掘調査概報』宇治市教育委員会
杉本宏編 1987『大鳳寺跡発掘調査報告』宇治市教育委員会
鈴木嘉吉 1974『法隆寺東院伽藍と西院諸堂』岩波書店
鈴木靖民 2010「王興寺から飛鳥寺へ―飛鳥文化の形成―」『古代東アジアの仏教と王権』：11-46．勉誠出版
須田勉 2003「古代地方行政機関の整備と画期」『日本考古学』第 15 号：57-93．日本考古学協会

須田勉 2008「結城廃寺・結城八幡瓦窯跡」『千葉県の歴史』: 716-725. 千葉県
須田勉 2013a「国分寺造営の諸段階―考古学から―」『国分寺の創建　組織・技術編』: 2-44. 吉川弘文館
須田勉 2013b『日本古代の寺院・官衙造営　長屋王政権の国家思想』吉川弘文館
須田勉・阿久津久 2013『東国の古代官衙』高志書院
成周鐸 1993「大宰府城郭と百済泗沘都城との比較考察」『考古学ジャーナル』369 号：25-30. ニューサイエンス社
妹尾周三 2011「出雲へ伝わった仏教の特質―古代寺院から見た地域間交流とその背景―」『古代出雲の多面的交流の研究』: 167-183. 島根県古代文化センター
薗田香融 1967「平安仏教の成立」『日本仏教史』古代編：175-240. 法蔵館
多宇邦雄 1998「龍角寺跡」『千葉県の歴史』: 454-459. 千葉県
高倉敏明 1991「山王遺跡」『多賀城市史』4 考古資料：152-223. 多賀城市
高倉敏明 2008『多賀城跡』同成社
髙倉洋彰 1983「筑紫観世音寺史考」『大宰府古文化論叢』下：97-132. 吉川弘文館
髙倉洋彰 1996『大宰府と観世音寺』海鳥社
髙倉洋彰 2018a「観世音寺伽藍朱鳥元年完成説の提唱」『大宰府の研究』: 499-517. 高志書院
髙倉洋彰 2018b「古代寺院の伽藍配置の意味」『見聞考古学のすすめ』雄山閣
滝口宏編 1979『木下別所廃寺第 2 次発掘調査概報』千葉県教育委員会
竹石健二・澤田大多郎 2009「川崎市影向寺境内（4）遺跡発掘調査報告―薬師堂西―」『竹石健二先生・澤田大多郎先生古希記念論文集』: 257-282. 六一書房
武内雅人・田中清美・西村歩 1991『池田寺遺跡Ⅳ』大阪府埋蔵文化財協会
竹内亮 2009「大寺制の成立と都城」『古代都城のかたち』: 105-127. 同成社
竹田宏司 2001「立願寺廃寺の発掘調査について」（肥後考古学会第 222 回例会資料）肥後考古学会
竹田宏司編 2002「立願寺廃寺」『玉名市内遺跡調査報告書Ⅰ平成 11・12 年度の調査』: 101-116. 玉名市教育委員会
太宰府市教育委員会 2007『大宰府条坊跡 32―般若寺周辺の調査―』太宰府市教育委員会
太宰府市史編集委員会 1997『太宰府市史』古代資料編. 大宰府市
田中俊明編 1989『韓国の古代遺跡』2 百済・伽耶篇. 中央公論社
田中俊明 2011a「古代朝鮮における羅城の成立」『東アジア都城の比較研究』: 23-41. 京都大学学術出版会
田中俊明 2011b「朝鮮三国の陵寺について」『東アジア都城の比較研究』: 188-207. 京都大学学術出版会
田中弘志 2005「「郡寺」と郡衙―関市弥勒寺遺跡群の調査から―」『地方官衙と寺院―郡衙周辺寺院を中心として―』: 79-100. 奈良文化財研究所
田中弘志 2008『律令国家を支えた地方官衙・弥勒寺遺跡群』新泉社
田辺哲夫 1955「立願寺廃寺跡中間報告」『日本考古学協会彙報』日本考古学協会
田辺哲夫 1956「玉名郡倉址と推定される肥後立願寺の遺構」『熊本史学』10 号：1-11. 熊本史学会
田辺哲夫 2005「第 3 篇古代」『玉名市史』通史編上巻：113-168. 玉名市
谷口梢 2010「丸亀市の古代寺院」『帝塚山大学考古学研究所研究報告』12：37-49. 帝塚山大学考古学研究所
谷口正美 1982『山王廃寺跡第 7 次発掘調査報告書』前橋市教育委員会

谷澤仁 1994「肥前国府域周辺の墨書土器についてⅠ」『佐賀考古』第 1 号：119-138．佐賀考古談話会
玉泉大梁・鏡山猛 1937「朝倉橘廣庭宮遺跡　長安寺廃寺跡調査」『福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書』第十二輯．福岡県
玉川文化財研究所編 2007『川崎市宮前区影向寺遺跡第 12 次調査発掘調査報告書』宗教法人影向寺
玉名市・秘書企画課 1994『玉名郡衙』
田村圓澄 2002『古代国家と仏教教典』吉川弘文館
田村圓澄 2004「天武・持統朝における「国家仏教」の創出」『古代文化』第 118 号：2-10．古代学研究所
丹野拓 2017「白鳳寺院からみた畿内南限と日本南限」『紀伊考古学研究』第 20 号：20-29．紀伊考古学研究会
長洋一監修 2009『日本古代の思想と筑紫』櫂歌書房
辻史郎 1998「木下別所廃寺」『千葉県の歴史』：398-403．千葉県
辻史郎 2001「下総国結城廃寺の伽藍配置と瓦について」『古代』110 号：195-220．早稲田大学考古学会
辻本和美 1996「南山背の古代寺院と瓦積み基壇」『京都府埋蔵文化財論集』第 3 集：351-364．京都府埋蔵センター
鶴嶋俊彦 1991「肥後における歴史時代研究の現状と課題」『交流の考古学』：105-133．朝倉書店
鶴嶋俊彦 2004「肥後国」『日本古代道路辞典』：366-372．八木書店
鶴嶋俊彦 2011「古代官道車路と鞠智城」『古代東アジアの道路と交通』：343-358．勉誠出版株式会社
土肥富士夫編 1994『史跡野と国分寺跡―第 5・6・7 次発掘調査報告』七尾市教育委員会
東海埋蔵文化財研究会岐阜大会実行委員会事務局編 1992『古代仏教東へ：寺と窯』東海埋蔵文化財研究会
同志社大学歴史資料館 2010『南山城の古代寺院』同志社大学歴史資料館
鳥取県教育委員会 1967『大寺廃寺発掘調査報告書』鳥取県教育委員会
鳥取県教育委員会社会教育課 1966『大寺廃寺発掘調査略報』鳥取県教育委員会
豊津町歴史民俗資料館編　1996『豊前国の古代寺院展図録』豊津町歴史民俗資料館
直木孝次郎 1983「大宰と総領」『大宰府古文化論叢』上巻：353-378．吉川弘文館
中井真孝 1991『日本古代仏教制度史の研究』法蔵館
仲川靖 2001「8．考察　第 1 章（1）穴太廃寺における諸問題」『一般国道 161 号（西大津バイパス）建設に伴う穴太遺跡発掘調査報告書Ⅳ』：282-295．滋賀県教育委員会事務局文化財保護課
仲川靖 2008「穴太廃寺に関する調査・研究の現状と課題」『人間文化 23 号』：82-93．滋賀県立大学人間文化学部
中島正 1997「南山城における伽藍造営の伝播」『堅田直先生古希記念論文集』：479-489．堅田直先生古希記念論文集刊行会
中島正 2009「高麗寺式軒瓦の様相」『古代瓦研究Ⅲ』：69-78．奈良文化財研究所
中島正 2010a「高麗寺」『同志社大学歴史資料館調査研究報告第 9 集　南山城の古代寺院』：222-267．同志社大学歴史資料館
中島正 2010b「燈籠寺廃寺」『同志社大学歴史資料館調査研究報告第 9 集　南山城の古代寺院』：273-280．同志社大学歴史資料館
中島正 2010c「里廃寺」『同志社大学歴史資料館調査研究報告第 9 集　南山城の古代寺院』：173-183．同志社大学歴史資料館

中島正編 2011『史跡　高麗寺廃寺Ⅱ』木津川市教育委員会
長島栄一編 2005『郡山遺跡発掘調査報告書 総括編（一)』仙台市文化財調査報告書第 283 集．仙台市教育委員会．
中西正和 1985「古代総領制の再検討」『日本書紀研究』第 13 冊：205-240．塙書房
中林隆之 1994「護国法会の史的展開」『ヒストリア』第 145 号：1-25．大阪歴史学会
中山圭 2005「鞠智城出土の軒丸瓦 -- 朝鮮式山城古瓦の一様相」『九州考古学』80 号：45-67．九州考古学会
永山修一 2009『隼人と古代日本』同成社
七尾市教育委員会文化課編 1994『史跡能登国分寺跡整備事業報告書』七尾市教育委員会
奈良県立橿原考古学研究所 1977『法起寺境内発掘調査概報』奈良県立橿原考古学研究所
奈良県立橿原考古学研究所編 1990『長林寺』河合町教育委員会
奈良女子大学古代学学術研究センター編 2014『都城制研究 8』奈良女子大学古代学学術研究センター
奈良文化財研究所編 2003『古代官衙・集落と墨書土器―墨書土器の機能と性格をめぐって―』奈良文化財研究所
錦織亮介 1976「観世音寺と不空羂索観音像」『仏教芸術』108 号：39-52．毎日新聞社
西住欣一郎 1999「発掘から見た鞠智城跡―最近の調査成果から―」『先史学・考古学論究 3』：139-158．龍田考古会
西住欣一郎・矢野祐介・木村龍生編 2012『鞠智城Ⅱ』熊本県教育委員会
西村勝広編 2010『各務原市文化財調査報告書第 50 号　山田寺跡第 1・2・3・4 次範囲確認調査報告書』各務原市教育委員会
野口美幸 1992「天花寺廃寺」『古代仏教東へ：寺と窯』：97-101．東海埋蔵文化財研究会
野田拓治編 1980『興善寺Ⅰ』熊本県教育委員会
朴淳發 2011「泗沘都城研究の現段階」『東アジア都城の比較研究』：42-69．京都大学学術出版会
朴淳發 2013「比較都城史の観点からみた百済都城の外郭」『東アジア都城比較の試み』東亜都城研究会資料
橋本市教育委員会 1977『和歌山県橋本市神野々廃寺跡緊急発掘調査報告書』橋本市教育委員会
服部隆博・栗田一生編 2014『橘樹官衙遺跡群の調査』川崎市教育委員会
服部哲也編 1994『尾張元興寺跡発掘調査報告書』名古屋市教育委員会
服部哲也編 2002『尾張元興寺跡第 7 次調査報告書』名古屋市教育委員会
花谷浩 2010「古代寺院の瓦生産と古代山陰の領域性―出雲西部を中心に―」『出雲国の形成と国府成立の研究―古代山陰地域の土器様相と領域性―』：289-296．島根県古代文化センター
林博通 1989『近江の古代寺院』近江の古代寺院刊行会
林博道編 2001『一般国道 161 号（西大津バイパス）建設に伴う穴太遺跡発掘調査報告書Ⅳ』滋賀県教育委員会事務局文化財保護課
原裕司編 1990『下府廃寺跡発掘調査概報』浜田市教育委員会
原裕司編 1993『下府廃寺跡』浜田市教育委員会
菱田哲郎 1994「瓦当文様の創出と七世紀の仏教政策」『ヤマト王権と交流の諸相』：207-232．名著出版
菱田哲郎 2005a「日本列島の国家形成と宗教政策」『国家形成の比較研究』：100-119．学生社
菱田哲郎 2005b「古代日本における仏教の普及」『考古学研究』25 巻 3 号：29-44．考古学研究会
菱田哲郎 2007a「丹後地域の古代寺院」『丹後地域史へのいざない』：3-16．思文閣出版

菱田哲郎 2007b『古代日本国家形成の考古学』諸文明の起源 14．京都大学学術出版会
菱田哲郎 2019「高麗寺からみた古代日本の仏教」『日本古代寺院史の研究』: 101-118．思文閣出版
菱田哲郎・吉川真司 2019『日本古代寺院史の研究』思文閣出版
姫野健太郎・赤司善彦編 2002『長安寺廃寺跡・宮地獄古墳群』朝倉町文化財調査報告書第 10 集．朝倉町教育委員会
平井勝編 1980『小殿遺跡（英賀郡衙推定地）・英賀廃寺』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告第 38 集．岡山県教育委員会
平岡勝昭・太田幸博・鶴嶋俊彦・柳原真由美 1982『肥後国分僧寺Ⅰ』熊本県教育委員会
平岡定海 1981『日本寺院史の研究』吉川弘文館
平方幸雄・菅田薫 1988「42 大宅廃寺」『昭和 60 年度京都市埋蔵文化財調査概要』: 103-108．京都市埋蔵文化財研究所
廣岡敏・中山雅弘編 2004『夏井廃寺跡』いわき市埋蔵文化財調査報告第 107 冊．いわき市教育委員会
広島県教育委員会編 1979『上山手廃寺発掘調査概報（1)』広島県教育委員会編
広島県立歴史民俗資料館 1998『平成 10 年度考古企画展ひろしまの古代寺院寺町廃寺と水切り瓦』広島県立歴史民俗資料館
広島県立歴史民俗資料館 1999『広島県立歴史民俗資料館　研究紀要』第 2 集 広島県立歴史民俗資料館
広瀬和雄 1982『観音寺遺跡発掘調査報告書』大阪府教育委員会
廣瀬正照 1984『肥後古代の寺院と瓦』廣瀬正照遺稿集刊行会
福井県埋蔵文化財センター 2009『第 25 回福井県発掘調査報告会資料』福井県埋蔵文化財センター
福田敬編 2007『南滋賀町廃寺発掘調査報告書』大津市教育委員会
福山敏男 1948『奈良朝寺院の研究』高桐書院
藤井保夫 1977「佐野廃寺」『仏教芸術』116：72-76．毎日新聞社
藤井直正 1978「讃岐開法寺考―国府と古代寺院」『史迹と美術』48：162-175．史迹・美術同攷會
藤井利章 1984「河内国府と衣縫廃寺」『龍谷史壇』85：1-12．龍谷大学史学会
藤田亮策編 1960『川原寺発掘調査報告』奈良国立文化財研究所学報第 9 冊．奈良国立文化財研究所
藤本誠 2017「古代村落の「堂」研究の現状と課題」『民衆史研究』93 号：3-16．民衆史研究会
文化庁 2009『埋蔵文化財発掘調査報告第 8　史跡末松廃寺』文化庁
兵谷有利編 2006「立願寺廃寺Ａ地点」「立願寺廃寺Ｂ地点」『玉名市内遺跡調査報告書Ⅰ平成 15・16 年度の調査』玉名市教育委員会
北條献示 1990『東畑廃寺跡発掘調査報告書（2)』稲沢市教育委員会
北條献示 1991『東畑廃寺跡発掘調査報告書（3)』稲沢市教育委員会
北條献示 1992『東畑廃寺跡発掘調査報告書（4)』稲沢市教育委員会
北條献示 1993『東畑廃寺跡発掘調査報告書（5)』稲沢市教育委員会
北條献示 1994『東畑廃寺跡発掘調査報告書（6)』稲沢市教育委員会
北條献示 1995『稲沢市内遺跡発掘調査報告書（1）東畑廃寺跡（7)』稲沢市教育委員会
北陸古瓦研究会 1987『北陸の古代寺院』桂書房
堀裕 2001「智の政治史的考察―奈良平安前期の国家・寺院・学僧」『南都仏教』80：47-71．南都仏教研究会

堀裕 2013「法会に刻まれた古代の記憶―大供と大修多羅衆」『仏教史学研究』46 － 1：47-75．仏教史学会
堀裕 2015「国分寺と国分尼寺の完成―聖武・孝謙・称徳と安居」『国史談話会雑誌』56 号：45-60．東北大学国史談話会
埋蔵文化財研究会 1997『古代寺院の出現とその背景』第 42 回埋蔵文化財研究集会．香芝市二上山博物館・埋蔵文化財研究会
間壁葭子 1970「官寺と私寺」『古代の日本』4 中国・四国：267-292．角川書店
正岡睦夫・岡本寛久編 1978『大海廃寺緊急発掘調査報告書』岡山県教育委員会
正岡睦夫・岡本寛久編 1979『大海廃寺緊急発掘調査報告書Ⅱ』岡山県教育委員会
町田章編 1989『古代史復元 8　古代の宮殿と寺院』講談社
町田甲一 1977「法起寺の歴史」『大和古寺大観』第 1 巻：岩波書店
松木裕美 1996「川原寺の創立―その安置仏像と国家仏教―」『日本古代の国家と祭儀』：358-384．雄山閣
松木裕美 2010「飛鳥寺の塔とその思想」『古代東アジアの仏教と王権』：353-370．勉誠出版
松下正司 1977「仏教文化の受容」『古代の地方史』2．山陰・山陽・南海編：114-140．朝倉書店
松田正昭編 1983『神野々廃寺跡発掘調査概報 2』橋本市教育委員会
松葉竜司編 2012『美浜町内遺跡発掘調査報告書 3』美浜町教育委員会
松葉竜司 2019「古代若狭における寺院造営の一様相」『日本古代寺院史の研究』：399-414．思文閣出版
松原弘宣 2008『古代瀬戸内の地域社会』同成社
松村恵司・冨永里奈編 2004『川原寺寺域北限域の調査―飛鳥藤原第 119 - 5 次発掘調査報告―』奈良文化財研究所
松本雅明 1961「興善寺廃寺調査報告」『肥後の国府と古代寺院址の研究―松本雅明著作集（3）―』弘生書林
松本雅明 1965「陳内廃寺調査報告」『城南町史』城南町史編纂会
松本雅明 1987『肥後の国府と古代寺院址の研究』―松本雅明著作集（3）―』弘生書林
松本雅明・高野啓一 1977「稲佐廃寺の伽藍配置」『熊本史学』50 号：83-97．熊本史学会
松本百合子 2000「長林寺の創建瓦」『古代瓦研究Ⅰ』：161-168．奈良国立文化財研究所
真鍋昌弘・西岡達哉編　1983「白鳥廃寺」『香川県埋蔵文化財調査年報　昭和 57 年度』：7-11．香川県教育委員会松山市教育委員会文化財課 2012「来住廃寺 39 次調査現地説明会資料」松山市教育委員会文化財課
丸杉俊一郎 2003「竹林寺廃寺跡」『静岡県の古代寺院・官衙遺跡』：105-108．静岡県教育委員会
三木文雄ほか 1962『石井』徳島県文化財調査報告書第 5 集別刷．吉川弘文館
水野正好編 1980『道成寺』昭和 54 年度発掘調査報告書．川辺町教育委員会
水野柳太郎 1993『日本古代の寺院と資料』吉川弘文館
湊哲夫 1992「4．大海廃寺」『美作の白鳳寺院』：17-21．津山郷土博物館
湊哲夫・亀田修一 2006『吉備の古代寺院』吉備人出版
美濃口紀子 2011『西海道と肥後国―出土品からみた古代の熊本』熊本県立熊本博物館
三舟隆之 1995「上淀廃寺と山陰の古代寺院」『出雲世界と古代の山陰』古代王権と交流 7：119-157．名著出版
三舟隆之 2005「地方寺院の性格―氏寺説から―」『地方官衙と寺院―郡衙周辺寺院を中心として―』：151-178．奈良文化財研究所
三舟隆之 2013『日本古代の王権と寺院』名著刊行会

三舟隆之 2016a「出雲への仏教伝播経路―寺院造営技術の伝播―」『出雲古代史研究』第 26 号：41-55．出雲古代史研究会
三舟隆之 2016b「影向寺遺跡と古代東国の郡家・寺院」『史叢』95：71-82．日本大学史学会
三舟隆之 2019a「伽藍配置から見た興道寺廃寺」『美浜町歴史シンポジウム記録集 13　復元！興道寺廃寺を取り巻く景色』：23-37．美浜町教育委員会
三舟隆之 2019b「地方寺院の法会―伽藍配置・仏像・経典―」『日本古代寺院史の研究』：369-382．思文閣出版
宮崎敬士 1997「熊本県地域における古代寺院出現とその背景」『古代寺院の出現とその背景』第 42 回埋蔵文化財研究集会：948-954．香芝市二上山博物館・埋蔵文化財研究会
宮崎哲治 2010「開法寺遺跡の発掘調査」『讃岐国府跡を探る』：94-100．香川県埋蔵文化財センター
宮崎哲治編 2011『讃岐国府の時代』香川県埋蔵文化財センター
宮本長二郎 1974「飛鳥・奈良時代寺院の主要堂塔」『日本古寺美術全集 2』集英社
三好清超編 2012『杉崎廃寺跡 2』飛騨市教育委員会
向井祐介 2019「中国における双塔伽藍の成立と展開」『日本古代寺院史の研究』：421-440．思文閣出版
村田弘・佐伯和也編 1991『和歌山県埋蔵文化財調査概報』平成 2 年度．和歌山県教育委員会
村田文夫 1991「影向寺の創建と史的展開に関する素描―南武蔵の一古代寺院をめぐる調査研究の現状―」『三浦古文化』49 号：43-69．三浦古文化研究会
望月和幸編 2011『寺本廃寺跡』笛吹市教育委員会
望月和幸編 2012『寺本廃寺跡　山梨県史蹟寺本廃寺試掘調査報告書』笛吹市教育委員会
森郁夫 1998『日本古代寺院造営の研究』法政大学出版局
森郁夫 2005『日本の古代瓦』雄山閣（増補改訂版）
森郁夫 2009『日本古代寺院造営の諸問題』雄山閣
森郁夫・甲斐由美子 2012『僧寺と尼寺』帝塚山大学出版会
森下英治 1996「白鳥廃寺」『香川県埋蔵文化財調査年報　平成 7 年度』：74-75．香川県教育委員会
森下衛 1984「千代川・桑寺遺跡の発掘調査」『京都府埋蔵文化財情報』第 12 号：13-20．京都府埋蔵文化財調査研究センター
森田梯 1991「総領制について」『金沢大学教育学部紀要』人文科学社会科学編第 40 号：192-182．金沢大学
八木充 2008「(1) 穴門国から長門国へ」『下関市史』原始・中世．第 4 章第 1 節：173-178．下関市
安井良三 1991「丹波」『新修国分寺の研究』第 4 巻．1-31．吉川弘文館
矢野裕介 2012「第Ⅵ章総括第 3 節遺跡の時期区分と変遷」『鞠智城Ⅱ』：520-524．熊本県教育委員会
山路直充 2013「龍角寺創建の年代」『古墳から寺院へ―関東の 7 世紀を考える』：140-166．六一書房
山下歳信・阿久澤智和編 2012『山王廃寺―平成 21 年度調査報告―』前橋市教育委員会
山下歳信・福田貫之・阿久澤智和編 2011『山王廃寺―平成 21 年度調査報告―』前橋市教育委員会
山城町教育委員会編 1989『史跡高麗寺跡』京都府山城町埋蔵文化財調査発掘書第 7 集．山城町教育委員会
山田猛 1981「一志郡嬉野町天花寺廃寺」『昭和 55 年度県営圃整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』：73-92．三重県教育委員会
山田猛 2008「天花寺廃寺」『三重県史　資料編考古 2』三重県
横田賢次郎編 1990『天台寺跡（上伊田廃寺）』田川市教育委員会

横田賢次郎編 1997『大分廃寺』筑穂町教育委員会
吉川真司 2007「大極殿儀式と時期区分論」『国立歴史民俗博物館研究報告』134 号：7-26．国立歴史民俗博物館
吉田一彦 1995『日本古代社会と仏教』：吉川弘文館
吉田東伍 1969『大日本地名辞書』富山房
善端直・津田耕吉・谷口健太郎・網谷準二 2000『能登国分寺跡発掘調査報告書』七尾市教育委員会
李陽浩 2008「百済の都城・寺院遺跡における近年の調査成果について」『共同研究成果報告書 2』：13-26．大阪歴史博物館．
李成市 2010「王興寺の建立と百済仏教―高句麗・新羅仏教関係を中心に」『古代東アジアの仏教と王権』：73-92．勉誠出版
李炳鎬 2010a「百済泗沘時期塑像の展開過程」『奈良美術研究』10 号：23-52．早稲田大学奈良美術研究所
李炳鎬 2010b「扶余定林寺址塑像と伽藍配置について」『奈良美術研究』10 号：119-129．早稲田大学奈良美術研究所
李炳鎬 2011a「百済寺院の展開過程と日本の古代寺院」『都城制研究会特別例会』資料（PDF ファイル）
李炳鎬 2011b「植民地期における扶余地域の寺址調査に対する再検討」『奈良美術研究』11 号：155-166．早稲田大学奈良美術研究所
李炳鎬（訳：井上主税）2012「百済寺院の展開過程と日本の初期寺院」『帝塚山大学考古学研究所研究報告』14 号：1-29．帝塚山大学考古学研究所
李炳鎬 2015『百済寺院の展開と古代日本』塙書房
李鎔賢 2010「百済泗沘時代の政治と仏教」『古代東アジアの仏教と王権』：93-99．勉誠出版
梁淙鉉 2008「百済の瓦―近年の出土品を中心として―」『考古学ジャーナル』9 月号：11-14．ニュー・サイエンス社
若井敏明 1992「七・八世紀における宮廷と寺院」『ヒストリア』第 137 号：1-23．大阪歴史学会
和歌山県教育委員会 1991『和歌山県埋蔵文化財調査概報　平成 2 年度』和歌山県教育委員会
和歌山県史編さん委員会 1983『和歌山県史　考古資料』和歌山県
和歌山県文化財研究会 1978『佐野廃寺発掘調査概要』和歌山県教育委員会
和歌山県文化財センター編 2008『紀の国の歩み―財団法人和歌山県文化財センター発掘 20 年の記録―』和歌山県文化財センター編
渡部明夫 2002「開法寺式偏行唐草文軒平瓦について―香川における 7 世紀末から 8 世紀前半の軒平瓦の様相」『香川県埋蔵文化財センター研究紀要』2：3-28．香川県埋蔵文化財センター

＜挿図出典＞

図 1　佐川 2010 より作成
図 2　森 1998 より作成
図 3　森 1998 より作成
図 4　髙倉 1996 図 16 を一部改変
図 5　上：小田 2013、下：杉原 2011
図 6　左下：須田 2013、上段・右下：高倉 2007

図 7　菱田 2007b

図 8　1 ～ 3：廣岡・中山編 2004 より作成

図 9　4・5：林ほか編 2001、6 水野編 1980、：7：真田ほか 2001、8：平井編 1980、9：潮見ほか 1968

図 10　10：川本 1998、11：石松 2007a、12 松本 1965

表 1　筆者作成

図 11　貞清・髙倉 2012

表 2　筆者作成

図 12　筆者作成

表 3　筆者作成

表 4　吉田 1969 より筆者作成

図 13　奈良文化財研究所 2004

図 14　左：滋賀県文化財保護協会編 1993、右：林 1989

図 15　筆者作成

表 5　筆者作成

表 6　筆者作成

図 16　1： 京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課編 2010、2：杉本編 1987. 3：小泉 2010、4：中島 2010a

図 17　6：中島 2010b をトリミング、7：町田 1977 をトリミング、8：奈良県立橿原考古学研究所編 1990 をトリミング、9：河野編 2004、10：藤井 1984 をトリミング、14：小玉・山田 1980 をトリミング

図 18　15:愛知県史編さん委員会 2010 をトリミング、17:大川 2008 をトリミング、18 丸杉 2003、19:内田・三沢編 1988 、20：玉川文化財研究所編 2007 、21：斉藤編 1999

図 19　22： 城倉ほか 2017、23：滝口編 1979、24：林編 2001、25：田中 2008 をトリミング、26：西村編 2010 をトリミング、27：三好編 2012 をトリミング

図 20　28：池田ほか編 2010、29・30：松葉 2019 をトリミング、31：小森編 1978、32：文化庁 2009

図 21　33：善端ほか 2000 をトリミング、34：亀岡市文化資料館 2005 をトリミング、36：久保 2017、38：岸本 2003、39：鳥取県教育委員会 1967

図 22　40：岸本 2003、41：原編 1993 をトリミング、42：正岡・岡本編 1979、43・44：湊・亀田 2006

図 23　45・46・47：湊・亀田 2006

図 24　48：小谷 2002、49：村田・佐伯編 1991、50：石松 2007b

図 25　51：三木ほか 1962、52：木本 2006、54：香川県埋蔵文化財センター 2011 をトリミング、53：香川県教育委員会 1983

図 26　55：太宰府市教育委員会 2007、57：横田編 1990、58：松本・高野 1977、59：江本 1980

表 7　筆者作成

表 8　筆者作成

表 9　筆者作成

図 27　筆者作成

図 28　古代瓦研究会編 2005、2009 より作成

表 10　筆者作成

表 11　筆者作成

図 29　矢野 2012

図 30　1：坂田編 1994、2：松本 1977、3：鶴嶋俊彦氏のご提供による 4：美濃口 2011 から作成、5：江本 1980、6： 松本 1965

図 31　朴 2011 を一部改変

図 32　李 2012 を一部改変

図 33　木下 2009 に加筆

図 34　木下 2009 に加筆

図 35　姫野・赤司 2002

表 12　菱田（2005a）、田村（2004）を参考に筆者作成

図 36　須田 2013

図 37　筆者作成